

---

# ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

フォック・リザハート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

### 【Nコード】

N8918P

### 【作者名】

フォック・リザハート

### 【あらすじ】

ポケモンだけの世界、この世界は二度の危機があったが、ある探検隊により、世界は二度救われた、それから5年後、トレジャータウンは変わり、さらに二つのギルドによって探検隊は激増した、プクリンのギルドともう一つ、ギルド『ブレイブ』これはこのギルド『ブレイブ』にいるある探検隊とその仲間達の、いろんなところを回る、カオスな物語、そしてこれはポケモン不思議のダンジョン希望の空と絆の続編の物語

ただいまテイルズオブデスティニー・デスティニー2の世界編へと突入しています。残酷表現ありを追加しました。

## ブログ依頼（前書き）

ついにあのコンビが帰ってきた！！

はちゃめちゃなカオスな物語をお楽しみください

ではごきげん！！

## ブローグ依頼

????? 「はあはあ……」

一匹のポケモンは全速力で走る

何者かに追われているようだがその慌てぶりからはそのようだ

????? 「捕まってたまるか！あいつらなどに！」

そのポケモンはお尋ね者という罪を犯した者

この世界はポケモンだけの世界：人間のいない世界で、ここは不思議のダンジョンという不思議な場所だ

そのポケモンは体が紫で、目が赤く、口が三日月のような形をしているポケモンだ

シャドーポケモンのゲンガー

彼は逃げる

しかしそれは彼らを立ちばかせる

????? 「逃がさねえよ！お尋ね者ゲンガー！」

ゲンガー「!？」

ゲンガーの目の前には一匹のポケモンが現れた

腕と太もものたくましい筋肉質な体、そして頭には炎が灯っている  
ポケモン…火炎ポケモンのゴウカザルだ

ゴウカザル「オイラ達から逃げられると思ってる？」

ゲンガー「うるせえ！！」

ゲンガーはゴウカザルに向かってシャドーボールを放った

ゴウカザル「はあ〜言ってもわからないね…」

ゴウカザルは呆れた表情をする

ゴウカザル「マツハパンチ！」

ゴウカザルの拳が光り、拳がシャドーボールを殴る

するとシャドーボールは跳ね返されてゲンガーに向かう

ゲンガー「くそっ！」

ゲンガーは回避した

ゴウカザル「やるね、でも」

すると今度は

何処からか緑の光線が何処からかゲンガーに向かって放たれた

ゲンガー「うわっ!？」

ゲンガーは咄嗟とつなに回避した

?????「チツ、はずしたか」

するとそこから一匹のポケモンが現れた

背中には木が生えていて、目は鋭く鼻は黒く、耳には鋭いトゲが両方ついていた

ゲンガー「ゲツ!？お…お前は!？」

このポケモンは大陸ポケモンのドダイトスだ

ドダイトス「おいおい、俺達から逃げられると思ってるのか、幽霊野郎」

と、ドダイトスはゲンガーを睨む

ゲンガー「くっ!」

ゲンガーはこの二匹のポケモンに囲まれた

ゲンガー「くそっ!ならこれでも食らえ!」

半端でゲンガーはシャドーボールを繰り出した

その対象はドダイトスだ

ドダイトス「聞きてえか？」

ゲンガー「何っ!?!？」

ドダイトス「聞きてえよな、俺達の事」

ドダイトスはなぜこのような事を言っのか

それはこの二匹は

ドダイトス「俺達は探検隊ブレイブ!! ロマンを求める探検隊だ!  
! テメエのハートに刻んどきな!!」

ブレイブ

この二匹は、ポケモンの世界を二度救った有名な探検隊である

ドダイトス「ロックフェンス!!」

ドダイトスの周りから岩の壁が現れシャドーボールは防がれた

ゲンガー「何っ!?!？」

ドダイトス「よし! 行くぞ! シルム!!」

ゴウカザル「うん! ドルク!!」

二人は互いに攻撃技を出した

ドルクと呼ばれたドダイトスはエナジーボール



と、二人はハイタッチした

ドルク「それじゃあ戻るか、ギルド『ブレイブ』に！」

シルム「おおっ！」

ドルク達は探検隊バッジをかざして脱出した

## プロローグ依頼（後書き）

いや〜しょっぱらからゲンガーには犠牲になってもらいました（笑）

シルム（ゴウカザル）「いや作者さん（汗）犠牲はないと思うけど（汗）」

ドルク（ドダイトス）「でも進化できていいぜ　すげえ〜よ力がわいてきたぜ　これが進化なんだな　」

でもドダイトスって素早さ低いよ？

ドルク「んなもん関係ねえよ、まあ結構よかつたぜ　」

5年後だからもう二人して18歳なんだからね（汗）

ドルク「まあ進化してもよろしくな　」

シルム「オイラ達の活躍がまた来たからみんな！応援よろしくな！」

続編は色々とやっておかないとね〜（黒）

ドルク「楽しみだぜ　（黒）」

シルム「やっぱそうなるのかよ（汗）」

依頼 1 ギルド『ブレイブ』(前書き)

ドルク「おっ！ついにか」

うん、まあ今回はギルドである『ブレイブ』の紹介とからです

少しメンバーも出ますので

ではどしどし

## 依頼1 『ギルド』ブレイブ』

あれから5年

ドルク達だけでなく色々と変わってきている

ここはトレジャータウン

町はさらに活気に溢れていて、多くの探検隊などが足を運ぶ

そんなトレジャータウンの通りをドルクとシルムの二人は歩いている

カクレオン（普通）・カクレオン（色違い）「いらっしゃい！」

ドルク達はカクレオン商店&専門店に来た

お腹の赤いギザギザ模様が特徴のポケモン、カクレオンが店を開いている

緑のカクレオン、つまり普通のカクレオンは兄

薄紫のカクレオン、つまり色違いのカクレオンは弟

この二人が店を切り盛りしている

カクレオン（普通）「おやおやドルクさん、今日も依頼を片付けたんですか？」

ドルク「ああ、まあ大したことでもなかったぜ」

そりゃあそうだろう(汗)

カクレオン(普通)「さすがギルド『ブレイブ』の親方、大体探検に出るのもすごいですね」

ドルク「体とか動かさねえとな、そういうばアレは入荷しているのか？」

アレとは？

カクレオン(普通)「アレですか…ありますよ…!!これですね」

カクレオン(普通)「がとりだしたのは黄緑色のグミだ」

これは若草グミと呼ばれるグミで

食べるとかしこさがあがるという食物で、食材などでも使えるのだ

カクレオン(普通)「おまけに茶色グミもありますよ」

ドルク「おっ！気が利くじゃねえか それじゃあ買ったぜ」

ドルクはポケを払った

この世界ではポケが通貨となっている

カクレオン(普通)「まいどあり」

シルム「それじゃあ戻ろうか」

ドルク「おう」

ドルク達は買い物を買わせて自分達のギルドへ

……

サメハダ岩

その場所に一つの建物があつた

壁はレンガできていた、それはドルクの顔：ドダイトスの顔の形をしていた、しかも口が開いているようであれが入口だろう、ドルク達は中へと入っていった

中に入るとそこは別世界のようだった

まず入口付近が1階

1階は広々としていて、それぞれイスと広い木のテーブルがいくつもある

ここは食堂なのだろう、しかもそれぞれお店があつた

どれもこれもすごいため、色んなお店が出迎えてくれているようだ

ドルク「帰ったぞ！！」

ドルクが叫ぶすると

????? 「パパー！お帰り〜」

一匹のポケモンが1階の食堂の地下階段から上がって来た、つぶらなかわいい目に胸に赤いものがついている。かいゆうポケモンのマナフィだ

ドルク「ただいまミネラ」

このマナフィの名はミネラという

5年前ドルク達が閉ざされた海で拾った卵から孵ったポケモンで今はドルクの義理の息子でブレイブのメンバーだ

ミネラ（マナフィ）「ねえねえ！今回はどうだった？」

ドルク「ああ、捕まえたぜ」

ミネラ「わあ〜やっぱパパは強いね」

こうして見るとドルクがある意味親バカに思えてくる

????? 「ドルクさん、シルムさん、お帰りなさい」

さらに別の2階の階段から一匹のポケモンが降りて来た、頭は三日月の形のもの、そして周りにはピンクのわっかがついているポケモン、みかづきポケモンのクレセリアだ

ドルク「帰ったぜシムーン」

このクレセリアの名前はシムーン…彼女もブレイブのメンバーだ

シムーン(クレセリア)「今回もお手柄ですね」

シルム「まあオイラ達二人いるからがんばれるよ」

ドルク「シルムいねえとサポートもできねえしな」

ミネラ「でも一人でも十分強いよパパは」

ドルクは時に一人で探検することがある、だがシルムがいるからブレイブは一つ、お互い大切なパートナーであるのだから

ドルク「ああ そういえばシムーン、こっちでは何か変わった様子とか異常はなかったか？」

シムーン「いいえ、こちらには異常はありませんでした」

毎回ドルク達は色々と時間や空間の異常などを確認している。過去に2度起きた世界の危機：1度目は星の停止、2度目は空間の歪みの事件があった…だが探検隊ブレイブが2度世界を救った…ドルクとシルム、そしてもう一人のポケモンと共に…それからというものドルク達は二度とこのようなことが起きないように、こうして確認をしている

?????「まあ私達もいるんだ、世界だって色々もあるかもしれん」

入口から一匹のポケモンが現れた

胸には青い宝石が埋め込まれていて、4足でさらに水色の透き通る体色のポケモン、時間ポケモンのディアルガだ

ドルク「おっ！ディアシアか」

ディアシアと呼ばれるディアルガは頷いた

元々彼は闇に一度染まってしまったが、ドルク達のおかげで元のディアルガへと戻った、そしてドルク達は空間の歪みを解決した後、ディアルガ、ディアシアと再び戦って仲間にしたのだ

ディアシア（ディアルガ）「まあこうして見てくれているドルク達には感謝している、ここまでやってくれるとは、私も時間を司る者としては嬉しいことだ」

ドルク「いや、またそうなるとだめだ…そうなたらまた再び星の停止が起きるのはごめんだ」

二度とこのようなことがないように…そう思い見ているのだ

ディアシア「とりあえず今日の依頼はどうだったのだ？」

ディアシアはドルクの今日の依頼を聞きたいらしい

ドルク「捕まえたぜ、まあ俺とシルムにはちょうどいい相手だったぜ」

ドルクもシルムも変わってきた

ドルクは前にも増して強くなり

さらにバトルの腕も磨きがかかる

シルムは臆病といくじなしがなくなり、前よりも積極的がんばっている。さらにはバトルもヒコザルの時と比べて強くなった

今でもドルクをサポートしている

ドルク「さてと、俺達は部屋に行くぜ」

シムーン「食事になったら呼びますので」

ミネラ「ゆっくり休んでねパパ」

ドルクとシルムは自分達の部屋で

……

地下1階

ここにはいくつも部屋がありその階段の向かいにドルクとシルムの部屋があった

窓は一面地平線が見えている、まるでサメハダの口に窓がついたような感じだった

ドルクの部屋の中に入るとでかいベットにさらに大きなイスがあるさらにはテーブルがあり、周りには今まで取ってきた宝がたくさんある

そしてドルクのとなりの部屋がシルムの部屋だ

壁には地図がはってあり、ベットもある、さらに同じく、取ってきた宝がたくさんで二人の部屋はちゃんときれいだった

ドルク「はあ〜」

ドルクはイスに腰掛ける

ドルク「このギルドの親方になって、毎日いいで〜プクリン親方様と同じギルドの親方になるとはな〜」

シルム「うん、オイラ達の努力が実って、秘密基地を改造して、ギルドを立てたんだよね」

そう、元はドルク達の秘密基地だった場所、そこを改造してギルドを設立したのだ

ドルクはこのギルドの親方になり、シルムはそのドルクのサポート兼副親方だ

ドルク「まあでも今でもプクリン親方とは同盟とかも結んでるしな」

トレジャータウンにはもう一つのギルドがある

それがプクリンのギルドだ

そこはドルクが探検隊を目指した故郷であり、探検隊の修行をした場所だ

今でもプクリンのギルドには行っているドルクとシルム

いつもお世話になっているプクリン親方に挨拶したり、話したりもしている

そしてギルド同士で同盟を結んでいる

今でもお互いがんばりあっている

シルム「まあ、僕達はプクリンのギルドを卒業してからだしね」

そう、二人はプクリンのギルドを卒業して探検隊として活動してきた

そして世界は二度救われ、今でも平和だ

それでもドルクは親方になってもまだまだ現役の探検家

シルムや他のみんながいたから彼は親方になれた

ギルドのマスターとして

ググウ~~~~~

すると何処からか音がする

ドルク「話してたら腹減ってきたな」

ドルクの腹から音がしたのだ

シルム「あはは ドルクはやっぱり大食い大食いしん坊だな」

ドルク「うるせえ／＼／＼」

ドルクは顔を赤くする

シルム「まあそろそろ食事にしようか」

ドルク「そつだな」

ドルクとシルムは部屋を出て1階の食堂へと向かった

## 依頼 1 『ギルド』ブレイブ』（後書き）

秘密基地というかギルド『ブレイブ』は元はドルクとシルムのブレイブの秘密基地を改造して作られました

ちなみにディグダみたいに足音とかの反応とかのチェックはしませんが

かわりに別の防犯があるので次回かそのぐらいで明かします

ミネラ（マナフィ）「わ〜い 続編嬉しいな」

シムーン（クレセリア）「私達も出ましたね」

まあ二人はもうメンバーだから出てもいいものだよ

他にもメンバーはいるけど

ディシア（ディアルガ）「私までメンバーになるとはな」

入れないと意味ないでしょ

ディシア「まあ悪くはないが時限の塔の管理とかは大丈夫なのか？」

まあドルク達もいるからちゃんとチェックもしてるよ

ディシア「これで私も一安心できるな」

さて今回はまだまだ続く、ギルド『ブレイブ』の全貌などを公開し

ていきまます

依頼2 仲間達(前書き)

はい、『ブレイブ』の紹介は続きます

## 依頼2 仲間達

ドルク達は1階の食堂へのぼってきた

食堂はすいてるが座っている者もいる

シムーン「あつ、ドルクさん、シルムさん、今食事にしようと思つて声をかけに行こうと思つてたところなんです」

ドルク「ちょうどよかったな」

デイシア「まあ私もいるし、後はまだ帰ってこないな」

他にメンバーがいるらしい

すると

?????「帰つたぞ」

入口から3匹のポケモンが入ってきた

一匹は背中に6つの黄色の小さな玉がついていて、尻尾はジャング  
ルで見かける葉っぱのようなもの、腕には2つの鋭い葉、そして2  
足でお腹には赤いラインがついている

一匹は妖精のようでピンクの体色だ

そしてもう一匹は足がなく、一つ目のポケモンだ

上から順番にジユカイン、セレビィ、ヨノワールドだ

ドルク「おっ！帰ったか相棒」

ドルクは相棒と呼ばれた一匹に言う

?????「ああ」

シルム「お帰り、ジユク、レビィ、ゼラス」

シルムは3匹の名前を言う

まずジユクと呼ばれているジユカインは5年前にドルク達と一緒に冒険し、そしてドルクのパートナーである元ジユプトルだ

彼が消えなかったのはドルク達には嬉しいことだった（詳しくは『フォックの短編集』で）

そしてレビィと呼ばれたピンクのセレビィ、このセレビィも未来のポケモンでドルク達を元の世界に戻したのだ、彼女もまた、恋する彼（ジユクの事）と一緒にこの世界に来たのだ、今はその彼ともゴールインしている

そしてゼラスと呼ばれたヨノワールドは、かつてドルク達の星の停止を邪魔した者で、ジユク（その時の名前はジユプトル）と共に未来に帰ってきた、そしてジユクと探検してから彼もジユクの言葉などで胸を刻み込まれ、そして彼もまた、この世界に来て、ドルク達にやった罪を償うためにブレイブで探検などとして働いている

ジユク（ジユカイン）「こっちの方もその様子じゃやったみたいだ

な」

レビィ（セレビィ）「さすがブレイブね」

ゼラス（ヨノワール）「まあドルク達ならやり遂げられるだろうと思っただけだな」

未来から来たのは3匹だけではない

?????「ドルク親方！食事を持ってきました！」

ドルク「ごくろうさん、1号」

食事を持ってきたのは一匹の小さなポケモン

両目はダイヤモンドをしていて、爪は鋭く、紫の体色でお腹辺りには赤い宝石が埋め込まれている

このポケモンはヤミラミと言って、ゼラスの忠実な部下じっしんぶしの一人でドルク達の仲間だ

現在は他のヤミラミ5匹で雑用やギルドの食事など色々やってくれる

そして同じヤミラミでは言うのは難しいのでドルクはそれぞれの番号で呼んでいる

6匹と同じヤミラミなので（汗）

すると入口から

????? 「帰ったぞ〜兄貴〜」

入口から一匹のポケモンが入ってきた

両肩には白い宝石が埋め込まれて、薄桃色の体色に目が鋭いポケモンだ

空間ポケモンのパルキアだ

デイシア「帰ったのか、パルサ」

パルサと呼ばれるパルキアにデイシアが言う

パルサ「あ〜結構奴らを叩きつぶせていいぞ〜なんとかお尋ね者は逮捕したしな」

ドルク「それはいいが、やりすぎたるなよ?」

パルサはその言葉で焦り

パルサ「は!はい!わかってるって兄貴〜」

絶対やっただろうこいつとみんな視線をパルサに向ける

パルサ「うっ!」

パルサはもはややっただろうというみんなの視線に動きが固まる

元は空間の歪みをドルク達が原因だと思って攻撃したが、ダークラ

イというポケモンにだまされ、怒りでダークライに攻撃してことは収まった。さらにドルク達ブレイブの仲間にもなり、勝負でドルクに負けたためドルクの事を兄貴と呼んでいる、だがパルサは空間を司るものでも怒りっぽく、さらにバカなためかドルクなどみんなに説教される時が多い、もちろん暴れるのもいいが、暴れすぎると被害が大きくなるため、なるべく対策などをしている

ドルク「とりあえず何もやってないなら食事にするぞ！」

とりあえずみんなで食事にした

……

ドルク「あゝうまかった」

ドルクは満足そうに言う

ドルクの周りには皿が多く積まれていた

大食いもさらにパワーアップしたようだ(汗)

シルム「最近のドルクの胃袋が気になるよ(汗)」

ジユク「さすが俺のパートナー(汗)」

元パートナーであるジユクは啞然としていた

本当にあのドルクなのかというのを

ゼラス「(元人間なのかこいつは(汗)もはや人間ではなくなつて

きているよつだぞ（汗）」

分析するゼラスもさすがにドルクの力量が計り知れなくなっていた

……

ドルク「ふう〜やっぱ温泉はいいな〜」

ここは2階、ここは温泉などが入れる浴室や、弟子部屋もある

ちなみにここは崖でほとんど弟子部屋と客室部屋はある、しかし問題は崖がくずれて落ちてしまうというのもある、だがそれも対策はしている

このギルド『ブレイブ』は実は水陸空両用のギルドで、もしものときに備え、船になったり、飛行機になったりなど対策をしている

何処でそんな素材を手にいれているのかは企業秘密だ

シルム「まあこうやって温泉に入るのもいいね」

この温泉はあのコータス長老の温泉からだ

ここからサイコネシスなどで少しずつ組んでいる、温泉じゃなくても普通のお湯もある

そんなこんなで

……

ドルク「あゝいい湯だったぜ」

ドルクは満足そうに自分の部屋へ

シルム「それじゃあお休みドルク」

ドルク「ああ」

ドルク達はそれぞれの部屋で寝た

## 依頼2 仲間達（後書き）

はい、ギルド『ブレイブ』には様々な機能などもついているハイテクな秘密基地になっています

ドルク「まあ娯楽施設もありって感じだしな」

シルム「ある意味ね（汗）」

ジユク「まあ俺達もだがな（汗）」

レビィ「ホントよね（汗）」

ゼラス「理解不能だ（汗）」

パルサ「兄貴は俺の自慢ツスよ」

壊すお馬鹿が何処にいる（笑）

パルサ「んだと！！」

ドルク「だまれ！！」

パルサ「すみません！！」 土下座

ミネラ「まあこんなメンバーだけど」

シムーン「よろしく願いしますね」

次回はあの子が帰ってきます、そしてもう一人…第2の主人公の登場です

### 依頼3 再会と新たな仲間（前書き）

ついにもう一人の主人公の登場です

ドルク「誰だ？」

それは秘密、さらにあの悪魔亀大魔王の弟子がついに帰ってきます  
！では依頼3

ドルク「刻んどきな！」

### 依頼3 再会と新たな仲間

次の朝

今日もギルド『ブレイブ』は活動をする

するとギルドの外から

シルム「ふう〜今日もスッキリしたな〜」

シルムだ

しかもタオルを首にかけている

実はシルムは海岸までランニングしていたのだ

ドルク「おっ！おかえり〜」

ドルクが入口にいた

シルム「ただいま〜」

すると

ミネラ「ただいま〜」

ミネラが朝の散歩から帰ってきた

ドルク「ミネラもおかえりな〜」

こうして朝はむかえられる

……

ギルド食堂

ドルク「やっぱうめえくな」

ドルクはご飯を結構食っていた

朝は人間世界の食い物もある

グミだけでそうなるとだめなので、ちゃんとした食事も用意している

もはやポケモンだけの世界でも発展はしている(汗)

……

ドルク「さてと、今日は何っすかな」

ドルクは自分の部屋で色々と資料などを整理している

シルム「今日は新しい子が来る日だよ」

どうやら新人の子が来るらしい

ドルク「新人？」

シルム「うん、今日新しく入る子は……」

……

一方

「?????」「ここがトレジャータウン」

交差点に一匹のポケモンがいた

ラッコのような姿のポケモンで、お腹に貝がついていて、顔にはそばかすがついているポケモン

ラッコポケモンのミジュマルだ

ここでは珍しいポケモンだ

この世界ではそれぞれの大陸があり、その大陸によって住むポケモンも違う

このミジュマルは遠いところから来たポケモンだろう

ミジュマル「でもここからどう行けばいいんだろう?」

どっちら迷ったらしい

するし

ミジュマル「ん?あのポケモンに聞いてみるか」

ミジュマルは近くにいたポケモンに聞く

そのポケモンはふさふさの銀の体毛でつぶらな瞳のポケモンだ

ミジユマル「すみませ〜ん！」

?????「はい？」

そのポケモンはミジユマルに振り向く

ミジユマル「ギルド『ブレイブ』が何処にあるか知りませんか？」

すると

?????「僕もちょうどそこに行くところですよ、知ってますよ」

ミジユマル「えっ!？」

?????「それじゃあ行きましょつか」

ミジユマルはそのポケモン…イーブイに連れていかれる

色違いの銀イーブイだ

……

銀イーブイ「つきましたよ、ここが師匠のギルドかあ〜」

ミジユマル「えっ?師匠?」

すると銀イーブイは振り向く

銀イーブイ「あっ、自己紹介がまだでしたね、僕は銀イーブイのソウ」

ミジュマル「銀イーブイのソウさんですか…俺はミジュマルのシエルマルです」

シエルマルと呼ばれたミジュマルはぺこりと頭を下げた

ソウ「はい よろしくお願いします、それじゃあ入りましょう」

シエルマル「はい！」

二人はギルドの入口に入る

すると

ピーピー

入口から警戒音がなる

ソウ「なんででしょう？」

すると

ピー

確認完了

するとギルドの扉が開く

ソウ「さすが師匠、防犯までやるとは」

シエルマル「入りましょう」

2人は入った

……

ギルド食堂

ソウ「結構広いですね」

シエルマル「そついえば俺、このギルドに弟子入りで来たんだけど……」

すると

?????「ようこそいらっしやいました」

そこからシムーンが出てきた

ソウ「シムーンさんお久しぶりです」

シムーン「お久しぶりですソウさん」

シエルマル「えっ!?!」

シエルマルは驚いていた

ソウとシムーンが知り合いだということに驚く

シムーン「それとたしか君が今回弟子入りを志願する子ね？」

シエルマル「は…はい！」

若干緊張しているシエルマル

シムーン「そんなに緊張しなくていいわ、さ、親方のところまで案内するわ」

シムーンにつられてソウとシエルマルはついていく

……

ギルド地下1階

シムーン「ここが親方の部屋です」

シムーン達はドルクがいる部屋の前に

シムーン「さて、シエルマル君」

シエルマル「は、はい！」

シエルマルは呼ばれて焦る

シムーン「くれぐれも親方に失礼のないようにしてください」

シエルマル「わ、わかりました」

シエルマルは冷や汗をかく

でもちよつと疑問が

シエルマル「(なんでソウさんには失礼とかの忠告をしないんだろ  
う?)」

シエルマルだけは忠告したのになぜソウだけは忠告しないのか

後にわかることになる

シミーンは扉に向かって

シミーン「ドルク親方、シミーンです、ソウさんと弟子入りの子を  
連れてまいりました、入ります」

シミーン達は部屋へと入った

部屋に入ると

ドルク「おお、ソウ！よく来たな」

ドルクが笑顔で迎える

ソウ「師匠!!」

ソウはドルクのそばへ

ソウ「師匠がたくましくなって、さらに進化するなんてすごいです

「

ソウは目をウルウルとする

ドルク「ハハハッそうかそうか」

シエルマルは啞然とした

シエルマル「（なんなんだこの人（汗））」

と、若干引きつった表情をする

ドルク「ん？お前が弟子入りのポケモンか？」

ドルクはシエルマルに気づいて声をかける

シエルマル「ひゃ！？はい！」

と、口をかんだように言う

ドルク「そんなに緊張すんなよ、それじゃあ探検隊キットだ、これからもよろしくな」

シエルマル「は…はい！」

シエルマルは探検隊キットを手に入れた

シエルマルは中身を開けるとそこには不思議な地図とトレジャーバツクと探検隊バツジが入っていた

シエルマル「ありがとございますー!」

と、シエルマルは頭を下げた

ドルク「ああ、がんばれよ」

すると部屋から

シルム「ドルクくって!? ソウ!？」

シルムは入ってきてソウが来たことに驚く

ソウ「シルムさんまで大きくなりましたね!」

シルム「オイラもおかげでね」

と、ソウと話す

すると

シルム「ん? 君がシエルマル君だね」

と、シエルマルに視線を向く

シエルマル「はい! ドルク親方様とシルム副親方様にあこがれて来たんです! よろしくお願ひします!」

と、シルムに頭を下げる

シルム「そうだったんだ… オイラ達も照れるな〜 / / / /」



ソウ「なのでまた師匠と探検できるのは嬉しいですのでよろしくお願ひします」

ドルク「ああ」

こうしてシエルマルの探検隊修行が始まる

……

ギルド食堂

ここにはドルク・シルム・シムーンがいる

そこから

ジユク「来たぞ」

シユク、レビイ、ゼラスが来た

ソウ「あ！あなたは！？」

ソウはヨノワールを睨む

ドルク「いやソウ、もうこいつは味方だ」

ソウ「え？」

ソウは睨むのをやめた

ドルクはソウに色々と説明した

ソウ「そうだったんですか、それでゼラスさんは罪を償ったためにヤミラミ達と一緒にここで働いているんですね」

ゼラス「ああ、あの時はすまなかった、私も本当は」

ソウ「まあでも師匠がそう言うなら許してあげますよ」

話してる途中で

ミネラ「パパー！」

ミネラが来た

ソウ「ミネラ君も!？」

ミネラ「あっ!ソウも久しぶり」

ミネラは回る

ソウ「まさかジユプトルさん…いやジユクさんまで」

さらに

デイシア「私もだ」

パルサ「俺もだけどな」

そこからデイシアとパルサまで現る

ソウ「みなさん元気ですね」

ドルク「ああ、さて、飯にするか」

ソウ「はい」

ソウは元気に返事をする

シエルマル「（俺、この先やっていけるかな（汗））」

と、シエルマルは先が不安になる

ここからが本当の始まりだ

### 依頼3 再会と新たな仲間（後書き）

はい！再びクルペッコさんのところからソウ君が来ました！

ソウ「お久しぶりですフォックさん」

そして、もう一人の主人公である

シエルマル「ミジュマルのシエルマルです」

ドルク「もう一人の主人公がシエルマルなんだな」

そうだよ、でもほぼ準主人公かもね

シエルマル「えっ!?!」

まあでも出番は出すから安心して

シルム「まあ再びソウと会えるなんてね」

ペッコさんから再び出してほしいという許可をいただいたからソウ君を出したんだ

ドルク「これからもよろしくなソウ」

ソウ「はい」

依頼4 俺って入るとこ間違えたか(泣)byシエルマル(前書き)

シエルマル「なんなんだ！？このタイトル！？」

はい！もう一人の主人公君は黙ってようね(黒)

シエルマル「黒っ！？」

シルム「それじゃあ依頼4」

ドルク「かかってこいやあ！！！」

どござのあの人がお前は(汗)



????? 「おっ起きたか」

その犯人は

シエルマル「お！親方様!？」

なんとドルクだった

ドルク「もう朝だぜシエルマル、そろそろ朝礼が始まるから準備しろ」

シエルマル「え?...あ?..」

シエルマルは混乱する

ドルク「寝ぼけてるのか？俺は行くぜ」

ドルクは弟子部屋から出た

シエルマル「...って!？朝礼!？急がなきゃ!？」

シエルマルは急いで準備をした

.....

ギルド食堂

シエルマル「はあはあ...遅れてすみません!!」

シエルマルが来た

シルム「来たねシエルマル」

そこにいたのは親方であるドルクと副親方であるシルム、順番にソウ、ミネラ、シムーン、ジユク、レビィ、ゼラス、デイシア、パルサそして他には

両耳にはピンクの花でふわふわした草の色の体毛のポケモンと両腕には鮫のヒレのようなものがついていて、額が星のようなものがついているポケモンと巨体でつぶらな瞳に大きな両翼で肌色の体色のポケモン

それぞれ順番のシェイミ、ガブリアス、カイリユーのようだ

シルム「それじゃあ朝礼を始めるよ、まずはドルクから何か一言を」

ドルクが前に出る

ドルク「えゝ朝礼を始める前に、今日から俺達の仲間になる奴を紹介だ、シエルマル！」

シエルマル「は、はい！」

シエルマルはぎこちない歩き方でみんなの前に出る

ドルク「えゝ今日から新しく入った、ミジユマルのシエルマルだ。みんな仲良くしてくれ」

すると

パチパチパチ！

みんなから拍手が

シエルマル「（うわあ〜こんな歓迎するなんて…でも今日からこゝで探検隊をやるんだ！）」

それでも意気込むシエルマル

ドルク「じゃあ自己紹介からしてくれ」

シエルマルは前に出る

シエルマル「え〜今日からここでお世話になるシエルマルです、みなさんよろしくお願いします！」

と、おじぎをした

パチパチパチ！

みんなから拍手が響いた

シルム「ありがとう、では最後に誓いの言葉！」

全員『ひとつ！仕事は絶対さぼらない！ふたつ！脱走したらおしおきだ！みーっつ！最後まであきらめない！よおーっ！仲間を大切に！いつーっ！みんな笑顔で明るいギルド！』

みんなが誓いの言葉を言う



ダンジョンで倒れたポケモンの救助とそして怪我をしている場合の回復などだ

シエルマル「よろしくお願いします」

と、シエルマルはおじぎをした

グラデル（シエイミ）「そんなにおじぎしないで、ここみんなは優しいポケモン達ばかりですし」

シエルマル「そうなんですか？」

グラデル「はい」

と、グラデルは笑顔で言う

さらに

ガブリアス「おめえが新人だな、俺はガブリアスのグロリアルだ」

次にシエルマルに挨拶したのはガブリアスだ

シエルマル「はい！」

と、返事をする

ガブリアス「いい返事だ、その調子でがんばれよ」

と、頭をなでた

見た目は怖いが根は優しい

彼の担当は救助とお尋ね者退治などが担当だ

カイリユー「僕も自己紹介だよ、僕はカイリユーのリユラ、担当はグラデルと同じ救助よ他は届け物などを担当しているんだ、よろしくね」

と、カイリユー、リユラがシエルマルに握手した

シエルマル「はい！よろしくお願いします！」

こうして挨拶を済ませ、朝食をとった

……

朝食後

シエルマル「さて、俺はどうすればいいんだろっ？」

シルム「シエルマル君」

シルムが声をかけた

シエルマル「シルム副親方」

シルム「こっちだよ、ついてきて」

シルムにつられ、シエルマルはついていく

……

食堂の壁には掲示板がはってあった

そのうちのひとつ、額縁が青い掲示板の前に来た

シエルマル「これは？」

シルム「初心者君にはここの依頼から始めるんだ」

この青い掲示板は依頼掲示板だ

ドルク「おっ、やってるな、俺が選ぶぜ」

シルム「そうだね、じゃあドルク選んで」

ちょうど来たドルクが選んでみせる

シエルマル「どれどれ？」

その依頼内容は

道に迷ってしまった！！どうか助けてください！！

すごく迷いました、どうか助けてください（泣）

依頼主：父（魔王） & ピツケル

場所：暗夜の森



その助っ人とは？

……

交差点

ドルク「ここで待ち合わせだ」

シエルマル「一体誰なんでしょう？」

すると

?????「なぜ私が（泣）」

涙目で来たのは一匹のポケモン、頭には音符のようなものに色彩の両翼のポケモン

ドルク「来たかペラハ」

ペラップ「だからペラップだろおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおがあああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」（怒）」

と、キレツツコミをしたのはプクリンのギルドの情報屋、ペラップ、  
通常ペラハ

ペラハ「だからなんでペラハとかそんな風に言うの!? 私の名はペ  
ラハだぞ!？」



依頼4 俺って入るとこ間違えたか(泣)byシエルマル(後書き)

この依頼主…次回はその依頼主の正体がわかりますっていうかもう  
何処かで見てるはずですけど(汗)

シエルマル「作者!!すごく厳しいって!?!」

ペラハ「コリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!いい加減ペラハつけるなああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああ!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?!(怒)」

ペラハつけるのやめねえよ、それにどうなるか楽しみでねフッフ  
黒)

シエルマル・ペラハ「黒っ!?!」

依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ(前書き)

はい！さらにコラボです

ドルク「誰だ？」

この依頼主の名前、実は…

シルム「まさか(汗)」

はいじゃあそこは本編で、依頼5

シルム「行くぜ！」

## 依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ

暗夜の森

シエルマル「それにしてもここは暗いな」

シルム「まあオイラ達には慣れっこだよ」

ペラハ「結局は私まで（泣）」

4匹は暗夜の森を進んでいた

まずは

ドルク「シエルマル、ケムツソの相手は任せた、俺達はお前の實力を見るからやってみな」

シエルマル「はい！」

シエルマルは前に出る

ケムツソはいとをはくを繰り出す

シエルマル「こんなの！シエルブレード！」

シエルマルはお腹についた貝、ホタチを使って糸を切りつけた

ホタチは鋭い青い剣に具現化して切りつける

シエルマル「水鉄砲！」

今度は水鉄砲でケムツソを攻撃

ケムツソは耐えられず倒れてしまった

ドルク「ホタチか…武器になるんだなそれ」

ホタチはミジユマルという種族にとってはかなり重宝する物だ

シエルマル「まあこれがないと守りもうまく固まりませんし」

ドルク「なるほどな」

ドルクは納得する

シルム「それじゃあ先に進もうか」

ドルク達は先へと進んだ

……

かなり奥まで進んだドルク達

シエルマル「す…す…す…い…い…い…」

シエルマルは啞然とした

なぜなら周囲のポケモンは倒れていたのだ



まず一匹は尻尾に炎を灯して、さらに小さくてお腹はクリーム色のポケモン

もう一匹はそのポケモンと同じく尻尾には炎があり、両翼の翼に黒い体色で龍の顔をしたポケモンだ

それぞれ順番にヒトカゲとリザードンだ

だがこのリザードンは通常はオレンジの体色だが

このリザードンは黒の体色なので色違いのようだ

ドルク達は声をかけた

ドルク「おい！あんたらが助けを出したのか？」

すると

ヒトカゲ「助かったよ！僕達ポケモンにされてここで迷っていたんだ」

シルム「えっ？」

ヒトカゲの言葉にみんな氷つく

だがリザードンだけは氷ついてはいない

ヒトカゲ「あれ？僕なにか悪いこといいました？」

と、ヒトカゲは聞く

ドルク「いや、俺と同じ元人間がいたとは思わなくてな」

ヒトカゲ「いや、こっちの世界に来たときに僕は人間で父さんは魔王なんです(汗)」

シルム「魔王？」

すると黒いリザードンは

リザードン「そう！私は魔王だ」

と、ズビシとポーズを決めた

ヒトカゲ「いや父さん(汗)僕達ポケモンの世界に来たからって通  
用するの(汗)」

と、ヒトカゲはつつこむ

ペラハ「つまりドルクと同じ元人間ってことか…しかも魔王って！  
？」

ペラハも驚く

ドルク「とりあえずはギルドに戻るぞ」

そう言ってドルク達は探検隊バッジを取り出して脱出した

……

ギルド『ブレイブ』食堂

シルム「じゃああんた達は父であって魔王で息子であって自称勇者  
ってことだね」

ヒトカゲ「はい（泣）」

リザードン「おお！この姿は最高だな」

黒いリザードンもとい魔王は喜んでいる

ヒトカゲ「父さん、そこ喜ぶところ（汗）」

息子であるヒトカゲはつつこむ

ドルク「とりあえずまずは名前だな」

彼らは自己紹介した

ヒトカゲ「僕はピッケルっていいいます」

リザードン「私は父（魔王）、本名はテツって名前だ」

ピッケルと名乗るヒトカゲと父（魔王）もといテツと名乗る黒いリ  
ザードンはそう言う

デイシア「聞いたことがあるが、ある村で魔王城を立て、昔はかな  
り強かったって聞いたことがあるな、後はその息子が勇者ってこと

だ  
」

デイシアは聞いたことあるみたいなのを言う

シルム「つまりこの2人の事だよねきつと」

そのとおりだ

ドルク「そうか まあなんかあんたとは気が合いそうだな」

父（魔王）「おお！たしかにあなたみたいなのとも気が合いそうだな  
な」

魔王というつながりでドルクと父（魔王）は仲良くなる

シルム「（汗）とりあえずはしばらくはブレイブの仲間ってことに  
する？」

シエルマル「いいんですか（汗）」

ドルク「OK」

ピッケル「よろしくお願いします（汗）」

こうして父（魔王）とピッケルはブレイブの仲間になった

ドルク「とりあえずはよろしくな」

父（魔王）「こちらこそドルク君」

魔王と悪魔亀大魔王は握手する

ある意味嫌な予感しかしない

シエルマルはそう思った(汗)

ホタチ日記

月×日

俺はギルド『ブレイブ』に入った

ドルク親方とシルム副親方は優しい

でもあの親子、特に黒いリザードンは魔王らしく

この先不安だ(汗)

## 依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ（後書き）

最後のホタチ日記はシエルマル君の日記です

そしてまたこの人達が来ました

父（魔王）（リザードン）「どうも〜魔王です」

ピッケル（ヒトカゲ）「ピッケルです」

バトル部に続いてポケダンにも登場しました、実はドルクとの魔王同盟という感じにしようと考えていたので登場させました

父（魔王）「父さんパワーは強いぞ〜」

ピッケル「誰か止めて（泣）」

今回はそんな父（魔王）とドルクが対決します

ドルク「それはそれは楽しみだな」

シルム「どうなることやら（汗）」

依頼6 ドルクVS父(魔王) 親方は強かった(前書き)

はい！大魔王と魔王が対決します

シエルマル「マジですか(汗)」

まあカオスにはなるけどね(黒)

シルム「とりあえずやるうか(汗)」

父(魔王)「それでは依頼6」

ドルク「暴れるぜ！」

依頼6 ドルクVS父(魔王) 親方は強かった

次の朝……

今日も俺はドルク親方に起こされる

親方って一体何時に起きているんだろう？

そんなこんなで俺、シエルマルは食堂へ

……

全員『いつーっ！みんな笑顔で明るいギルド！』

シルム「それじゃあ今日もがんばろう！」

全員『おおー——————』  
っ！ー！』

今日も仕事が始まるのだが

ドルク「もぐもぐ、今日はトレーニングをするぜ」

シエルマル「トレーニングですか？」

シエルマルはすっと呆けた感じで言う

シルム「トレーニングも修行のうち、ダンジョンでは強い敵もいる

からそれぞれ依頼だけでなく、時にトレーニングしないかね」

シルムの場合は、朝のランニングが日課で走っている

ミネラ「今日は僕とリュラ君と一緒に行くね」

リュラ「はい、ミネラ君は僕が面倒みるので」

ジユク「じゃあ俺もトレーニングするか」

レビィ「じゃあ私も」

ゼラス「私は単独で探検してくる」

ソウ「師匠！僕も！」

今回も朝食を食べて、そこからそれぞれ今日の予定を決める

シエルマルの今日の内容はトレーニング

とりあえず食休みしてからやることになった

……

ギルド『ブレイブ』1階トレーニングルーム

トレーニングルームはそれぞれ違ったのがあった

滝があり、瓦が数枚あり、バトルできるフィールドがあったりなどがあった

シエルマル「うわぁ〜すごい」

シルム「こうしないとね、それにシエルマル君もトレーニングするんだよ」

シエルマル「はい！」

と、威勢のいい返事をするシエルマル

ソウ「さすが師匠」

ドルク「ありがとな」

ソウも喜んでいる

そこに

父（魔王）「お〜すごいな〜」

ピツケル「僕も結局こうなるの（泣）」

父（魔王）とピツケルが現れる

ドルク「おっ！来たか ちょうどいい、おい！父（魔王）！俺と勝負してくれないか？」

すると

父（魔王）「私は強いぞ〜 かかってきなさい」

と、ファイティングポーズをして構える

シルム「じゃあバトルフィールドに移動しよう」

ドルク達はバトルフィールドに移動した

……

バトルフィールドは草などが生えたフィールドや岩があるフィールド、さらに熱いフィールドや氷のフィールドや水のフィールドなどがある

ドルクと父（魔王）が戦うフィールドは岩のフィールドだ

岩に囲まれたこのフィールドでどう戦うかだ

シルム「それじゃあこれよりドルクVS父（魔王）の試合を開始します、どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了、両者準備はい？」

ドルク「バツチリだ！」

父（魔王）「こっちも」

どちらも準備万端のようだ

シエルマル「どんな戦いなんだろう…」

ピッケル「どうなるか（汗）」

ソウ「師匠がそう簡単に負けるはずないですよ」

三人は観客席で二人の試合を見る

シルム「それじゃあバトル開始!」

シルムの合図とともに試合が始まった

父（魔王）「今こそ私の拳を受けてみる!父さんの拳は痛いぞパンチ!」

父（魔王）はドルクに向かってパンチを繰り出そうとしている

ドルク「ロックフェンス!」

すぐさまドルクはロックフェンスで防ごうとするが

ピキピキ

なんとロックフェンスがパンチで壊された

ドルク「何っ!?!」

パンチがドルクの顔を直撃

ドルク「ぐおっ!?!」

ズザーっとドルクは後ろにすべる

だが

ドルク「今のは効いたぜ」

ニヤリと顔が微笑む

父（魔王）「私の拳に耐えるとは、私もまだまだだな」

と、父（魔王）「両手を見て言っ

シエルマル「親方すごい!？」

ピッケル「あの父さんのパンチに耐えるなんて、へたすれば小惑星ほど破壊できるパンチなのに」

技名はつつこむが強いのだ

だがドルクも伊達にトレーニングしたわけでもない

シルム「（ドルクは防御など色々な特訓してここまで鍛えたんだ、オイラもラツシュに会った時、色々の特訓したな）」

シルムもまた、ドルクと共にトレーニングしていた

5年前、ジユクに言われたあの言葉

『お前達は最高のコンビだ!』

そう、あの言葉もあったから彼らはがんばれた

姿は変わっても彼らはいつでも一緒だ

それでもドルクは守るべき者がいるから

信頼できるパートナーがいるから

ドルク「ストーンエッジ！」

周りからとがった岩が現れて父（魔王）に襲い掛かる

父（魔王）「くっ！？」

父（魔王）にとがった岩があたる

リザードンである父（魔王）には効果はばつぐんだ

だが

父（魔王）「さすがはギルドの親方、これでこそバトルは燃えないな」

少しボロボロだがまだまだ余裕の表情な父（魔王）

ドルク「それでこそだぜ」

ドルクも微笑む

父（魔王）「なら今度は父さんの息は生暖かいぞハリケーン！」

今度は口から生暖かい風を吐くが

父（魔王）「あり？」

なぜか炎の風が吐かれた

ドルク「グランドフェンス！」

ドルクは炎を防いだ

父（魔王）「なぜこの技が出ないんだ？」

父（魔王）は思っていた技とは違うことに首をかしげる

ドルク「たぶんポケモンの技になってる奴があるってことじゃないか？」

シルム「たぶんあの技は熱風じゃない？」

父（魔王）「！？なんということだ！？」

父（魔王）は重大なミスをおかした

ここはポケモンだけの世界

ポケモンに変わったため、技も違う感じになってしまい発動できない技もあるってことだ

ドルク「さてと、そろそろいかせてもらうぜ！ハードプラント！！」

ドルクがそう叫ぶと地面から植物の蔓が現れて父（魔王）に襲い掛

かる

父（魔王）「なっ!?!」

ドルク「そしてきわめつけはエナジーダマシー!?!」

ドルクは青いエネルギーの球体と緑のエネルギーの球体を同時に繰り出した

ドカー—————ン!!

それがハードプラントで動けなくなった父（魔王）にあたった

父（魔王）はボロボロになっていた

父（魔王）「私の負けか…!」

父（魔王）はそのまま気を失った

シルム「父（魔王）戦闘不能!」

ピッケル「うそっ!?!」

ハードプラントは消えて父（魔王）はフィールドに倒れる

ドルクは父（魔王）に駆け寄る

ドルク「大丈夫か?」

ドルクが手を差し伸べる



依頼6 ドルクVS父(魔王) 親方は強かった(後書き)

やっぱり変わってきてくと技も影響でるな

ドルク「まああのパンチは結構効いたな、あゝいて」

その割にはあまり効いてないように見えるけど？

シルム「まあ防御高いしね」

ドルク「伊達にトレーニングしているんだ、俺もまだまだがんばらないとな」

そうだね

ソウ「やっぱり師匠は強いな」

君もだよ(汗)

依頼7 トレーニング(前書き)

はい、今回はトレーニングです

ドルク「続きだぜ」

シルム「それじゃあ依頼7」

父(魔王)「燃えるぞ」

## 依頼7 トレーニング

バトルの後ドルク達は休憩をした

まず色々用意されているのはこっちではありえない物が(汗)

それは

シルム「スポーツドリンクっていいな」

ドルク「ごくごく、ぷはあ〜やっぱこうでないとな」

ソウ「へえ〜色々とあるんですね師匠のギルドは」

そう、トレーニングにはかかせないスポーツドリンクがあるのだ

それぞれのポケモンのグミを使ったスポーツドリンクでドルクは若草ドリンク、シルムは赤ドリンクだ

作っているのはゼラスの忠実な部下であるヤミラミ達だ

最近になってドルク達は人間達の世界に行ったりもあり、そこで色々調達もするのだ

シエルマル「でも捕まるってこともあるんじゃないですか？」

そう、ポケモンの姿なので捕まることもありそうなのだが



レヴィ「ドルクはあれでも強いから大丈夫よ」

ジユク「俺達もな、それじゃあ特訓するか」

ジユクもトレーニングルームへ

シエルマル「(うわあ、俺どうしよう？！)」

シエルマルはパニックに陥った

ピッケル「僕すごく不安だよ(泣)」

ピッケルも涙目だった(汗)

……

シルム「ほっ！ほっ！」

シルムは華麗にステップを踏んでリズムよくボクシングマシンのパンチを避ける

ゴウカザルという種族は主に攻撃と特攻と素早さが高い種族だ、シルムはその素早さをいかしてこつやっつてリズムよく避ける

シエルマル「シルム副親方はすごいな、リズムよく避けてる」

ソウ「しかも避けるのうまいですね、さらに素早いですから」

シルムは避けながらボクシングマシンにパンチを繰り返す、隙を見て攻撃を加えているようだ

ピッケル「すごいな、僕はあまりできないけど（汗）」

自身がありませんピッケルは言う

シルム「これでとどめー！」

シルムはこれでもかとボクシングマシンにパンチした

するとボクシングマシンは煙をあげてだらりとする

シルム「ふうー」

シルムは汗をぬぐう

ジユク「シルム、タオルだ」

ジユクはシルムに向かってタオルを投げた

シルム「ありがとう」

シルムはタオルを受け取って汗を拭いた

すると

ドカーーーーーー！

シエルマル「なっ！？なんだ！？」

何処からか爆発音が聞こえる

シルム「ああ、たぶんドルクの方かな、ちょっと様子を見てみよう」

ということでシルム達はドルクの方へと向かう

……

ドルク「ふう、まだまだだな俺も」

ドルクの目の前には

パルサ「ピクピク」

すぐくボロボロになっているおバカなパルキアの姿が

実は組み手をドルクはしていたのだ

ドダイトスという種族は主に攻撃と防御が高い種族で、素早さや特攻などはあまり期待できないが、ドルクの場合は攻撃と特攻そして防御や特防などが異常に高いためかエナジーバスターなどの特殊攻撃が強い、しかも相手はパルキアであるパルサ、伝説のポケモン相手に組み手をするのは逆に自分がやられることにもなる

だがドルクの場合は大食いやグミの効果もあつてかあまり効いていないのだ、このバカキアにもだ

シルム「うわぁ、やっぱりこうなるか(汗)」

ソウ「パルサさんがやられていますね」





## 依頼7 トレーニング（後書き）

ある意味チートなトレーニングでした

シルム「ここまでやるドルクもある意味すごいけどね（汗）」

ドルク「いや、俺もまだまだだ」

ソウ「師匠はすごいですよ さすがです」

まあ君もドルクの弟子だしね（汗）

シエルマル「俺、ついてこれるのかな（汗）」

大丈夫、君もがんばればね

ドルク「作者？次回は？」

今回はね〜とりあえずはその場所である種族同士の争いになります

シルム「争い？」

たぶんドルク達も一度は合ったことがあるよ

依頼 8 三つ巴！？エレキ平原の戦い（前書き）

スッキリした〜 休んだためスッキリ

ドルク「おつしゃあ！今回はなんだ作者？」

今回はあのエレキ平原のあの戦いが時・闇も加えた感じになります

シルム「時とか闇とかなんなんだよ（汗）」

それは自分達で確認しろ、では依頼 8

シルム「どうぞ」

## 依頼 8 三つ巴!? エレキ平原の戦い

次の朝……

シエルマル「おはようございます」

シエルマルはみんなに挨拶した

そんなこんなで今回も朝礼が始まる

……

ドルク「もぐもぐ、それで今回の依頼は？」

シルム「今回はなんかエレキ平原の最奥部で縄張り争いが酷くてやばいみたいなんだ」

ゼラス「たしかここは前にドルク達が言ったところだったな」

5年前、ドルク達がマリルとルリリの兄妹から水のフロートを取り戻す依頼を受けて以来だ

あそこは電気タイプのポケモンが多く生息している

だが最奥部には縄張りをもっているポケモン達もいた

シエルマル「エレキ平原ですか…俺じゃ無理がありますね」



父（魔王）「なら私も行くぞ」

ピツケル「僕も不安だけど行くよ（汗）」

本当は4匹なのだがジユクとペラップ、そして父（魔王）とピツケルは別々らしい

ジユク「で？シルム、縄張り争いをしているのは誰なんだ？」

シルム「うん、オイラ達が5年前に戦ったライボルト達とルクシオ達を連れたレントラーがリーダーのレントラー軍団と、こっちではめずらしいゼブライカというポケモンがリーダーのゼブライカ軍団らしいんだ」

ドルク「エレキ平原は電気タイプのポケモンにとってはいいがここまで来ると他の電気タイプのポケモンの被害が拡大されると困るしな」

そう、他の電気タイプのポケモンにも影響が出てしまうのだ  
なので

ドルク「準備して行くぞ！」

他のみんなは頷いて準備をした

……

エレキ平原入口

ペラハ「一体なんで私まで巻き込む！！（怒）」

早速ペラハのキレツツコミが炸裂した

ドルク「うるせえな、どうせ暇だろうと思ってプクリン親方に許可をいただいたんだ、文句言っつんじゃねえよ」

ペラハ「だからって私も色々仕事残っているんだけど！！ってか私はなんだ！！ああ！！どうせ私を身代わりのペラハガードとかそんなことするつもりだろ！！（激怒）」

激怒するペラハ

ドルク「は〜いとにかく行くぞ」

ペラハ「って聞いてねえし！！」

ペラハのキレツツコミはスルーしてドルク達は別々の組で入っていた

……

エレキ平原中間地点

シエルマル「はあはあ…きつい」

シエルマルの息が荒くなる

相当きついのだろう

ドルク「俺達はなれてるから平気だけどな」

シルム「オイラ達のは慣れっこだし」

ソウ「シエルマル君もなればなんとかなりますよ」

ドルク、ソウ、シルムはなれているため平然としている。三人はベテランだ、ソウは長く離れていたが、まだまだがんばれるようだ

シエルマル「すごいな〜親方達、かなわないな〜（汗）」

シエルマルも三人の凄さを実感した

ドルク「よっしゃ、行くぜ」

4人は最奥部へ

……

エレキ平原最奥部

ジユク「お前達もついたか」

ソウ「ジユクさん」

ドルク「こつちも今着いたようだな」

ジユク達と合流

ジユク「見てみる」

ドルク達は視線を向く

するとそこには

?????。「ここは私の縄張りだ！邪魔をするな！！」

黄色の髪を立てたポケモンが相手の二匹を睨みつける

?????。「何を言う！ここは我々の縄張りだ！！」

ピンとした黒い髪に目が鋭いポケモンが同じように睨みつける

?????。「なんだと！ここは俺達シママ一族のものだ！！」

しまつまみたいなポケモンが二匹を睨む

それぞれ順番にライボルト、レントラー、ゼブライカだ

ドルク「これはやべえ〜な」

シエルマル「これをどうやって止めるというんですか！？」

ペラハ「ってかものすごく怖いんですけど！？どう止めるというんだ！！？」

パニくるシエルマル&ペラハ

ドルク「ここは俺が行くぜ」

ドルクが歩き出す

シルム「ドルク、大丈夫かな？」

ジユク「あいつは地面タイプを持っているからな」

そう、地面タイプは電気タイプには通用しない

だがどうなのかわからない

ドルク「おゝい、テメエら何やってんだ？」

すると3匹がドルクを睨みつける

ライボルト「邪魔するな！！」

ライボルトが雷をドルクに向けて繰り返し出す

レントラー「貴様などに関係ない！！」

レントラーもドルクに攻撃

ゼブライカ「そうだ！！邪魔するな！！」

ゼブライカもドルクに攻撃

3匹の攻撃がドルクに直撃して爆発

あたりが煙に包まれる

ソウ「師匠!!」

シルム「いや、ドルクは大丈夫のようだよ」

シルムが言った通り、煙が晴れるとドルクは無傷だった

ドルク「ほう、どうやらテメエ等を成敗したほうがてっとりはいええ  
ようだな」

ドルクは3匹を睨みつける

するとライボルトはドルクを見て何か気づいた

ライボルト「ま!まさか!?!お前は!?!」

レントラー「なんだ!?!この殺気は!?!」

ゼブライカ「一体なんだ!?!」

ドルク「テメエら全員喧嘩両成敗だ!!! (黒怒)」

ドルクはエナジーバスターやアルテマなどで攻撃

3匹『うわあああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?』

ドカ-----  
ーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!





依頼9 縄張りは誰の者？（前書き）

はい、この三つ巴を解決します

ドルク「俺達でやってやるぜ」

ペラハ「お前がやるとすごく不安だよ！！」（怒）

## 依頼9 縄張りは誰の者？

シルム「大丈夫？（汗）」

ライボルト「すまない（泣）」

ドルクの攻撃によりダメージを受けた一族の者達は治療のためドルク達が治している

ドルク「これで大丈夫だな」

ドルクは回復魔法のケアルガで回復させる

ドルクはバンバン魔法使うが色々と魔力の事なども考えないといけない

シルムは補助系統の魔法は覚えているが回復魔法はあまり覚えていない

父（魔王）「私も回復といきたいな」

だが角は抜けないためか使えないがとりあえず回復魔法を唱えたが

ゼブライカ「こんなのが魔法か！！（怒）」

父（魔王）の回復魔法の実験台にされたゼブライカはさらにダメージを受ける



ライボルト「だが私は一度このドルク殿と戦った、二度目も負ける  
とは、私もまだまだだ、なら私はここをあきらめよう」

なんとライボルトはあきらめてしまった

レントラー「我もたしかにそうだ、この縄張りはブレイブの所有と  
いうのも」

ゼブライカ「ありだな」

レントラーとゼブライカも言う

シルム「でもそうしてもね（汗）」

ドルク「そこだな…そうだ！なあなあお前ら」

ドルクが3匹に提案した

ドルク「なら俺達ブレイブの仲間になればいいんじゃないか？それ  
なら文句ねえな」

ライボルト「仲間か…なら私はお前達に負けたのなら仲間になろう」

ラクライ達「はい！」

ライボルト達が仲間になった

レントラー「なら我…いや俺も仲間になろう」

ルクシオ達「なってやろう」



## 依頼9 縄張りは誰の者？（後書き）

ソウ「仲間になってよかったです」

ここから3匹のリーダー達も登場します

ドルク「次回ぐらいには名前がつくしな」

シエルマル「なんだかあつけないように思うような（汗）」

気にするな、さてお知らせです。次の話からコラボなどしたいのですが、そこで依頼募集です。

こっちの世界に来てほしいなど依頼は自由です。このようになります

・依頼内容

・詳細

・依頼主

・報酬（金額はポケ単位で別の世界で変えます）

という風です。メッセージもしくはこの感想をお願いします

ドルク「依頼待ってるぜ」



依頼10 再会！黄金の間探し（前書き）

はい！今回からコラボ入ります！

ドルク「で？最初は誰なんだ？」

今回はあの二匹の登場だよ

シルム「二匹？」

二人が知ってる人物、では依頼10！

ドルク「行くぜ！」

依頼10 再会！黄金の間探し

ここはギルド『ブレイブ』

今日も彼らはがんばっていた

シルム「1！2！」

ピッ！ピッ！

シルム「1！2！」

ピッ！ピッ！

ドルク、シルムはシエルマルとピツケルとソウと共にランニングをしていた

シルムは掛け声をかけて走り、ドルクはホイッスルをくわえて吹いて走っている

シエルマル「ぜえ…ぜえ…」

ピツケル「きついよ（泣）」

ソウ「さすが師匠とシルムさん、僕もがんばらないと」

シルム「ほら！二人ともしっかり！1！2！」

ピッ！ピッ！

……

シエルマル「疲れた」

ピツケル「僕も……」

シエルマルとピツケルは床に大の字で倒れた

ドルク「まだまだだな」

ソウ「まあなれてきたのでまだまだ余裕ですよ」

対してドルク、シルム、ソウはまだまだ余裕のようだった

シルム「それじゃあ二人は休憩してて、ドルク、オイラ達は依頼の方を」

ドルク「そうだな、ソウは二人を休ませてから休憩してくれ、その後二人と共に次の特訓をしといてくれ」

ソウ「はい！師匠もお気をつけて」

ソウは二人を連れてギルドの中へ

ドルク「俺達も依頼の方」

シルム「行くつぜ」

ドルクとシルムもギルドの中へ

……

ギルド食堂

ドルク「さて、依頼つと」

ドルクとシルムは早速依頼を探す

1階のギルド食堂は探検隊の憩いの場でもあり、様々な掲示板があるため、依頼はここで受けることになる  
すると

シムーン「ドルクさん！シルムさん！」

シムーンが来た

ドルク「シムーン、どうした？」

シムーン「二人宛に依頼ですよ」

シルム「依頼？」

ドルクは自分達宛の依頼を受け取った

その依頼内容は

シルム「黄金の間か…」

ドルク「場所は…隠された遺跡…ん？」

するとドルクは何かに気づいた

ドルク「こ、これは!？」

シルム「依頼主が!？」

ドルクとシルムが驚いた

その依頼主が

ドルク「アレンと…ガガリじゃねえか!？」

シルム「あの二人が来るなんて」

すると見ていたシミーンが二人に問いたたす

シミーン「アレンさんとガガリって誰ですか？」

ドルク「ああ、アレンはリオルの でガガリはダーククライなんだがこつちとは別の世界のダーククライだ、敵じゃねえよ」

シミーン「別の世界にもダーククライっているんですね」

世界はどうだろうとダーククライはいい奴や悪い奴もいる

最も5年前にドルク達が倒したダーククライはパルサが時空ホールに攻撃したためダーククライ自体の行方も知らない

シルム「シムーンは知らないと思うけど、オイラ達の世界とは違っていい人なんだガガリさんは」

ドルク「シムーンはまだ仕事残ってるだろ？とりあえず後は俺達に任せてくれ」

シムーン「わかりました、それでは」

シムーンは別の仕事があるため去った

ドルク「行くか、隠された遺跡に」

ドルクとシルムは隠された遺跡へと向かった

……

隠された遺跡入口

そこに2匹のポケモンがいた

一人は大きな目に、黒いたれている耳、そして小柄な体型の水色の体色のポケモン、もう一匹は白い髪に黒い体色、そして首には赤いアクセサリのようなものがついているポケモン

水色のポケモンはリオル、黒いポケモンはダークライだ

リオル「先生ここですね、ドルク達がいる世界のは」

ダークライ「ああ、どうやらそうだな…それにしても黄金の間の依頼なんてシャドーで依頼してもいいが」

この二人こそ依頼主の二人だ、リオルのアレンとダークライのガガリだ

アレンは一見リオルで男に見えるのだが、彼女は ポケだ、そしてカガリというダークライと共にシャドーという組織で働いている

実はこの二人はドルク達に会っている（詳しくは爆炎爆雷のアレン！！にて）

なので二人の事は知っているのだ

そこに

ドルク「久しぶりだな！アレン！カガリ！」

アレン「ドルクさん！」

シルム「久しぶり！」

アレンはドルクとシルムの元へ

アレン「うわぁ〜見ないうちに立派になってる！」

ドルク「まあ進化してな」

シルム「オイラ達もあの修行のおかげが強くなったよ」

ドルクとシルムは自慢する

カガリ「たしかに、進化前は強い感じの波動もあったが、それ以上に強くなってるな…さすがブレイブだ」

カガリがよってくる

ドルク「ああ、シャドーも悪い組織でもないようだしな」

シルム「それより黄金の間の依頼だったね？」

アレン「うん 先生も探検楽しみにしてたんだよ」

カガリ「そうだ 楽しみだな」

二人は嬉しくなる

特にカガリが一番嬉しいようだ（汗）

ドルク「そんじゃ行こうぜ」

アレン「よっしゃー！」

シルム「ダンジョンは強いポケモンいるから油断しないでね」

カガリ「俺を舐めるなよ、これでも強いからな」

そんなこんなで四人は隠された遺跡に入っていった

依頼10 再会！黄金の間探し（後書き）

はい！『爆炎爆雷のアレン！！』からリオルのアレンちゃんとダイクライのカガリさんが来てくれました！

アレン「私はリオルのアレンだよ　ちなみに　だからそこんとこよろしく！」

カガリ「カガリだ」

カガリさん嬉しそうですね（汗）

カガリ「1回探検したかったんだよな俺」

そうですね（汗）

アレン「あゝ次回が待ちきれないよ」

まあ待ってね（汗）

ドルク「嬉しいな、アレン達と探検できてな」

シルム「どうなるか楽しみだよ」

依頼 1 1 黄金の間とアレンの召喚龍達 (前書き)

ドルク「ん？このタイトルは？」

今回で黄金の間&さらにアレンちゃんの2匹のポケモンが登場だよ、  
それじゃあ依頼 1 1

アレン「オスッ！」

## 依頼 11 黄金の間とアレンの召喚龍達

隠された遺跡 10F

ドルク「エナジーバスター!!」

ドルクがエナジーバスターを放つ

アレン「きあいだま!」

アレンはきあいだまで敵ポケモンを倒す

シルム「シルムシュート!」

シルムは炎の弾を作って、左足で蹴りとばし、さらに手で炎の弾を作って相手に向かって投げ、高速回転で上に上昇して炎の弾をシュートして放った

カガリ「すごいな…あのナエトルとヒコザルとは思えないな(汗)」

カガリは二人の成長に唖然としていた

……

ドルク「なんとかなったな」

アレン「すげえ!ドルク先輩とシルム先輩!」

アレンは と思えない言葉をした

ほとんどの敵がドルクとシルムとアレンによって

カガリ「俺の出番（泣）」

カガリは涙目になる（汗）

ドルク「とりあえず降りるぞ」

ドルク達は次の階へと降りた

……

降りた階へ来たドルク、そこは黄金に輝いている部屋だった

アレン「すげえ！ここが黄金の間！」

カガリ「ほとんど黄金だな」

シルム「さて…ひきよせ玉！」

シルムはトレジャーバックからひきよせ玉を取り出して使った

すると何処からか宝箱が2つひきよせられた

黄金の間の間には水路があり、行けない、だが不思議な玉などを使えばなんとかなる

ドルク「とりあえず持って行って鑑定するか」

アレン「じゃあここから脱出しよう」

カガリ「ちよつと待て」

ここでカガリが待ったをかける

カガリ「こつちではダークライは敵とかだろ？俺は大丈夫なのか？」

そう、カガリ自体はダークライという種族だ、どうなるかわからない

ドルク「それなら事前に俺の仲間達が伝えてある、安心しろ」

どうやら事前に依頼で行く前にトレジャータウン周辺などで伝えてはある

カガリ「そうか…それじゃあギルドへ行くか」

ドルク達は頷いて探検隊バッジをにかけてダンジョンを脱出した

……

カガリ「ふう〜どうやらなんとかなったな」

カガリは安堵の表情をする

事前に伝えたため、敵でないことはなんとかなった

アレン「でも先生　こうして埋蔵金なども手に入れましたし」

アレンが持っているのは先程ネイティオの鑑定で手に入れた宝箱の中身だ

中身は黄金のリングと埋蔵金だ

アレンはすごく喜んでいた

アレン「これで遊んでくらせそうですね先生」

カガリ「そうだな」

不安もなくカガリは笑顔になる

アレン「あつ、そうだ、これ報酬だよ」

ドルクとシルムはフォレストリングとごうかのマフラーをもらった

これはドナイトスとゴウカザル専用の道具だ

ドルク「ありがとな 早速つけてもらっせ」

ドルクとシルムは早速道具をつけてみる

シルム「うわぁ〜マフラーすごくいい!」

ドルク「どうだ?」

アレン「うん すんごく似合う!」

ドルク達には好評だ

シムーン「それにしてもこっちの方はいい人なんですね」

シムーンは元々ダークライと対となす者だ

少し警戒はしているが

カガリ「まあ無理ないか、俺は種族的にもな」

種族の壁は超えられるものかどうかだ

後は信じることだけ

アレン「どうせだし、このまましばらくはここに居ていい？ドルク先輩？」

アレンはこのまましばらく『ブレイブ』に居たいらしい

ドルク「ああ、かまわねえよ」

ソウ「それにしても世界によって違うんですね」

シエルマル「いいダークライや悪いダークライっているんですね」

デイシア「たしかに、世界は広いな」

パルサ「なんかこいつを信用できないんだけどよ」

それぞれがカガリに対してだが、パルサはだまされたことで疑っている感じだ

ドルク「とりあえず食事にするか、黄金のリングはたくさん持つてるからな」

アレン「えっ！？それって？」

もちろん黄金の間はアレン達だけでなく、他にも色々ただ

ドルク「とりあえず腹減ったしな」

アレン「じゃああの二匹を呼び出さないとー！」

アレンは咄嗟とっさに白くて丸い石と黒くて丸い石を取り出した

すると二つの石は光って、周りから白いものと黒いものが包まれる

石は姿を変えて2匹のポケモンになった

一匹は純白に染まり、尻尾がターボエンジンのようなもので目が青い龍

もう一匹は黒に染まった体色に白いポケモンと同じくターボエンジンのようなものがついていて、さらに目は赤くなっている龍だ

白いポケモンはくようポケモンのレシラム、黒いポケモンはこくいんポケモンのゼクロムだ

ソウ「えっ!？」

シムーン「これは!？」

ミネラ「すごい!?!」

ピッケル「なんなんだ!?!」

シエルマル「レ…レシラムとゼクロム!?!」

レシラム「お久しぶりですねドルク様にシルム様」

レシラムはドルクとシルムに敬語で話す

ゼクロム「久しぶりじゃけん!ドルクにシルム!」

ゼクロムは訛った感じで話す

ドルク「久しぶりだな炎丸、雷吉」

説明しよう

この二匹はアレンの召喚、つまりアレンのポケモンであるのだ

カガリも召喚は使えるがここではディシアやパルサと同じポケモンがいるため召喚はしない

レシラムの方は炎丸と言う名前だ

ゼクロムの方は雷吉と言う名前だ

炎丸「おや、結構広いですね」

雷吉『結構広いけんな俺結構気に入ったわ』

二匹のイッシュの伝説がそう言う

まあ伝説などでも入れるスペースにはなっている

ソウ、レシラムにゼクロムですか…すごいですね「

ドルク「まああいつらはアレンの仲間だ それじゃあ夕食にしよう  
ぜ」

こうしてアレン達はしばらく、『ブレイブ』に滞在することに

依頼 11 黄金の間とアレンの召喚龍達（後書き）

はい！アレンちゃんの召喚ポケモンの二匹が登場しました！

ゼクロム 雷吉『俺はゼクロムの雷吉じゃ、よろしくな』

レシラム 炎丸『私はアレン様の召喚ポケモン、レシラムの炎丸と申します』

来てしまったというか雷吉君の訛り難しいな（汗）

雷吉『そうか？俺はこれがいいじゃけん』

炎丸『たしかにフォック様には難しいものですね』

まあなんとかできるようにがんばってみるから

アレン『おいしい』 夕食を食っている

ドルク『うまいだろ』

さて、次回はあの方が登場です

ソウ『誰なんですか？』

俺も知っている人で…実は…っと次回でわかります

カガリ『気になるな』

依頼12 ハチャメチャな作者登場！（前書き）

ドルク「ん？なんだこのタイトル？」

今回はとある方が登場します

シルム「まさか作者さんが登場するとか？」

んなわけないだろ（汗）俺とは別の作者さんだよ、しかもポケモンの姿で登場+ドルク達は知っているはずだよ

ドルク「あいつだな」

そしてシエルマル&ピッケルに悲劇が（汗）では依頼12

ドルク「かかってこいー!!」

依頼 1 2 八チャメチャな作者登場！

次の朝

今日も朝礼をやって朝食だ

ドルク「ガツガツ」

ドルクは相変わらず量が多い

シエルマル「すごいな〜親方（汗）」

父（魔王）「さすがドルク君だ！ピッケル！お前も見習え！」

ピッケル「いやこんなに食べないって（汗）」

ピッケルが無理があるのでつつこんだ

ドルク「ガツガツ…ああそういえば今日からピッケルとシエルマルを指導してくれる奴が来るんだが」

ソウ「指導？」

ソウは頭をかしげる

シルム「どうやら直接こっちに来るらしくて、オイラ達やピッケル君の事知ってるみたい」

ピッケル「僕を知ってる？」

ピッケルは頭をかしげる

知り合いなんていたのか？ピッケルはわからなくなる

アレン「ねえ？その人ってどんな人？」

アレンは気になって質問する

ドルク「そうだな…俺と同じ腹黒な奴だ」

カガリ「なんか怖いな（汗）」

ダークライなのになぜか不安がるカガリ

一体誰なのか？

その頃

?????「ここがトレジャータウンか」

一匹のポケモンが交差点の看板を見ていた

犬のような顔立ち、腕にはトゲの突起がついていた、さらに腰には銃、背中には剣を持っていた。剣は青い透き通った色をしている

リオルの進化系、波動ポケモンのルカリオだ、武器を持っているルカリオはここではめずらしい

「?????」さてと！ギルド『ブレイブ』はあっちだな」

笑顔でルカリオはギルド『ブレイブ』の方向へと向かう

……

その頃こちらは夕食を食べ終えていた

ドルク「ふう〜食った食った」

ドルクは腹をさする

まあこれでもヤセの大食いなのだから

ミネラ「それでその人はパパの知り合いって事？」

ドルク「ああ」

シムーン「どんな方なのでしょうね」

グラデル「気になりますね」

それぞれ気になるようだ

すると

ビービー！

何処かから警戒音なる

数秒だがなんとかおさまる

ドルク「来たか」

すると入口から

ルカリオ「おお！ここがギルド『ブレイブ』なんだな！」

来たのはルカリオだ

腰には銃、背中には剣を背負っていた

シムーン「ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンがルカリオに挨拶する

ルカリオ「ああ！それでドルクはいる？」

ドルク「いるぜ」

ドルクがルカリオの前へ

ルカリオ「おお！ドルクじゃん！」

ドルク「そういうお前はクラウドじゃねえか！」

ドルクがクラウドと呼ばれたルカリオに言う

このルカリオ、実は作者だ



依頼12 ハチャメチャな作者登場！（後書き）

はい！なんと作者であるクラウドさんが登場しました（汗）

シエルマル「えっ！？作者さん！？」

いや〜本人がシエルマルとピツケル君を鍛えたいと言ってきたから  
まあ面白そうなので来てもらったってわけ

シエルマル「俺すごく嫌な予感しかしないよ（泣）」

ドルク「とりあえずはクラウドも来たな」

今回はそんなクラウドさんがシエルマルとピツケル君を鍛えさせます

シエルマル・ピツケル「いやあああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああつ！！！！！！！！！！  
！！！！！！！！！！？」（泣）」

依頼 13 暴走大特訓！！その1（前書き）

はい！今回はついにシエルマル&ピッケル君のためにクラウドさんがすごい特訓メニューを考えてくれました

シエルマル「嫌な予感しかしない（汗）」

ピッケル「もう嫌（泣）」

はいはい、せつかくなんだからがんば それでは依頼 13

クラウド「暴れるぜ！！」





シエルマル・ピッケル「(黒っ!?!?つかすごくやばいし!?!?)」

シエルマルとピッケルは心の中でつつこんだ

すると

?????「ん?何やってんだお前達?」

そこにペラハが現れた

ドルク「おっ!ちょうどよかった ペラハ、お前も特訓付き合え」

ペラハ「特訓?」

クラウド「俺のすげえ特訓をな」 お前強制参加な」

ペラハ「ちよつと待て!?!?」

ここでペラハがつっこむ

ペラハ「まだ私参加するとかいってないし!?!?しかも何!?!?あなた誰よ!?!?しかも強制参加つて!?!?」

クラウド「うるせえな鳥(黒怒)焼き鳥にして食うぞゴラァ!(黒怒)」

クラウドはすごい形相でペラハを睨んで怒る

ペラハ「こわっ!?!?つか結局私も参加させられるのか...でも何の

特訓するんだ？」

クラウド「2時間全力疾走 (黒)」

すごい笑顔で言うクラウド

ペラハ「ちよつと待て!!?」

ペラハが待ったをかける

ペラハ「全力疾走って疲れるわ!!ってかそれ以前に特訓じゃないだろ!？」

ペラハのキレツツコミが炸裂

クラウド「うるせえよ! (黒怒) 波動弾!!」

クラウドは波動弾を数発ペラハに放つ

ペラハ「ごべばっ!？」

数メートルぶつ飛ばされてペラハは星となった

クラウド「全力で走ってなかったら…波動弾100発とロケットランチャーとアルテマ食らわすからな…あ、ドルクとシルムとかは別な…」

ドルク「ちなみにソウもな」

ソウ「僕にそれ食らわせたらどうなるかわかりますよね? (黒)」

すごい笑顔になってない顔をするソウ

クラウド「こわっ!? わかったから怖い顔するな」

とりあえずソウの機嫌をなんとかなおした

シエルマル・ピッケル「(ずりい!!?)」

クラウド「そんじゃ始めるぞ!!」

こうして2時間全力疾走が始まった

……

シエルマル「ぜえ…ぜえ…」

ピッケル「無理だよ」(泣)

クラウド「オラア! テメエら二人走れ!!」(黒怒)

クラウドの厳しい罵声でシエルマルとピッケルは汗をたらしながら走る

ここまで1時間

ただいま空の頂をのぼっている

大体の敵はほぼドルクやシルム、さらにジユクやソウが倒している。もちろんクラウドも波動弾や銃や剣などで次々と倒していく

シエルマル「(なんでこうなるの!?!?)」

ピッセル「(もう嫌(泣))」

シエルマルとピッセルは心の中で嫌なことを叫ぶ

その後

ペラハ「はあ…はあ…もうだめ…」

ペラハはフラフラしながらのぼる

クラウド「オラオラ!のぼりやがれペラハ!」

ペラハ「ペラップだ…」

疲れてツッコミする気力がない

……

2時間後

クラウド「はいお疲れ様でした!」

ドルク「ふう〜いい汗かいたぜ」

シルム「きついけどいい特訓だよオイラ達には」

ジユク「フン!このぐらいでくたばるか」

ソウ「きつかったです、師匠もいたからよかったです」

ドルク、シルム、ジユク、ソウはなんともなく汗をかいていてただいまスポーツドリンクを飲んでいる

一方

シエルマル「……」

ピッケル「……」

ペラハ「……」

こちらの三人は屍状態だ（汗）

クラウド「よし！今度は100キロのおもりで全力疾走やるぜ！！」

今度は全力疾走、100キロおもりバージョンをやるらしい

シルム「その前に休憩したほうがいいよ」

ドルク「そうだな、クラウド、ひとまずは休憩してからだ」

クラウド「わかった！」

とりあえず休憩することに



依頼14 暴走大特訓!!その2(前書き)

はい!クラウドさんの暴走大特訓の続きです

ペラハ・シエルマル・ピツケル「鬼!!悪魔!!(泣)」

はいはい、さぼるとクラウドさんのお死おきが待ってるから落ち着いて

シルム「お死おきって(汗)」

それじゃあ依頼14

クラウド「燃えるぜ!!」

## 依頼 14 暴走大特訓!! その2

休憩した後

クラウド「よし!早速走るぞ!」

今度はおもりをつけて走るようだ

シエルマル・ピッケル・ペラハ「おもっ!?!」

シエルマル、ピッケル、ペラハはなぜか200キロのおもりをつけていた

クラウド「ちなみにお前ら三人は200キロおもりだからな(黒)」

三人「ふざけるなああああああああああああああああ  
あああああああああああああああつ!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! (激怒)」

三人が見事なシンクロツッコミをした

ドルク「100じゃ軽いな、俺は300ぐらい頼む」

シルム「100ぐらいなら大丈夫かな」

ジユク「俺もだな」

ソウ「僕もです」

ドルクは300キロ、シルム、ジユク、ソウなどは100キロだ  
ちなみに

アレン「暇だから私も」

アレンも参加でアレンは50キロのおもりを

カガリ「俺は100だな」

カガリは100のおもりを背負っている

クラウド「そういえば初めての奴らだな」

クラウドは気になっていた

ドルク「ああ、こいつらはシャドーという組織に入っていて、しば  
らくはこっちにいるつもりだな」

ドルクが説明した

クラウド「へえ、そうだったのか、なあなあドルク！お前腹黒同盟  
のリーダーだろ？俺を腹黒同盟に入らせてくれ！それとブレイブに  
入れてくれ！」

なんとクラウドはブレイブの仲間になりたい+腹黒同盟に入りたい  
らしい

ドルク「いいぜ」



三人はクラウドにつっこんだ

ドルク「中々のもんだな」

シルム「重いけどなんとかあったよ」

ジユク「素早さを上げるにはちょうどいいな」

ソウ「いい汗かきましたね」

ドルク達はまだ疲れていなく余裕だった

アレン「まだまだ!」

カガリ「すごいな」

アレンはまだまだ余裕の表情、カガリはすごいことに感心している

ドルク「そろそろ昼メシにするぞ」

クラウド「今度は俺が作ってやるよ!」

なんとクラウドが作るらしい

ドルク「おっ! そんじゃあ任せませ」

ドルク達は早速ギルドの中へ

……

クラウド「完成だぜ！」

クラウドは満足そうにした

テーブルにはクラウドが作った料理がたくさんあった

和・洋・中など色々な料理がある

クラウド「さあ！食ってくれ！」

全員『いただきます！！』

全員がクラウドの料理に手をつける

……

ドルク「ガツガツガツ…おかわりな」

クラウド「ドルク、お前すげえな（汗）」

ただいまドルクは100皿食っていた

シルム「これでもヤセの大食いだけどね（汗）」

シルムが付け足して答えた

ドルク「ぷは、食った食った」

ドルクは満足そうになる



依頼14 暴走大特訓！！その2（後書き）

クラウドさんが料理上手なので昼食をそうさせてもらいました

ドルク「いや〜こいつがブレイブに入ったら飯とかもいしいな〜」

でもたまにヤミラミ達にもだけどね（汗）

シルム「12歳で若くてもすごいな〜」

そうだね、次回もクラウドさんの特訓は続きます





……

全員がバットを持っている

ドルクは口でくわえている

カガリは筋肉痛でお休み

アレン「なんだか面白そう（黒）」

アレンはなぜかバットを持って何かたくらんでいるような感じだった

アレン「これでいじめっ子どもを撲滅できればいいな」

と、いじめ経験があるためかそのような恐ろしいことを考えていた

クラウド「マジか、それじゃあアレンはそいつらの顔を思い出しな

がらすぶりをやれ」

アレン「わかった」

笑顔で答えるアレン、ある意味恐ろしく感じる（汗）

……

クラウド「もっと気合入れろ！シエルマル！！ピッケル！！」

シエルマル「そういわれても！！」（泣）

ピッケル「これ以上は！！」（泣）

二人とも涙目である

クラウド「もっと回数増やしたいのか　そうかそうかならh」

シエルマル・ピツケル「ごめんなさい×100!」（泣）「

涙目になりながら必死にごめんなさいを連語しなからすぶりをやる  
シエルマルとピツケル

一方

シルム「なんか軽いな」

ドルク「ほい!」

アレン「潰す!」

シルムはクラウドが用意した重いバットを軽々ともって振る

ドルクも同様に口でくわえながら振る

アレンはすごい形相でいじめた奴らの事を思い出しながらすぶりを  
する

父（魔王）「ふん!」

父（魔王）はものすごい顔ですぶりをする（リザードンだが）

ジユク「ここまでやるなんてすごいな」

ジルクは關心しながらすぶりをする

ソウ「みなさん順調ですね」

ソウは持てないため見学だ

……

クラウド「よし！今日の特訓はここまで！この調子でやるZ E」

シエルマル・ピツケル「もう勘弁して（泣）」

シエルマルとピツケルは疲労となりベタリと座り込む

ドルク「まあいい特訓にはなったな」

シルム「汗かいてきたな、それじゃあ温泉とかに入ってリフレッシュするか！」

クラウド「マジ！俺も入る！」

ジルク「とりあえず二匹を運ぶか（汗）」

ドルク達は二匹を運びながらギルドの温泉へ

その後シエルマルとピツケルは筋肉痛となったがクラウドの回復薬などで復活して、また地獄の特訓を受けるハメになったとさ

ペラハはさらに1ヶ月も筋肉痛となった



依頼16 クロウド初めての探検へ(前書き)

はい！今回は探検です

ドルク「クラウドと一緒に」

シルム「どうなるかな」

それじゃあ依頼16

ドルク「テメエのハートに刻んどきな！！」

## 依頼16 クロウド初めての探検へ

次の朝

今日も誓いを言い終えて朝食へ

クロウド「朝食はやっぱりご飯と味噌汁だぜ！」

そう、日本人の朝の定番のご飯と味噌汁だ

さらにおかずは色々ある

納豆に卵焼きや目玉焼きなどもある、もちろんふりかけもある

全員『いただきますーすー！』

全員が朝食をいただく

……

クロウド「さて！今日はどうしようかな」（黒）「

クロウドが笑顔に言う、逆に口元がニヤリとしているが

ドルク「とりあえず今日は探検に行くぞ」

シルム「クロウドさんも一緒にどうかな？」

クラウド「マジ！いくいく！！」

どうやら行きたいらしい

ソウ「師匠？場所は何処なんですか？」

ソウは今回探検する場所が何処なのかをドルクに言う

ドルク「そつだな、ちょうど海のリゾートで食料調達しようと思つてな」

クラウド「あそこはグミがうめえんだよね」

海のリゾート

そこはミネラが教えてくれた場所だ

ドルク「今回はシエルマル達は特訓していてくれ」

シエルマル「はい……」

シエルマルがなぜか暗くなる

昨日のクラウドの地獄の特訓がある意味トラウマになってきた

クラウド「さぼったら追加するからな（黒）」

クラウドがさりげなくシエルマルとかに言う

それだけでなくピツケルもだが

ドルク「それじゃあ出発するぜ」

ドルク、シルム、ソウ、クラウドは海のリゾートへ

……

海のリゾート

ソウ「食料が結構ありますね」

クラウド「おっ！この銀色のグミいただき」

ドルク達は海のリゾートで食料などを探す

ただ探すだけでなく、探検も怠らない

クラウド「超電磁砲レールガン！！」

クラウドは腰につけている銃を取り出して襲い掛かってくるポケモンに撃った

撃たれたポケモンは倒れた

ちなみにこの銃は弾は大体死なない程度で、さらに炎や雷などの属性の弾なので影響はない

クラウド「波動弾！」

今度は銃に波動弾を込めて撃つ

さらに敵ポケモンは吹っ飛んだ

シルム「すごいな」

シルムが羨ましそうになる

クラウド「シルムもなんか武器を具現化すればいいんじゃない？」

ためにシルムは頭の中でイメージする

すると炎で出来た銃が二丁でできた

それをシルムは両手で持つ

シルム「できた！」

ドルク「おっ！新しい技ができたな」

シルム「でもまだここからだよ、これに炎の弾とかで撃てるようにしないとね」

クラウド「まあ死なない程度なら大丈夫だろうな」

とりあえず何事もなかったように先へと進んだ

……

クラウド「うひょ〜！お宝がいっぱいだー！」

宝物エリア

クラウドはお宝を入れた

ドルク「そんじゃあ帰るか」

クラウド「おう！」

ドルク達はワープゾーンでダンジョンから脱出した

依頼 16 クロウド初めての探検へ（後書き）

シルムに新技ができました

シルム「銃とはすごいね」

まあ玉とかは死なない程度にはしてあるから、次回あたりでなんとかなるかな

シルム「楽しみ」

次回はそんな新技を使っつての練習バトルになります。相手はまあ楽しみにしててください

依頼 17 バーニストガン（前書き）

はい！今回は前回シルムが具現化した二丁の炎の拳銃でシルムがバトルします

ドルク「ってかよく相手って誰だよ？」

それは誰かはお楽しみ、それじゃあ依頼 17

シルム「燃えるぜ！！」

## 依頼17 バーニストガン

次の朝

ドルク「ガツガツ…やっぱりグミパンはいいな」

クラウド「やっぱりこうするのが一番だな」

朝食はクラウドがグミを使って作ったグミパンだ

それぞれ色が違っていて、色んな味がある、たとえば今ドルクが口  
にしているのは黄緑色のパンだ

これは若草グミを使った若草パンというグミパンだ

それぞれグミパンを食べて今日も1日が始まる

シルム「昨日の新技…とりあえずためしてみたいな」

シルムはそう言う

前回、クラウドの銃を見てシルムは二丁の拳銃を炎で具現化した

シルム「とりあえず殺傷能力はないようにしてるしダメージを与える  
程度はなんとかなるから」

ドルク「そうだな、相手はどうするんだ？」

そう、相手をどうするかだ

シルム「うん、そうだな」

ソウ「せっかくですし、僕と相手しますか？」

ソウが言うてくる

シルム「それもそうだな…じゃあ」

カガリ「俺も相手にしてもいいが？」

カガリもだ

シムーン「とりあえずはソウさんの方がちょうど相手にはいいですし、ソウさんの方が」

アレン「まあ楽しみだし早くみたいな」

楽しみにする者もいる

シエルマル「まあ俺も特訓だけでなく、相手の事も知っておく必要  
ありますし」

まあ相手の事も知っておくのも探検の心得だ

父（魔王）「ならシルム君の戦いも見ておく必要があるな」

ピッケル「たしかに」

しかし

クラウド「抜け駆けで悪いけど、ピッケルは特訓な」

ピッケル「ガーン!?」

ピッケル、地獄特訓へ(汗)

ピッケル「ふざけるなああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!」(泣怒)

ピッケルの叫び声がギルドに木霊する

……

ここはギルドのバトルフィールド

ソウとシルムが対峙する

クラウド「それじゃあこれよりシルムとソウのバトルを行うぜ!ル  
ールは先に戦闘不能にしたほうの勝ちだ、それじゃあバトル開始だ  
!」

ドルク「この勝負どうなるかだな」

ドルクや戦わない者はバトルフィールドの横にあるベンチで二人の  
戦いを見る

シルム「まずはフレイボール!」

シルムの口から数発の炎の弾を吐く

ソウ「そう簡単にいきませんよ」

ソウはニヤリと口をニヤケだす

するとフレイボールはソウに当たらず逆にシルムに跳ね返ってきた

シルム「くっ！」

シルムは自分の放った技をかわす

シルム「跳ね返った！？一体！？」

シルムはわからずに少し焦る

ソウ「僕もパワーアップしたんです、この結界でね」

ソウの周りには結界が張られていた

だからシルムの攻撃を跳ね返したのだ

シルム「結界ならこれで！」

シルムは素早くソウに迫る

ソウ「何を攻めてくるかわかりませんが無駄ですよ？」

ソウは余裕の表情だ

シルム「それはどうかな？瓦割り！！」

シルムは結界に瓦割りをした

すると結界が

パリーン！！

ソウ「なっ！？身代わり！」

ソウは咄嗟に身代わりを使ってかわした

シルム「やっぱりソウは強いや」

ソウ「シルムさんもまさかここまで強くなっているなんて…それでこそですよ！サウザントカッター（水）！！」

ソウは青色の真空波を繰り出す

シルム「（やっぱりサウザントカッターで来たね、ならここでためさせてもらっぜ！）バーニストガン！！」

シルムはそういつとシルムの両手から炎で作った拳銃が二丁も出てきた

シルムは二丁の拳銃を構える

シルム「ショット&フレア！」

シルムの拳銃から青い炎の弾が発射された

クラウド「うお〜!!」

ドルク「いい感じじゃねえか！」

観客から歓声が来る

青い炎の弾は真空波を打ち消した

ソウ「（僕のサウザントカッターを打ち消した!?!）」

ソウは驚き、焦る

シルム「ロード！」

シルムはそう言うとかシッ!と拳銃から音になる

シルム「シヨット！」

シルムは連続で炎の弾を銃で連発する

ソウ「でも!結界！」

ソウは結界を作る

炎の弾は跳ね返される

シルム「守る！」

シルムは守るで防ぐ

シルム「(やっぱここは...)ブレイクショット!」

シルムは再び拳銃から青い光の弾を発射させる

ソウ「瓦割りではだめですが、遠距離からでも結界は壊れませんよ!」

しかし

パリーン!と再び結界が破られる

ソウ「くっ!」

ソウに青い光の弾があたる

ソウ「いたたた…」

ソウはいたそうにするがまだ大丈夫のようだ

シルム「ブレイクショットは結界などのバリアを打ち破る効果があるんだ、まあどれも殺傷能力は打ち消してあるから安心して」

どうやらどの弾にも殺傷能力はまったくないようだ

ソウ「どうやらかなり強くなってますね、ならライオットカッター  
&セイントカッター!」

それぞれ光の真空波がシルムに向かう

シルム「よつと！」

シルムは見切るように避ける

ソウ「ホーリー！」

ソウは光球を5発飛ばす

シルム「マツハパンチ！」

シルムはマツハパンチで光球をはじき返す

そしてジャンプした

拳銃の銃口から光が吸収する

それは炎の弾と青い光の弾だった

シルム「フレアライトレールガン！！！」

シルムが引き金を引くと同時に一方に炎の光線が放たれ、もう一方に青い光の光線が放たれた

ソウ「やばい！？守る！」

ソウは守るを使って防ぐが

ソウ「ヒビが！？」

守るのベールにヒビが入り、ソウに直撃した

ソウはボロボロになって倒れた

クラウド「ソウ戦闘不能！！シルムの勝ち！」

シルム「オイラ勝っちゃった！？」

シルムは驚く

シルムはソウの元へ

シルム「ソウ、大丈夫？」

ソウに声をかける

ソウ「負けました、ここまでやるなんて…シルムさんは強くなりましたね」

ドルク「お前もよくがんばったぜソウ」

そこにドルクが駆けつける

ソウ「師匠…」

ドルク「シルムは色々と努力してここまで強くなれた、俺とも戦ったことも数回あったからな」

シルム「それでもドルクには勝ったり負けたりはしてるよ」

二人がいるからお互いが強くなれた、そして互いが認め合う、それがバトルなのだから

シルム「オイラもこれを使いこなせたのは嬉しいし、さらにかんばらないと」

それでも強くなっている。ドルクも、シルムも

アレン「すごいバトルだったな」

クラウド「俺の超電磁砲レールガンとはちょっと違う感じだな」

それぞれの技には技名に何かついていて見た目からして同じように見えるが同じ感じではない、技は不思議に思うことばかりだ

ドルク「さてと、昼飯にすっか」

ドルクの一言でみんなは食堂へ

## 依頼17 バーニストガン（後書き）

やってみたかったんだよね」とある科学の超電磁砲とかにあるレールガンを

ドルク「クラウドの超電磁砲とは違うんだな」

技っていつでもそれぞれが違うものだよ、シルムの場合は炎属性と格闘タイプだから

シルム「あの青いのって波動弾？」

いや、大体気合玉かな、一応アレも格闘タイプの特殊技だし

シルム「まあオイラ波動弾とかは覚えないけどね（汗）」

そりゃね、エナジーダマシーとかも気合玉とかの原理もあるし

ドルク「そうなのか」

さて今回はプクリンのギルド訪問とかです

依頼18 プクリンのギルド(前書き)

ドルク「おっ！ついにか」

うん、やっとプクリン親方の登場です。では依頼18

ドルク「ロックでいくぜ！」

## 依頼18 プクリンのギルド

次の朝

今日もいつもと変わらない日だ

ドルク「さて、今日はプクリン親方のところに行くか」

シルム「そうだね、ペラップがクラウドさんの特訓で休みっぱなしだったしね」

クラウド「まっ！どうせ暇だし行くぜ」

クラウドも行きたいらしい

ピッケル「じゃあb」

父（魔王）「ピッケルは父さんと特訓だぞ」

ピッケル「ちょっと待て！！？」

ピッケルは特訓で行けないようだ

父（魔王）「プクリン親方がどのような方なのか会ってみたいが、また機会あったらで」

都合が悪い感じのようだ、まあドルクに負けているため負けたくない気持ちが高いのだろう

シエルマル「じゃあ俺も」

シエルマルもだ

ソウ「それなら僕も行きましょう」

ソウも行くらしい、ソウは怪我は完治している

アレン「私も」

カガリ「俺も挨拶ぐらいはしておかないとな」

アレンとカガリも行くようだ

ジユク「俺達は依頼の方をやらないとな」

シムーン「こちらも色々忙しいですし」

まあほぼ行けるメンバーと行けないメンバーで分けられた

……

プクリンのギルドに行くメンバーはドルク、シルム、ソウ、シエルマル、クラウド、アレン、カガリの7人だ

ここは交差点だ

ドルク「この上にプクリン親方のギルドがあつてな、まあプクリン親方には失礼ないようにな、シエルマル、クラウド」

クラウド「わかった」

シエルマル「はい」

ドルク達はプクリンのギルドへ

……

プクリンのギルド入口前

ドルク「ここだが、まずはこの鉄格子で囲まれた穴に乗ってからだ」

まずはドルクが穴に乗った

?????「ポケモン発見!!ポケモン発見!!」

?????「誰の足型?誰の足型?」

?????「足型はドルクさん!足型はドルクさん!」

シエルマル「わわっ!?!?穴の中から声が聞こえてる!?!?」

シルム「プクリンのギルドはこうして足型で判断するんだ、オイラも最初は緊張してすごく怖かったんだ」

クラウド「今はすごく成長してるなシルムも」

シルム「まあな」

どんとんと穴に乗るブレイブ一行

ただシエルマルはミジュマルなのでめずらしく穴の中は少し騒動があったが何もなくプクリンのギルドへと入った

……

プクリンのギルド地下1階

シエルマル「すごい!?!」

プクリンのギルド地下1階は掲示板があり、広がった

そこに

?????「あら!ブレイブのドルクとシルムではありませんの!」

ドルク達に近付いてきたのはひまわりのような顔で葉っぱのような両手のポケモンだった

ドルク「おっ!キマワリ姉さん」

そう、このポケモンの名はキマワリでプクリンのギルドの弟子の一人で実力者だ

キマワリ「今回も来てくれて嬉しいですわ」

さらにそこから

?????「ハイハイ!お前から来たんだな!」

ハイテンションで来たのは両手はハサミで頭に3つの突起がついて、体色が赤いポケモンだった

シルム「ハイガニ！」

プクリンのギルドの弟子の一人、ハイガニだ

ハイガニ「ハイハイ！それにしてもダークライまでいるなんてな」

ドルク「ああこいつは別の世界のダークライで敵じゃねえからな」

ドルクが説明した

とにもかくにも地下2階へ

……

ギルド地下2階

ドルク「ここだ」

ドルク達はプクリンの部屋の前に来た

ドルク「プクリン親方！ドルクです！失礼します！」

ドルク達は中に入った

プクリンの部屋

プクリン親方は後ろを向いていた、ピンクの体色でふわふわした体毛だ

ドルク「プクリン親方」

プクリン「……」

シエルマル「あれ？」

アレン「どうしたのかな？」

すると

プクリン「やあ！」

シエルマル・アレン「わっ!？」

突然プクリンが振り向いたことにシエルマルとアレンが驚く

プクリン「ドルクいらっしやい、それに君達はシエルマルにアレンにかがりだね」

アレン「私の名前知ってるの!？」

ドルク「俺達が前もって教えただ」

アレン「あっちのとは違うんだね」

アレンは同じプクリンでいじめっこのあいつを思い出していた

プクリン「それにしてもすごいね」

ドルク「まあ結構こっちもなんとかやってますよ」

プクリン親方とか色々会話しているドルク

クラウド「すげえな」

プクリン「うわあ〜君めずらしいね、銃とか剣とか」

ドルク「クラウドは一応作者です」

ドルクが説明した

その後色々話してプクリンのギルドを後にした

クラウド「いや〜すごいな〜すごい威圧感というのも感じるな」

クラウドはプクリンから来る何かを感じた

ドルク「まああれでもすごい方だからな、さてパッチールのカフェで飲み物飲んで帰るか」

シルム「そうだね」

アレク「あそこって飲み物とかすごいんだよね」

カガリ「俺も〜」

シエルマル「（なんだかドルク親方と同じような感じがする…）」

ソウ「プクリン親方が元気でやってるなんて僕も嬉しいですね」  
みんな喜び、その後パッチールのカフェで飲み物を作ってもらって満足して帰った

……

夜

ドルクの部屋

ドルク「（俺もがんばらないとな…俺ももっと強く…まだまだかもしれねえが明日もがんばらねえとな）」

ドルクは少し起きていた、考えことをして寝ていなかったのだ

ドルク「さあて寝るか」

ドルクは眠りについた

依頼18 プクリンのギルド(後書き)

さて、あまりにもグダグダになってしまった(汗)

ドルク「しっかりしろよ」

ごめん(汗)さて次回は作者キャラ&コラボキャラが登場します。

依頼19 新たな者達（前書き）

はい！今回はまたコラボです、なんとその方は読者さんで感想送ってくれた方ですが、作者になった方です。クロウドさんと関係ある方です

ドルク「関係ある方？」

うん、さてどうなるか依頼19

ドルク「テメエ等のハートに刻んどきな！！」

## 依頼 19 新たな者達

交差点

????? 「ここから左に行くとギルド『ブレイブ』があるんだな」

????? 「でもヨ、ポケール?ここで強くなれるって本当なのかヨ  
」?

一匹は頭に突起がついていて、岩色の体色にお腹には赤いもの、背  
中の腰には短剣がついている

もう一匹は小さい翼にトゲトゲした白いいくつもの突起に三角の赤  
と青の斑点がついている

一匹は岩肌ポケモンのヨーギラス、もう一匹は幸せポケモンのトゲ  
チックだ

????? 「ああ、ここでつよ〜い奴がいるみたいでな、俺の剣術と  
かの修行などにちょうどいいんだデイン」

????? 「そうなのかヨ」

その二人はギルド『ブレイブ』の方へと向かった

……

ギルド1階トレーニングルーム

クラウド「超電磁砲<sup>レールガン</sup>!!」

シルム「フレアライトレールガン!!」

ただいまシルムとクラウドがバトルしている

ドルク「二人してやるじゃねえか」

ミネラ「シルムもクラウドもすごいな」

ジユク「まあシルムはサポートなど色々してるから強いしな」

アレン「すげえ！」

カガリ「やっぱりブレイブ…あなどれないな」

こちら観戦しているドルク達

父（魔王）「いや〜さすが副親方だ！ピッケルも見習え」

ピッケル「いや僕は僕でシルムさんはシルムさんだから（汗）」

ピッケルがツッコミをする

すると

ビービー

シルム・クラウド「ん？」

突然警報音が聞こえてきたためシルムとクラウドは一時バトルを中断した

ドルク「誰か来たようだな」

シルム「行ってみよう」

ドルク達はギルド入口へ

……

ギルド入口

ヨーギラス「それにしてもすげえな」

デイン「すごいヨー！でかいヨー！」

ヨーギラスとデインと呼ばれたトゲチックがギルド『ブレイブ』の  
でかさに驚く

ヨーギラス「入るぞ」

デイン「わかったヨ」

二人は中へと入った

……

ギルド食堂

ヨーギラス「すげえ（汗）」

デイン「ボケール、ここ広いヨ！」

二人はギルド食堂の広さに驚く

すると

ドルク「ん？お前らか、ここに入ってきたのは」

二人「!？」

ドルク達が来た

ヨーギラス「あんたがここのギルドの親方？」

ドルク「ああ」

ドルクは答えた

ヨーギラス「俺はミゲール、修行のために来ていてな、ここのギルドで修行できると聞いてきたんだ」

ヨーギラス、ミゲールは自分の紹介と目的を言う

デイン「そしておれっちはデインだよ」

デインも紹介する

すると

クラウド「おっ！誰かと思えばミゲールさんじゃん！」

クラウドがミゲールの前に

ミゲール「ってクラウドさんじゃん！」

ドルク「知り合いか？クラウド？」

クラウド「ああ！俺とも知り合いなんだ」

どうやらクラウドとも知り合いらしい

クラウド「ってか修行で来たの、まあちょうどここでバトルとかしていたんだ」

ミゲール「バトルか？それなら俺もやるうかな」

と、ミゲールはバトルしたいらしい

ドルク「どうせだから俺とバトルするか」

ドルクがバトルしたいらしい

ミゲール「お！おう！ならバトルしてやるぜ！（って！？いきなりバトル申しこまれたー！！無理無理！？ぜってえ勝てる気がしねえ！？）」

と、大量の汗をかくミゲール

シルム「無理しないほうがいいよ（汗）」

とりあえずシルムがそこをカバーする

ドルク「まあいきなりバトルするのも無理あるか、ごめんな、それじゃあ聞きたいか？」

ミゲール・デイン「はい（ヨ）？」

ドルク「聞きてえよな、俺達の事」

ミゲール「うん、聞きたい」

するとドルクが高らかに決めゼリフを言う

ドルク「俺達は探検隊ブレイブ！ロマンを求めて探検する探検隊だ！  
！テメエらのハートに刻んどきな！！」

ドルクの決めゼリフが決まった

ミゲール「すげえ」（汗）」

デイン「ボケール、おれっち達大丈夫なのかヨ（汗）」

不安がる二人

ドルク「まあとりあえずクラウドの知り合いだしよ、ブレイブに入る許可を出すぜ」

こうしてミゲールとデインの二人を仲間にした

だがこの二人は後にドルク達のすごさを目の当たりにする

依頼19 新たな者達（後書き）

はい！作者のミゲールさんとそのミゲールさんのキャラ、デインです！

ドルク「まさかあの二人がな」

感想でも実は出たいという出演依頼が来ていてね、まあまさかクロウドさんとそんなつながりがあるとは思ってもみなかったけどね（汗） 詳しくは感想をみればわかります

シルム「でもこの二人大丈夫なのかな（汗）」

そんな次回はミゲールさんとデインの特訓です。ある意味カオスになるかもしれませんが（黒）

依頼20 混沌（カオス）なバトル&特訓（前書き）

ドルク「おっ！すげえタイトルだな」

クラウド「ククク（黒）あの二人を（黒）」

シルム「なんかクラウドさんがやばい感じになってる（汗）」

アレン「わあ〜なんだろう〜」

カガリ「なんかカオスになりそうだな（汗）」

それでは依頼20

ソウ「行きますよ」

## 依頼20 混沌（カオス）なバトル&特訓

ギルド1階 トレーニングルーム

ドルク「よっしゃあ！ミゲール、お前の実力見せてくれよ」

ニコやかになるドルク

ここはトレーニングルームのバトルフィールド

ここにドルクとミゲールの二人がフィールドにいる

ミゲール「お、おう！（無理×100！！）」

ミゲールは冷や汗がダラダラと落ちる

もはや嫌な予感しかしない

シルム「バトル開始！」

シルムの合図とともにバトルが開始される

ミゲール「もうだめもとで！龍の舞！そしてストーンエッジ！」

ミゲールは龍の舞をしてストーンエッジを繰り出した

ドルク「ロックフェンス！」

ドルクがロックフェンスで防いだ

ミゲール「うおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!」

ミゲールは腰の短剣でドルクを斬りつけようとしている

ロックフェンスを解除したドルクは口からエネルギーをためる

デイン「やばい!? ポケール!? 離れるヨ!!!」

ミゲール「え?」

ドルク「エナジー……」

ドルクの口から緑のエネルギーがたまった

ドルク「バスタアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!」

ドルクの得意技、エナジーバスターが至近距離でミゲールに向かって放たれた

ミゲール「ホゲエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
!!」



……

1時間後

ミゲール「死ぬかと思った（泣）」

ミゲールは三途の川をあやうく行ってしまつところだった

クラウド「よし！ミゲールさんとデインを含めて俺の特別特訓を開始する（黒）」

再び地獄の特訓が始まろうとしていた

クラウド「まずは全員で空の頂を登ってそして降りてここまで帰ってこい！ちなみに重りをつけたままだ（黒）」

空の頂はグラデスのシェイミの里から行けるダンジョンだ

そこから頂上からギルドまで帰ってくるのが今回の特訓だ

カガリ「俺はとりあえず見学する」

カガリは筋肉痛になつたため休み

グラデル「私はとりあえず様子などですね」

グラデルはスカイフォームでみんなの様子などを伝える

シムーン「私は救護の方をやっています」

シミーンは救護の方を担当

クラウド「それじゃあ…スタート!!」

全員が走る

アレン「おっしゃあ!行くぜ!!」

アレンががんばって重りを50でスタート

他はそれぞれ100や300あたりだ

ドルク「まあこのぐらい軽いな」

ドルクは背中に500kgの重りをのっている

ジユク「フン!!」

ジユクは300kgの重りをつけている

レビィ「ジユクさ〜ん!がんばって〜!!」

レビィが応援する

ゼラス「重い…ここまでやるとは(汗)」

ゼラスは100kgの重りをつけている

ソウ「僕は軽く50ぐらいですけどね」

ソウは50kgだ、あまりソウを怒らすとやばいというところで(汗)

クラウド「さて、どうなるのかな」(黒)

楽しそうにクラウドは黒い笑顔を見せる

デイン「重いヨ」(泣)

ミゲール「おもっ!?!ってかマジきつい!?!?」

ミゲール&デインは100kgの重りをつけて走っている

ちなみに空を飛ぶことは不可能

……

空の頂

シエルマル「水覇斬!」

シエルマルは重りをつけながら新しい技を使って敵ポケモンを倒していく

シエルマルのホタチが水をまとい、そこから地面に叩きつけ水の衝撃波を放つ

ピッケル「火炎放射!」

ピッケルは火炎放射で応戦する

一方

ミゲール「はあはあ…しんど…」

デイン「おれっちもヨ…」

この二人は疲れていた

歩きながら頂上を登る

……

3時間後

ドルク「はあ〜いい特訓だったぜ」

シルム「あ〜重かったよ」

ドルク&シルムは疲れた表情を一つもせずゴール

シエルマル「はあはあ…やっとゴールできた…」

シエルマルは汗をかきながらなんとかゴール

アレン「ゴール！あ〜結構きつかった〜」

アレンも疲れながらなんとかゴール

ジユク「こっちもゴールだ」

ゼラス「なんとかゴールできた…」

ジユクは汗をぬぐってゴール、ゼラスは汗びっしょりになりながらゴール

ソウ「やっとゴールです」

ソウもゴールした

しかし

クラウド「ミゲールさんとデインはまだか？」

この二人はどうしたのか？

すると

ミゲール「やっと…」

デイン「ゴールヨ…」

足を引きずりながら二人はなんとかゴールへと一歩一歩歩き出す

そして

ミゲール「やっとゴールだ」

デイン「やったヨ」（泣）

なんとかゴールなのだが



依頼20 混沌(カオス)なバトル&特訓(後書き)

カオスな感じになってしまった(汗)後、ミゲールさんすみません(汗)

ドルク「まあクラウドの特訓って結構いいな」

シエルマル「なんかなれてきたみたいで(汗)」

シルム「まあオイラは300kgだけど、なれてきたな」

強くなっていくね(汗)さて次回はさらにコラボキャラが来ます、なんと腹黒同盟のメンバーになった新たな腹黒キャラが(汗)

依頼21 狂気なルカリオ（前書き）

ドルク「おっ！すげえタイトルだな」

はい！今回はあのキャラの登場です

シルム「ルカリオ？」

クラウド「俺の他にいますかフォックさん？」

実はいるんですよ（黒）

シルム「なんか黒いよ作者さん（汗）それじゃあ依頼21」

クラウド「暴れるぜ！ー！」

## 依頼 21 狂気なルカリオ

ここはトレジャータウンなど色んなルートで行く交差点

そこに一匹の赤いコートを来たルカリオがいた

そのルカリオは普通とは違って身長が種族より少し高かった、さらに背中にはそのルカリオ以上ある剣があった、剣は半月のような片刃であり、剣の腹の中央には赤く光る石のようなものが埋め込まれている、その剣の柄には赤色の文字で言葉が刻まれていた：D a i n s l e i f：ダインスレイブと書かれていた、コートの胸部分には白と黒の拳銃がついていた、それぞれ文字が刻まれていた、白の方は w h i t e d e v i l：ホワイトデビルと英語で文字が刻まられていた、黒の方は b l a c k a n g e l：ブラックエンジェルと英語で文字が刻まれていた。それぞれ白い悪魔と黒い天使という意味だった

ルカリオ「さて ここにギルド『ブレイブ』というギルドがあるんだよね」（黒狂笑）」

このルカリオは狂気笑いをする

どうやら血の気があるようなルカリオのようだ

だがギルド『ブレイブ』になんの用があるのだろうか？

そんな狂気なルカリオはギルド『ブレイブ』の方向に向かった

……

ギルド『ブレイブ』1階 トレーニングルーム

シエルマル「はあ…はあ…」

クラウド「進化してもやるじゃねえか、結構いいぜ」

ただいまシエルマルがクラウドとバトルをしていた

しかもシエルマルはミジユマルの姿ではなかった

腰に二枚のホタチをつけていて、さらに体色が水色になっていた

修行ポケモンのフタチマルになっていた

シエルマル（フタチマル）「はあ…はあ…シエルスラッシュユ！」

シエルマルは二枚のホタチをつかって青い透き通った剣へとホタチを変化させ、そこからたくみにクラウドに攻撃しようとする

クラウド「ダークヘイズ！」

クラウドの剣が闇に包まれた

カキーン！

互いの剣がぶつかった

するん

シエルマル「うわっ!?!」

シエルマルははじきとばされ倒れた

クラウド「まだまだだな」(黒笑)

クラウドは笑いながら言う

ドルク「シエルマルも中々の成長だったぞ」

ドルクがシエルマルをほめる

シルム「いいバトルだったよ」

雷吉「やっぱバトルはこうでないためじゃけん」

炎丸「そうですね」

シルムもいいバトルと褒め、雷吉と炎丸も楽しんでみていた

アレン「私も強くないと、雷吉、炎丸」

炎丸「はい」

雷吉「そうじゃけん」

ガガリ「そうだな」

すっかりなじんできたシャドー組

ピッケル「はあ〜まだまだ進化は遠いな〜」

父（魔王）「ピッケル！ならもつと特訓だな」

ピッケルは進化がまだまだ及ぶレベルでないため進化していない

ちなみにピッケルのヒトカゲでのレベルは13だ

ミネラ「最近賑やかでいいよね」

ミネラは踊りながら言う

ミゲール「もういや〜（泣）（）」

ミゲールは涙目になりながら思っている

デイン「かなり厳しいヨ（汗）それにしてもよくあんな特訓受けるヨ、あのフタチマルはヨ」

デインもあんな厳しい特訓を受けているシエルマルに納得する

ソウ「でも楽しいですよ（黒）」

ミゲール「（黒いよ〜！〜この子〜！〜（泣）（）」

ソウは笑顔で口がニヤリとする

すると

ビービービー

警告音が響いた

ドルク「誰か来たようだな」

シルム「行ってみよう」

ドルク達はギルドの玄関へ

……

ギルド『ブレイブ』入口

ルカリオ「なんだ？」

一匹のルカリオは入口で立ち止まる

ここで色々とチェックをしている

武器もあるためか警戒も激しい

するとそこから

ドルク「誰だ…おっ！お前は!？」

ドルクは何か知っているような口で聞く

ルカリオ「おっ！お前はドルクじゃねえかよ」

どうやらこのルカリオはドルクの事を知っているようだ

ドルク「ちよつと待つてな…」

ドルクが操作パネルを操作した

すると警戒音はおさまった

ルカリオ「いやゝ助かったぜ さすがギルド『ブレイブ』だなゝ」

ルカリオは笑顔になる、ただ笑顔が逆に狂気っぽい感じの笑顔で怖いのだが（汗）

そこから

シルム「あつ！来たんだな！」

シルムが出てきた

ルカリオ「よっ！来てやったぜ（黒狂笑）」

赤いコートのルカリオは狂気笑いをする

クラウド「俺と同じルカリオで！？しかも身長たけえ！？」

クラウドはそのルカリオに驚く

ルカリオ「そういやあ紹介がまだだったな（黒狂笑）俺は便利屋  
フェンリルの事務長ソルだ」

ルカリオ、ソルがそう紹介する

アレン「へえ、便利屋なんだ」

ガガリ「（なんだ！？このルカリオから黒い感じと狂気のオーラを感じるな…）」

ガガリはソルのオーラを感じていた

黒くて狂気のオーラが

ソル「ここに来たのはドルクのギルド『ブレイブ』がどんなところか来てやったんだぜ（黒狂笑）」

どうやらギルドを見に来たらしい

ドルク「それにこいつは腹黒同盟にも入っていてな、さらにこいつの情け容赦なし同盟に俺も入ってるんだぜ（黒）」

なんとお互い同盟に入っているらしい

クラウド「おもしろえ〜！！マジ！」

クラウドはすごく入りたい気持ちになっている

シルム「とりあえず中入ろうか」

みんなは頷いてギルドの中へと入っていった

## 依頼 2 1 狂気なルカリオ（後書き）

はい！『fenrir魂の乱獲者を喰らう者達』から、狂気のデビルハンターでfenrirの事務長、ルカリオのソル君が来てくれました！

ソル「ひゃっはああああああああ！俺がルカリオのソルだ！！よろしくなあ！！ひゃっはああああああああ！！」（黒狂笑）

あゝとりあえずこっちは残酷表現ないから残酷にはならないから、むしろ倒す程度というか死なない程度にしてるからね（汗）

ソル「マジ！でも暴れるんだろっ？」

まあ暴れてもいいけど、やりすぎて依頼のお礼が減るようなことにならないようにね？

ソル「わかってるぜ（黒狂笑）」

今回はそんなソル君とのギルド『ブレイブ』をまわります

ドルク「次回も楽しみにしてくれよな（黒）」



## 依頼22 案内！ギルド『ブレイブ』

ソルが来たところで

ドルク「それじゃ案内するか」

ミゲール「あつ！俺も行く！」

デイン「おれっちもいくヨ」

ミゲールとデインが言ってくる

ドルク「そうだな、お前等二人は案内してねえからちよつどいい」

するとドルクは何処からか旗を取り出した

旗にはギルド『ブレイブ』案内ツアーと書かれていた

ピッケル「いやそこ案内ツアーと言えるの（汗）」

細かいことは気にしない、さてドルク達はまずこのギルド食堂からドルクは紹介した

ドルク「まずギルド食堂はここは結構な食い物がこつちとは違う感じのがあつてな様々な料理が楽しめるぜ」

ソル「おいしそうだな」

クラウド「まあ俺も作ってるから後で食べてくれよな」

クラウドが自身満々に言う

彼の料理はうまいので絶品だ

ドルク「それじゃあまずは二階から行くぜ」

ドルク達は二階へと上がる

……

二階

シルム「ここは温泉があつて、とてもいいんだ」

二階は温泉があり、とてもくつろげることができるのだ

ソル「おっ！すげえな（黒狂笑）俺の方でも温泉あったらいいのにな」

ソルは羨ましくなる

ミゲール「温泉かゝさすがブレイブ（汗）」

デイン「すごいヨ（汗）」

ミゲールとデインは啞然とする

ドルク「次行くぜ」

次の場所へと移動する

……

ドルク「ここは応接室だ」

二階の応接室は広かった

相談など急な依頼などにはここを使うことができる

直接の依頼でもここは使われる

ソル「まあ俺のところで応接室はあるけどな」

雷吉「俺達も入れるスペースがあるけんさ」

どうやらここにもちゃんと伝説系統で大きいポケモンなどに合わせた天井の高さにしている

シルム「それじゃあ次は地下一階だよ」

今度は地下一階へ

……

地下一階

ドルク「ここは来客用や俺達の部屋があるんでな」

アレン「そういえば私達の部屋もそうだったね」

部屋は順にドルク、シルム、ソウとミネラ、ジユクとレビィ、ゼラス、デイシア、パルサ、シムーン、グラデル、グロリアルとリユラ、シエルマル、父（魔王）とピツケル、ミゲールとデイン、そして他は来客用と弟子部屋に分けられている

ソル「さすがだな 俺は来客用の部屋だな」

ソルは来客ということなので一応しばらくはいるつもりだ

ドルク「次はまた一階に戻るぜ」

今度は一階へと戻る

……

ドルク「ここはバトルフィールドとトレーニングルームだ」

最後に連れてこられたのはトレーニングルームとバトルフィールドだ

もちろんここでは

シルム「ここはオイラ達が強くなるために作られたんだ、オイラ達もまだまだかなわない敵もいるし、お尋ね者も強い奴が現れた時の事を考えてこうして特訓しているんだ」

アレン「結構よかったから」

炎丸「見学とかもできますし」

シエルマル「まあ結構きついトレーニングもあるけど(汗)」

シエルマルはあのクロウドの地獄の特訓でトレーニングしたのだ、それによってこうして進化できた

ソル「これで全部か？」

ドルク「まあこれで全部だな、ちなみにこのギルドは色々に対応できるように船になったり空飛ぶ戦艦とかにもなるぜ」

ソル「面白れえじゃねえか (黒狂笑)」

ソルが狂気笑いをする

ミゲール「(なんかすげえく嫌な予感が(汗))」

デイン「(おれっち達とんでもないとこに来たようだヨ(汗))」

ミゲールとデインは汗だらだらになる

ソル「やっぱり師匠はすごいです」

ドルク「案内終わったところで夕食にするか」

全員『賛成!』

ドルク達はギルド食堂へ

依頼22 案内！ギルド『ブレイブ』（後書き）

案内って説明するの難しいな（汗） 説明苦手な作者

ソル「まあこつちとはすげえんだな、ドルクのは」

まあね、これでもドルクは親方だし

シエルマル「作者、次回は？」

次回はあの子が来ます

シエルマル「誰？」

ミゲールさんと関係ある子だよ

依頼23 ベビーチートな(前書き)

ドルク「なんだよこのタイトル？」

今回は…あの子が登場です

シルム「あの子だね」

ドルク「ああ、あいつだな…まああいつも強ええしな」

そんな依頼23

ドルク「ぶっ放すぜ!!」

## 依頼23 ベビーチートな

次の日

クラウド「オラァ！気合入れろ！」

ミゲール「そういつたってえ〜（泣）」

デイン「なんでこうなるんだヨ！（泣）」

ミゲール&デインはただいま走らされている

ドルク「まだまだ！」

クラウド「さすがドルクだな！」

ドルクはクラウドの特訓を受けている

ソウ「師匠〜待ってくださいよ〜」

ソウがドルクの後を追う

他のメンバーは

シエルマル「はっ！」

シエルマルは攻撃をホタチでガードした

シルム「うん、その調子！ブレイクショット！」

シルムは青い光の弾を繰り出した

シエルマル「（貫通能力あるのなら…）シエルブレード！」

シエルマルはシエルブレードで青い光の弾を斬りつけて防いだ

シルム「うん、いい感じだよ」

シルムがシエルマルを褒める

ソル「今度は俺だ！」

ソルがダインスレイブでシエルマルを斬りつけようとする

シエルマル「はっ！」

カキーン！

シエルマルは二つのホタチでダインスレイブの斬りつけを防いだ

ソル「やるじゃねえかよ」

シエルマル「（すごい…この大剣の重圧…）」

シエルマルはダインスレイブの重圧を感じた

デイシア「はっ！」

ディシアは波動弾を繰り出した

パルサ「こつちもだ！」

パルサも波動弾を繰り出す

波動弾が二つとも相殺された

パルサ「なんかお前最近張り切ってるな」

パルサがディシアの様子を言う

ディシア「私も強くないと…」

ディシアはそう言う

パルサ「ふん、だけど無理すんなよな」

ディシア「わかっている」

ディシアはそう言われ頷く

シムーン「クレセリスカッター！」

シムーンがパール色のカッターを繰り出す

グラデル「シードバリア！」

グラデルが緑色のバリアを張り、守る

ジユク「いい感じだ」

レヴィ「グラデルもいい感じ」

ジユクとレヴィが二人のバトルを見ていた

アレン「いくよ！」

アレンはとてつもなく巨大な電撃の球体をもっていた

雷吉「今じゃけん！」

アレン「バーンバルテックス爆雷!!!」

アレンはその巨大な電撃の球体を投げた

相手はカガリだ

カガリ「守る！」

カガリは守るで防いだ

カガリ「力は中々だ…だがまだまだだ」

カガリはアレンにそう言う

アレン「はい！先生！」

炎丸「アレン様のために私も強くならないといけませんね」

雷吉「そうじゃけん！ここでの修行もわるくないけんな」

……

その頃交差点で一匹のポケモンがいた

龍の顔でまだ幼さが残っているようなポケモンだ

このポケモンはタツベイというポケモンだ

タツベイ「あゝあいつらたしかこの世界の何処かにいるんだよな」

あいつらとは誰なのかわからないが人を探しているようだポケモン

タツベイ「今度はギルド『ブレイブ』に行ってみるか」

タツベイはギルド『ブレイブ』へと向かう

……

ギルド食堂

ドルク「ガツガツガツ」

雷吉「ガツガツガツ」

ドルクと雷吉は大食いをしている

ちなみに今はお昼だ

シルム「結構な特訓だったし、午後は依頼をこなすよ」

午後は依頼をこなす予定になっている

その時

ビービー

再びアラームがなる

誰かが来たようだ

そこに一匹のタツベイが現れた

タツベイ「ここだな、ギルド『ブレイブ』は」

交差点でいたタツベイのようだ

ドルク「ん？なんだ？依頼か？」

ドルクが近付き言う

タツベイ「人を探しているんだけどよ…それより肉ないか？」

タツベイは肉を要求してきた

ドルク「それならあるぜ…ほらよ」

ドルクはタツベイに肉を渡した

タツベイ「おっ！サンキューな！お前いい奴だな！俺様はアトリっ  
ていうんだ」

ドルク「俺は探検隊ブレイブのリーダー兼このギルドの親方で元  
人間のドダイトスのドルクだ」

ドルクとアトリと呼ばれたタツベイが握手する

シルム「それでアトリ君は人を探しているって言ってたよね？名前  
とかは？」

アトリ「ミゲールとデインって言うんだが知らないか？」

この言葉にドルクとシルム…そしてみんながアトリに注目する

そこから

ミゲール「おお〜！！いとしの我が息子アトリちゃ〜ん！！」

ミゲールが咄嗟にありえないスピードでアトリに迫るが

アトリ「キモイんだよテメエ！！（怒）ブラスト！！」

アトリは膝蹴り（ひざげり）をミゲールに食らわせた

ミゲール「ぐはっ!?!」

ミゲールはそのままぶっ飛んだ

ドルク「ポチツとな」



すると

アトリ「まああいつは俺の父親なんだよな。でもギルドで働いているのなら俺様も働いていいか？」

なんとアトリがギルドに入りたらしい

ドルク「構わないぜ」

OKのようだ

すると

クラウド「アトリが来るなんてな」

アトリ「おっ！クラウドじゃん、おめえも来てたんだな」

アトリはクラウドとも知り合いのようだ

クラウド「アトリが来てよかったぜ」

クラウドは嬉しそうだ

ソル「ひゃっはあああああああああ！面白くなってきたじゃねえか！（黒狂笑）」

ソルが黒狂気笑いをする

シルム「これはかなり穏やかどころじゃなさそうだな（汗）」

シエルマル「あのタツベイすごい(汗)」

父(魔王)「(このタツベイ…できるな…)」

父(魔王)は真剣な目をしてアトリを見た

ピッケル「(すごく嫌な予感しかしない)」

こうしてアトリがブレイブの一員になった

ついでに腹黒同盟にも入った





## 依頼24 神出鬼没

そんなこんなで午後

アトリ「それにしてもすげえな」こじは

アトリはこの後ギルド『ブレイブ』を見学してギルドの作りとかに驚いている

ドルク「まあとりあえずはゆっくりしてていいぜ、それに肉ならちやんと注文すりゃあクラウドやヤミラミ達に作らせるからな」

アトリ「ありがとな」

アトリは嬉しそうに笑顔になる

ミゲール「しくしく(泣)」

その様子を見ていたミゲールは涙目になりながらいじけてしまっていた

前回、息子との再会のはずが逆に膝蹴りをされたためさらに色々言われたためかショックは大きいようだった(汗)

するとそこから

?????「すごいな」こじは

ドルク「!??つてお前は!？」

いつの間にか一匹のポケモンがドルク達のところからいたのだ

半分クリーム色の体毛に半分黒っぽい体毛のポケモンだった、さらに左目には眼帯をしていて背は2メートル、背中には黒い大剣を背負っていた

このポケモンはふんかポケモンのバクフーンだ

シルム「ギルガメスさん、あなたも来たのか？」

?????「ああ」

ギルガメスと呼ばれたバクフーンは頷いた

デイン「ギルガメツシユヨ？」

シルム「違うよデイン、この人はギルガメスという名前だよ、決して某ゲームのあのキャラじゃないからね」

まあたしかに名前似ている部分はあるが(汗)

ソル「お前どうやって入ったんだよ(汗)」

ソルが質問した

ギルガメス「とりあえずはこっちに入れるようにチェックしといた安心しろ」

どうやら入れるようにしたらしい

ドルク「まああれは敵か味方がどうかを見極めるからな、防犯上は色々チェックしてからだしな」

ギルド『ブレイブ』の防犯も色々だ

ギルガメス「とりあえずこの依頼などもらっておく」

と、ギルガメスは1枚の依頼書を持っていた

ドルク「とりあえずアトリは最初どの仕事にするんだ？」

ギルガメスの方がさておき、ドルクはアトリがどういう依頼がしたいのかを選択している

アトリ「とりあえずはこれだな」

アトリは指さしたのを見ると、お尋ね者の依頼だ

そこにはお尋ね者Aランクのカプトプスと書かれていた

しかもアジトので、場所は磯の洞窟だ

ドルク「まあちょうどAランクのお尋ね者とかの依頼あったからな、まあアトリの実力を見るのにはちょうどいいしな」

とりあえず依頼することに

ドルク「とりあえずメンバーは俺とシルムとソウ、そしてアトリに

するか」

アトリ「よろしく頼むぜドルク」

他のメンバーは別の依頼をすることになった

ソル「ってかいつの間にかあいつ、行ったな（汗）」

いつの間にかギルガメスの姿はなかった

まさに神出鬼没な奴だ

もちろんクロウドはミゲールとデインとピツケルと一緒に依頼をこなしながらの自主トレも含めての特訓をすることになる

とりあえずドルク達は目的のダンジョンへと向かった

依頼24 神出鬼没（後書き）

さて、どういうことになるのか

ギルガメス「俺の出番ってたしかに少ないな」

まああなたの場合はそうですね

ドルク「そうだよな」

ソル「まあ少し出番あったりだしな」

今回はブレイブVSお尋ね者達です

依頼25 全滅のお尋ね者達(前書き)

さて、恐怖の制裁の時間です

シルム「違うだろ!？」

ドルク「それじゃあ依頼25」

アトリ「見るよ」

## 依頼25 全滅のお尋ね者達

### 磯の洞窟

アトリ「ブラスト!!」

アトリの膝蹴り…ブラストが炸裂して敵ポケモンを倒した

アトリ「フン!口ほどにもねえな」

ドルク「俺にとってはいい修行だしな」

ソウ「まあ師匠は草タイプですし」

ドルクにとっては磯の洞窟は相性では有利な場所だ

シルム「でも水あるからオイラにはね」

逆に炎タイプには不利な場所だ

シルム「まあそれでもオイラは特訓してるけどね」

アトリ「オメエも中々の腕前だと思うぜ」

アトリはシルムをほめる

シルム「ありがとう」

アトリ「それに剣とかも使えそうじゃねえ？」

シルム「そうかな？」

シルムは剣を使えるとアトリは言う

後にそうなるかもしれない

ドルク「行こうぜ」

ドルク達は先に進んだ

……

ドルク「広いところに出たな」

ドルク達は広いフロアにいた

そこに

????「ようこそ俺達のアジトへ……ここが貴様等の墓場だ!!」

そこから数体のポケモンが現れた

その中心にリーダーがいた、茶色の硬い体に腕には鋭いかまをもったポケモンだ

アトリ「どつやらこいつらのようだな」

ドルク「準備はいいか？」

ソウ「いつでもいいですよ師匠」

シルム「オイラもいけるよ」

ドルク達は攻めた

アトリ「ブラスト!!」

アトリは膝蹴りもといブラストを繰り返した

敵ポケ達「ぎゃあああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

敵ポケ数体がぶっ飛ばされた

カブトプス「なんだと!?!」

リーダーでありお尋ね者のカブトプスが驚く

ソウ「守護方陣!」

ソウの周囲から立ち昇る光弾が相手を襲う

敵ポケ「ぐわっ!?!」

ソウ「さらにホーリークラスト!」

ソウの周りから光弾が数発敵ポケ達を蹴散らす



ドルクの口から小さい青いエネルギーがカブトプスに直撃する

カブトプス「がっ!?!」

さらにおいうちをかけるようにドルクは

ドルク「響け!!俺のシャウトを!!エナジーシャウト!!」

ドルクが叫ぶと緑音符が数個現れカブトプスに直撃する

カブトプス「ぐわあああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!」

音の衝撃でカブトプスは壁にぶつかり倒れた

ドルク「よっしゃあ!任務完了だ!」

アトリ「やったぜ!!」

ソウ「やりましたね」

シルム「よしっ!」

こうしてブレイブのお尋ね者依頼は完了した

依頼25 全滅のお尋ね者達(後書き)

ドルク「エナジーシャウトすげえ!!」

やっぱりシャウトモンだから歌や音楽系統の音を使った技がいいかね新技を

ドルク「やっぱりこうでねえとな」

アトリ「俺のおふくろとはまだまだだな」

まあそれほどじゃないよ(汗)

シルム「たしかに(汗)」

ソウ「でもそのうち技も結構覚えてきますね」

まあ基本技とかは覚えられるようにオリ技は考えているよ

シルム「オイラもオリ技もつと覚えられるようにしよう!」

うん

ドルク「俺のオリ技すくねえからな」もつとオリ技増やしてえ」かな

ちゃんとするから

依頼26 バトル好きのリザードン(前書き)

ドルク「おっ！ついにあいつが来るんだな」

そう、今回もコラボッス

シルム「結構ブレイブにも来るよね」

まあそうだね

一体誰なのか…それじゃあ依頼26

ドルク「燃えるぜ！！」

## 依頼26 バトル好きのリザードン

交差点

そこに一匹のポケモンがいた

龍のような顔に両翼、尻尾には炎が灯っていてクリーム色の腹をしたポケモンだ

????? 「ここに…ギルド『ブレイブ』があるんだな…たしかこっちだったな…ここでぜってえ強くなってやる！」

そのポケモン…リザードンは強くなりたいと意気込む

リザードンは『ブレイブ』の方向へ歩いていく

……

ドルク「ただいま帰ったぜ」

ドルク達はギルドへ帰ってきた

ギルガメス「帰ったか」

なぜかギルガメスはいつの間にか食事を取っていた

ドルク「お前何処でも出るような感じだな(汗)」

ドルクはギルガメスの神出鬼没な現れ方にタジタジになる

シムーン「お帰りなさい」

シムーンが来た

ドルク「ただいま」

ドルクはシムーンに挨拶する

ミネラ「パパお帰り！！」

ミネラがドルクに駆け寄る

ソル「おっ！帰ってきたな こっちはクラウドさんの特訓が結構よ  
かったぜひゃっはああああああああ！！（黒狂笑）」

ソルが高笑いしながら駆けつけた

クラウド「お〜お帰り〜」

クラウドは重りをつけながら駆け寄る

ミゲール「……」

デイン「はあ…はあ…」

シエルマル「親方、副親方、ソウさんお帰りなさい」

父（魔王）「おお！帰ってきたか〜」

ピツケル「……」

アレン「ドルク先輩おかえり」

雷吉「おお！帰ってきたけんな」

炎丸「お帰りなさいドルク様、シルム様、ソウ様にアトリ様」

カガリ「よくやったな」

ジユク「帰ってきたか」

レビィ「おつかれさま」

ゼラス「帰ったか……」

約2名屍と化しているがみんなが帰ってきたドルク達を迎える

そこから

ビービー

ドルク「誰か来たのか？」

入口から

リザードン「ここがギルド『ブレイブ』なんだな」

ドルク「お前は？」

ドルクがリザードンに話かける

リザードン「俺はリードン、あんたがここの親方だな？」

ドルク「ああ、そうだが？」

リードンと呼ばれたリザードンがドルクに話す、すると

リードン「ここに来たのは強くなるために来た…だからあんたのこのギルドに入らせてくれ！！」

リードンは土下座してドルクに頼む

すると

ドルク「頭上げてくれ…いいぜ 俺がしっかり鍛えてやつからよ」

ドルクは胸をはってそう言う

リードン「ありがとな！あいつに勝ちたいし…なにより俺もまだまだだからな」

シルム「ねえ？そのあいつって誰なの？」

シルムがリードンに質問した

リードン「ポケハン学園バトル部部長の俺と同じリザードンだが名前はラッシュと言っただ」

シルム「ラツシュ！？それならオイラ達知ってるよ！」

ドルク「あいつもがんばっているんだな」

ドルクとシルムは5年前にラツシュと会っていた

リードン「俺はあいつにも勝ちてえ…だからあんた達のギルドに来たんだ…」

理由がそうらしい

ドルク「まああいつ強いからな…まあいいか…でもきっちり働いてもらうぜ？しっかりついてきな！」

ドルクが吠えるように言う

リードン「ああ！よろしく頼むぜ！ギルド『ブレイブ』の親方…ド  
ダイトスのドルク…！」

リードンは気合が入ったように言う

依頼26 バトル好きのリザードン（後書き）

はい！『スイクンとギラティナの物語』からリザードンのリードン君が来てくれました！！

リードン「リードンだぜ！よろしくな！！」

え〜スイクンさんどうもありがとうございます

ドルク「まあ俺の誘いでこいつの修行をじきじきにさせてもらっぜ」

リードン「強くなってやるぜ！」

まあラッシュに会うとすぐに喧嘩になるというけど…負けず嫌いな性格だからラッシュに勝てない感じだしね（汗）

リードン「あいつにはぜってえ勝つ！！ここで修行してぜってえ！勝ってやるぜ！！」

まあ難しいけどね（汗）

リードン「何iiiiiiii！！」

ドルク「さて…リードンにはクラウドの地獄特訓とかやっておくか」

リードン「すんげえ嫌な予感が（汗）」

依頼27 体力をつける！リードン体力トレーニング1（前書き）

今回はリードン君の体力トレーニングです

リードン「体力か…でもあいつを倒すためなら」

ドルク「俺にしっかりついてこいよ」

それじゃあ依頼27

リードン「気合入れていくぜ!!」

## 依頼27 体力をつける！リードン体力トレーニング1

次の朝

シルム「それじゃあ今日も1日がんばろうー！」

全員『おおー——————！』

全員が仕事に行く

残ったのはドルクとシルム、ソウとシエルマル、ミネラとシムーンとアトリ、クロウドとリードンとジユク、ミゲールとデインだ、そしてなぜか鳥のようなものが

この鳥はロボットでミゲールの発明品、コケッコマシン

目覚ましとかでもあり、さらにドルク達が改良して作られたマシンで通常ケッコと呼ばれている

ジユク「で？今日はこのリザードンの特訓か」

ドルク「ああ、それでリードンは体力面がねえよつだからな」

するとリードンは

リードン「何言ってるんだよ！俺は体力あるぜ？」

しかし

シルム「昨日体力テストなどすぐやったのに体力があまりなかった  
感じだよ（汗）」

どうやら体力テストをしたようだ

クロウド「まあ俺の特訓とドルクの特訓でリードンを特訓してやる  
ぜ」

シエルマル「今回俺までも（汗）」

ソウ「いいですね それにアトリ君と特訓できるのは嬉しいですし  
」

アトリ「俺様もソウと特訓できるしよ……」

今回はリードンのための特訓だ

ドルク「じゃあまずはリードン、体力強化のため…重りを足につけ  
てもらっぜ」

そう言うとドルクはリードンに重りを両足と両腕につけた

リードン「おもっ…！」

つけると重く感じるリードン

ドルク「ちなみに空を飛ばないでくれな、特訓の意味ねえからな」

クラウド「俺も重りを」

クラウドも重りを両腕と両足につける

ドルク「クラウドは特訓できたらイチゴ牛乳をあげるぜ」

クラウド「マジ！？」

クラウドはイチゴ牛乳に反応する

ドルク「とりあえず俺達も重りとかはつけている」

ドルク達の両足と両腕には重りがついていた

リードン「つてか重くねえのか？」

リードンはドルク達に聞く

シルム「とりあえずは平気だよ」

ドルク「探検隊ブレイブを舐めるなよ、このぐらい平気だ」

どつやら平気のようだ

ミネラ「僕はまだ無理だからそのままだよ」

シムーン「私は回復などをさせてもらいますね」

二人はサポートと特訓に付き合う

ドルク「それじゃあ今回は修行の山の頂上まで登るぞ！」

リードン「マジかよ!?!」

リードンにはきつい特訓だが

ドルク「あいつに勝ちたいんだろ?」

リードン「そうだよな……ここであきらめてちゃあいつに勝てないしな」

リードンはある一匹のリザードンに負けたくないために特訓に付き合うことに

ミゲール「マジで重い〜(泣)」

デイン「重いヨ(泣)」

二人は涙目だ

ケッコ「がんばがんば」

ケッコは応援する

……

修行の山

クラウド「波動弾!?!」

ドルク「エナジーフルバスター!!」

シルム「ヒートバレット!」

ミネラ「スプレットボム!」

シムーン「ムーンオブリング!」

ジユク「リーフカルデット!」

ミゲール「爆碎斬!!」

デイン「グレイブ!!」

シエルマル「シエルスラッシュ!」

ブレイブのみんなの攻撃で次々と敵ポケモンが倒れていく

リードン「すげえ(汗)」

リードンはブレイブメンバーの強さに唖然とする

リードン「俺も!うおりゃ!!!」

リードンはきりさくやアイアンテールなどで次々と倒していく

ケッコ「頂上まで後8階」

ケッコは頂上までのカウントをする

……

リードン「はあ……はあ……」

修行の山頂上

全員なんとか頂上までついた

ドルク「なんとか登れたな」

リードン「きつすぎるぜ……」

リードンは疲れた表情をしながら言う

ジユク「だがまだまだこれからだ、覚悟しとけ」

リードン「わあゝたよ」

ドルク「それじゃあ降りて昼食にしようぜ」

みんなはうなずいて頂上を降りてギルドへと戻っていった

依頼27 体力をつける！リードン体力トレーニング1（後書き）

リードン君の体力特訓は続きます

リードン「さすがにきついぜ（汗）」

ラッシュならこのぐらいがんばれるよ

リードン「なんだと！？ならがんばるぜ！！」

（単純だ（汗））

ドルク「まああいつには体力をつけないとまたねえしな」

シルム「（そうじゃないと勝てないからね）（汗）」

依頼28 体力をつける！リードン体力トレーニング2（前書き）

まだまだ続きます

リードン「なんか俺のために」

ドルク「まあラッシュに勝ちたいその努力は認めるがまだまだだ、あいつはそれなりに強いからな」

シルム「そんな依頼28ガンドコ行こう！」

依頼28 体力をつける！リードン体力トレーニング2

ギルド食堂

昼食

リードン「うわっ！？量おおっ！？」

リードンは驚く

なぜなら目の前にある料理がかなりの量あるのだ

まあ人数的にもそうだが特にリードンの量は量かなりあるのだった  
クラウド「俺特製のスタミナがつく料理だ！リードンは体力ねえからスタミナ料理の量多めで他のも多めに作らせたぜ、た〜んと食ってくれ」

リードン「（こんなに食べるのか（汗））」

内心食えるのか不安なリードン

ドルク「それじゃあ食おうぜ」

全員『いただきます！』

全員がいただきますを言う

ガツガツガツガツ

ドルクはいきおいよく食う

リードン「あいつ結構食うな(汗)(汗)」

ドルクの食いつぶりにリードンは啞然とする

リードン「とりあえず食うか(汗)」

リードンは料理を口に入れる

リードン「(うめえ! ! ! ってかあのルカリオ料理うまいんだな)」

リードンはクラウドの料理をうまいと評価する

リードン「よしっ! ! 食ってやるぜ! ! 」

リードンは料理にがつつく

シルム「やっぱりクラウドさんの料理はうまいね」

クラウド「ありがとな」

クラウドは喜ぶ

シエルマル「やっぱりおなかすきますね」

ミネラ「そっだね」

ソウ「動いた後は特にいいですし」

アトリ「ああ、ソウと一緒に特訓して楽しいしな」

他は喜ぶ

ドルク「おかわり大盛でな」

リードン「(はやつ!?!あいつ食うのはええ)(汗)(」

ドルクはすぐさまおかわりをした

……

リードン「ゲップ…うゝおかわりもしてかなり食っちまったがうまかったな」

リードンの腹がパンパンになる

リードン「(それにしてもあいつもすげえな)(汗)(」

ガツガツガツガツ

ドルクはただいま50皿とかなりの量を食っている

リードン「(それでもあいつの体力はすげえな…俺もあいつを見習わないとな)」

リードンはそんなドルクを見る

……

ドルク「ふうう…さて休憩してから特訓再開だ」

リードン「で？次はどういう特訓だ？」

リードンはドルクに聞く

ドルク「そうだな…まあお前は重りはつけたままでいい、リミッタ  
制限というものだけだな」

シルム「まあ重りはなれるまでは苦勞するけどね」

重りはその動きなどの制限だけでなく…つけている状態とつけてい  
ない状態での効果が違う

ジユク「とりあえずは力をつけるにはそれほどの特訓だ、とりあえ  
ず覚悟しておけ」

リードン「ああ、わかったぜ」

リードンは納得する

クラウド「次の特訓はつけた状態で腕立てと腹筋してくれな、ちな  
みに回数は最初は500だけど3回当たりやって合計1500回や  
つてくれ」

リードン「かなりきついがやってやるぜ」

リードンは意気込み次の特訓を開始する

依頼28 体力をつける！リードン体力トレーニング2（後書き）

まだまだリードン君の特訓は続きます

ドルク「俺とクロウドの特訓すりゃあ大丈夫だ」

まあクロウドさんのはダイエットに効果ありそうな特訓だしね 実際ヘタレウスに効果はあったので

シルム「でも身体のバランスもね」

ドルク「リザードンの平均とかもあるしよ」

たしかにね

依頼29 体力をつける！リードン体カトレーニング3（前書き）

張り切っていきます！！

ドルク「さて、さらに今回はあいつの弟が登場みたいだ」

それは誰なのか、依頼29

ドルク「気合入れる！！」

依頼29 体力をつける！リードン体力トレーニング3

トレーニングルーム

早速リードンは特訓を開始した

リードン「1…2…くっ！きついぜ」

重りをつけた状態での腕立てはかなりきつい

ドルク「俺は監視している、クラウドは？」

クラウド「俺は今日弟を連れてくる予定だから」

シルム「へえ、クラウドさんに弟がいるんだ」

初耳である

クラウド「とりあえず連れてくるからその間リードンの特訓の監視してるだろ？じゃあ行ってくる」

クラウドは出かけた

ドルク「とりあえずはシルムは特訓していてくれ」

シルム「わかった」

シルムは席をはずした

……

リードン「はあ…はあ…」

なんとか1セット目の腕立てを終わらせたリードン

ジユク「バテていてはまだまだだ、少し休憩してからだな」

ドルク「ああ、リードン、少し休憩してから次の第2セット始めてくれ」

リードン「ああ…」

とりあえず休憩した

……

それから数時間後

リードン「498…499…500！」

腹筋をしていたリードンはなんとか3セットすべて終わらせた

リードン「はあ…はあ…」

さすがにこれはきつく、かなり消耗したらしい

ドルク「これからこういう特訓をするからな、なれるまで時間かかるががんばってくれ」

リードン「はあ…ああ…」

疲れてあまり話せないリードン

するとそこに

クラウド「連れてきたよ!!」

そこにクラウドがトレーニングルームに入ってきた、別のポケモンを連れて

連れてきたポケモンは足が長く額にVの字の突起物に髪がブロンドなポケモンだった

?????「初めまして、弟のレイです」

レイと呼ばれたバシャーモが挨拶する

ドルク「よろしくな、俺はドルク、このギルドの親方だ」

シルム「オイラはシルム、このギルドの副親方だよ、よろしくねレイ君」

ドルクとシルムはレイに挨拶する

レイ「それにしても今は何をやっているんですか?」

レイがドルク達に質問する

ドルク「今リードンというリザーダンの特訓をしていたんだ」

レイ「へえ、そうだったんですか……このギルドは結構いいですね」

レイが褒める

ドルク「ありがとな、それじゃあ今日からよろしく頼む」

レイ「はい」

こうしてクロウダの弟レイが仲間になった

……

ドルク「特訓は以上だ、これから毎日やるからな、もちろん依頼と  
かも特訓だからな、しっかりしとけよ」

リードン「わかったぜ」

特訓は終了し、リードンはかなりボロボロになっていて汗だらけに  
なっていた

ドルク「とりあえず風呂にでも入って綺麗にしとけ」

リードン「じゃあ遠慮なく入らせてもらっせ」

リードンは2階のお風呂場へ

依頼29 体力をつける！リードン体力トレーニング3（後書き）

はい！クラウドさんの方からレイ君が来てくれました

ドルク「これからリードンには厳しい特訓になるけどな」

成長できるように全力でがんばってやらないとね

次回はリードン君を入れての依頼です

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前(前書き)

さて、依頼です

リードン「一体何やるんだ？」

それは見てからの楽しみみっと、ついに30話まで行きました!!  
それじゃあ依頼30

ドルク・リードン「燃えるぜ!!」

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前

次の朝

リードン「あゝ体中がいてえゝな」

リードンは昨日のトレーニングで結構体に響いていた

しかし

ドルク「今日も特訓だ、とりあえず明日から朝はランニングを  
しろ、リードンは重りをつけながらやってくれ」

リードン「わかった」

リードンが承諾する

ここで説明をしておこう

リードンがつけている重りは道具でおなじみ、パワーシリーズだ、彼の両腕には攻撃を上げるパワーリストと体力を上げるパワーウエイト、両足には素早さを上げるパワーアンクルとくこうを上げるパワーレンズの4つの重りをつけている

なのでかなり重いのだが素早さも下がるため動きも限定される

……

お昼

リードン「はあ〜…あ〜疲れる」

リードンはさすがにバテていた

これほどの運動量と特訓量だ、さすがに疲れる

クラウド「とりあえず飯でも食べよ」

クラウドに食を進められ、とりあえずリードンは昼食を食った

ガツガツガツガツ

あいかわらずドルクは結構な量食べていた

シルム「もぐもぐ…おかわり」

シルムはおかわりをした

運動した分おなかやすく、大体ドルクやシルムなどがおかわりが多くなっている

リードンもおかわりをして結構な量を食べた

…

1時間後

ドルク「今回はピーピーマックスを届ける依頼だ、場所は空の裂け

目で俺とシルムと今回はミネラと一緒に行くぜ」

ミネラ「パパとシルムと一緒に嬉しいな」

ミネラは小躍りをする

リードン「（重いがやるしかねえ）」

シルム「それじゃあ出発！」

ドルク達は空の裂け目へ

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前(後書き)

さて、色々とリードン君の特訓は続きますよ

ドルク「まあよくやるな」

やっぱりなんかやりたい気持ちあるんだよね…次回は依頼2です

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために(前書き)

依頼です

リードン「やってやるぜ!!」

ドルク「熱意だけは十分あるな」

リードン「おう!俺だってあいつに負けてられねえからな」

それじゃあ依頼31

リードン「負けねえ!!」

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために

空の裂け目

リードン「やけに暗いところだな」

シルム「ここはパルサが支配していた空間なんだ、パルサは空間の神だからこうして大体こことかの依頼とかもするし」

空の裂け目：パルキアであるパルサの支配する空間のダンジョンだ、今回はピーピーマックスを届ける依頼だ、もちろんトレジャーボックスにはピーピーマックスが入っている

ドルク「来たぞ」

ドルク達のところから敵ポケモンが攻めてきた

リードン「へっ！やっぱ敵のお出ましかよ」

ドルク「リードンはそっちの敵をやってくれ、まあ動きが宣言されているようだがミネラ、リードンのサポートを頼んだ」

ミネラ「まかせてパパ」

それぞれ構える、モンスター達が襲い掛かってきた！

リードン「火炎放射！！」

リードンは火炎放射でジバコイルを倒した、だが敵にはリードンと同じリザードンもいる

リードン「くそっ！」

リードンは避けるが攻撃が来て食らってしまったが

リードン「はあ…はあ…」

なんとか耐えている

リードン「（少し体力ついた感じだな…でもやっぱりきつい…ダメージを受けているしな…どうすりゃあいいんだ…）」

リードンは少しボロボロになりながら目の前の敵をどうするのか考えている、そこに

ミネラ「ミネラルスター！」

ミネラは星型の水をそれぞれの敵に飛ばした、敵ポケモン達は食らうが耐えたその時

リードン「なんだ？傷がなくなってくる」

リードンの体の傷がみるみるふさがれていた

ミネラ「僕のミネラルスターは食らうと味方や自分の体力と傷を癒す僕のオリ技だよ」

ミネラのオリ技ミネラルスターはギガドレインやドレインパンチの

ように相手の体力を奪う効果があるらしい

ミネラ「でも僕の実力はこんなもんじゃないよ ミネルイラブション！」

ミネラの前から魔方陣が現れ、敵の頭上と地面から大量の水が敵ポケモンを飲み込んだ

リードン「すげえ」（汗）

ドルク「終わったぞ！こっちはどうだ？」

そこからドルクとシルムが敵ポケモンを倒して戻ってきた

ミネラ「こっちは終わったよパパ、シルム」

ドルク「おっ！さすがだな」

ドルクが笑顔になる

リードン「すげえなミネラ（汗）」

ミネラ「僕は水系統の技と術とか色々とかんばって覚えたんだ、オリ技もパパとシルムや他のみんなと一緒にやって出来たんだ」

リードン「そうか（汗）」

リードンは改めてミネラの凄さを知った、こんな小さなポケモンでも力はすごいんだから、それが幻のポケモンであるマナフィだからなのだ

……

ドルク「あれだな」

ドルクは依頼主であるポケモンを見つけた

顎は斧のようなものが両頬についていて、黄色い鱗の体色をした龍だった

そのポケモンはここでは見られないポケモン、オノノクスだ

オノノクス「どうもありがとうございますブレイブのみなさん」

これで依頼完了だ

ドルク達は探検隊バッジを使って脱出した

……

ドルク「今日も依頼終わってなんとか報酬もらえたぜ」

今回の報酬はドルク達は10000ポケを手に入れた

それほどの報酬だがリードンのは2000ポケ、ドルクとシルムは3000ポケ、ミネラは2000ポケだ

ミネラ「達成できてよかった」

リードン「あくでも達成感が充実していいしな」

リードンは笑顔で言う

クラウド「おっ！依頼終わったんだな」

そこにクラウドが来た、さらには

ミゲール「……」

デイン「なんとかがんばれたヨ……」

疲れ気味のデインともはやただのしかばねになった青いマントに頭に青いハチマキを巻いているヨーギラスが……

レイ「兄さんの特訓はかなりのものですよし」

レイも来ていた

ドルク「じゃあ早速だがクラウド、料理頼む」

クラウド「わかった！やってやるぜ！！」

クラウドは早速料理を作りに入る

……

その頃、交差点である一匹のポケモンがいた

目つきが鋭く、龍のような顔でお腹は青くなっていて、それ以外は赤色のポケモン、ガバイトとよばれるポケモンだが、このガバイト

は色違いらしい、通常のガバイドは青い体でお腹は赤と下腹部分は白なのだ、さらに腰にはロングソードと呼ばれる剣がついていて背中にはマント、頭には赤いハチマキを巻いていた

ガバイド「ここに父さん達がいるんだ…まったく父さん達、僕を置いてここに来ていたなんてね…」

そのガバイドはガバイドらしくない普通の目つきな感じだった、むしろほころかなような感じだ

ガバイド「たしか父さん達がいるのはギルド『ブレイブ』だったな…待っててね父さん」

色違いのガバイドはギルド『ブレイブ』へ

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために（後書き）

ドルク「最後のあのガバイドは誰だ？」

次回でわかるよ、実はミゲールさんがヒントです。そしてそれはあの有名な初代主人公です…わかりますか？

シルム「あっ！わかった！あの人だ！」

依頼32 登場！初代主人公！！（前書き）

はい！ついにあの初代主人公のあのキャラがポケモンの姿で登場です！！

ドルク「どうなるかな」

そんな依頼32

ドルク「きやがれ！！」

依頼32 登場！初代主人公！！

ドルク「ガツガツ…あゝうめえ」

ドルクは喜びながらガツガツと料理を食っている

リードン「結構うめえ〜！！」

リードンもガツガツと食いながら笑顔で言う

シルム「働いた後のご飯はうまいんだよね」

デイン「特訓してうまいヨ」

デインが笑顔で言う、やっぱりトゲチックだろうか笑顔な感じが一番だ

ドルク「ガツガツ、とりあえずはデインはなれてきたようだな…そろそろ依頼とか受けるようにしてやるよデイン」

デイン「ホントかヨ！？おれっちがんばるヨ！！」

デインが小躍りをする

アトリ「よかったなデイン…それに比べてクソ親父は」

ミゲール「……」

ミゲールは屍状態ですでに戦闘不能ひんし状態だ

クラウド「おかわりならいくらでもあるぜ」

リードン「おかわりだ!」

リードンが早速おかわりを要求した

アレン「ホントだよな」

雷吉「うまいな」

ソル「やっぱり仕事の後のチョコサンデーは格別だぜ」

炎丸「みなさん喜んでますね」

カガリ「そうだな(汗)」

シエルマル「今のうちに食べておこう」

ジユク「レビイの料理もうまいな」

レビイ「ありがとうジユクさん」

ゼラス「このカオスな食事は見てもカオスだな(汗)」

父(魔王)「おかわり!」

ピッケル「父さん(汗)」

デイシア「まあ私は楽しいからいい」

パルサ「こつちもおかわりだ!!」

ミネラ「やっぱおいしい」

シムーン「おかわりはたくさんありますので」

みんな楽しそうに食事する、ちなみにギルガメスは依頼中

すると

ビービー

アラームがなった

入口から一匹のポケモンが現れた、お腹の色が青で体色が赤でロングソードを腰につけている色違いのガバイドだ

ガバイド「すみません、ここの親方はいますか？」

そのガバイドはドルクを呼ぶように言う

ドルク「俺がここのギルドの親方だが？何かようか？」

ドルクは用件を聞く

ガバイド「実は…探している人がいるんですが…ここにミゲールという人とデインという人とアトリという人はいますか？」

すると

アトリ「お前…クレスか？」

アトリが出てきた、するとそのガバイドは！

ガバイド「えっ！？アトリ！？」

さらにそこから

デイン「クレス！」

デインが出てきた

ガバイド「デイン！」

ガバイドは一目でアトリとデインだとわかった

ガバイト「ということは父さんも」

しかし

ミゲール「……」

返事がない…ただの屍だ

ガバイド「父さん（汗）」

こうしてクレスと呼ばれたガバイドは会いたかった人と再会できた

……

ドルク「なるほど…ミゲールと色んな世界をまわってここに来たんだな」

クレス「うん、僕はアルベイン道場の師範をやっている、それに僕の世界でも悪者がいてね」

ドルク達はクレスの話を聞いていた

シルム「でもすごいな、僕も剣を習おうかな？」

クレス「それなら稽古つけてあげるよ」

クレスはガバイドでは有り得ないほど笑顔で言う

シルム「クレスさんありがとう」

シルムはクレスに頭を下げる

クレス「ハハハ、でもここでちゃんと働かせてもらうよ、これからよろしくね」

こうしてあの初代主人公であるクレスがブレイブに加入した

## 依頼32 登場！初代主人公！！（後書き）

はい！ミゲールさんの小説：そしてテイルズオブファンタジア主人公！クレスが来てくれました！！

クレス（ガバイド）「どうも…アルベイン道場師範で父ミゲールの息子、クレス・アルベインです」 ガバイドとは思えないさわやかな笑顔で

え〜説明するとミゲールさんは作者さんでもあつてクレスの父親です。まあ俺もファンタジアはやったことないですが、テイルズザワールドレディアントマイソロジー3でクレスを知りました。初代主人公の意味はテイルズシリーズで一番最初の主人公がこのクレスだからです

クレス「さすがフォックさんだよ、まあ別のフォックさんの小説でも僕は出ているけど」

あっちのクレスとは同じでも違う感じもありますので

クレス「でも僕がポケモンの世界にいけるなんて嬉しいな」

まあ次回はさらに別のコラボキャラ登場です

**依頼33 腹黒なダイケンキと愉快な仲間達（前書き）**

はい！今回登場する方はなんと読者さんからの参戦です

シルム「参戦って（汗）」

ドルク「楽しみだな」

そんな依頼33

ドルク「行くぜ！！」

### 依頼33 腹黒なダイケンキと愉快的仲間達

????? 「ここがギルド『ブレイブ』 すごくでかい」

????? 「ここに強いコンビがいるって噂みたいだよ、あたかも熱くなつてウズウズしてくるよ」

?????・????? 「まあ俺等も姉御のためについてきたものですし」

ギルド『ブレイブ』の前には4匹のポケモンがいた

一匹は貝の一本角に白いヒゲをしたポケモン、かんろくポケモンのダイケンキ、一匹はゼブライカ、一匹は鋭い目に透き通った少し白いきこちない翼のポケモン、きょうかいポケモンのキュレム、そしてもう一匹は6枚の赤い羽根の蛾のようなポケモン、たいようポケモンのウルガモスだ

ダイケンキ「まあいいじゃない、私もここに来たかったんだから」

ダイケンキは嬉しそうにする

ウルガモス・キュレム「はあ〜(汗)」

呆れた表情をする二匹のポケモン

ゼブライカ「行くよ」

ウルガモス・キュレム「待つてください！姉御！」

ダイケンキ「あっ！待ってよ！」

4匹は中へと入る

……

その頃トレーニングルーム

リードン「はあ…はあ…」

ドルク「どうした！そんなんじゃまだまだだ！」

リードンは傷だらけでボロボロになりながらドルクと一戦していた  
ちなみにまだパワーシリーズをつけているためはずしてないリードン

リードン「まだまだだ！」

リードンはボロボロでもまだまだいける状態だ

別の方では

シルム「はっ！」

クレス「やっ！」

カキーン！！

シルムとクレスが剣の稽古をしていた

シルムの剣は炎のようでオレンジ色の剣だ、この剣の名はバーニスベルジユと呼ばれる武器だ

クレス「中々剣になれてきたねシルム」

シルム「はい！クレスさんの指導でがんばれてよかったです」

二人は気が合うように剣を稽古を続ける

あれからもう1ヶ月もしていた

リードン「はあ…はあ…」

ドルク「よくしそこまでだ」

ドルクが止める

リードン「はあ…はあ…まだまだだが…さすがに疲れたぜ…」

べたりとリードンは座ってしまった

ドルク「まあ筋肉もついてきて強くなった感じはあるぜ」

リードン「ありがとな」

リードンも腕の筋肉がついてきて力強くなった、体力も少しずつついてきたがまだまだこれから強くなっていくのだ、ドルクもそう感じていた

ソル「みんながんばっていますね」

デイン「おれっちもがんばるヨ」

ピッケル「もう勘弁して（泣）」

父（魔王）「まだまだ！」

こちらはそれぞれ特訓していた

ミゲール「はあ〜早く俺も依頼とかしてえ〜な〜」

ミゲールは剣の特訓をしていた

アトリ「ブラストブラストブラスト!!」

アトリはサンドバックでブラストを連発している

クラウド「オラオラ！」

クラウドもサンドバックで殴りまくりだ

レイ「（なんか兄さんすごい勢いで恨むような感じで殴っているよ  
うな（汗）」

レイはそんな兄を見ている

アレン「はっ！」

ソル「おっと！」

アレンはソルと一戦していた

ソル「中々なもんだなアレン」

アレン「そうかな…私だってもっとがんばらないと」

ソル「まあ無理すんなよ」

と、ソルは優しく言う

……

ダイケンキ「ここがギルド『ブレイブ』…すぐくひるゝい」

一方こちら先程の4匹はギルド食堂にいた

すると

シムーン「ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンが出迎える

ダイケンキ「こんにちは、私はサフィーっていうの、ここで働かせてもらいに來たんです」

サフィーと呼ばれたダイケンキが自己紹介する

キララ「あたいはキララ、サフィーと同じく働かせにきたんだ…そ

れと戦いたい相手と戦いついでに修行に来たのさ」

キララと呼ばれるゼブライカも自己紹介する

ゼロ「俺はキュレムのゼロ、姉御同様ここに働きの来たんだ」

カゼル「俺はウルガモスのカゼル、ゼロと同じく姉御同様にここに働きの来た」

ゼロと呼ばれるキュレムとカゼルと呼ばれるウルガモスが自己紹介する

シムーン「そうでしたか…では親方のところにご案内します」

サフィー達は頷いてシムーンの後についていく

……

シムーン「親方」

ドルク「どうした」

ドルクが出てくる

シムーン「弟子入りしたいという方達が来ています」

ドルク「今行く！…リードンは自主トレしといてくれ」

リードン「わかった！」

ドルクはシミーンの前へ

サファイー「すごい！なんか熱気が伝わったような感じ」

キララ「あたいにとっては喧嘩したくてウズウズするよ！」

サファイーは喜び、キララは戦いたくてウズウズしている、そこにドルクが出てきた

ドルク「ごころうシミーン、で？お前等が弟子入りしたいという奴等か？」

ドルクがサファイーたちに質問する

サファイー「そう　そして腹黒同盟というのがあるという噂を聞いてはるばるやってきたの　私はサファイー、そしてこっちにいるのは私の友達のゼブライカのキララとキュレムのゼロとウルガモスのカゼル」

キララ「よろしくな」

ゼロ・カゼル「よろしくな」

ドルク「ああ、こちらこそ」

ドルクは挨拶した

ドルク「腹黒同盟なら入っても構わないぜ、それに弟子入りしてやるが…サファイーの腹黒さはいいな…」

サファイー「そうですね、私これでも」

サファイーはどこからかチェインソーを取り出していた

ドルク「まあ殺傷能力は消してあるからOKにしておくれ」

こうしてあなたに弟子入りする者が仲間になった

キララ「なああんた早速だがバトルしてくれない？あたいすごくウズウズしているんだけど」

キララはバトルしたいとウズウズしていたが

ドルク「わりいが後にしてくれ、こつちも色々あるからな」

キララ「わかったよ…やりたかったのにな」

ふてくされそうにキララは言う

ドルク「悪いな…とりあえずシムーン、案内とかしてくれ」

シムーン「わかりました…それではこちらへ」

シムーンはサファイー達を案内する

するとそこからミネラが入ってきた

すれ違いに通っていく

ミネラ「ねえパパ？あの人達は？」

ドルク「今日から弟子入りする仲間だ、後で挨拶に行くんだぞ」

ミネラ「うん」

ミネラがニコやかに言う

依頼33 腹黒なダイケンキと愉快的な仲間達（後書き）

はい！読者さんからサファイアさんが来てくれました

ドルク「読者参戦したな」

感想でサファイアさんが色々とくれたので、今回出演させてもらいました、さてここからどうなるかです。というか次回もコラボですが次回はあの作者さん&単純なワニとその仲間達の登場です（黒）

ドルク「誰なのか楽しみだな」（黒）

依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間（前書き）

はい！今度はとある作者さん&あの面白い探検隊の登場です。

ドルク「タイトルからして一体誰なのかだな」

シルム「誰だろう？」

クレス「気になるね」

サフィー「そうですね」

それでは依頼34

サフィー「がんばります！」

### 依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間

ここはギルド食堂

?????「いや〜このギルドはいいですね〜」

ドルク「いや〜これでもまだまだだけだな」

ドルクが誰かと話していた。話しているのは一匹のポケモンだった、岩の殻はうずまき状で、体はマグマで目が二つあるポケモンだった、このポケモンはマグカルゴと呼ばれたポケモンだ、だがこのマグカルゴ、普通のとは違って手があるのだった、さらに伊達メガネもつけていた

シムーン「どうぞお茶です」

マグカルゴ「どうも」

マグカルゴはシムーンにおじぎして言う

ドルク「まあ今回は作者によって出演となったな…ノコタロウ」

マグカルゴ「はい…今回出演ありがとうございます」

ノコタロウと呼ばれたマグカルゴはドルクにおじぎした

ドルク「まあ今回鍛えたい奴等が来るようだが?」

ドルクはノコタロウに聞いたたす

ノコタロウ「はい…今回あいつらを鍛えるために私はここに来たのです」

どうやら彼には目的があるらしい、それはある探検隊を鍛えるためのようだ

なのでそれを待っているようだ

……

その頃

シルム「はっ！やっ！」

クラウド「まだまだだ！」

一方他のメンバーも今回は特訓だ、ちなみに依頼で行っているものもただいま依頼中だ

ソル「オラオラオラア！！」

ソルは銃を連射している、的を使っての射撃特訓だ、ただし殺傷能力は抜いている

リードン「うおりゃ！」

クレス「はっ！鳳凰天駆！！」

クレスは炎をまとって上ななめにしてリードンを打ち上げてななめ





……

ケッコ「コケッ！上空から何かが飛んできますコケッ！」

ケッコは警報を鳴らす

ドルク「何っ!?!」

すると

ドカーーーーー  
ーン!!!

何処からか大きな音が聞こえた

ドルク「トレーニングルームから聞こえたな」

ノコタロウ「あ…たぶんあいつらだと(汗)」

ドルクとノコタロウとケッコは急いでトレーニングルームへ

……

トレーニングルーム

シルム「(汗)」

トレーニングルームにいた全員がいた

カガリ「なんだ（汗）」

バトルフィールドの地面にはくつきりと形を残した後があった、しかも3匹のポケモンの落ちた後だった

そこから3匹のポケモンが出てきた

一匹は背中の種があるカエルのようなポケモン、一匹は背中に甲羅があり頭には若葉が生えたポケモン、そしてもう一匹はワニのようなポケモンだった

そこから

ドルク「おい！みんな！」

シルム「あっ！ドルク！」

ドルクとノコタロウとケッコが駆けつけた

ドルク「一体何があったのか？」

ソウ「師匠、実は」

ソウが説明する前に

ノコタロウ「おっ！来たか…というか天井突き破って出てきたか（汗）」

ノコタロウがそう言う、どうやらこの3匹のポケモンが鍛えたい奴等だろう

ドルク「ノコタロウ？こいつらなのか？鍛えたいという奴等は？」

ノコタロウ「はい…こいつらです」

?????「つて！？ここは何処じゃー！」

?????「なんやここー!？」

?????「つてかクロー様！なんか見知らぬポケモン達が!？」

3匹は辺りを見渡して言う

ノコタロウ「おいお前達」

ノコタロウが3匹に近付く

?????『つて!？作者!？(やないか!？じゃねえか!？)』

3匹は叫ぶ

それでは紹介しよう

この3匹はノコタロウさんの別世界から来た探検隊なのだ

まずワニのようなポケモンがクローと呼ばれたワニノコだ、探検隊のリーダー的存在だ、次に背中の中を背負ったポケモン、シードと呼ばれたフシギダネだ、クローの手下らしくクローを様つけで絶対服従のポケモンだ、最後にドルクの種族でもいえるドダイトスの進化前のナエトルの名はシノと言うらしい、同じくクローの手下であ

り、関西弁を喋るナエトルだ

ノコタロウ「以上です！」

クロー「って何さらすんじゃバカ作者！！（怒）」

クローは怒っていた

ノコタロウ「せっかくフォックさんから特訓をしに飛ばしたのだから感謝するべきだよそこは」

真面目そうにノコタロウは言う

ドルク「ってかその前に…お前等…」

ドルクはクロー達を睨みながら近付く

クロー「な…なんじゃ！お前は！」

ドシーン！！とドルクの足音が大きくなる

それは怒りを表してる

ドルク「天井など…こっちできっちり払ってもらってからオラア！！（激怒）」

どうやら彼等は着陸したのはトレーニングルーム…しかも天井のため天井には穴が開いているためドルクは穴を開けた張本人達をエナジールバスターやさらに派生技エナジールバースト、エナジールバスターXなど豪快に放った、クロー達は被害にあって結局天井の

修理代および地獄特訓を受けるために結局強制的にブレイブに入れ  
させられたのであった(汗)

#### 依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間(後書き)

はい！『ポケモン不思議のダンジョン 葉炎の物語』から、作者さんのノコタロウさん、そしてライバルの探検隊であるクロー、シード、シノの4人が来てくれました

ノコタロウ「こんにちは、ノコタロウです」

クロー「ワニノコのクローじゃ(怒)」 ドルクにやられたためミイラ状態

シード「フシギダネのシードだ(怒)」 同じく

シノ「ナエトルのシノや(怒)」 同じく

ドルク「ついにだな」

そんな次回は…やっぱりやっちゃっう地獄特訓(黒)はたしてクロー達の運命は(黒)

クロー「おい！ワシ達を殺す気か！！(怒)」

えっ？何言ってるの〜(黒)

クロー「(この龍！)(怒)」

シルム「どうなるんだろう(汗)嫌な予感しかない(汗)」

依頼35 クロー達の特訓1〜楽しい地獄特訓〜（前書き）

クロー「おい！？なんだこのタイトルは！？」

楽しい地獄特訓開始です

クロー「おい！？」

では依頼35

クロー「負けん！！」

依頼35 クロー達の特訓1〜楽しい地獄特訓〜

なんとかことが収まりとりあえずは特訓を開始することに…だが

ドルク「さらにクラウドのコーヒー牛乳弁償やソルのチョコレート  
サンデー代含めて合計15万払ってもらっぜ」

クロー「なんだと！？わし等そんな大金持っていないぞ！？」

もちろん無一文だ

ノコタロウ「じゃあお前達は強制的に働いてもらうからな、まあそ  
れで返すってような感じでいいですかドルクさん？」

ドルク「いいぜ、どうせこいつらにはきっちり特訓+働いてもらう  
からな」

クロー「もとはといえばそのバカ作者が大砲撃っただからだろ！  
！（怒）」

そうクローはいうが

ノコタロウ「ハ〜イワタシニホンゴワカリマセ〜ン」

と無視した

クロー「無視すんなああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ！！（怒）」

キレルワニの木霊が響く

ドルク「まあとりあえずまずは特訓だな…」

すると

クラウド「テメエ等は俺のコーヒー牛乳を台無しにした…よって特訓を厳しくしてやるから覚悟しとけテメエ等！！（黒激怒）」

クラウドがコーヒー牛乳の事でまだごりつぶくの様子だった、がドルク「とりあえずコーヒー牛乳は後で届けておく、待っていてくれるか？」

するとクラウドは

クラウド「マジ！ありがとなドルク」

笑顔になるクラウド

クラウド「じゃあ…特訓開始だが…テメエ等ワニとカエルとなにわ亀…覚悟はできてるだろうな」（黒激怒）」

クラウドの背後には鬼人やらなにやらが現れてくる

シード「（ククククロー様！？すごく嫌な予感が！？）」

クロー「（そ…そんなことワシに聞かれても！）」

シノ「(どうしましょうクロー様!?)」

そう3匹は考えてもどっちみち特訓はされるのだ…強制的に

……

クロー「はあはあ…」

シード「ぜえ…ぜえ…」

シノ「き…きつ…い…」

クロー達はすでに汗だくで疲れまくっていた

クラウド「オラオラ!!走れ!!」

クラウドは重さ1000kgの重りをつけて走っている

クロー・シード・シノ「それ以前にお前何者だよ!?(なんや!?)」

□

クロー達は驚く

彼は一応神で若き青春突入の少年なのだから(汗)

リードン「ふう…なんだかなれてきたなこの特訓」

リードンも走っていた

ちなみにこれは地獄特訓その1、ギルド内のグラウンドを1000

周（重り付き）まわるのだ

ノコタロウ「ほう〜これはすごいですね〜（黒）」

ニヤリと笑う一匹の作者マグカルゴがクロー達を傍観する

ドルク「まあクラウドも作者だがこれでもあいつの特訓はすげえ役に立つぜ（黒）」

それがクオリティーなのだ

……

クロー・シード・シノ『……………』

彼等は走り終えて返事がないただの屍状態になった

ノコタロウ「そんなんじゃあいつに勝てないぞ」

ノコタロウがそう言うと

クロー「なんだと!？」

単純なワニ、クロー復活

クラウド「よしっ!次やるぜ!！」

クロー「おう!」

クローだけ復活したが他二人はそのまま屍状態でダウン



アトリ「あのワニいい気味だぜ(黒)」

ソウ「面白くなりましたね (黒)」

ミゲール「マジおもしれえ(黒)」

アトリ、ソウ、ミゲールはクロー達を傍観していた

サフィー「後で激辛パイとかで (黒)」

サフィーは何か作っている…しかもなぜか素材が辛いものばかりだった

この後クローは色々な目に合い、帰ってきたデイン達は驚いたのはいうまでもない



依頼36 クロー達の特訓2〜大食いとバトル前〜（前書き）

シルム「もはや修行になってないタイトルだよ（汗）」

気にしない

ドルク「おっしやあ！行くぜ！」

それでは依頼36

ドルク・シルム「行くぜ！！」

依頼36 クロー達の特訓2〜大食いバトル前〜

ギルド食堂

ドルク「あゝ楽しみだぜ」

ドルクは夕食をまだかと楽しみにしている

クラウド「おまたせ！」

クラウドとヤミラミ達が料理を運んできた

ドルク「よしっ！では早速いただきませ！」

シルム「それじゃあみなさんご一緒に！」

全員『いただきます！』

全員がいただきますを言った

早速ドルクはガツガツと勢いよく食った

ノコタロウ「速い！？」

大食いのノコタロウはドルクの異様な大食いに驚く

クロー「大食いならワシも負けんぞー！」

クローも負けじと料理をガツガツと食った

ノコタロウ「私もだ！」

負けじとノコタロウも参戦

夕食は大食い対決へとなったが

……

30分後

クロー「ゲフツ…このチート亀…わしよりかなり食うとは…」

ノコタロウ「す…すごい…」

満腹な二人はダウンしたがドルクはというと

ドルク「ガツガツ…おかわりくれ」

かなりの量食べていたちなみに

ミゲール「俺もおかわり！」

ミゲールもだった

実はミゲールとドルクは大食い対決をしていたことがあって結果はドルクが一気に逆転勝利をおさめたのだ、なぜか仲良く大食いをしている

……

シムーン「とりあえずノコタロウさんは客室で、クローさん達は弟子部屋で」

その後部屋に案内してもらったノコタロウとクロー達

ノコタロウ「さすがギルド『ブレイブ』 客をもてなしていて最高です」

喜ぶノコタロウ

クロー「ワシ等は結局は狭い部屋か」

弟子部屋は狭いが綺麗なのだが彼等三人にはちよつと窮屈きせうくつな部屋なのだ

ドルク「お前等はしかたねえだろ」

サフィー「私のは広いから」

サフィーも弟子部屋だが広い

もちろん残りも

クレス「まあ僕や父さん達はそれぞれ広い部屋だしね…」

クレス達ファンタジアオリジナル組は4人一緒の部屋で広い

シルム「それじゃあ寝ようか」



シルム「うん！」

ソウ「眠いですけど師匠の弟子ある僕が師匠と一緒にじゃないと体力が付きませんし」

シエルマル「ふわあ〜」

ソウとシエルマルもランニングに参加していた

ちなみにミネラは朝の散歩が日課でいつもトレジャータウンをまわっている

……

ドルク「ガツガツ……」

ノコタロウ「（さすがはギルド『ブレイブ』の親方で元人間…大食いとかで体力がかなりある…これはすごいですね）」

朝食もみんなでワイワイと楽しい食事となった

そこにクローが

クロー「なあドルク…ワシと勝負じゃ…！」

いきなりクローがバトルを仕掛けてきた

ノコタロウ「ちょっ!?!お前は何を言っ!?!」

ドルク「いいぜ」

なんとドルクはOKのようだ

クロー「ワシの実力をみせつけたる！」

そんな二人は対決することに

依頼36 クロー達の特訓2(大食いとバトル前)(後書き)

はい！次回はドルクとクローがバトルします

クロー「ワシは負けんぞ！」

はたしてそうかな(黒)

クロー「ワシだってこれ以上は負けんからな！」

ドルク「次回も楽しみにしてくれよな」

依頼37 クロー達の特訓3〜ドルクVSクロー〜やっぱりワニは散る運命とき

はい！対決です

クロー「ワシは負けんぞー！」

はたしてどうかな？（黒）そんな依頼37

クロー「行くぞー！」

トレーニングルーム

バトルフィールドにはドルクとクローの二人が立っていた

シルム「それじゃあれよりバトルを始めるよ…どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了…二人とも…準備はいい？」

ドルク「いつでもいいぜ」

クロー「ワシは万全じゃ！」

いつも以上に気合を入れるクロー

シード「(クロー様大丈夫なのか…(汗))」

シノ「(クロー様…(汗))」

手下であるカエルと若葉亀は不安がる

シード・シノ「おい！？(怒)」

そんななかバトルが始まった

シルム「バトル開始！！」

クロー「ワシの豪快な技で勝負じゃあ！！ハイドロポンプ！！」

クローはいきなり大技のハイドロポンプがドルクを襲う

ドルク「守る！」

ドルクは守るで防いだ

クロー「今度はこれじゃ！氷の牙！」

クローは氷の牙を繰り出してドルクに迫る、ドルクは草・地面タイプを持っていてるため氷タイプには4倍のダメージがきてしまう…しかし

ドルク「守るだ」

再び守るで防いだ

クロー「くぬぬ…こしゃくな！守ってばかりでは勝てんぞ！」

クローは怒りながら言う

クロー「ならば滝登りじゃあー！」

クローは水をまとって突進してきた

ドルク「……………」

ドルクは無言で攻撃を受けた

クロー「さらに氷の牙じゃー！ー！」

さらにクローはドルクに噛み付いた、ドルクは甲羅を噛み付かれて  
しまいだんだんと凍ってきた

クロー「ふははは！ワシの勝ちじゃな！」

クローは勝利を確信するが

ドルク「効かねえなあゝそんな攻撃じゃ俺のロツクなハートは打ち  
砕けねえよ…フン！」

パキーン！とドルクは力を入れて凍った部分の氷を砕いた、ドルク  
を見るとあんまりダメージを与えたように見えなかった

ドルク「エネルギーバスター！！」

ドルクはエネルギーバスターを放つ

クロー「負けん！！」

クローは避けた

ドルク「エネルギーバスター！！」

さらに広範囲となったエネルギーバスターを繰り出すドルク

クロー「チツ！」

クローは少しかすったがなんとか避けた





どうやら知らせというのは遠征らしい

遠征とは…ドルクやシルムもプクリンのギルドで体験した遠出での探検の事だ、まだ見ぬ謎や新たな発見など…それが遠征の目的と意味だ、メンバーも誰がいくのかわからない…だがまだ時間はあるため余裕があるようだ

シルム「それじゃあいいただくよ」

全員『いただきます!』

久しぶりの遠征…そして他のみんなも初めての事だ、特にシエルマルは喜んでいた

シエルマル「よし!俺が遠征に選ばれるようがんばらないと!」  
「

シエルマルはいつもより気合を入れる

ソウ「遠征楽しみです」

ミゲール「よしっ!ぜってえ!選ばれて行ってやる!」

クレス「(遠征か)…どんなところに行くんだろうな)」

デイン「(楽しみヨ)」

クロー「(ううならそこのお宝を絶対にあいつらより先にとつてくれるわ!)」

クローは怪我しながらもそう誓う…運は悪いがその根性だけは一番のようだ

ノコタロウ「（クロー達は無理だろうな…でもどんなところを遠征するのか…わからないな…ドルクさんのことだ…きつとすごい場所に行くのかもしれない）」

遠征場所…そして選ばれるメンバーは！？

やっぱりワニはやられました(笑)

クロー「おい!?ワシ負けてるじゃないか!？」

ドルクが強すぎるからです(笑)

クロー「ふざけるな!!(怒)」

そして…今回なんと遠征が近付きました!!そこでアンケート&募集です。遠征場所ですが…何処がいいでしょうか?もしくは自分達の世界に来て!という方は感想もしくはメッセージでお願いします。そこから1名の方の世界もしくはアンケート募集で行く世界などそれぞれ選ばせてもらいます!それではよろしくお願いします!そんな次回はいよいよミゲールさんの初めての依頼となります

クレス「ついに父さんの初めての依頼だね」

まあどうなるかわからないけどね(汗)

クレス「たしかに(汗)」

依頼38 ミゲールの初依頼（前書き）

今回はミゲールさんの初依頼です

クレス「父さんの……」

ファンタジア主人公クレスの父親であり作者のミゲールさんがどう  
いう活躍をするのか：依頼38

クレス「負ける……ものかあ!!」

## 依頼38 ミゲールの初依頼

今日も平和なギルド『ブレイブ』そんな中

リードン「てやっ！」

ドルク「いい感じだ、少しずつ感覚が慣れてきたな」

ドルクはリードンと特訓している、そんな時

ミゲール「ドルクく来たぜ」

ミゲールが来た

ドルク「おっ来たな、今日からミゲールの初依頼だ、しっかりがんばれよ」

ミゲール「気合い入れて行くからな！」

ミゲールは気合い十分だ

ドルク「ほらよ」

ドルクはミゲールに依頼書を渡した、今回の依頼は

ミゲール「…!?マジ!?!」

依頼はこうだ

今回の依頼はお尋ね者でさらにお尋ね者はミゲールだけで倒すという条件でとなる。

ミゲール「無理×100!!」

怯えるミゲール、だが依頼なのだから一人で勝てる相手なのかもわからない

ドルク「少しサポートする奴もいるから大丈夫だ、がんばれよ」

ドルクは励ます

ミゲール「よっしゃあ!! やってやるぜ!! (マジ無理です) (泣) (泣)」

がんばる気を見せていても実際は一人でお尋ね者を倒すのは無理があると涙目ではあったミゲール

……

場所は変わって輝きの丘

ミゲール「はあ〜」

ミゲールはため息をつく

今回の同行者はリードン、ソル、クレスの三人だ

クレス「父さん、ため息はいてる場合じゃないよ、ドルクからの初依頼だから」

リードン「俺はパワー系のつけていてあまりうまく戦えねえけどな」

ソル「俺等に任せろ、それにボスと手下だから俺には通用しねえけどなあ〜（黒狂笑）」

ソルだと一発でお尋ね者をやりそうだ（汗）

すると敵ポケモンが現れる

クレス「次元斬！！」

クレスの剣が青く光る、空間を歪ませて敵ポケモンを一刀両断する

敵ポケモンは次元斬で戦闘不能になった

クレスの技はミゲールから教わった剣術、アルベイン流というのだ  
…さらに時空から転移して攻撃して相手を倒す時空の力をもっている

リードン「へえ〜すげえ〜な」

リードンが感心する

クレス「いや、僕もまだまだだよ…僕ももっと腕を磨かないといけないし」

クレスも修行する身、それでも強いのだ…ミゲールのいる…クレスのいる世界はある者の支配によって一度ミゲールは死んでしまったが…クレスの仲間である者の手によって生き返ったのだが…ミゲール自体はポケているようなものになったが、クレスの尊敬する父には変わりはない…彼自体はそのある者を倒したのだから

ソル「でもお前十分強いぜ？それでもすげえとは思う」

クレス「ソル……」

ソルもクレスの強さを理解している、彼も悪魔だが暴れすぎるのもあるがそれでもドルクが彼の世界にやってきたとき、ドルクも喜ぶ…お互いが結ぶ絆というのがあるだろう

クレス「そうだね、僕も仲間と冒険したときはよかったし」

クレスには仲間がいる…自分の世界と自分の世界の過去と未来にいる仲間を

ミゲール「俺はその時死んでいてわからなかったしな」

そりゃわかるわけないだろう（汗）

ミゲール「でもクレスが話してくれてな…」

まあたしかに話せば大体が分かるときがある

ソル「な〜るほどな〜…まあこうして話すのも悪くねえしな」

ギルガメス「そうだな」

リードン「って!?!?いつの間に!?!」

いつの間にかギルガメスがいた

ソル「聞いていたのかよ(汗)」

クレス「気配がしなかった!」

ギルガメスなら気配など消してだろう…さすが神出鬼没なバクフー  
ンだ

クレス「とりあえず行こう、お尋ね者でも油断できないし」

ミゲール達は頷いてダンジョンを進んだ

……

輝きの丘…お尋ね者アジト

今回のお尋ね者であるデンチュラと言うポケモンとバチュルが5匹  
を囲んだ

ミゲール「(ひえ〜おっかねえ〜)(泣)(泣)」

ミゲールの足がガタガタと震える

ギルガメス「やるぞ!」

みんなが戦闘態勢に入った

クレス「秋沙雨!!」

ソル「オラオラ!!」

リードン「バァングランド!!」

ギルガメス「フン!!」

クレスは連続の突き、ソルは二丁の拳銃、リードンは拳を地面に叩きつけバチュルのいる地面から炎を吹き出し、ギルガメスは大剣でバチュルを一掃した

デンチュラ「何っ!?!」

残ったのはボスのデンチュラのみ

後はミゲールがボスを倒すのみとなった

クレス「父さん!がんばれ!!」

クレスが応援する

ミゲール「やってやるぜ!!」

ダメ元でミゲールは気合を入れてデンチュラの前へ

デンチュラ「くそ!エレキネット!!」



あああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああつ!!  
!!

デンチユラはボロボロになって目を回した

ミゲール「おっしゃあ！！依頼達成だ！！」

ミゲールは喜び依頼を達成した

……

ドルク「ごくろうだったな」

ミゲール「マジきつかったけど達成してよかったぜ！」

ミゲールは喜ぶ

ドルク「ソルもクレスもリードンもごくろうだったな」

リードン「まあ俺もまだまだがんばらねえとな」

クレス「父さんの事心配だったけど……なんとかなつてよかったよ……

それにソルとも話とかできたし」

ソル「まあ俺もよかったし……それにお尋ね者を捕まえたしな」(黒  
狂笑)

それぞれそう話す、ソルは黒狂笑いをする

ドルク「ミゲールの報酬だが…ほらよ」

ミゲール「…こんだけ？」

ミゲールの手元には500ポケがあった

シルム「ギルドの運営もあるし、それに弟子になった人の報酬は10分の1なんだ」

ソル「まあ俺は客人だが報酬はこんだけだ」

ソルの手元には2500ポケあった、客人のためかそれ以外（ドルクやシルムも含めて）はポケは報酬の半分になる

ミゲール「しょんなあ〜（泣）」

ミゲールは愕然と燃え尽きてしまった、真っ白に

クレス「まあ僕も500ポケだったし（汗）父さんとりあえず休もうよ」

ミゲール「……（灰）」

クレスはミゲールを連れて部屋へ

ソル「それじゃあ俺も休むか」

ソルも部屋で休むことに

ドルク「今回のミゲールはお見事だったな」

シルム「デenchyu相手ではよかった、相性では有利だったから」

相性も基本のうち、相手によっては簡単な依頼にもなる

ちなみに残った報酬などはギルドの運営代などに使うのだ、慣れているドルクなどは報酬の半分はギルド運営資金にあてている

依頼38 ミゲールの初依頼（後書き）

ドルク「簡単な依頼な感じだったな」

まあそつだね…デenchユラは電気と虫だから、まあヨーギラスが岩・地面と読めなかったのがアホだったかもね

シルム「まあ相性もあるから有利と不利はあるからね」

次回もお楽しみに

依頼39 クローのハチャメチャ特訓、強すぎだろ！〜 (前書き)

クロー「なんだこのタイトルは(汗)」

君の特訓だよ？ (黒狂笑)

クロー「(このトカゲ(怒))」

では依頼39

クロー「負けん!!」

依頼39 クローのハチャメチャ特訓〜強すぎだろ！〜

リードン「はあはあ…」

リードンは朝のランニングをしていた

シエルマル「リードンさんももう慣れました？」

シエルマルが走りながらリードンに聞く

リードン「ああ、もうなんだか慣れてきたな…それにあまり疲れとも感じねえ〜し、腕もかなり硬くなったようだしな」

リードンの腕を見るとかなりの筋肉量にはなってきた、相当な特訓をしたためか力が上がったような感じだ

シエルマル「俺も、慣れてきたのでだいぶ体力がついてきましたし」

シエルマルも最近ではあまり疲れなどを感じなくなった、ほぼクロウドの地獄特訓のおかげで体力もついてきた

.....

クロー「ふわあ〜…」

クローがあくびをする

ただいま朝食の時間だ

ドルク「さて今日はクローのために特訓付き合ってやるか(黒)」

何かを企むギルド『ブレイブ』の親方：黒くなってる時点で何かやりそうなのだ

ノコタロウ「今回は私が提案した：連続バトルをしましょう」

ノコタロウの提案でクローには連続バトルをしてもらうことに、ここで説明しよう：連続バトルはもちろん相手との連戦でのバトルの事だ：戦闘不能になったらそこで終了となる。なのでかなりのバトルだ：これはさすがに無理があるかもしれないが

シルム「でも無理あるしな：ノコタロウさんそこらへんは大丈夫ですか？」

シルムが質問すると

ノコタロウ「大丈夫でGES、そうじゃないとあの単純ワ二達は強くなれませんし：それにみなさんも強いのでみなさんの修行にもなりますし」

まあ強くなれるメリットにもなるのだ

シルム「まあみんなどれぐらい強くなったのかも見たいしね」

みんなは食事を終えて休憩してからトレーニングルームのバトルフィールドへ



というわけで三人の連続バトルが始まった

……

まずはクローからだ

クロー「フン！これも修行だ！ワシは負けん！！」

気合を入れるクロー：「まず最初の対戦は

クレス「なんで僕（汗）」

クレスだった

クロー「フン！ワシがこんな奴に負けるわけがない！」

自信満々なクロー

クレス「でもこれ本気でいいのかなノコタロウさん（汗）」

ノコタロウ「どうぞどうぞ 遠慮なくお願いします そつでない  
強くなれませんし」

なぜか喜んでいるように見えるノコタロウ

クレス「それじゃあ遠慮なく（汗）」

クレスは構えた

シルム「それじゃあ第1バトル開始！」

クローの最初のバトルが始まった

クロー「行くぞ！！氷の牙！」

クローは氷の牙でクレスを噛み付こうとする、クレスはガバイドの姿になっているため氷タイプには4倍のダメージを受けることになる。

クレス「空間翔転移！」

クレスは剣を地面に突き刺して掴んだまま青いものに包まれるするとクレスは浮かんで突然姿を消した

クロー「何っ!?!」

クローの氷の牙が何もないとこを噛み付く

クロー「なっ!?!何処に消えた!?!」

クレス「せやっ！」

そこからクレスがクローを吹っ飛ばす

クロー「がっ!?!」

クローは大きく吹っ飛ばされ、トレーニングルームの壁に激突する

クロー「ぐはっ!?!一体!?!」

するとクレスは説明する

クレス「この技は時空を移動して攻撃する技なんだ…これは僕にしかできない技だけだね」

それを見ていた観客席

パルサ「何っ！？これは俺の空間の力と同じような感じだ！？」

ディシア「どうやらクレスという青年は時間と空間を移動するいわばどちらの力をもっているような技を使っているようだな」

神と呼ばれし二人はクレスの時空技に驚く、ディシアやパルサは時と空間の一つの力を持っている…クレスの場合はその時間と空間を合わせた技が時空技だ

クロー「まさかワシの技が当たらないとは…」

クローは気絶した

シルム「第1バトルはクレスさんの勝利だよ」

シルムが勝利コールをする

クレス「僕が時空剣技持っていなかったら今頃ダメージ受けていたよ」

クレスは少し焦った感じもあったがなんとか保った

クロー「くそっ！」

ノコタロウ「7つの秘宝取られたくないのか？」

クロー「ぬっ！やってやるぞ！！」

単純ワニ、クロー復活

クレス「（まさかこんな言葉で復活するなんて…彼も結構根性だけはあるようだね）」

クレスはそうクローを見ている

次の対戦相手は

ソウ「僕みたいですね」

次の相手は悪魔亀大魔王ドルクの弟子であるソウだ

クロー「こんな奴が相手だと！？舐めているのか！」

クローは叫ぶが

ドルク「まあ見てろ、それにソウを甘くみるなよ？最悪一瞬で終わるぜ？」

クロー「？」

クローはドルクの言ったことがわからなかった、だがそれが後に知ることになるとは彼はこの時知る由もなかった

シルム「それじゃあ第2バトル始め！」

第2バトルが始まった

クロー「まずはハイドロポンプ！」

クローは大技ハイドロポンプを繰り出したが

バシヤア！

なぜかソウには当たらなかった…なぜなら目の前でハイドロポンプが打ち消されたのだ…見えない何かによって

クロー「ならこれでどうじゃ！穴を掘る！」

クローは穴を掘って地面にもぐった

ソウ「中々やりますね…でも僕には通じませんよ、ルインライト！」

ソウは黒と白を混ぜたエネルギーをクローが穴を掘ったところに向かって放つ、すると穴から光が出てきた

ドカーン！！

さらに爆発がする

クロー「ぐはっ！？」

そこからクローが黒こげになりながらも出てきたが

バタツ！

倒れてしまった

シルム「クロー戦闘不能！ソウの勝ちだよ」

ソウ「僕を甘くみないでくださいね、これでも師匠の弟子ですから」

教訓：どんなポケモンでも甘く見ると痛い目に合う

……

クロー「く…くそっ！」

ノコタロウ「7つの秘宝があいつらに取られたくないのか？」

クロー「よしっ！やってやるぞ！」

再び復活した単純ワニ、クロー、そんな次の相手は

アトリ「俺様だな」

なんとアトリだ

クロー「（油断したがこいつは対したことないな…でも待てよ…あのソウというイーブイだけでなく…あのタツベイも何かありそうだな…だがワシは7つの秘宝のため絶対に勝つ…！）」

クローはそう思っている





しは慣れただろ?」

と、ドルクはリードンに聞く

リードン「ああ、ならやっつてやるぜ!」

リードンは燃えるように言う

シルム「とりあえず3連戦にしておくよ、その方がいいと思っつて」

リードンは頷いてバトルフィールドに立つ

果たして!?!?

依頼39 クローのハチャメチャ特訓〜強すぎだろ!!!〜 (後書き)

結局は攻撃が単純で敗れまくりでした

クロー「ちよつと待て!!!? (怒)」 ミイラになっている

何?

クロー「ワシすんごく被害受けまくりじゃないか!!! (怒)」

このぐらいではまだまだだよ、それに攻撃が単純すぎては勝てないよというか7つの秘宝をとられちゃうよ

クロー「何だと!?!」

ドルク「とりあえずクラウド地獄特訓コース受ける」

クロー「覚えてろよ!!! (怒) ワシはすんごく強くなってお前等を絶対倒してやるからな!!!」

フォック・ドルク「(無理だろ)」

つと、さて次回はリードン君の連続バトルです。彼はどこまでやれるのか!

リードン「勝つぜ!」

依頼40 リードン 漢の意地！（前書き）

ドルク「おっ！なんだかすげえ〜タイトルだな〜」

リードン「俺の意地？」

まあ熱いバトルになるよ

リードン「おっじゃあー！やってやるぜー！」

では記念すべき依頼40

リードン「行くぜー！」

依頼40 リードン 漢の意地！

リードンがバトルフィールドに立つ

まず最初の相手は……

キララ「あたいが相手だね！あたいもちょうどバトルしたかったんだよ」

ゼブライカのキララだ、彼女にとってはバトルは喧嘩みたいなものだ

リードン「（相手は でさらに電気タイプか…これは俺には苦戦するな…だが俺はそれでも負けねえ！）」

リードンが気合を入れる

シルム「それじゃあ始め！」

キララ「ニトロチャージ！」

キララはニトロチャージを繰り返した、リードンにとってはダメーシがないが一番厄介なのはニトロチャージの追加効果…それは素早さをあげる効果をもっているため、パワー系のアイテムをつけているリードンには苦戦する。

リードン「（厄介だな…ドルクならたしか素早さが低くても相手をよく見ればいいって言ってたな…）」

リードンはキララの動きをよく見る

キララがリードンに迫る

リードン「(今だ!)」

リードンは技を繰り出す

リードン「バーングランド!!」

リードンが地面を拳で叩きつけると、キララがいる地面から炎が噴き出す

キララ「なっ!?!」

キララは咄嗟に避けた

リードン「ごめんな、れっかれんけん烈火連拳!!」

リードンはそこからキララに連続で炎のパンチを繰り出す

キララ「くっ!やるねえ〜あんだ!」

キララはなんとか耐えた

リードン「まだまだ!火炎放射!」

今度は火炎放射を繰り出すが

キララ「充電!」

キララは充電を繰り返した、そこから繰り返す技は

キララ「今こそアタイの底力を見せてやる！サンダーインパクト！  
！」

キララは電気を帯びてリードンに突進してくる。サンダーインパクトはギガインパクトの電気技であるオリジナルの技、当たればリードンには効果は抜群だ

リードン「ぐわっ！？」

リードンはそれを食らってしまう

キララ「よしっ！」

キララは決まっただと思っていたが

リードン「まだだ！」

リードンはボロボロになりながらも気合でなんとか耐えた

キララ「嘘っ！？」

キララはリードンが攻撃に耐えたことに驚いた

リードン「紅蓮龍波くれんりゅうは！！」

リードンの口から炎で作られた龍が吐き出された

炎の龍がキララを飲み込んだ

キララ「きゃあああああああああああああああああ  
!!!!!!!!!!!!!!」

キララは炎に包まれて炎が消えた後倒れた

シルム「キララ戦闘不能！リードン君の勝ち！」

リードン「うっしゃあ！」

リードンはガッツポーズをする。だが油断はできない…リードンはサンダーインパクトのダメージもあって体力は不利な状況だ。それでもその根性だけは…ドルクは認めていた。

ドルク「（最初は苦戦したようだがかなりやるな…ダメージを受けているが次とかが不安だな）」

まだ残り2戦もあるのだ（ちなみにクローは強制的に負けても3戦）  
油断はできない

次の相手は……

デイン「今度はおれっちだヨ」

デインだ

デインは術を使って攻撃をする…ただ術でもデメリットがある…それは詠唱時間と詠唱硬直だ

詠唱時間は術や魔法の詠唱してから術を発動する間の時間の事だ、

だが時間をかけすぎると攻撃されて術の発動を無効にされるのだ、  
なのでかならず早く詠唱を済ませることだ…この詠唱を早めるため  
の事を詠唱速度と言う、そして詠唱硬直というのは詠唱中自分が術  
を詠唱しているときにそのまま動かなくなることを言う、術詠唱で  
もかなりのものだ…デインの場合は『星の紋章』という力があり、  
その中の『光速の力』というのがある…これは詠唱速度と詠唱硬直  
を2倍にして時間を短縮することができる…デインはその術で色々  
と練習や集中力を高めている。

リードン「（次はあのトゲチックか…たしか魔法とか使えるんだっ  
たな？）」

リードンはデインを見る

デイン「（おれっちも特訓の成果を見せてやるヨ！）」

デインは気合を入れる

シルム「では始め！」

デイン「……」

デインはいきなり詠唱した…デインの周りの地面から茶色の文様が  
現れる…

リードン「（どういくか！？）」

リードンは構える

デイン「グレイブ！！」

デインは術の名を吐く、リードンの足元からとがった岩が5本も現れてリードンに襲い掛かる

リードン「くっ！」

リードンは咄嗟に空を飛んで回避した、だがパワー系アイテムの重さで少し飛べる範囲まで回避はできる

リードン「何とかあったが、あの魔法だけは食らいたくねえな」

グレイブは地属性の術だ、だが同時に岩でもあるため、リードンが食らえば確実に負けてしまうだろう

リードン「なら一気に攻めたほうがいいな…」

リードンは迫る

デイン「来るヨ！なら紋章を発動するヨ！！」

デインの左手から紋章のようなものが光だした…デインは再び詠唱する

デイン「グラウンドダッシャー！！」

地面からすごいエネルギーが出てきて、そこから再び岩が地面から出てくる

リードン「これはふせげねえ！？なら！！」

リードンの拳から炎が出てくる

リードン「烈火連拳！！」

リードンは連続で岩を殴りつけて砕いた…これによって術を防いだ

デイン「（なっ！？砕いたヨ！？）」

これにはデインは驚く

リードン「ウオラア！！雷撃<sup>らいげき</sup>烈火拳<sup>れつか</sup>！！」

リードンは右拳の電気、左拳に炎をまとってデインを殴った

デイン「ぐわっ！？がっ！？」

デインはパンチをモロに食らって目を回して倒れた

シルム「デイン戦闘不能だよ」

かろうじてリードンは勝てた

リードン「（はあ…はあ…なんとか勝てたが…次で最後だがもつてくれよ俺の体力！）」

すでにリードンの体力もそろそろ限界に近付いている。次のバトルで決まるのか…その相手は

シエルマル「俺のようですね」

なんとシエルマルだ

リードン「（最後はシエルマルかよ…相性最悪だな（汗））」

相手はシエルマル…水タイプが弱点のリードンにはかなり不利な状況だ

リードン「（だが雷パンチは覚えている…やるしかねえ!）」

リードンはなんとか気合を入れる

シルム「これで最後だよ、それじゃあ！始め!」

バトルが始まった

リードン「火炎放射!」

まずリードンは火炎放射を繰り出した

シエルマル「シエルブレード!」

シエルマルは両腰についている二枚のホタチで炎を斬った

リードン「何っ!?!」

炎は斬られて消されてしまった

シエルマル「続けていきます!水の波動!」

シエルマルはそこから水の波動を放った

リードン「くそっ!」

リードンは水の波動を避けた

リードン「(ここは接近戦でいくしかねえ!)」

リードンはシエルマルに迫る

シエルマル「(接近戦ですか…なら俺も!)(シエルブレード!」

リードン「きりさく!」

シエルブレードときりさくがぶつかる

リードン「ドラゴンクロー!」

リードンはドラゴンクローを繰り返す

シエルマル「シエルターフェンス!」

シエルマルは二枚のホタチを使ってドラゴンクローを防ぐ

リードン「くっ!」

リードンの技ははじき返された

シエルマル「今だ!水翔双破斬!」

シエルマルのホタチが水に包まれて剣を生成してリードンを斬りつ

けた

リードン「ガッ!?!」

リードンは食らってしまい吹っ飛ばされ、地面に倒れたが…

リードン「はあ…はあ…」

体はすでにボロボロでもまだ立っていた、だがシエルマルはそこから攻撃を繰り出す

シエルマル「双牙水斬そじが!!」

二枚のホタチで一気に決めようとする

リードン「(負けねえ!負けねえんだ!!)」

するとリードンから赤いオーラがまとう、リザードンの特性もつかが発動したのだ

リードン「行くぜ!!爆炎乱荒拳ばくえんらんこうけん!!」

リードンは拳で炎のパンチをまるで暴れるように連続で繰り出した。それぞれの技がぶつかって爆発が起きた

煙が収まると…二人は倒れていた

シルム「両者戦闘不能!」

この勝負は引き分けに終わった

リードン「最後は引き分けで終わっちまったか…」

リードンは倒れたまま言う

シエルマル「でも俺はいいバトルだったのでよかったですし…」

シエルマルもボロボロになりながら言う

ドルク「お疲れさん、とりあえず今日はここまでにするぞ」

リードン「ああ」

シエルマル「はい」

こうして連続バトルが終わった

それぞれの課題を残して…彼等は成長する

依頼40 リードン 漢の意地！（後書き）

リードン「結構いいバトルになつて満足だぜ」

シエルマル「俺もまだまだがんばらないと」

その意気だよ…さて！ここでお知らせというかアンケートです。

ドルク「なんだ？」

遠征の事ですが…ここでアンケートをとります、次のうちのこの6つです。

- 1・剣士ミゲールさん案の宝島
- 2・サファイアさん案の聖なる森と聖なる神殿
- 3・ゼロの島のどれか
- 4・テイルズオブファンタジアの世界
- 5・テイルズオブグレイセスの世界
- 6・レディアントマイソロジー3の世界ルミナシア

以上の6つから1つのどれかにします。

ドルク「すごいな、でもファンタジアとかグレイセスとかレディマ3の世界とかどういう風にするんだ？」

テイルズ系統はたぶんミゲールさん達は人間に一時戻る感じとドルク達はそのままというのもありもしくはドルクとシルムが擬人化するというような感じもあったりも

シルム「遠征と修行だね」

まあそうなるかな…でももちろんお宝とかもちゃんとなんとかしておくから

ドルク「楽しみだな」

依頼 4 1 ゼロの島北部での修行と遠征場所（前書き）

ドルク「ゼロの島か」

今回はリードン君と単純ワニの修行です

クロー「よし！やってやるぞー！ー！」

はたしてどうかな（黒）

クロー「何っ！？」

## 依頼 4 1 ゼロの島北部での修行と遠征場所

それから1週間後

リードン「はっ！オラァ！！」

リードンは朝から汗をかきながらサンドバックでパンチを繰り返している。ものすごい熱気で連続で殴る

リードン「はあ…はあ…だいぶ体力ついたな」

連続バトル以来さらに彼は強くなっていた、腕の筋肉は逞しくなり、体も体力がついてきたようで腹は変わらないが体力もついてきた

ドルク「おっ！がんばってるじゃねえか」

そこにドルクが来た

リードン「ああ、ありがとな…あいつに追いつけそうかな？」

ドルク「いや、ラッシュだともっと特訓してると思っぜ？あいつならきつとな」

ドルクはそう言う

リードン「そうかもな…あいつも仲間がいたからそうかもしれないな…前の俺は熱中していたから俺もまだまだだったんだ」

リードンは最初の単純である自分を思い出す

ドルク「まあでもお前もよくがんばってきた…それに依頼もこなしてきているしな…これからもがんばれよ」

リードン「ありがとな／＼／＼」

リードンは少し照れる

ドルク「そんじゃあ戻ろうぜ、腹が減っては戦はできぬというしな」

リードン「そうだな！それじゃあ行くか！」

二人は仲良くギルドの中へ

……

ドルク「がつがつ！」

リードン「がつがつ！」

シエルマル「がつがつ！」

ドルク・リードン・シエルマルは朝食をがつがつと食っている

シルム「シエルマル君もよく食べるね」

シエルマル「なんだか慣れてきましたよ、結構動いたから」

シエルマルも地獄特訓によって強くはなっていた

クラウド「そりゃあ、俺の地獄特訓だからな」

考えた本人が言う

ミゲール「（あゝ逆に俺は嫌だ）（泣）（）」

ミゲールは地獄特訓が逆にトラウマになってきた

リードン「おかわりくれ！」

クラウド「おっ！リードンも結構食うな」

リードン「まあな！今のうちにスタミナつけねえとな」

おかわりがきてリードンはそのままがつつりと食う

シルム「あまり食べ過ぎて太らないようにね」

リードン「おう！」

そうシルムに忠告されてもガツガツと食い物を食う

……

ドルク「さて、今日の依頼はどうっすかな」

ドルクは依頼を選んでいる

シエルマル「それじゃあ俺はソウさんとクレスさんとで」

シルム「いつてらっしやい」

クレス「シエルマル君をちゃんと鍛えるよ、後でシルムの稽古つけるからね」

シルム「はい！」

シエルマル達は依頼場所へと出発した

ドルク「これにするか」

ドルクが選んだ依頼は

リードン「ゼロの島北部：俺にはやべえな（汗）」

ゼロの島はそれぞれ条件が異なるダンジョンでもある、かなり熟練の探検隊でないとできないのだ北部はある意味簡単だが敵も強い

ドルク「リードン、お前の修行にはちょうどいいから行くぜ」

リードン「しやあねえな」

リードンが同行

ドルク「後はあの単純ワニと一緒にの方がいいな、あいつには色々教えておかないといけないからな」

シルム「じゃあクローを呼んでくるね」

シルムはクローの元へ

……

シルム「おまたせ」

クロー「ワシを頼むとは、そこのお宝を手に入れてやる！」

クローは意気込むが

ドルク「あゝ悪いが今回は依頼だ、お宝探しではねえぜ？」

クロー「なんじゃと!？」

クローはショックを受ける

シルム「今回の依頼は救出、助けが来ていてね」

どうやら今回の依頼はダンジョンで倒れた依頼主を探すようだ、早速ゼロの島北部へと向かった

……

リードン「くっ！かなりきつい！」

リードンは苦戦していた、重りとかをつけているがさらに強いポケモンもいるため重りつけても苦戦してしまう

ドルク「だがそういうのに慣れるのも修行のうちだ」

ドルクはカイリキーに赤い音符の技、イグニクスシャウトで倒した

クロー「ワシだって！！滝登りじゃー！！」

クローはカブトプスに滝登りするが

カブトプス「きりさく！」

きりさくではじき返された

クロー「どわー！！」

クローは吹っ飛ばされた

ドルク「いきなり単純に攻撃するなよったく…エネルギーボール！」

ドルクはエネルギーボールでカブトプスを倒した

……

リードン「はあ…はあ…」

ただいま依頼主がいる目的地についた、ドルクとシルムはあまりダメージを受けていなく、リードンはボロボロだが体力は残っている状態、ただクローだけは

クロー「なんでワシだけこんな目に合わんといかんだ！！（怒）」

何度もやられてミイラ状態になっていた

ドルク「単純に攻めるからだろ（汗）もう少し考えるよ、俺たちはなれているからあまりダメージ受けねえけどな」

リードン「たしかにすごいな、俺もよく見ていてもそれぞれのポケモンが強いから傷もつくしな」

だがリードンも苦戦はしたがなんとかがんばれた

ちなみにクローのせいで復活の種をかなり消耗してしまった

ドルク「復活の種の代金も追加な、今回お前を連れてきたのは俺たちのバトルをよく見るってことだ、それだけは覚えとけ」

クロー「ワシだってやれるんだぞ！」

クローは言うが

ドルク「そうだとしてもな、ただ単純に攻めてはダメだったことをわかってほしい、俺も守りとかそういうの使っただろ？でもお前はただ単純に攻めているから負けるんじゃないのか？」

クロー「うっ！」

クローはそう言われてショックだった

ドルク「まあコツコツと積み重ねが必要だ、慌てていても何も解決はしねえからな」

シルム「クローはパワーあるけどただ闇雲に突き進んではだめなんだ、時に慎重にいかないかね」

ドルクやシルムもクローの事はちゃんと見ているのだ、彼等はベテランの探検隊でもあって親方と副親方なのだから

クロー「(ワシだって！あいつには負けたくもないんじゃない！)」

クローは黙ったままそばを向く

クロー「(ワシは豪快なパワーじゃないとワシらしくない！ならここでワシらしい戦いを考えてやる！！待っておれ！！)」

クローはそう意気込む

……

ドルク「助けに来たぜ」

ドルクは依頼主のポケモンを見つけた、そのポケモンは背中周りがモコモコとした綿のポケモン、なぜかくれポケモンのエルフーンだった

エルフーン「ありがとうございます！」

なんとかこれで依頼は完了した

……

ドルク「ふう、やっぱここでリフレッシュするのは最高だな」

ドルク達は帰ってきた後、パッチールのカフェでくつろいでいた。

復活の種を使用したため、ただの種になっているのでパッチールの  
カフェでドリンクにしてもらった

ドルク「ぶは〜！うめえ〜！」

ドルクはただの種を使ったドリンクを飲んでいる

リードン「うまいな」

シルム「うん！」

リードンとシルムはドリンクで幸せな気分になっているが

クロー「なんじゃこのドリンクは！！なんかまずいぞ！！」

クローのは運悪くはずれだった、ドリンクにはまずいのがあって  
最悪能力が下がる場合があるらしい

パッチール「ごめんなさい（汗）食べ物によってなのです。なので  
責任は受け付けません」

まあ復活の種の効果でただの種にしたのはクローのせいなので

クロー「くそー！！ワシは絶対強くなつてやるー！！」

クローの叫びがパッチールカフェに木霊する

……

ギルド食堂

みんなは席についている。そんな時

シルム「みんな！注目！！」

全員がドルクとシルムに注目する

シルム「今日は発表があるんだ、ドルク」

ドルクが話す

ドルク「発表なんだが…今回の遠征場所が決まったんだ」

ソル「マジ！？どんなところだ！」

ミネラ「パパく何処に遠征に行くの」

アレン「何処何処！」

ノコタロウ「気になりますね」

ソウ「師匠く遠征場所何処になるんですか？」

アトリ「何処になるのか楽しみだな！」

みんな何処に行くのかワクワクしている

ドルク「落ち着け、今回の遠征場所だが…別の世界に宝島というのがあってな、そこにはすごいお宝が眠っているというんだ、これはミゲールからなんだがここにしようと思っってな、まあまだ遠征メン

バーの発表まで時間がある、それまでみんながんばってくれ」

ジユク「こりゃ楽しみだな」

レビィ「ジユクさんと一緒なら」

デイシア「どうなるかだな」

パルサ「絶対遠征メンバーに選ばれてやる！」

グラデル「がんばります！」

みんなが選ばれたという気持ちで楽しみにしている

ドルク「それじゃあ食事とするぞ…後明日ある探検隊が来る」

シエルマル「探検隊？一体何処の方ですか？」

シエルマルはドルクに質問する

ドルク「まあ俺たちとも知り合ってる奴等だ、かなりの腕前だぜ」

シルム「オイラ達はその探検隊と一緒に探検したことがあるんだ」

クラウド「どんな奴等なんだろう？」

クレス「気になるな」

ミゲール「なんか楽しみだな」

一体どんな探検家が来るのか…

それはまた次回

依頼 4 1 ゼロの島北部での修行と遠征場所（後書き）

クロー「ワシがなんでこんな目に!?!」

リードン「きつかったな」

ドルク「なぜかクローの場合運も影響しているな」

シルム「たしかにね（汗）」

今回はあの探検隊の登場です。

ドルク「あいつらだな」

そう、あの3人組です。

依頼42 再びチャームズ参上！（前書き）

ドルク「おっ！このタイトルからして！」

はい！その探検隊とは！では依頼42

シルム「ガンドコ行こう！」

依頼42 再びチャームズ参上!

次の朝

今日はいつもと違うようだった

朝食が終わった後

ドルク「俺とシルムは買い出しに行つて来るぜ」

シルム「こっちは準備とかしてね」

そう言い、二人はギルドを出た

ジユク「相当すごい探検隊だろうな」

レヴィ「どんな人なのかしら？」

ジユクとレヴィは気になっていた、もちろん他にもだ

リードン「シエルマルはわかるか？」

シエルマル「いや、俺もさっぱりです」

シエルマルも知らないらしい

クレス「一体誰なんだろう?」

デイン「たしかに気になるヨ」

クレスとデインは首をかしげる

アトリ「なあソウは誰が来るのかわかるか？」

アトリはソウに質問する

ソウ「そうですね…たぶんあの人達ですよ、プクリン親方とは知り合いの方なんです」

ミゲール「あのプクリンのギルドの親方のか？」

ミゲールはそう言い、ソウは頷いた

シムーン「私もお会いしたことがない方達です」

シムーンも会ったことがない人物だ、つまり知り合っているのはドルク・シルム・ソウあたりだろう、そんな時

ビービー！

警報がなり、そこからギルドのドアが開く、入ってきたのは…

……

ドルク「よしっ！これでOKだな」

ドルクとシルムは買い出しを終えたところだった

カクレオン（兄）「今日は何かあるんですか？」

カクレオン（弟）「よほどのことでも？」

カクレオン兄弟はドルクとシルムに質問する

ドルク「ああ、あの三人組がな」

シルム「オイラ達と一緒に探検したことがある…あの三人組だよ」

カクレオン（兄）「もしかして？」

ドルク「ああ、それじゃあ俺達は行くぜ」

ドルクとシルムは会計を済ませてギルドへと行く

カクレオン（兄）「あのマスターランクの探検隊が来るとは…」

……

## ギルド食堂

シムーン「お客様ね、ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンがギルドに入った者達を迎える

出てきたのは3匹のポケモン、右側のポケモンは細い腕と体に頭に丸いピンクの突起のポケモン、左側のポケモンは白いスカートで緑色の短い髪で左目を隠していて、みぞおちには赤い突起がついているポケモン、そして真ん中のポケモンは兎のようで長い耳に腕にモ

コモコした白い綿がついているポケモンだ

????? 「あたい達はここに用があつてきたんだ」

????? 「この親方と副親方はいらっしやいますか?」

右側と左側にいるポケモンがそう言う

シムーン「今は出かけておりました、すぐに帰って来ると思っています」

シムーンが丁寧に説明した

????? 「あらそうなの、久しぶりにブレイブに会いに来たのに二人ともいないなんて」

シムーン「あの、あなた方は?」

シムーンが3匹に質問する

????? 「そういえばあたい達の紹介がまだだったね、あたいはチャールム」

右側にいるポケモン、チャールムが挨拶する。

????? 「私はサーナイトと申します」

左側にいるポケモン、サーナイトが挨拶する。

????? 「そして私はミニロップよ」

真ん中にいるポケモン、ミニロップが挨拶する

ミニロップ「私達は探検隊チャームズよ」

シムーン「えっ！？あなた方がですか！？」

シムーンが驚く

チャーレム「そう！あたい達久しぶりにトレジャータウンに来て今回ドルク達に会いに来たんだよ！」

サーナイト「5年ぶりですし、それにギルドで活躍していると聞きまして来ました」

どうやら来る探検隊というのはチャームズの事なのだ

シムーン「チャームズ…たしかプクリンのギルドの親方であるプクリンの親友であり、マスターランクのトレジャーハンター…まさかうちのギルドに来るなんて」

シムーンはまだ驚いている

ミニロップ「まあ無理ないわね、それじゃあ上がらせてもらっわ」

シムーン「それじゃあご案内します」

シムーンがチャームズを連れて行く

……

ギルド食堂

シムーン「こちらです」

ミニロップ「すごい！ ブレイブも立派になったのね」

チャームズの三人はギルド『ブレイブ』の広さなどを見て感激する

そこに

シエルマル「すごい！あの有名な探検隊であるチャームズに会えるなんて！」

ソウ「お久しぶりです。チャームズのみなさん」

そこにシエルマルとソウが来た

ミニロップ「あら〜お久しぶり〜ソウ君だったよね？」

ソウ「はい！」

サーナイト「変わらずがんばっているんですね」

シエルマル「まさかソウさんがチャームズと知り合っていたなんて…親方と副親方すごいな〜！」

シエルマルはそう思っている。

他のメンバーは

ミゲール「あのポケモン達が今日来た探検隊か？」

クレス「どうやらそうみたいだよ父さん」

デイン「なんかきれいな人達だよ」

アトリ「ドルクもすげえ奴等と仲いいんだな」

ファンタジアミゲールファミリーはそう言う

ソル「あいつもすごいな」

クラウド「たしか有名な探検隊だったな、ドルクって顔が広いんだな」

ルカリオ二人はドルクの凄さを思い知らされた

リードン「さすが親方ってとこだな（汗）」

父（魔王）「すごいな」

ピッケル「そうだね」

リードンはドルクの凄さに唖然とし、父（魔王）はあまり驚いていない、ピッケルも父の言葉を受け流す

アレン「すごい」

雷吉「さすがじゃけん」

炎丸「ドルク様もシルム様もチャームズという探検隊とは会っていたんですね」

カガリ「ブレイブの凄さには驚いたな（汗）」

シャドウの二人と召喚ポケモン二人も驚いている様子だ

ノコタロウ「こうしてはおけない！お前達！お客様が見えている！急いで準備をするのだ！」

三人「結局こうなるんかい！！」

ノコタロウがクロー達に命令して、三人はツツコミをした

そこへ

ドルク「帰ってきたぜ！」

シルム「ただいま！」

ドルクとシルムが帰ってきた

ミニロツプ「えっ！？あの二人が！？」

チャーレム「驚いた！？まさか二人して進化していたなんて！？」

サーナイト「私も驚きでした…」

チャームズは久しぶりに会った二人に驚いている

ドルク「おっ！久しぶりだな」

シルム「お久しぶりです。チャームズのみなさん」

ドルクとシルムが頭を下げる

ミニロップ「うっそ〜！ドルクにシルムも久しぶり〜 あんた達す  
ごいじゃな〜い！すんごくかつこよくなってるし〜！」

ミニロップは二人の姿にはしゃぐ

ドルク「元気だったか？」

ミニロップ「ええ！早速だけとお腹空いてきちゃったな〜」

シルム「ならここのメンバーで料理とか作りますよ」

ミニロップ「楽しみ〜」

こうしてチャームズがギルドに来た

ジユク「聞いたことがあったな、チャームズは」

レヴィ「す〜いわ〜！」

ゼラス「さすがだな（汗）」

未来組は唾然としていた

依頼42 再びチャームズ参上！（後書き）

ミミロップ「みんな〜お久しぶり〜 希望の空と絆以来ね」

サーナイト「私達が来るなんて」

チャーレム「作者もやるね〜」

出さないとなんかしっくりこないからね〜

ドルク「嬉しいぜ」

シルム「次回はどうなるんだろう?？」

依頼43 来た理由(前書き)

さて、前回チャームズが登場しました、はたしてここに来た目的は！

ミニロップ「それじゃあ依頼43」

チャームズ「華麗に行くわ！」



某キャラのセリフでミゲールは撃沈した

アトリはミゲールを引きずって退場させた

リードン「すごい探検隊とも知り合いだったんだな」

ノコタロウ「さすがはギルドの親方と副親方…お前達も見習え」

クロー・シード・シノ『作者テメエ!!! (怒)』

5年前にドルクとシルムはプクリンのギルドを卒業してから会ったのだ、今回もどうなるのか

ドルク「さて、本題だが…今回の遠征は宝島なんだが、同行などしてくれるか?」

ミミロップ「もちろんよ　あなた達には借りができているからOKよ」

どうやら今回チャームズが来た理由は遠征での同行などであった、理由はチャームズぐらいの探検隊がいたほうが何かと得策なのだ、それにドルクとシルムとも探検したことがあるのでベテランの探検隊は必要なのだ

ドルク「まあ宝とかは山分けという条件だけだな、引き受けるならありがたいぜ」

ミミロップ「まあ山分けも悪くはないわ　プクリンとも知り合った仲ですし喜んで引き受けるわ」

チャーレム「久しぶりに一緒に探検ができるなんてね」

サーナイト「よろしくお願いします」

こうしてチャームズが遠征に協力してくれた

……

ギルド食堂では昼食の時間となった、みんなが集まって食事を取ろうとした時

シルム「みんな、食事を取る前に今日からチャームズがこのギルドでしばらくお世話になり、さらに今回のギルド遠征にも同行してくれるよ」

ミミロップ「みんなよろしくね」

みんな拍手をした

クレス「よろしくチャームズの方々」

クラウド「色々世話になるよ」

レイ「よろしくお願いします」

ミゲール「サーナイトさん！あなたと一緒に俺はどこまで」  
「ブレイブプラスト！！（黒激怒）シビレビレ！！」

ミゲールはまたもアトリのさらにバージョンアップした膝蹴りを食らって気絶した

クレス「すみませんチャームズの方々（汗）」

クレスはチャームズに謝った

サーナイト「いえいえ（汗）」

ミミロップ「私達は別に大丈夫よ（汗）」

チャーレム「まあアトリって坊やも中々いいんだね」

クロー「（あんな探検隊にワシが負けてたまるか!!）」

クローはチャームズに嫉妬する、負けたくないという意味で

リードン「（そっいえばあいつらも元気にしてるかな）」

リードンは一緒に旅した仲間の事を思い出していた。

チャームズを加えたブレイブ、遠征もどうなるのか…

依頼43 来た理由（後書き）

今回の遠征：がんばって書こうと

ドルク「まあ色々個性ある奴等ばかりだけど」

シルム「みんな優しいしね」

まあみんないいからね

依頼44 クレスの旅仲間達（前書き）

はい！さらに仲間が増えます

ドルク「クレスの仲間か…」

シルム「どんな人達なんだろう」

そんな依頼44

ドルク「行くぜ」

## 依頼44 クレスの旅仲間達

次の朝

いつものランニングが始まった

クレス「結構いいトレーニングだね」

クレスは笑顔で走っている。ガバイドは元は目つきが悪いのだが、  
が彼は目つきが悪くなく、笑顔でさわやかであった

リードン「クレスもきついトレーニングなのにすごいな」

リードンはクレスが嫌な表情を一つも見せないことに驚く

クレス「僕は父さんの道場の師範でもあるし…僕も仲間がいたんだ」

リードン「仲間？俺も仲間がいるけどな」

クレス「へえ…どんなの？」

クレスはリードンの仲間がどんなのか質問した

リードン「そうだな、種族がスイクンとギラティナとエネコロロなんだ…まあ俺もジムとか回っているのだがなぜか勝てなくてな…それにあいつと戦っても勝てなくて」

クレス「へえ…まあラッシュも強いからね…僕も戦ったんだ、彼に」

強いライバルの事も勝てないからここにいる…もちろん戦った者は一人だけではない

リードン「クレスもラッシュと戦ったのか？」

リードンは気になってクレスに質問する

クレス「まあ負けちゃったけどすごかったよ」

リードン「そうか…あいつに勝てるようにもつとがんばらないとな…なあクレスの仲間ってどんな奴等なんだ？」

今度はクレスの仲間についてリードンは質問する。

クレス「僕の仲間はね…優しい人とか個性ある仲間だったよ…僕の親友とかもね」

リードン「一度会ってみたいもんだな」

クレスは仲間との思いもある…みんな旅した仲間なのだから

クレス「みんな元気かな…」

クレスは空を見て彼の仲間の事を思っていた

ドルク「結構なれてきたな、ってか何話していたんだ？」

そこにドルクが入ってきた

リードン「ちょうど仲間の話をしていたんだ」

リードンが説明する

ドルク「へえ、たしかクレスの世界の仲間ってそれぞれ時代が違うんだろ？」

クレス「うん、僕の時代からの仲間と過去の世界の仲間と未来の世界の仲間なんだ」

リードン「時間を飛び越えてか、すごいなクレスは」

クレスの世界はそれぞれの時代から仲間がいるのだ。時空を超えての出会いなのだから

……

その頃ここは交差点。プクリンのギルド、ギルド『ブレイブ』、海岸とダンジョンに行く道。そこに3匹のポケモンがいた

一匹はつぶらな両瞳に両耳にカールした白いものがついていてさらに白い帽子をかぶっていて杖を持っているポケモン、一匹は赤い鬚たてがみに目つきが鋭く、体毛が黒で弓を持っているポケモン、もう一匹は両腕に黄色のヒラヒラとしたものに黒い耳にほっぺが黄色の丸につぶらな瞳でモモンガのようでホウキを持っているポケモンだ

それぞれヒヤリングポケモンのタブンネ、ばけぎつねポケモンのゾロアーク、モモンガポケモンのエモンガというポケモンだ

タブンネ「ここは一体何処なんでしょう……」

タブンネは清らかな声で言う

ゾロアーク「それにしてもここは俺達の世界とは違うもんだなあ」

ゾロアークは少しさわやかな声で言う

エモンガ「でもあたし達、なんでこんな姿になってるの？ってかここまで来たからどうしよう…」

エモンガはおてんばな声でどうするか困っている

タブンネ「まあ…アーチエさんが空を飛んでいなかったら助かりませんでしたし」

エモンガ「だけどこの姿になってあたし自身も空飛べるけどほつきとかもなんかしっくりこないのよね」

アーチエと呼ばれたエモンガは自分の持つてるホウキに不満をもっていた

ゾロアーク「まあ、別に俺達は無事でよかったけどな」

ゾロアークのこの言葉にアーチエと呼ばれたエモンガが反論する

アーチエ「何よ！大体アンタが変な穴を見つけたからでしょ！（怒）」

アーチエの言葉にゾロアークも反論する

ゾロアーク「なんだと！大体お前もわ〜い　と自分勝手に入るから  
だろ！（怒）」

アーチェ「なんですって！この変態！（怒）」

ゾロアーク「言ったな〜！このおてんば娘！（怒）」

二人は喧嘩してしまった

タブンネ「二人とも、喧嘩はやめてください（汗）」

タブンネは困った表情で二人の喧嘩を止める

タブンネ「とりあえずここから何処に行くか決めましょう」

とりあえず何処に行くかを決める三人

アーチェ「でもどっちに行けばいいの？ミント？」

アーチェはミントと呼ばれたタブンネに問う

ミント「そうですね…なら看板にあるギルド『ブレイブ』ってところに行きましょう…なんだかこっちに行った方がいい気がするんです…」

ミントはブレイブの方に行こうと言う

アーチェ「まあたしかにあっちの方がなんかいいかもって感じだけど…でもブクリンのギルドっていうのもあるけどいいの？」

アーチェの疑問にミントは

ミント「たしかにそうですが…でもなんだかこっちに行った方がいいと思って」

そこにゾロアークが

ゾロアーク「まあそうだな…じゃあ行こうぜ」

ゾロアークがギルド『ブレイブ』の方へ

ミント「あっ！待ってください！チェスターさん！」

ミントはチェスターと言うゾロアークを追う

アーチェ「あっ！二人とも待ってよ！」

アーチェも二人の後を追う

……

こちらギルド『ブレイブ』は朝食にはいていた

ノコタロウ「うまいですね…クラウドさんってすごいですね」

クラウド「俺はこれでも料理は得意なんでな」

ノコタロウがクラウドの料理を褒めてクラウドは嬉しくなっていた。

ドルク「まああいつの料理はすげえ〜うめえ〜しなもぐもぐ」

シルム「まあ結構みんなには好評だからね」

リードン「おかわり！」

クロー「ワシもおかわりだ！！」

リードンとクローがおかわりをした

クロー「（ワシだって絶対やってやるぞ！！あんな奴等なんかに負けてたまるか！！）」

クローの目が燃えていた

シード「（クロー様が燃えている（汗））」

シノ「（相当負けたくないんやな（汗））」

仲間である二匹の草ポケ御三家はクローを見て相当なものを感じていた。別の意味で

ミゲール「サーナイトさん！」

ミゲールはサーナイトにナンパしていた

ミゲール「あなたと一緒に食事…」

アトリ「いい加減にしろやくソ親父が！！ブラストV3！！（怒）」

ミゲール「シビレビレー！！」

再びアトリの膝蹴りで鎮圧

クレス「すみませんうちの父がご迷惑を（汗）」

クレスがチャームズの三人に謝った

サーナイト「い…いいですよ（汗）」

チャーレム「後でしごいた方がいいかもね」

チャーレムは膝蹴りの準備をする

ミミロップ「それにしてもみんないいわね」

シエルマル「まあ俺もなれてきましたし」

ソウ「みんないいですよ」

と、ソウは言う

デイン「ボゲールまたかヨ（汗）」

デインは呆れた表情で気絶したミゲールを食事しながら見る

アレン「それにしても楽しみだな」

カガリ「そうだな」

この二人は楽しみでウキウキだった

クレス「（そういえば…カガリさんってなんだかクラスさんの声と似ているな…）」

クレスはカガリを見てある一人の仲間と同じように思っていた。

父（魔王）「さて、私は修行といくか 行くぞ！ピツケル！」

ピツケル「ちょっ！？まだ食事中だっ！？」

ピツケルは朝食をとりながら父（魔王）の修行へと強制的に引きずり込まれた

ソル「さて、次は何処いこうかな」（黒）

ギルガメス「そうだな」

ソルとギルガメスは今日の依頼についてを決めている。

ミネラ「今日はどうしようかな」

レビィ「決まらないわね」

ジユク「そうだな…」

ゼラス「私は一人で行く…二人はソルとギルガメスの方がいい」

こちらも依頼をどうするか決めている。ミネラは楽しそうに食事しているが

クレス「（みんな来てくれればいいな）」

クレスは食事風景を見て、一緒に旅した仲間が来ればいいと思って  
いた。そんな時

ビービー！！

警告音なる

ドルク「こんな時間に来るとは…一体誰なんだ？」

シムーン「とりあえず行つてきます」

シムーンがギルドの玄関へ

……

ギルドの玄関には3匹のポケモン…先程交差点にいたポケモン達だ

玄関からシムーンが出てきた

シムーン「どちらさまですか？」

シムーンが出てきた

ミント「あの…私達実は迷いこんでしまって…それでここに来たの  
ですが…」

ミントが説明する

シムーン「それじゃあ中に入ってください、少しこちらまでしばらく話とかしたほうがいいですし」

シムト達は頷いてシムーンについていく

……

シムーン「親方！」

シムーンがシムト達を連れてきた

ドルク「ん？そいつらは？」

ドルクが3匹を視線を向く

シムーン「実は迷ってしまった方達みたいですよ」

シムーンが簡単に説明する

ドルク「そうか…まず名前を聞きたいんですがいいか？」

ドルクが3匹に名前を聞く

シムト「はい…私はシムトと申します」

するとクレスが席を立った

クレス「えっ！？…ミ、シムト！？」

クレスはシムトの元へ向かう

ミント「えっ!?!」

ミントは驚く

クレス「僕だよ!クレスだよ!」

クレスがそう答える

ミント「えっ!?!ク、クレスさん!?!」

チエスター「まさかお前!?!」

アーチエ「えっ!?!クレスなの!?!」

他の二人も驚いていた

ドルク「(これは思わぬ再会ってとこだな)」

クレス「まさかみんなポケモンの姿になって来るなんて」

ミント「ポケモン?私達の姿がですか?」

どうやらミント達は自分達の姿がポケモンだとわからないようだ、  
そりゃそうだろう…彼女達は这个世界に来たばかりだから

……

とりあえずミント達はここまでの事をドルク達に説明した。

ドルク「まさかクレスの旅した仲間だったんだな」

シルム「へえ、クレスさんの知り合いでもあるんだ」

ドルクとシルムも驚いている様子だ

クレス「うん、まさかこんなところで出会うなんて思ってなかったよ…でもミント達はこれからどうするの？」

そう、これからどうするかだ

ドルク「でもクレスの仲間だから俺達のところにいた方がいいと思っうぜ？それにクレスの仲間だからなおさらだ…いいか？」

ドルクはミント達に聞く

ミント「そうですね…クレスさんにミゲールさんにデインさんとアトリ君もいますからここにいた方がいいですし」

チエスター「まあそうだな…それにクレス達がいなかったから心配していたんだ」

アーチエ「まあでも面白そうだし」

3人は承諾してくれたようだ

ドルク「じゃあよろしくな…そのかわり働いてもらっうがいいか？」

その質問に三人は答える

ミント「私の法術なら傷を癒すことができますから回復とかはお願  
いします」

ミントは法術と呼ばれる治癒術をもっており、補助系統も使えるのだ

チェスター「俺は弓で百発百中できとめてやるぜ」

チェスターは弓を使うようで、遠距離から攻撃はできるようだ

アーチェ「あたしは魔力あるからいいもの　まあよろしくね〜ドル  
ク〜」

アーチェは元人間だがハーフエルフという種族だ、だが今はポケモ  
ンの姿だが、魔術は使えるのだ

こうしてクレスの仲間達がギルド『ブレイブ』に入った

#### 依頼44 クレスの旅仲間達（後書き）

今回ファンタジアの三人のキャラをポケモン化しました、ミゲールさんと話してこうしたようなポケモンに

ミント「でもクレスさん達に会ってよかったです……」

クレス「僕も嬉しいよ」

まあせっかくクレスがいることなのでファンタジアの仲間はずせませんし

ドルク「そうだな」

依頼45 それぞれの探検（前書き）

今回は短いです

ミント「今回はなんですか？」

とりあえずは三人が来たから依頼をやってもらおうとね

チエスター「まあたしかにな」

アーチエ「どうなの？」

まあまあ待って待て、とりあえず依頼45

ミント「始まります」

## 依頼45 それぞれの探検

クレスの仲間の三人を仲間に加えたブレイブ、とりあえずドルクやクレスとかがポケモンについての事をミント達に説明して納得させた。そりゃあ別の世界に来てポケモンに驚くだろう…なので説明をしてからミント達は食事をして…

ドルク「さて今回依頼だが…クレス、今回はミントと俺とシルムで依頼をしていいか？」

ドルクの言うことにクレスは

クレス「それは構わないけど？大丈夫かい？」

クレスは心配するが

シルム「まあ少しなれるのにもちょうどいいですし、それに法術とというのもあるから傷とかの回復もできるから一緒に同行して仕事の事を見て覚えたほうがいいですし」

というわけでドルク・シルム・クレス・ミントはダンジョンへ

ミゲール「じゃあ俺はサーナイトさんと…」

アトリ「べるぜバブラスト！！（怒）」

アーチエ「インディグネーション！！」



チエスター「あ、ああ（なんかすごい奴等だな（汗）しかもルカリオのソルだったか？なんかすごく黒いオーラを感じるぜ（汗）」

チエスターは異様にソルの何かを感じていた。彼の狩人という本能からなのだろうか…

アーチエ「とりあえずチエスターは足引つ張らないでよね」

アーチエがニマニマとする

チエスター「誰が足引つ張るかって！」

怒ったような口調でチエスターは言う、4人は別のダンジョン…依頼を受け取って出発した。

ノコタロウ「さてお前達は修行だ、特にクローはクラウドさんの特別特訓を受けてこい！」

クロー「ちょっ！？ワシ死ぬ！？」

クローは嫌々言うが

ノコタロウ「7つの秘宝を取られたくないのか？」

クロー「やってやるぞー！！」

結局やることになってしまった

シード・シノ「（クロー様（汗）単純すぎですよ（汗）」

そんなクローに呆れる子分の二人

そんな三人の初依頼、果たして！

依頼45 それぞれの探検（後書き）

ミント「私の法術が役に立ててくれればいいですが…」

クレス「大丈夫だよミント、僕がついてるし…それにドルクやシルムもいるから」

安心してミント

ミント「はい…」

次回はドルク達視点から行きます

依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者(前書き)

さて！まずはドルクルートです

ドルク「俺のか」

そしてなんとそこから新しいメンバーができるかもです

クレス「気になるね」

シルム「それじゃあ依頼46」

ミント「よろしくお願いします」

## 依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者

それぞれ三人は依頼を受けることになった

ドルク・シルム・クレス・ミントは神秘の森にいた

ドルク「今日の依頼はお尋ね者だ、しかもトレジャーハンターなのに犯罪者というか盗みとかをやる奴だ」

クレス「それで？そのお尋ね者の種族は？」

クレスが質問する

ドルク「ああ、どうやら ジュカインのようなんだ」

ミント「なんだか怖いです…」

ミントは不安がるが

クレス「大丈夫、僕やドルクやシルムが守ってあげるから」

シルム「オイラ達は強いからちゃんと守るよ」

ミント「ありがとうございます」

この四人だといいい感じのようだ

……

ドルク「そういえばミントは攻撃術ないよつだがどうするんだ？」

ドルクは攻撃技のないミントに質問する

ミント「私は法術を使うので攻撃術とかはないんですが…ほぼ杖で叩くようですね」

シルム「それしかないけど、でも補助や回復はオイラ達にとってはいいと思うし」

クレス「うん、だからサポートはミントとかに任せればいいよ、アーチェは魔術使うし、チェスターは弓でしとめてくれるんだ」

クレスはそれぞれの仲間の特徴を言う

ドルク「なるほどな…だけど相手を状態異常にする術はあるんだろ？」

ミント「はい、ピコハンとかピコピコハンマーなら」

補助の中では相手の動きを封じたりの術もある

すると

ドルク「止まれ」

ドルク達が止まる

ドルク「エナジーバスター!!!」

ドルクがエナジーバスターを葉が多いところに放つ、すると

ガサツ！

素早く黒い影が一瞬で移動したのが見えた

????? 「あら、さすがブレイブね、あたしのことを見つけるなんて」

そこにいたのは一匹のポケモン…ジユカインだった

ドルク「伊達に探検隊やってねえよ、さすがにやるなくお尋ね者ジユティア」

ジユティア「あら、あたしの名前まで…でもあたしは色々あるのでじゃあね」

ジユティアは去るが

シルム「シルムシュート！」

シルムがシルムシュートを放つ、ジユティアはそれを軽く避けた

ジユティア「逃がす気ないのね…あたしも事情があるの…ならいかせてもらおうわ！」

ジユティアがリーフブレードとさらに短剣を持って構える

ドルク「来るぞ！」

シュン！

ジュティアは素早く移動、ターゲットは

シルム「うわっ！」

シルムだ、だが咄嗟に剣で防いだためなんとかあった

ドルク「エナジーボール！」

ドルクはエナジーボールを当てるが

ジュティア「そんな攻撃当たらないわ！」

ジュティアはそれを軽々と避けた

ジュティア「ならこれならどうかしら？アイストルネード！」

ドルク「何っ!?!」

クレス「魔術を使えるなんて!?!」

ドルク達はジュティアが魔術を使うことに驚いた、アイストルネードがドルクを襲う

ドルク「くっ！ロックフェンス！」

ドルクはロックフェンスでアイストルネードを防いだ、しかしロックフェンスは凍って砕けてしまった

ジュティア「隙を与えない！タイダルウェイブ！」

さらに大洪水を発生させた

シルム「うわっ！」

ドルク「くっ！」

クレス「うわっ！」

三人は大洪水で流されてダメージを受けてしまった。特にシルムは水属性に弱いたため大ダメージだ

シルム「やばい…オイラかなりダメージを受けちゃった」

シルムは体力が残されていない、炎タイプだがもうかも発動はしているはずだ

ドルク「シルムは休んでいる！ミント！シルムを治療してくれ！」

ミント「わかりました！」

ミントはシルムの元へ

クレス「魔術を使えるなんて…これはなんとかしないと」

ドルク「とりあえずやるぞ！」

ドルクとクレスが迫る

ジュティア「あたしに勝てると思わないで！ブリザード！」

今度は吹雪がドルクとクレスを襲う

ドルク「エナジールバスター！」

ドルクがエナジールバスターで押し流そうとする

ブリザードとエナジールバスターが押せ押せと一歩も引けない

クレス「隙ができた！秋沙雨！」

クレスが連続の突きをジュティアに繰り返すが

ジュティア「そんなのお見通しよ！」

クレス「なっ!?!」

ジュティアは秋沙雨を避ける

クレス「くっ！なんてスピードなんだ!?!」

ドルク「これじゃあうまく攻撃があたりねえ……」

もはやピンチのブレイブ

……

ミント「ヒール！」

ミントは法術であるヒールを唱えた、シルムの体に光が包まれていっておさまった

シルム「ありがとうございます、助かります」

シルムはミントにお礼を言う

ミント「いいえ、お役に立ててよかったです」

シルム「でもあの素早さじゃうまく攻撃ができないよ」

シルムは戦っているドルクとクレスを見る

ミント「なら方法があります、ちょっと耳を貸していただけますか？」

シルム「わかりました」

ミントがシルムに方法を使った

シルム「…そんなことができるんですか!？」

シルムは驚いている

ミント「任せてください、こちらの方をお願いしますシルムさん」

シルム「わかりました、それじゃあ後は任せます!」

シルムはドルクとクレスの元へ

ミント「私の秘奥義なら……」

ミントが言う秘奥義……それがこの戦いのカギになるだろう

……

ジュティア「そろそろあきらめたら？あたしも色々あるの」

クレス「はあ……はあ……攻撃を避けたりで当たらない……」

ドルク「あきらめるか！俺もそう簡単にいかねえ！」

ドルクが強気で言う

ジュティア「強気で言えるわね？対策とかもとってないのかしら？まあどう来てもあたしを捕まえるのは無理よ、あんたも何か理由あって熱くなってるけど捕まえるものなら捕まえてみなさいよ！」

ジュティアは自身満々に言う

????「それはどうか！スライディングバレット！」

ジュティア「!?!」

ジュティアに炎の弾が数発も飛んできたが、ジュティアはそれをうまく避ける

ジュティア「あら、復活早かったみたいね」

ドルク「シルム！」

ドルクは自分のパートナーの名を呼ぶ

シルム「ごめん遅くなって、パートナーを守るのがオイラの役目だから」

ドルク「ああ、ごめんなお前を守れなくて」

ドルクは落ち込むが

シルム「いや、オイラも魔術には油断したよ…でも大丈夫…オイラも本気でいくから！大地に燃える炎よ！バーンストライク！！」

ジュティアの地面から炎が吹いてきてさらに上斜めから炎の弾が3発降り注ぐ

ジュティア「スプレッド！」

水流を圧縮して上空で炎の弾を打ち消した

ジュティア「なんどやっても無駄よ！」

シルム「それはどうかな…ミントさん！」

ミント「これ以上させません！」

ミントは宙に浮いていた

ミント「時を統べる神の御技今ここに！タイムストップ！」

すると時間が止まり、背景も色が変わってきていた

ジュティア「(なっ!?!?か…体が…動かない…)」

ジュティアは動けなくなっていた。これがミントの方法だ…ミントは法術使いで補助と回復の術が多い…だが攻撃系の術はない…だが彼女には秘奥義があるのだ…彼女の秘奥義は相手を一定時間動きを封じる秘奥義だ…相手の動きを止めれば相手の素早い行動などは封じられたも当然なのだ

ミント「今です!」

シルム「行くよ!」

シルムはジュティアを剣で斬りつけて吹っ飛ばし、そこからバーニストガンを取り出して

シルム「派手に踊れ!」

バーニストガンの乱射でジュティアにダメージを与える

シルム「アンスタンヴァルス!」

その技の名で一発炎の弾を発射した

ジュティア「きゃっ!?!」

ジュティアは飛ばされる

ドルク「おっと!」

ドルクが背中の木をクッションにしてボロボロのジュティアを受け止めた

ジュティア「くっ!」

ジュティアはドルクをにらみつけた

ドルク「おいおいにらむなよ…まあ理由と言つのも話しておかないとな…」

ドルクはジュティアを降ろした

……

ジュティア「………」

ジュティアは捕まって縄で巻かれていた

ドルク「さて、突き出す前に聞きたいことがあるんだが…お前本当は何か理由があつて盗みとかしていたんだろう?」

ジュティア「!?!」

ジュティアは驚いた表情をする

ドルク「やっぱな…お尋ね者の中には何かしらの理由のありなしとかがあるんだよな…それにお前は事情があるとか言っていたしな…話してくれるか?もしかしたら俺達が力になつてもいいけどな…」

するとジュティアが口を開く

ジュティア「あたし…本当は孤児院にいる子供達がいるの…みんな親が誰もいないし…それにあたしも両親ともいないんだ…」

シルム「だから子供達のために盗みを働いたってことだね…」

ジュティアは首を縦にふった

ミント「そうだったんですか…ならこれから罪を償えばいいんです。貧に落ちるポケモンもこの世界にはいるんですね…」

ミントは悲しい表情をする

ジュティア「あなた…優しいんだね…」

ミントの言葉で少し涙が出てきた

ミント「私も母をなくしてしまっているんです。だからその気持ちとか少しわかりますし」

ドルク「俺もだ…俺は元人間で両親の事も記憶にはない…」

ジュティア「そうだったんだ…でもあたしこれからどうしたらいい…」

ジュティアは悲しそうな表情を見せる

ドルク「なら俺のところで働くか？それにお前も強いじゃねえか」

ドルクがジュティアの肩をポンと叩く

ドルク「戦ってわかったぜ…理由があつて負けられなかった…絶対捕まりたくなかったと…ならこっちで面倒見てやるよ…これからがンばればいい…だから無理してこついうことをやるな…トレジャーハンターというのは盗みとかそういう感じのもんじゃないやねえ…だからそいつらを悲しませるな…そうなたら誰も面倒なんて見てくれねえよ…まあ俺達が色々と事情説明とかしてなんとかしてやつからよ」とするとジュティアの目から涙が零れ落ちてきた

ジュティア「う…くすっ…ありがとっ…」

理由はきつと何処かにある…彼女のように大事なものを失うことが…  
…

ドルク「とりあえず縄はずしたがまずは戻って警察とかで色々と手続きとかをしてもらうぜ」

ジュティア「ありがとね…（悪魔亀大魔王と呼ばれた元人間でも…なんかあいつの事…）」

ジュティアはドルクの何かを思っていた。それは後にわかるだろう

シルム「それじゃあ行こう！」

クレス「ああ」

ミント「はい」

ドルク「ああ」

ドルク達は探検隊バッジをかざしてダンジョンを脱出した

依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者（後書き）

シルム「こういう話を書く作者さんも珍しいね」

そうじゃないとんだかね

ドルク「まあ仲間になりそうかもね」

まあそれは次の次辺りぐらいで、次回はチエスター&アーチエの力  
ツプルコンビとソル君とリードン君の四人の探検です。

依頼47 海のリゾートで（前書き）

さて、チェスターとアーチエの視点はどつなのか、依頼47

チェスター「行くぜ！」

## 依頼47 海のリゾートで

一方リードン・ソル・チェスター・アーチェの四人は海のリゾートに来ていた

ソル「ここでグミ探しか…しかもくろいグミらしい」

アーチェ「もしかして？そこらへんに落ちているグミの中にあるってわけ？」

海のリゾートはグミが拾い放題+食べ放題のダンジョンだ

チェスター「ようするに黒色のグミを見つければいいんだろ？」

リードン「ああ、特徴分かれば後はなんとかなるだろうな」

アーチェ「じゃあ探そうよ！」

アーチェがホウキに乗って飛ぶ

チェスター「あ！おい！」

チェスターがアーチェを追いかける

ソル「ホウキで飛ぶなんて魔女かなんかか？」

リードン「空飛んでいいのか(汗)」

ダンジョンでは低空なら大丈夫だが高く飛ばないように

……

アーチエ「え」と

アーチエは色々とグミを次々と拾っていく

チェスター「かなりあるな」こりゃあ…凍牙！」

チェスターは咄嗟に氷を纏った矢を敵ポケモンに放つ、敵ポケモンは当たって動きがぶくなくなった

リードン「獄炎拳！」

リードンはさらに火力が強い炎のパンチでさきほどの敵ポケモンを倒した

アーチエ「天光満る所に我はあり…黄泉の門開く所に汝あり！出よ！神の雷！インディグネーション！！」

すると空から雷が降り注ぎ敵ポケモンを倒していった

ソル「おっ！魔術みたいだな」

アーチエがやったのが魔術だ、これは詠唱とかも必要でもあるのだ…たとえばデインの場合は紋章効果とかで詠唱の時間を短縮とかもできたりでさらに地属性の術が多い、しかしアーチエとかは属性の術が豊富である

アーチエ「これでもあたしだって魔術は使えるわよ、今はポケモンだけどあたしは人間の血とエルフの血であるハーフエルフだから」

クレス達の世界では人間やエルフというのが存在する。エルフは魔術が使えるが人間は魔術は使えない…。しかし人間とエルフの間の血で生まれたハーフエルフはエルフの血を半分もっているため魔術が使えるのだ

リードン「（俺も魔術使えたらな〜）」

リードンは自分が魔術を使えればと思っていた。

ソル「とりあえず行こうぜ」

四人は歩き出した

……

アーチエ「あつた！」

チェスター「これが黒いグミか〜たしかに黒いな（汗）」

アーチエは黒いグミを見つけたようだ、まあエモンガの姿でもホウキにまたがって空を飛んでいるのだから（汗）

リードン「それじゃあ戻ろうぜ」

四人は探検隊バッジを掲げてダンジョンを脱出した

依頼47 海のリゾートで（後書き）

チエスター「なんだかあまり実感わかないな」

依頼は色々あるからこういうのもあるんだよ

アーチエ「へえ、そうなんだ」

次回はドルク達視点に戻ります

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達（前書き）

はい！ドルク視点です。

ドルク「ついにか」

そうだね…まあ悪役でも味方になってくれるのもいるからね…それ  
じゃあ依頼48

ドルク「派手に行くぜ！」

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達

ドルク・シルム・クレス・ミントはギルドに戻らずジュティアの案内で孤児院へと向かっていた

……

ドルク「ここが孤児院か」

孤児院は少しボロボロだがポケモンが住める面では問題はないようだ、すると

?????「あゝ！ジュティアお姉ちゃんだ！」

そこから3匹のポケモンが出てきた、一匹は黒い体毛のキツネのようなポケモン、一匹はバチュルでもう一匹は頭に突起がついていてあごにはキバが平行に生えているポケモン、キツネのポケモンはゾロア、キバが平行に生えているポケモンがキバゴだ

ジュティア「ただいま、みんな大丈夫だった？」

ジュティアが3匹の子供ポケモンに聞く

ゾロア「うん！」

バチュル「いい子に留守番してたよ」

キバゴ「ちゃんといい子にしたよ」

みんな笑顔で言った

ジユティア「よかった…そうだ実は探検隊の人達が来たんだ」

するとみんながドルク達のところに集まる

ゾロア「わあ〜お兄ちゃん達探検隊!」

バチユル「すごい!」

キバゴ「サインちょうだい!」

シルム「わあ〜すごいね／／／／」

ドルク「照れるな／／／／」

ドルクとシルムは照れる

ミント「でもみんな苦しんでいるんですね…」

クレス「ああ、だけど僕達がなんとかしないといけないよ…僕だつて…」

クレスは下を向く

クレスは過去に自分の故郷を燃やされてミゲールと自分の母親を亡くしてしまった…それはある事でミゲールと母親を生き返らせた…だが二度とそのような事が起こらないことをクレスは気にしている。それがクレスの過去に重なる

ミント「クレスさん…」

そんなクレスをミントが心配する。彼女も母親を亡くしてしまっている。その気持ちはミントにもわかるのだ…すると

ポン！

クレス「！？」

ドルクがクレスの肩を叩いた

ドルク「落ち込むなよ…俺も両親がいないからな…それにこのようなことがならないように互いに助けあった方がいいぜ…俺もいるからな…だから今はまずは…」

クレス「わかってる…ありがとうドルク…」

クレスはなんとか元気になった

……

ゾロア「わあ…その『ブレイブ』っていうギルドにオイラ達が！」

バチユル「わあ…い！」

キバゴ「しかもオイラ達もここに住んでいいの！」

ドルク「ああ、それに困った奴はほおっておけねえしな…孤児院も3匹だけで誰も見てくれない様子だろ？」

シルム「大丈夫、みんないい人達ばかりだから」

ジュティア「ありがとう…」

ジュティアの目に涙が零れ落ちる

ドルク「だけどちゃんとその分働いてもらうかな？いいか？」

ジュティア「わかってるわよ、あたし…がんばるから」

ゾロア「早速準備してくる！」

バチュル「あたしも〜！」

キバゴ「オイラも〜！」

3匹は早速準備をした

……

ゾロア「これでこことはお別れになるね」

バチュル「さようなら…僕達の生まれた孤児院…」

キバゴ「オイラ達こっちに行ってもがんばるからね」

3匹は自分が住んでいた孤児院に別れをつげた

ジュティア「さよなら…あたしはがんばるから…」

ジュティアはそう言い孤児院を後にした

……

ドルク「帰ったぞ！」

シムーン「お帰りなさいドルク親方…そちらの方達は？」

シムーンが後ろにいるジュティア達が気になっていた

ドルク「ああ、新しくブレイブで世話になる奴等だ…3匹はこつちで預かってもらう、それにそのジュカインはお尋ね者だったが俺やシルムが説得してここで働いてもらうことになった」

シムーン「なるほど…わかりました」

すると同時に

ソル「おっ！帰ってたのか？」

そこにソルやリードン、さらにチェスターやアーチエまで帰ってきた

リードン「それに子供までいるじゃねえか？」

リードンは言うが

ドルク「こいつらは俺達の仲間ですここで世話になるんだ」

チェスター「そうか…俺にもそいつらみたいなのがいるんだよな」

チエスターは3匹と同じ自分の世界にいる子供達の事を思い出していた。

クレス「チエスターとアーチエが無事に帰ってきてよかったよ」

アーチエ「でもグミ拾いとかでつまんなった」

アーチエはふてくされる

ドルク「まあこれも仕事だ…とりあえず腹減ったな…夕食にしようぜ」

ドルク達は食堂へ

……

クロー「うう……」

シード「……」

シノ「なんでこうなるんや…」

クロー達はぐったりとしていた。クロウドの地獄特訓はきつかったためかかなりのものだ…特にクローは単純なところの改善のため倍の地獄特訓を受けたのだ

ノコタロウ「あいつらに負けたくないのか？」

クロー「負けん！ワシだってあいつには負けんぞ！！」

ノコタロウの一言でクローは復活した、そこだけは人一倍根性あるようだ

クラウド「まだまだこんなもんじゃねえぞ、覚悟しとけ（黒）」

クラウドはもはや何かを企んでる黒さだった

ドルク「帰ったぞ」

そこにドルク達が来る

クラウド「おっ！お帰り〜…ん？そいつらは？」

ドルク「ああ、こいつらは今日から世話になる孤児院の子供達だ」

ドルクが説明した

ノコタロウ「ドルクさんもそついうのがあるんですね」

ドルク「まあ俺は探検家だ、そうじゃないと探検隊なんてやってねえよ」

クラウド「まあでもドルクも悪魔亀大魔王と言われても根は優しいもんな〜」

ドルク「うるせえ／＼／＼」

ドルクは照れる

そんなこんなで夕食の時間がやってくる

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達（後書き）

クレス「こうして仲間になってよかったよ」

まあジュティアのモデルはティルズオブデスティニーのルーティがモデルだし…イメージC.Vもルーティだから

ミント「だからなんですね」

デスティニーでそうしたのだからこうした方がいいかなと思ってね

ドルク「いいかもな」

（まあドルクにも春を訪れさせておかないとね）

シルム「次回は？」

次回は…あの××なあの子の料理が…

シルム「ものすごく嫌な予感が（汗）」

依頼49 恐怖！××料理パニック！（前書き）

今回はあの料理がへたなああのキャラの恐ろしい料理が（汗）被害者  
が出なければいいですが（汗）

ドルク「どうなるかな」

そんな依頼49

アーチエ「行くわよ！」

依頼49 恐怖! ××料理パニック!

次の朝

今日もブレイブの1日が始まった

ドルク「おしし! 飯だ」

今日も朝食なのだが

アーチエ「は〜い! 今日のはあたしが作ったよ」

クレス「!?!」

ミント「えっ!?!」

チエスター「!?!」

ファンタジア組(アーチエ以外)は驚いていた。なぜかというと

クレスがドルクとシルム、さらにメンバーみんなを集める

ドルク「(どうしたんだ?)」

クレス「(さすがにアーチエの料理はやばいよ!)」

ミゲール「(アレは食ったら死ぬ…俺あれはすごくやべえんだよ!)」

」

チエスター「（ああ、アーチエの料理はすごくやべえよ…ほとんど食べれば被害者が増えるんだ！そうになったらやべえことになる！）」  
どうやらアーチエの料理は相当やばいようだ

クラウド「（一応予備の朝食は用意した、ってか前にこういうことあったんだよマジ！）」

クラウドもどうやらあったようだ

シルム「（それってまさか（汗））」

ドルク「（アーチエの料理を食ったらやばいことになるってことか？）」

チエスター「（ああ、絶対あいつに二度と料理を作らせないでくれ、フルーツ類のなら大丈夫なんだがそれ以外だとあいつの料理の被害者が増えていくんだ！だから絶対に！）」

ドルク「（とりあえずはそうしておくが、だがどうする？誰が食べるんだよ？）」

クレス「（たしかに…誰が食べれば…）」

ジュティア「（それにあの子の料理すごくやばそうよ（汗））」

アーチエ「ちょっと！なんでみんなコソコソ話しているのよ？」

ドルク「ああ、わりいな…じゃあ俺とシルムと」

ノコタロウ「じゃあクロー達でいいかい？」

三人「ちよつと待て!？」

三人がツツコミをした

アーチエ「わあ〜じゃあ味見してみてよ！」

するとアーチエが作った朝食が出てきた、見た目は普通だが…

ドルク「（これはなんか感じるな…だがもしシルムが…）」

シルム「（ドルクが倒れないか心配だよ（汗）」）

二人は不安になっている

アーチエ「どうしたの？早く食べてよ？」

アーチエが二人の食べてよと言ってくる

ドルク「（しかたねえ…）」

シルム「（覚悟決めて!）」

二人はアーチエの朝食を一口食べた

ドルク「（まずいが…これはダメだな）」

シルム「（うわあ〜なんか味がまずいよ）」

なぜか二人は倒れなかった

クレス・チエスター「あれ？」

不思議に思ったクレスとチエスターは二人を呼ぶ

チエスター「なあ？なんともなかったか？」

チエスターは二人に異常がないか確認をする

ドルク「いや、まずいだけでなんともねえよ」

シルム「オイラもだよ」

クレス「でもあれを食べても倒れないなんて…二人ともすごいよ」

そう二人はなんともないのだ…でもなぜ二人は倒れなかったのか？

ドルク「ああ、俺はたぶんサフィーの辛いのを食べてたからかもな」

シルム「その辛味とか色々食べていて味覚が敏感になったんだと思う」

サフィー「そりゃあ私の特製激辛パイとかだしね（黒笑）」

ドルク「それにかしこさサバイバルっていうのが俺達二人にはあるからかもな」

かしこさとはグミを食べたときにあがるものでスキルがつくのだ…スキルサバイバルはベトベターフードとかだと悪い効果を受けない

ようだ

クレス「でもあれってたしか」

クロウド「ベトベターフードじゃないよな…それが影響とかしてる  
ってことか？」

ドルク「考えてみるとそうかもしれないな…でも味はまずかったか  
ら被害なくてよかったぜ」

シルム「死ぬかと思った(汗)」

この二人も相当な舌の持ち主だろう

アーチェ「ねえ？どうだった？味は？」

アーチェは味の感想を聞いてきた

ドルク「味はちょっとな〜やっぱ得意なのがお似合いだと思っぜ？」

シルム「オイラもだよ」

アーチェ「(なんかむかつくけど)そうか、あたしにも得意なのがあるから、そこだけ伸ばせばいいのよね？」

ドルク「ああ」

アーチェは料理は得意ではないが、他の長所を伸ばしたほうが自分らしいだろう



依頼49 恐怖！××料理パニック！（後書き）

やっぱり被害者が（汗）

3匹「なんでワシ（俺！）（ワイ！）（なんだ！！）（怒）」

面白そうだったから

ドルク「まあシルムが無事でよかったぜ」

シルム「そうだね」

まあかしこさの表現はできたかな？

依頼50 単純ワニを強くせよ〜ドルクのペット〜(前書き)

シルム「何このタイトル?(汗)」

実はちょっと『フォックの集会所』とつながります

ドルク「おっ!あいつだな」

そう、では記念の依頼50

ドルク「ダメシー!!」

依頼50 単純ワニを強くせよ〜ドルクのベット〜

アーチエのヘタクソ料理事件から3日後

リードン「とりゃー!」

シエルマル「えいやっ!」

ドルク「いい感じだ!」

リードンとシエルマルがバトルしていた。二人ともかなり特訓したのか傷が多くなっていた。リードンの腕もかなりムキムキの筋肉質になっている。シエルマルもホタチを使った戦いや使わない戦いなどをしていた。かなり腕もあがっていた。

シルム「それじゃあここまで!」

シルムが二人のバトルを止める、二人はバトルをやめる

リードン「あゝありがとなシエルマル」

シエルマル「いいえ、リードンさんも結構なれてきましたね…俺もあれからクラウドさんの特訓で結構な量のトレーニングをさせられましたし(汗)」

シエルマルはクラウドの地獄特訓を走馬灯のように記憶が駆け巡った

リードン「まあ俺もだけどな(汗)まさか俺もここまでやれるとは思わなかったしな…あいつらが見たらビックリするだろうな」

ニイツとリードンは笑う

ソウ「まあ僕もアトリ君ともトレーニングしてて楽しいですし」

アトリ「そうだよな」

ソウとアトリも仲良くなってきた

クレス「まあ僕もなれてきたし、でも父さんとかが(汗)」

ミゲール「……」

死んでいないが気絶している。

デイン「ボゲール(汗)」

チエスター「まっ！この世界も悪くはねえな」

ミント「シムーンさんに色々教えてもらいましたし」

アーチエ「まあ結構いいけどな」

アーチエはホウキにまたがり浮いている。

ドルク「さてと、じゃあリードンとシエルマル、一緒に単純ワニの特訓をするぞ」

シエルマル「なれるのに時間かかりますしね(汗)」

リードン「あいつごんだけ単純だよ（汗）俺も単純のわりに強くなつたのにな」

どうやらクローの特訓のようだ

ドルク、シルム、リードン、シエルマルはクローの元へ

……

トレーニングルーム2

ドルク「クロー、特訓だ」

クロー「ワシも逆にバテバテになつとるわ!!」

クローはクラウドの特訓によってすでにバテバテだ

リードン「とりあえずドリンクだ」

リードンはポンドリンクを差し出す

クロー「ん！これはうまい！」

クローは大絶賛だ

クロー「おお！なんだか力がみなぎる感じだぞ！」

クローはドリンクによって力がみなぎるような感じだった、だがこのポンドリンクはドーピングとかしていませんので（汗）



クローはビツクリする

ドルク「紹介してやるぜ、我がギルド『ブレイブ』…そして俺のペ  
ットであるイビルジョーのデビーだ」

と、ドルクはイビルジョーのデビジョーを紹介する

デビジョー「初めまして！俺はイビルジョーのデビーッス！！ちな  
みにポケモンじゃないッスよ！」

ツス口調を使うモンスターだったというか彼はポケモンではなく…  
別の世界のモンスターだ、なぜポケモンじゃないモンスターがここ  
にいるかというドルクがこのイビルジョーに挑んで勝ってそして  
デビーがドルクの飼い犬…いや飼いモンスターとしてこのギルド『  
ブレイブ』でのペット&特訓相手をしてくれるようになった…もち  
ろん依頼とかもしてくれるので大いに助かってはいる。

ちなみにどうやって仲間にしたのか…詳しくは『フォックの集会所』  
にて

ドルク「ちなみにこいつは食いしん坊でな、腹が空く場合が多いか  
ら食事也多めに用意はしている」

と、自身満々に言うドルク

クロー「ちよつと待て！？ワシ死ぬ！？ってかなんでそんな化け物  
がいるんじゃあ…！？」

クローはつつこむが

ドルク「細かいことは気にするな お前のためにだ、それにちゃんと手加減はしてくれるから大船に乗ったつもりで行け」

と、ドルクはグーサインを出す

はたしてこの特訓で大丈夫なのだろうか？

依頼50 単純ワニを強くせよ〜ドルクのベット〜(後書き)

クロー「なぜモンハンのモンスターを出す!」

いや〜実は『フォックの集会所』でやったのでどうしようかと思っ  
たからこうしようと思っ

ドルク「まあ設定上は残酷表現にはしねえし、っつかもはや加減も  
してる」

シルム「ある意味どうなのか(汗)」

シエルマル「不安ありすぎですよ(汗)」

加減はしてるから大丈夫だよ

デビー「大丈夫ッスよ〜」

依頼51 クローの特訓、補助と守りも必要、(前書き)

逃走中書いていてこっちの更新もしとかないと(汗)

ドルク「待たせるなよ?」

うん、では依頼51

デビー「どうぞッス」

依頼51 クローの特訓く補助と守りも必要く

というわけで早速特訓開始

クロー「（こんなので大丈夫なのか（汗））」

クローは不安になるが

クロー「（ワシだってあいつには負けんぞ！！）」

と、目が燃えていた。

ドルク「行くぞ」

デビー「行くッス！」

デビーがクローに噛み付いてくる

クロー「よっと！」

クローは見切って避けた

デビー「今度はこれで行くッス！とりゃあ！」

デビーは身体を回転して尻尾でクローをなぎ払おうとした

クロー「（ここは攻撃と行きたいところじゃが、しかたない！）守る！」

クローは咄嗟に守るを使った

ドルク「（いい感じに守るを使ったな…あいつには少し補助もつけないとやられるからな）」

クローは単純に補助と防御技を覚えていないので、少し技を覚えさせていたのだ、もちろん技マシンで

ドルク「（本当はオリ技とかの特訓でもいいが、ノコタロウの許可なくやるのは無理があるからな、ここは技とかのでだしな）」

オリ技でもたしかに効果的になる。さてクローの特訓に戻そう

クロー「やるじゃないか、さすがはこのギルドの親方のペットだな！」

デビー「そう言ってもらえると嬉しいツスよ、でもここからツス！龍プレス！！」

するとデビーは怒り状態になって龍プレスを吐き出した

クロー「くっ！」

クローはプレスを避ける

デビー「岩飛ばしッス！！」

デビーは地面をえぐって岩を飛ばす

クロー「ならねっとうじゃあー！！」

クローはねっとうを吐いた、岩は飛ばされてデビーにあたる

デビー「アチチチチ！」

岩はねっとうによって熱くなっているためデビーは慌てる

クロー「今じゃ！！氷の牙！！！」

クローは冷気をまとった牙でデビーを噛み付いた

ガブッ！

デビー「痛いッス！…でも効かないッスよ！それ！」

デビーは噛まれたが痛みを感じずにそのままクローを振り落とす

クロー「うおっ！？」

クローはそのまま振り落とされた

ドルク「そこまでだ」

ドルクがストップをかける

ドルク「いい感じになったな」

クロー「ワシはたまたまじゃ、ワシだって負けたくないからな！」

と、強気で言う

リードン「それじゃあ今度は俺ともやるっぜ」

シエルマル「俺もですよ」

クロー「よっしゃあ！やってやるぞー！」

クローは気合を入れる

シルム「あんまりやりすぎないでね」

と、シルムが注意する

ドルク「まあ少しはやれるようだな…後はどうなるかだな」

ドルクはそんなクローを見ている。

ドルク「（これはかなり楽しみになってくるな…遠征が）」

そんな風に思っていた。

依頼51 クローの特訓と補助と守りも必要(後書き)

ドルク「あいつの単純さは変わらないかもしれないかもしれねえがとりあえず守りや補助も必要だしな」

そうじゃないと結局は負けてしまう感じだしね

シルム「でも他の二人(シードとシノの事)も大丈夫なのかな？」

クラウドさんの特訓は過酷かつ地獄だしね、まあ大丈夫だろう

ドルク「そうだな、あいつらもきつとな、まあ俺の進化前々のあいとも単純だが俺とは違うバトルスタイルだしな」

いやゴリ押しだから同じだろ(汗)っと次回ですがついに遠征メンバーが決まります。お楽しみに

はいなんとか戻ってきました。ご迷惑をおかけしてすみません、今日から復帰です。

ドルク「作者がなんとかなってよかったぜ」

シルム「そうだよね」

うん、それでは早速依頼52

ドルク「決めるぜ！」

依頼52 遠征メンバー発表と別れ…さらに対決！ドルクVSソル前編

次の朝

いつもの朝なのだが今日は違う…なんたって今日は……

……

ギルド食堂

みんなが集まっていた。

シルム「みんな、今日は遠征メンバーの発表だよ」

ついに遠征メンバーの発表となった

みんなゴクリと唾を飲み込む、緊迫した緊張が食堂を包む

ドルク「それじゃあ発表するぜ……」

いよいよ発表の時…はたして…！

ドルク「全員だ」

全員『えっ！？』

なんと全員のようにだ

ミゲール「やったやった！」

アトリ「うるせえー！」

アトリがミゲールに膝蹴りする

ミゲール「ごはっ!?!」

しかし

サフィー「あの〜」

ドルク「どうした？」

サフィー「私達はその…色々と事情があるためここでお別れしていいですか？」

突然サフィーからお別れと言われ啞然とする

キララ「ごめんな、あたい達も色々あるんでね」

と、キララは言う

ドルク「そっか、元気だな」

シルム「しょうがないね、まあ時間あったらまた来てね」

ゼロ「じゃあな」

カゼル「こっちもがんばれよー！」

サファイアメンバーはギルドから去っていった

……

シルム「遠征は3日後、それまでは準備とか色々しててね、でもあまり遠くに行かないようにね」

と、シルムは言う

そんなこんなで解散した。

ドルク「っとソル、ちょっといいか？」

ソル「俺か？」

ソルは突然ドルクに呼ばれた

ドルク「どうだ？なれてきたか？」

ドルクはソルになれてきたのかを言う

ソル「まあなんとなくか…力の制御も少しはなってきたかどうかからねえけど」

ソルは力の制御に不安があった

ドルク「じゃあ俺とバトルするか？」

そこでドルクがバトルを申し込む

ソル「えっ？お前とか？」

ドルク「嫌か？」

ソル「いや、まあむしろいいかもしれないな…それじゃあよろしく頼む」

ドルク「ああ」

そう言っただルクとソルはトレーニングルームへ

……

トレーニングルーム

バトルフィールドにはドルクとソルが立っていた。

シルム「それじゃあ始めるよ」

リードン「相手はソル…というか強いんだよね」（汗）「

リードンはソルの実力をすでに感じている。まあダンジョンで一緒の時に実力を見てみるとそれは常識を覆すような実力だ、そんな相手をドルクは相手する。

ソル「本気でいっていいのか？」

ソルは少し戸惑ってドルクに言う

ドルク「俺は別にいいぜ、それに力の方もコントロールもできてい  
るはずだからな、それを見るために俺がバトルしてためしてやるぜ」  
ドルクが構える

たとえお互い同盟を組んでいてもいつかバトルする時があるのだ、  
全力とためすために

シルム「それじゃあバトル開始！」

ついに戦いの火蓋がきつておとされた！

ソル「やるしかねえ！」

ソルはコートの胸部分からホワイトデビルとブラックエンジェルを  
取り出して連続で撃った

ドルク「ロックフェンス！」

ドルクはロックフェンスで防いだ

ソル「ならこれならどうだ！」

ソルはダイインスレイブを背中から抜いてロックフェンスを破ろう  
としていた、そこから岩の壁に何度も斬りつける

ピキピキ

そこからヒビが入った

ソル「これで…どうだ！」

ソルは踏み込んで斬った

パリーン！と岩の壁が割れる、しかし

ソル「なっ!？」

ソルは驚いていた。なぜかというところでは割れたはずの岩の壁にさらに岩の壁が出てきたのだ、そこから岩の壁は崩れてドルクが姿を現す

ドルク「ふう、バージョンアップしてよかったぜ」

どうやらドルクはロックフェンスをさらに繰り出して二重の壁にしたのだ

ソル「さすがはブレイブのリーダーでギルドの親方だな…こりゃ本気で行くしかねえな（黒狂笑）」

ソルはニヤリと笑う

ドルク「おっ！そうでなきゃ面白くねえな（黒狂笑）」

互いに狂気笑いをする。ある意味大物な感じな二人だった

リードン「あいつらもすげえな（汗）もはやこれはすごくやべえ戦いになりそうだな（汗）」

シエルマル「たしかにそうですね、さすが親方様にソルさんだ、こ

んな戦いをするなんて」

リードンとシエルマルはそんな二人の戦いにそう言う

ドルク「さて…本気で来いよソル！見せてみる！お前の力を！」

ソル「おうよ！でも死なない程度にならないかもしれねえがそれでもか？」

ソルはドルクに質問する

ドルク「俺はそう簡単にはやられねえよ、かかってこい」

ドルクは構える

依頼52 遠征メンバー発表と別れ…さらに対決！ドルクVSソル前編（後書き

今回コラボしてくれたサファイアさんありがとうございます。色々あってこういうことになりましたすみません

ドルク「まあでも結構よかったからな」

シルム「また会えるかな？」

きつと…まだわからないけど…さてここで始めました。この二人の戦い

ソル「なんで俺とドルクが戦うのかなんだよね」

まあソル君が色々と不満やふてくされてそうだから本編でもそういう感じもあったからソル君と一度戦ってみた方がいいし、それにここに来てから特訓もさせたのだから実力が見れるいい機会だから

ソル「なるほどな」（黒狂笑）でも本気出したらドルクでもすむかどうかかわからねえぞ？」

あゝこれでもドルクは死なないし、それに悪魔亀大魔王だからそれぐらいは平気だとは思っしね

ソル「大丈夫なのか（汗）」

ドルク「ああ、次回も続きだからかかってこいよ」

ソル「まあ俺も特訓とかで色々あったからちよつとよかったかも

な  
」

依頼53 互いの本気！ドルクVSソル 後編（前書き）

ついに後編です。その前に今回の話ではソル君のリミットである魔力レベルというのが出てきます。とりあえずハボックさん使わせてしまっすみません

ドルク「本気で来るとはいい感じになりそうだぜ（黒狂笑）」

黒狂気笑いがソル君に移りまくりだな（汗）それじゃあ依頼53

ドルク「燃えるぜ！！」

依頼53 互いの本気！ドルクVSソル 後編

二人の戦いはまだ続いていた。

ソル「シャドークロー！！」

ドルク「ウッドハンマー！！」

カキーン！

お互いの技が火花を散らす

ソル「やるじゃねえか（黒狂笑）」

ドルク「おめえもな（黒狂笑）」

クレス「（この二人…狂気笑いしても楽しくやってる（汗）僕も様子を见に来たけど…ここまで派手になるなんてね（汗）」

クレスはバトルフィールドから少し離れたところから見ていた。クレスの剣技では追いつけないほど彼等にはおよばないものだ、ソルは悪魔の血が流れているため通常のポケモン相手だと一瞬だろう…しかしドルクだけは違った、ドルクは通常とは違って魔力もあり…さらに守りもかたいのだ

ドルク「（あいつも少しは力加減にはなれているな…こうでねえと面白くねえしな）（黒狂笑）」

ソル「（悪魔の血が流れていても…あいつのすごさには共感できるな（黒狂笑））」

互いが認め合うライバルだから彼等はこうしたバトルができるのだ  
シルム「（ここまでやれるなんてね…さすが…ソル君の力加減も少しはマシになってきているかな…）」

シルムはそんな二人の様子を見ている。審判でもよく相手の動きなどをシルムは見る。探検隊のサブリーダーでギルドの副親方として…ドルクや仲間を守るために彼は彼の役割で行動する。

ソル「ならこれでも食らえ！インフェルノクライム！」

ソルは黒い斬撃を繰り出す、食らえばかなりやばいがドルクは

ドルク「よっと！」

ドルクは横に避ける、少し斬撃にカスった程度だが少し傷がついた程度だった

ドルク「（それなりに加減するな…まあこういうバトルでいやなことになったらおしまいだけだな）エナジールバスター！」

ドルクはエナジールバスターを繰り出す

ソル「おっと！」

ソルはエナジールバスターの範囲から離れるように避けた、ドルクのエナジールバスターは広範囲なので避け方にも見分けをつけてお

かなければならない…まあジャンプ程度で避けられるが問題は空中では避けられないことが多い…なので色々避け方などを考えなければならぬ

ソル「デストロイステインガー!!」

ドルク「ギガントウッドハンマー!!」

ソルは黒い炎でおびたダインスレイブで、ドルクはさらに大きくなったウッドハンマーで、彼等の攻撃は繰り出された

ぶつかるそれが衝撃波となり風圧が襲う

シルム「うわっ!?!」

シルムは咄嗟に顔を両手で覆い隠す

すると二人はまだ立っていた。まだまだピンピンで

ソル「(チツ! やっぱあいつにはかなり強力じゃねえとだめだな…魔力レベル1を解放してもあいつの精神はそう簡単にはいかねえしな)」

ソルの魔力レベル1は相手を沈黙させる能力…しかしあれはかなりのもので相手もノックアウトにするほどの能力だ…だがドルクにはそんな生半可な能力では難しいのだ…なぜなら

ソル「(ドルクは何も恐れていねえ感じだしな…あいつの波動は強気だしな…そうしてもあいつには見破られちゃうし)」

ドルクはあまり恐れないのだ、ドルクも色々と不利な状況などそういう経験を積んでいるためソルの魔力レベル1ではドルクを封じることが不可能だ

ソル「魔力レベル2解放、眼前のターゲットが完全沈黙になるまで能力を解放する」

そうソルが言うとソルの体全体が赤黒いオーラをまとう

ドルク「そうこねえとな…」

ドルクは構える

ソル「行くぞ！」

ソルは巨大なシャドークローを繰り出す、魔力レベル2が解放されたため、シャドークローが巨大になったのだ

ドルク「へっ！そうこねえとな　ハードロックディフェンス！！」

ドルクがそう言うと緑の膜がドルクを包み込んだ、巨大なシャドークローがぶつかりはじく

ソル「なっ！？」

これにはソルは驚く、こつも簡単に防ぐとは思わなかったのだ

ソル「だがまだ終わらねえよ（黒狂笑）波動弾！！」

ソルはさらに波動弾を連発してドルクを覆う緑の膜を打ち消そうと

する。すると緑の膜にひびが入って割れ、ドルクは食らってしまった

ドルク「おお〜いてえ〜やるじゃねえか（黒狂笑）」

だがドルクは痛みを感じるがまだまだ余裕のようだった

リードン「すげえ（汗）」

シエルマル「ソルさんとドルク親方…どっちも一歩引けませんね」

シエルマルの言うとおり、ソルとドルクはどちらも一歩も譲らない状態だ

クレス「ここまでやれる二人はすごいな（汗）ソルの技もかなりの大技みたいだな…僕は闇とかは無理だけど…」

アトリ「おお！やってるな」

そこにアトリも来ていた

クレス「アトリも来たんだ」

アトリ「まあな、あいつらが気になってな…まあ結構いいバトルでいいぜ（黒狂笑）」

クレス「そうなんだ（汗）」

そんな黒狂気笑いのアトリにクレスはタジタジだった

ドルク「（やっぱこう来るか…さすがに前に魔力レベル2を見たと







クレスがディシアに呼びかける

ディシア「ソルというルカリオの禍々しい力を感じてな…どうやら時空にも影響するようだが…どうやらここでは心おきなく力を使えるようだ」

クレス「と？いいますと？」

ディシアが説明した

ディシア「つまりソルには力の制御に問題がある…あの能力は完全に世界に影響しそうなものだが…力を制御できれば影響はない」

クレス「なるほど…僕の時空剣技能力とかも同じようなものですが…ここまでできるなんて」

クレスは少し驚いていた。

アトリ「さあて、どうなるかだな（黒）」

そんな二人は……

ソル「Gワイバーン!!」

ドルク「ハードロックエナジーダマシー!!」

ソルは赤と紫の頭に鋭い刃があるドラゴンがドルクに向かって突進、ドルクは黄金色のエネルギー球を2発を放つ、二つの技が爆発した

ソル「うわっ!?!」

ドルク「くっ！」

二人の攻撃によって煙が立ち込めた

クレス「何も見えない……」

アトリ「これは勝負がわからなくなったな」

だんだんと煙が晴れてくる。そこには

ドルク「……………」

ソル「……………」

二人が立っていた。しかし

バタッ！

二人同時に倒れてしまった

シルム「両者戦闘不能！」

なんと引き分けに終わった

ドルク「あゝ引き分けか……」

ソル「でも結構楽しかったぞ」魔力レベル4まで使うなんてな」

ソルはそういいながら右腕を見た、少しだが怪我はしていた。

ドルク「でも少しなれては来ただろ？」

ソル「ああ…俺もこのバトルを糧に…がんばっていけるようにしねえとな！」

ソルはそう意気込む、自分の力…それを信じて

ドルク「でもおめえのその魔力レベル4は強かったぜ（黒狂笑）」

ソル「そういうお前のオメガリミットもよかったぜ（黒狂笑）」

何時の間にか二人は笑っていた。これほどのバトルができたことに満足感がうまれたのだろう、そして3日後に迫った遠征でどのようなお室にめぐり合うのだろうか…このバトルをきっかけに…がんばれるだろうか…それは後にわかるだろう

依頼53 互いの本気！ドルクVSソル 後編（後書き）

ドルク「あゝいいバトルだったぜ」

本気で殺傷能力つけたら死んでいたかも（汗）

ドルク「まあ俺はソルの世界であの野郎を協力して倒したしな」

まあたしかにね

シルム「次回はついに遠征だよ」

お楽しみに！

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号（前書き）

ドルク「このタイトルからしてもはや」

どうかなく

シルム「それじゃあ依頼54をどうぞ」

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号

3日後

全員が集まっていた

ドルク「よしっ！全員そろっているな」

シルム「みんな準備した？」

クレス「こっちはOKだよ」

父（魔王）「こちら準備は完了だ、いつでもいけるぞ」

カガリ「こっちもだ」

クラウド「俺達の方もOKだ」

ソル「こっちもだ」

リードン「いつでもいけるぜ」

クロー「ワシもだ！」

シエルマル「こちらもOKです！」

ミミロップ「もちろん」

みんな全員OKのようだ、なおこの留守番はライボルト・レントラー・ゼブライカの3種の軍団が残ることとなった

ドルク「それじゃあ行くこうぜ…まずは地下に乗り物を用意したぜ」

ミント「乗り物ですか？」

全員が乗り物に疑問にもっている

シルム「目的地までは途中乗り物で行くよ、それじゃあ行くこう」

一体乗り物とは何なのか……全員は地下へと向かう

……

地下2階

ここは地下2階らしい、特別な場所らしく…ここは広い場所だった、地下2階は特別または緊急の時のために作られた場所だ、もちろん遠征も特別には入っているらしい

ドルク「ついたぜ」

一行がついたところは

シエルマル「これは!？」

みんながあるところに視点を向く、そこにあっただのは戦艦と言える乗り物だった

ステンドグラスが張っているような壁に甲板は黄緑色、かなりのものだった

シルム「これはバンエルディア号なんだ」

ソル「バンエルディア号？」

ドルク「これはこの世界で伝わるアイフリードに関わるものだ」

シエルマル「ア、アイフリード!？」

シエルマルは驚く

ソウ「シエルマル君、何か知っていますか？」

ソウはシエルマルに聞く

シエルマル「そりゃあ知ってますよ！なんでも昔ここに海賊ギルドとかがあって、その中で特にアイフリードという名前のポケモンがいて、アイフリードはその海賊ギルドの親方だった…数々のお宝を手にいれ、そのお宝を貧しいポケモン達に分け与えたという伝説があるんです」

どうやら昔…ここには海賊ギルドというのがあったようだ、アイフリード…伝説の海賊を

シルム「まあシエルマルのいうとおりだよ…そしてこのバンエルディア号はね…そのアイフリードの残した船みたいなんだ…部屋も結構あるし、その他色々だね」

クレス「そういえば…僕も聞いたことがあるよ…でもそれぞれの世界ではアイフリードの存在があるかないかで、さらにそれぞれ違う部分と共通する部分があるんだ」

クレスがそう説明する

ソウ「それってどういうことなんですか？」

ミント「私達の世界ではアイフリードの存在はないんですが…他の世界ではアイフリードの存在があるんです。でもそれぞれ違いがありまして、唯一共通するのが『海賊』だけなんです」

ドルクの世界の他に、アイフリードは語られている

ミミロップ「すごい！あのアイフリードの残したお宝を！私達もほしかったな」

ミミロップは羨ましが、もちろんチャーレムやサーナイトも

ドルク「でもこのバンエルディア号とかぐらいだったぜ？まあこの乗り物を使って旅できるからいいけどよ」

ジュティア「あたしもアイフリードのお宝欲しかったな…あんたが羨ましいわ」

ジュティアは羨ましそうにバンエルディア号を見た

ドルク「とりあえず出発するぞ、乗るぞ！」

全員『おおー』

「！！！」

全員はバンエルディア号に乗った

……

バンエルディア号1階ホール

みんなはホームに集まっていた

ドルク「とりあえずみんないるな…ここはホールだ」

ホールは床は赤く、綺麗になっている。1階は研究室などがあり、さらに甲板にいけるところもあるのだ

シルム「まあとりあえず部屋は地下1階と地下2階があるから部屋は好きに使ってね」

ギルガメス「そういえば気になるが？誰が操縦するんだ？」

そう、2階には操縦室となっている。誰が操縦するのか？

ドルク「ああ、これは自動操縦とかもできるからなんとかなる…その時はシルムとかが操縦とかできるからな」

ミゲール「ワクワクするな」

シルム「それじゃあ出発するね」

コトコトコトコトコトコト

バンエルディア号が動き出す

……

ギルド外では岩が動いた、そこにバンエルディア号がカタパルトにつけている。

ドルク「発進！！」

するとバンエルディア号は発進した

今、彼等の遠征が始まろうとしている！！

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号（後書き）

ティルズシリーズの中の方でアイフリードが出てるシリーズとかも  
ありますし…もちろんレディマ3でもバンエルディア号とかが出て  
いるためギルド＝バンエルディア号という感じですね

ドルク「まあたしかに移動式のギルドだしな」

シルム「まあたしかにね（汗）」

クレス「僕は知っているような？」

レディマ3出演してるクレスとかは知っているはずだけど…あつち  
の設定上知らない場合とかもあつたりかもね（汗）

ドルク「たしかにな」

次回はそんな空の旅へ！

依頼55 到着！宝島！！（前書き）

ドルク「おせえぞ作者！」

色々あるんだよこっちは！

シルム「まあまあ（汗）ついに遠征が始まるね」

まあ今回の遠征がどうなるか

ドルク「さて！依頼55！！燃えるハートで行くぜ！！」

依頼55 到着！宝島！！

バンエルディア号に乗って快適な遠征をしているブレイブ一行、みんなそれぞれの部屋で遊んだりと色々としていた。

クレス「それにしてもここは快適だね」

ミント「どうやらそうですね」

クレス&ミントのファンタジアカップルは気に入った様子だ

ミゲール「サーナイトすわぁ〜ん！！」

アトリ「いい加減にしろや！！クソ親父が！！ブラスト！！（黒激怒）」

ミゲール「シビレビレ！！？」

サーナイト「（汗）」

ミゲールはサーナイトにナンパするが、アトリの膝蹴りによって鎮圧

シェルマル「それにしても…まさかアイフリードの船自体が」

リードン「そのアイフリードとかって有名なのか？」

シェルマル「はい、俺も聞いたことがあって」

シェルマルはリードンに説明する



シルム「これをこうして…」

シルムは他のパネルなどを操作した、すると画面から自動操縦と出てきた

3階は展望室となっている

ミミロツプ「わあ〜」

チャーレム「ホントに空を飛んでいるみたいだね〜」

そして地下1階は機関室、ここにもそれぞれ部屋が設置されている。ここはバンエルディア号の動力のある場所でもある

クラウド「へえ〜こうなっているんだ〜」

ノコタロウ「ホントにすごいでG.E.S」

シード「作者、それがやりたかったんだろう（汗）」

シノ「同じ同族なのになんやこの差（泣）」

クロー「ぐぬぬ…ワシだって絶対お宝をゲットしてやるぞ!」

そして地下2階は船倉であり、たくさん部屋と非常口などもある。ちなみに出口はここしかないが色々脱出のドアが各部屋に用意されている。もちろんパラシュートなどもある。

これがバンエルディア号の見取りだ

さすが歴史に名を残すアイフリードだ

ちなみにアイフリードはポケモンであり、どういっうポケモンだったのかは知らない

一行は宝島までゆっくりとした

……

シルム「見えたよ！」

ドルク「よしっ！上陸だ！」

バンエルディア号は目的地の宝島へと到着しようとしていた。

着陸は砂浜にしようとしてバンエルディア号をゆっくりと降下する

砂浜にバンエルディア号が着陸した。

みんなはバンエルディア号から降りた

……

宝島は霧に包まれていた。そんな霧が包んでいる砂浜でドルク達ブレイブメンバーは降りた

ドルク「霧が深いな」

シルム「クレスさん、ここの宝島」

クレス「どうやら呪いか何かだとは思っただけど…後はその呪いを解くしかないよ」

どうやら霧が包まれているのはこの宝島に伝わる呪いみたいだ

この宝島には宝がいつぱいあると噂される島なのだが…ここにはある伝説が残されていた。

それはこの島の宝を手に入れるにはその島の試練があるようだ

その試練とは…この島に伝わる呪いを解かなければ宝を手に入れることはできないのだ

そしてこの島の呪いを解かないかぎりこの島から出られないと言われている。

クレスの説明ではこのようだった

ドルク「かなりやべえもんだな」

リードン「そういう場合じゃねえよ！？ってか俺達無事に出られるのか？」

不安になるメンバーも多い…しかしドルクは力強く言った

ドルク「大丈夫だ！俺達がそう簡単にくたばるわけねえ！！気合入れていくぞテメエ等！！」

と、気合を入れるような一声でメンバーの不安感を吹っ飛ばした

これが探検隊ブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方…ド  
ルクだろう

この先…どのような試練が待ち望んでいるのか…

そしてブレイブメンバーははたしてこの島の呪いを解くことができ  
るのか!!

そんな彼等の遠征が始まる!!

依頼55 到着！宝島！！（後書き）

ドルク達はついに宝島に到着した

しかし島の呪いを解く試練を乗り越えなければ島から脱出することはできない

そんな彼等に最初の試練が訪れる！！

シルム「次回！『ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ』！！！」

ドルク「石版を見つける！宝島の大冒険！！テメエ等のハートに刻んどきな！！！」

依頼56 石版を見つける！宝島の大冒険！！（前書き）

ついに遠征の開始だよ！

ドルク「どういっお宝なのかだな」

シルム「オイラも楽しみだよ」

それじゃあ依頼56

シルム「派手に踊れ！！」

## 依頼56 石版を見つける！宝島の大冒険！！

宝島の砂浜に到着したブレイブメンバー達

そんなドルク達はまずどうするか話し合っていた。

クレスの話によると呪いを解くには呪文を解かなければならない

その呪文は島の何処かにあるようだ

呪文のありかはこの島の何処かにある石版がヒントをくれるようだ

そんな時

ミネラ「パパ！石版があったよ！」

なんとミネラがその石版を見つけたようだ

場所はこの砂浜の大きな岩山の頂上にあったらしく、他のメンバーとともに石版を運び込んだ

……

石版を運び込んだ後すぐにドルク達は石版を読んだ

そこにはこう書かれていた

『この下に呪文があるだろう』

シルム「この下？」

ドルク「どうやらこれか？」

ドルクは石版の下にある丸い小さな石に気づいた

ドルクはその石を押ししてみた

すると何処からか崩れる音がした、それはここから先の山の方だった

リードン「なんだ!？」

ソル「あっちに何かあったんだと思うぜ」

シルム「行ってみよう!」

ブレイブメンバーはその音がしたところへと行った

……

ドルク「ここだな」

ドルク達の目の前には地下へとつなぐ階段が現れていた。周りには石柱が6本立っている。

ドルク「ここからは別々に入るぞ、何かあったら連絡はしてくれ」

みんなそれぞれトランシーバーなどを持っている。これは仲間がはぐれても連絡はできるため準備してきたのだ



ばりましょう先生！」

カガリ「ああ、もちろんだ」

ノコタロウ「私もお宝見つけないとな…クロー達なら大丈夫だろう…たぶん」

チエスター「（なんでこいつとなんだよ）」

アーチエ「（なんであんなスケベ大魔王なんかと（怒）」

続けてチームC

メンバーはミゲール、デイン、アトリ、シエルマル、ギルガメス、ミネラ、グラデルの7人だ

ミゲール「サーナイトさんと一緒によかったのに」（泣）」

アトリ「くおらあ！！（怒）さっさと行くぞ！クソ親父！！」

デイン「ポケール、行こうヨ（汗）」

シエルマル「（大丈夫なのかな（汗）」

ギルガメス「油断せずに行くぞ」

ミネラ「はい！」



パルサ「俺に続け!!」

レイ「落ち着いてください」

シムーン「パルサさん、慎重に進みましょう(汗)」

グロリアス「俺も気合入れていくか!」

リユラ「僕達もがんばろうね」

そして他はクロー達三人、チャームズの三人は別々で行動

クロー「絶対ワシ達はお宝を取ってやるぞ!!」

シード・シノ「おおー!!」

ミミロップ「今回の探検は油断できないわ、二人ともがんばるわよ」

チャーレム「もちろんだよ!」

サーナイト「そうですね、ドルクさん達の誘いですからお宝はいただきます!」

ちなみにヤミラミ達やライボルト達はバンエルディア号で待機

そんなこんなでみんなそれぞれ地下へと入っていった

この先、彼等に待ち受けるものは!!!?

依頼56 石版を見つける！宝島の大冒険！！（後書き）

ドルク「俺達はそれぞれ別れて入っていった」

シルム「でもそこに待ち受ける石版の謎」

クレス「僕達はそれでも突き進む！」

ジュティア「次回！『依頼57 それぞれの遠征〜ドルクルート〜』

┌

デビー「刻め！俺達のハードロックス！！」

依頼57 それぞれの遠征〜ドルクルート〜（前書き）

それぞれの視点でお送りします。まずはドルクの方から

ドルク「おっしやあ！」

それじゃあ依頼57

ドルク「ロックに行くぜ！」

依頼57 それぞれの遠征〜ドルクルート〜

ブレイブメンバーはそれぞれチームを編成して地下へと入っていった  
まずはドルク達から見よう

ドルク「エナジーカタストロフィー！」

シルム「魔神剣！」

ソウ「ホーリーレイ！」

クレス「秋沙雨！」

リードン「業破拳！」

ジュティア「スカイエアー！」

デビー「噛み付き！」

それぞれの技が敵ポケモン達にぶつかり爆発を起こす、爆発がおさまると遺跡のポケモン達は次々と倒れていった、だがまだダメージが残っているポケモンもいる。

ドルク「体力ある奴もいるな〜」

ポケモンでも体力がある奴は耐えられる、もちろん能力の影響や特性などの影響で耐えることもある。

とりあえずドルク達はそれでも攻撃を繰り返し、遺跡のポケモン達を倒していった

……

ドルク達は炎が灯った場所についた、ここに石版があるようだ、ドルクは石版を見た

『炎が消えると呪文があるだろう』

つまり炎が灯っているのを消せば石版が出るってことだ、早速ドルク達は火を消すことにした

ドルク「ストーンエッジ！」

シルム「とりあえず…風牙ふうが！」

ドルクはストーンエッジ、シルムは剣で風を作り火を消す

すべての火が消えて中央から石版が現れ、そこから地下へと出る通路が現れた

クレス「これで先に進めるね」

ジュティア「お宝は絶対もらっわ！」

ジュティアはお宝で頭がいつぱいだ

ミント「でも油断はできません」

ソウ「そうですね、行きましょう」

ドルク達は先へと進んでいった

……

地下へと上がったドルク達の前には大きい扉があった

シルム「大きい扉みたいだね…ん？あれって？」

シルムは扉にあるくぼみがあることに気づいた

全部で6つのくぼみ、しかも

ジュティア「これって…石版をはめればなんとかなるんじゃない？」

リードン「たしかにそうだけども…でも俺達まだ3つしか手に入っていないぜ？」

リードンの言うとおり、ドルク達の持つてる石版は3つしかない

ドルク「ここは他のチームに任せるしかねえな」

残り3つは何処にあるのか

他のチームは石版を見つけているのだろうか？

依頼57 それぞれの遠征「ドルクルート」(後書き)

ドルク「まだまだあるんだな」

さて、次回はミゲールさんルートです。



依頼58 それぞれの遠征くクラウドルートく

一方こちらクラウド、ソル、アレン、カガリ、ノコタロウ、チエスター、アーチエのチームC

クラウド・ソル「波動弾!!」

二匹のルカリオは波動弾を連発してさらに自慢の銃などで敵ポケモン達を撃ちまくる

アレン「いくよ!雷吉!」

雷吉「よっしゃあ!やるじゃき!」

二人は技の準備をしている

アレン・雷吉『バーンホルテックス爆雷!!』

とてつもなく巨大な雷撃の球体を投げつけて敵ポケモン達を一掃させる

カガリ「さすがだな」

アレン「はい!先生!」

カガリはシャドーボールなどアレンを監視しながら敵ポケモン達を次々と倒していく。これも『シャドー』で経験したことだろう

ノコタロウ「ほい!」

ノコタロウはハンマーを使って敵ポケモン達を倒していく

ノコタロウ「(あいつらうまくいっているのやら)」

と、別々に行動しているクロー達を心配する。

炎丸「今度は私も行きますよアレン様」

アレン「うん！炎丸！やるよ！」

今度は炎丸を呼び出して巨大な炎の塊を生成させる

アレン・炎丸『ヒートエンブレム  
爆炎！！』

巨大な炎の塊は投げられ、敵ポケモン達を吹っ飛ばした

チェスター「疾風！はやて！震天！しんてん！」

チェスターは熟練した見事な手さばきで矢を連射し、さらに天に向かって8発の矢を放つ、それはまるで雨のように降り注ぎ、敵ポケモン達を倒していく

アーチェ「サンダーブレード！ファイアストーム！」

アーチェは術を詠唱し、雷の剣を敵に落とし、横から炎の渦が敵ポケモン達を襲いかかった

なんとかかすべての敵ポケモン達を倒した7人

チエスター「ふうっ、ゾロアークでも悪くはねえな」

チエスターは自分がゾロアークでよかったと思っていた。もし他のポケモンになっていると弓が使えないようなことがあれば戦えない、むしろポケモンの技でも出来るんじゃないかというのもあるのだが、ポケモンになった人間だとポケモンの技を覚えるまで時間はかかる、そう考えるとよく考えないといけないのだ

クラウド「たしかにな〜やっぱ武器使えるんなら手ぐらいはあつたりしてもいいよな〜」

ソル「そうだよな〜」

そうこうしてるうちについたのは滝だった

アーチエ「行き止まり?」

行ける場所がどこにもない、あるのは滝だけだった

クラウド「ちよつと待て…ん?」

ソル「あれだ!」

クラウドとソルは滝の裏から何かを発見したようだ、滝の後ろには石版があったのだ、ルカリオ特有の波動でわかったため見つげられることができた

早速クラウド達は石版を取った、すると滝の水は出なくなり、滝のあるところの壁がなくなる

チェスター「これは!？」

アーチエ「先に進めるみたいね」

クラウド「行くぞ!」

チームC全員は先へと進んだ

……

クラウド「ん?あれは!おい!」

なんとかクラウド達チームCはドルク達と合流、ドルクは説明して  
チームCのみんなは石版をはめた

残るは後二つ

依頼58 それぞれの遠征くクラウドルートく(後書き)

アレン「なんとか進めたね」

炎丸「そうですね」

雷吉「俺達の活躍みちよったか」

はいはい、次回はミゲールさんルートです。

依頼59 それぞれの遠征〜ミゲールルート〜(前書き)

今回はミゲールさんルートです。

ドルク「それより更新早いな」

まだストックあるから更新できるよ

ドルク「マジで」

うん、それでは依頼59

デイン「いくヨー!」



貝刃蒼破！」

シエルマルも二つのホタチを使って防御したり攻撃したりと大忙し、ミジユマルから進化しているためさらに技に磨きがかかっている。

ギルガメス「何がなんだかな…フン！」

ギルガメスは大剣を振り回して次々と敵ポケモン達を倒していく

ミネラ「そうだよミゲールおじさん、しっかりしてよ〜タイダルウェイブ！」

グラデル「そうですよ、シードパニッシュ！」

ミネラは水の上級術、タイダルウェイブで大洪水を発生させて敵ポケモン達を一掃させる、敵ポケモンの地面から緑のエネルギーが現れて逆雨のように敵ポケモン達に襲い掛かる

アトリ「わかってる！ジャージョーブラスト！」

アトリはいつもの膝蹴りで敵ポケモン達を一掃した

ミゲールはいじけてのの字を書いていた

……

デイン「ここだよ」

どうやらここは地下に出たようだ、そこには

ミネラ「見て！石版だよ！」

目の前には石版があった

ギルガメス「これでなんとかなったな…ん？」

すると石版が光り出してレーザーみたいなのが先の壁にあたる、すると壁は開き、先に進めるようになった

グラデル「ここから先に行けそうですね」

アトリ「ほら行くぞクソ親父！！」

ミゲール「痛い痛い！！」

アトリはミゲールを引きずって、他のみんなも先へと進んだ

……

アトリ「おっ！ドルク！ソウ！」

ミネラ「パーパー！！」

チームBはドルク達と合流した

ドルク「おっ！アトリ達も無事だったんだな」

合流した後それぞれ説明をした

「ミネラ」とりあえずこの石版をはめればいいんだね

早速アトリ達は石版をはめた

これで後一つ

はたして！

依頼59 それぞれの遠征〜ミゲールルート〜（後書き）

アトリ「あゝあのクソ親父のナンパには呆れるぜ」

ドルク「ミゲールもタ シ化しちゃってるしな〜」

まあテイルズではスパードだしね（汗）次回は父（魔王）さんルートです。





これにピッケルは驚いた

父（魔王）「さて、行くか」

親子二人で先へと進んだ

……

父（魔王）「どうやら合流できたようだな」

なんとかこつちもドルク達と合流した

シルム「あれ？こつちは石版を見つけていないようだね」

父（魔王）「石版は何処だかわからなかったのな」

どうやらそう簡単に残り一つの石版を手に入れることは難しいようだ

まだ合流していないチームに任せるしかないだろう

依頼60 それぞれの遠征(父(魔王)ルート)(後書き)

ピッケル「今回は短いですね」

まあ短いのもあるよ、まだまだ連続更新続きます。

依頼 6 1 それぞれの遠征〜ジユク&パルサルト〜(前書き)

更新祭は続きます。

ジユク「ストックをためたな」

こうしないとね〜更新もなんか曖昧なんだよ

ジユク「そうか」

それじゃあ依頼 6 1

ジユク「油断するなよ」

依頼 6 1 それぞれの遠征くジユク&パルサルートく

一方こちらはジユク達四人のチームE

ジユク「ここはかなり古い遺跡のようだな」

ゼラス「敵も少ないようだな」

こちらは敵が少ないためか色々調べている。

壁や壁画など

デイシア「3人とも、これを見る！」

デイシアは壁画を指差す

レヴィ「何々？」

ジユク達は壁画の前に集まりだす

そこに書いていたのは黒い何かが書いてあった

ジユク「これは…」

ジユクは壁画に書いてある文字などを読んでみた

ジユク「『この島の呪いである』ガトルーヴァ』…この島は『ガトルーヴァ』によって島は呪いを受けた…それ以来この島に訪れ

る探険家は誰一人として帰ってこなかった』と書いてあるな」

どうやら呪いの事など色々わかったようだ

レヴィ「これはドルク達にも伝えないと！」

デイシア「一刻も早くドルク達に伝えないとな」

ゼラス「この島の謎もわかったことだ、急がないとやばいぞ！」

四人はドルク達の元へ

……

一方別の方では

パルサ「あゝ敵を倒しても倒しても出口が見つからねえ」

レイ「不思議のダンジョンですし、まだまだでしょうか」

グロリアル「そうだなゝとりあえず休憩するか？」

リユラ「賛成です。僕も疲れましたし」

こちらチームFの5人

みんな戦闘や歩き疲れたため休憩することに

シムーン「とりあえず麦茶を」

パルサ「ありがとな」

グロリアス「それにしても手がかりがねえんじやどうしようもないな」

こちらは手がかりや石版は見つからない様子だ

……

数分後

パルサ「それじゃあ行こうぜ!!」

なんとかみんな回復して立ち上がる、すると

ガコツ!

パルサ「へ?」

何処からか何かが流れる音がした、しかもパルサ達の先にだ…その先には

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

リュラ「水!?!」

グロリアス「おい!?!バカキアテメエ!!(怒)」

パルサ「うるせえ!!俺は知らなかっただけなんだ!!俺は悪くねえ!!」



いのか？」

パルサ「あ」

そう、パルサは水タイプも持っている。さらに空間の力を使えば水を消し去ることだって可能だ

パルサ「忘れてた！ったくやるしかねえ！！亜空切断！！」

亜空切断でなんとか水を消し去った

グロリアス「ふうー一時はどうかるところかと思っただぜ」

みんな安堵の表情をする

ジユク「安心して居る場合じゃない、ドルク達の元へ急ぐぞ！」

シムーン「こちらは何か進展があったんですか？」

ゼラス「話は後だ、行くぞ！」

合流した2チームは急いでドルク達の元へ！

依頼61 それぞれの遠征〜ジユク&パルサルート〜(後書き)

デイシア「貴様という奴は(怒)」

パルサ「だから悪かったって！」(汗)」

あゝあ(汗)次回はチャームズとクロールトです。

依頼62 それぞれの遠征くチャームズ&クロールート(前書き)

やっとストックがこれでなくなる…

「ミミロップ」よくやるわね

いや〜考えるのもやっとだし(汗)

クロー「ようやくワシ達だな」

はいはい、それじゃあ依頼62

クロー「やってやるぞ!!」

依頼62 それぞれの遠征／チャームズ&クロールート

一方こちらは

ミミロップ「ここはかなり古いようね」

チャームズの三人は敵ポケモンを倒しながら地下を搜索している。

もちろんここは暗いためかたいまつを持つての搜索となった

サーナイト「敵も多い感じもありますが他のみなさんは大丈夫なの  
でしょうか」

チャームズ「大丈夫さ、ドルク達ブレイブだってそう簡単にはくた  
ばらないだろうし」

ミミロップ「そうね ブレイブの二人も成長してかつこよくなった  
んだし大丈夫よ」

チャームズの三人は二人の成長を感じていた。

5年前、彼女達は一度冒険に失敗した

番人のポケモンに敗れてしまった。しかしドルクとシルムの二人に  
よって助けられ、そして協力して冒険を成功させたのだ

ミミロップ「だから今度はあたし達もがんばらなきゃ！」

他の二人は頷いて先へと進んだ

……

一方こちらの三人

シノ「クロー様、ここはかなり行きましたけど中々到着しませんね」

クロー「わ、わかつとる！」

クローは慌てて言う

シード「たしかに全然だな」

敵も倒してはいるが一向にここから出ていない

ちなみにそれぞれ不思議のダンジョンになっているため何処に出るのかわからない

クロー「だがお宝はワシ達のものだ！あいつらより先に見つけるぞ！」

シード・シノ「おー！！！」

お宝のことで頭いっぱいになった三人だった

……

こちらチャームズの三人はダンジョンから脱出して、大きな石版の

前についていた。

「ミミロップ」こう見ると持ち運べる感じではないわね」

大きな石版には色んな文字などが書かれている。だがかんじんの石版が何処にあるのか、三人は何かあるかどうかを調べる、すると

サーナイト「これは？」

サーナイトは何かを見つけたようだ

すぐさま二人を呼んだ

チャーレム「これは扉のようだね」

すぐに開けてみた、そこはさらに地下へと続く階段があった

「ミミロップ」行ってみよう」

すぐにその階段を降りた

……

その頃クロー達は

クロー「うぬぬ…いつまで目的地に着くんだ！」

不思議のダンジョンで迷うクロー達



なんと石版があつたのだ、チャームズは石版を手に入れ部屋にあつた通路へ行った

……

ミミロップ「あ！みんな！」

ドルク「チャームズ達もこれで合流だな」

なんとかみんな合流できたが、その前にジユク達とパルサ達とも合流して、話したところだったのだ

ジユク達もこの島の事をチャームズの三人に伝え、先に行こうとするが

ノコタロウ「クロー達は来ていないですね」

クロー達はまだ来ていないようだ

ドルク「そのうち来るだろう、行こうぜ」

ミゲール「サーナイトすわぁ〜ん！！」

アトリ「いい加減にしるやくソ親父！！」

再びミゲールの叫びが木霊する。

チャームズが持っている石版をはめると6つの石版が光り出して、扉が開いた

ドルク「この先にお宝があるかだな」

シルム「気を引き締めて行こう！」

ソウ「がんばりましょう師匠！」

クレス「でも油断しないようにしよう」

ミント「行きましょう！」

リードン「最後まで何があるかわからねえからな」

ジュティア「もちろんよ！お宝は絶対に手に入れてやるんだから！」

デビー「もちろんツス！」

ミゲール「やってやるぞ！」

デイン「どんなのかワクワクだよ」

アトリ「気合入れていかねえとな」

シエルマル「（この遠征で親方様に見せつけないと！）」

ギルガメス「油断は禁物だ、心して行くぞ」

ミネラ「パパと一緒にがんばる！」

グラデル「この先嫌な感じですよ。気をつけていきましょう」



グロリアス「ああ！ぜってえな！！」

レイ「兄さん達がいる、それでも行きましょう！」

リユラ「油断しないようにしましょう」

シムーン「なんとか合流できたのですから何があっても私達は最後まであきらめません！」

全員が気合を入れて先へと入っていった

依頼62 それぞれの遠征くチャームズ&クロールト(後書き)

え、修正や色々と順序が違ってしまってますみません(汗)とりあえず修正などしてなんとかなので、ホントすみません(汗)

ドルク「これで先に行けるな」

果たしてどうかな？

ドルク「まだあるんだな？」

気づいたか(汗)

依頼63 ガトウルヴァ (前書き)

ついにこの遠征編もクライマックスに突入です!!

ドルク「よっしゃあ!絶対やってやるぜ!!!」

ついにボス戦です。では依頼63

ドルク「行くぜ!!!」

### 依頼63 ガトウルヴァ

ドルク達はこの島の最深部までやってきた

ここは自然があり、さらに天井が広く、上からは少しだが光が差し込んでいる。そして目の前には石版があった

ドルク「ここだな…さて最後の石版はなんて書いてあるんだ？」

シルム「読んでみるよ」

シルムは石版を読んだ

シルム「この石版を読んだ者へ、この石版の上を見ると呪文が必ず書いてあるだろう。しかし、気をつけたまえ…この島の呪い『ガトウルヴァ』が君達を襲うだろう。心してかかれだつて」

一体どういふことなのだろうか？

ドルク「つまりその『ガトウルヴァ』ってのがこの島の呪いの原因つてわけだな…ならそいつを消してしまえばこの島の呪いを解くことができるってことだな」

呪文を言えば戦闘になる。相当の覚悟が必要だ、もはやこれは最後の試練というのだろうか…ドルク達はそれでも覚悟を決めた

クレス「ん？みんな！上を見て！」

みんなが上を見た

すると石版の上から黒いモヤモヤとしたものが現れた…その黒いモヤモヤは姿を変え、人間のような姿となった

ドルク「こいつが『ガトウルヴァ』」

シルム「黒いようだね…」

ドルクとシルムが構えた

クレス「どうやらこいつを倒さないかぎりこの島の呪いを解くことができないようだね」

クレスも構える

他のみんなもそれぞれ構えた

ドルク「行くぞみんな!!」

全員『おおー！！！』

全員が一致団結した

それに反応したのか『ガトウルヴァ』が襲いかかってきた!

ドルク「エナジーバスター!!」

ドルクはエナジーバスターを放つ、しかしガトウルヴァはこれはいとも簡単に避けた、そこからドルクに向かって黒い炎を吐いた

ドルク「うおっ！」

ドルクは黒い炎をモロに食らった

ドルク「効いたぜテメエの炎」

ドルクはダメージを受けたが弱点なのにまだまだいけるようだ、だがガトウルーヴァはドルクに隙を与えない、さらに黒い手で突き飛ばそうとする。だが

バーン！

何処からか銃弾などがガトウルーヴァに当たった

クラウド「おっと！」

ソル「俺達を忘れてちゃ困るぜ真つ黒野朗（黒狂笑）」

シルム「ドルクはやらせないよ！」

クラウド、ソル、シルムの三人が銃を構えている。さっきのは彼等三人による発砲だろう、そこから

ソウ「よくも師匠を！！サウンドカッター（光）！！」

ソウがサウンドカッターでガトウルーヴァを斬りつけた、ガトウルーヴァは悲痛な叫びを上げて暴れる

ドルク「ビートフェンス！」

ドルクは地面を両手で叩きつける、するとそこから衝撃波がガトウルヴァの攻撃を防いだ

リードン「俺の実力…見せてやるぜ!!」

リードンは空を飛んで急降下してガトウルヴァを翼でうつでダメージを与える、だがそこから素早く方向転換してフレアドライブを繰り出しガトウルヴァに当てる、さらに急上昇してから炎をまとってガトウルヴァに向かって急降下した

リードン「行くぜ!これが俺の切り札だ!!業炎裂突撃!!」こっえんれつとつげき

急降下からの攻撃で地面にクレーターが付き、リードンが翼を広げ、地面に降り立つが少しひざまづく

リードン「へっ俺もあいつに追いつけたかもな…」

ポロポロになりながらもなんとか立ち上がる

ジュティア「お宝のため!あたしもやるわ!新緑の草の風、今こそ癒しを集え!ライフリーフチャージ!」

草の風が全員の傷を治す

リードン「傷が…治った」

ドルク「ありがとなジュティア」

ジュティア「べ…別にあなたにお礼言われなくても／／／」

ジュティアは赤くなる、もはやツンデレのようだ

だがガトウルヴァアは黒いビームを繰り出す

デビー「ここは俺に任せるッス！龍ブレス！」

デビーは龍ブレスを吐き出し、ビームを相殺した

デビー「行くッスよ！俺の奥義を！ドラゴンバースト！」

デビーは黒いエネルギー球体を吐き出しガトウルヴァアにダメージを与える

ガトウルヴァアは黒いモヤモヤになるそこからデビーに向かってくつつこうとする

ソル「やらせるかよ（黒狂笑）」

ソルはソウルイーターを発動していた。そしてGワイバーンを繰り出す

ガトウルヴァアは慌てて避け、人間のような姿になる

だがそこから

アレン・雷吉『バーンホルテックス爆雷！！』

アレン&雷吉の連携技、爆雷が繰り出され、ガトウルヴァアを感電させる、そこから

カガリ「ダークホール」

カガリはダークライ特有の技ダークホールでガトウルーヴァを眠らせる

カガリ「今だ！」

そこからノコタロウがハンマーでガトウルーヴァを叩きつける

ガトウルーヴァはたんこぶができた状態となった

チエスター「俺がしとめる！奥義！天威浄破弓てんいじょうはきゆう！！」

チエスターの秘奥義がガトウルーヴァに炸裂する

アーチエ「いでよ！創世の輝き、ビックバン！！」

アーチエは最強術、ビックバンで一掃させる、しかしまだガトウルーヴァは倒れなかった

ソル「まだ倒れねえのかよ！」

クラウド「今度は俺だ！超電磁砲レールガン！！」

クラウドが超電磁砲レールガンでガトウルーヴァを攻撃した、だがこれでも倒れない、ガトウルーヴァは全員に黒い雲を発生させた

するとみんなが苦しみだす





グラデル「花よ、私達に命の息吹を！グラデーションガーデン！」

ギルガメスのブラストバーン、ミネラの秘奥義が炸裂、そしてグラデルの回復の秘奥義によりみんな回復した

父（魔王）「父さんの拳は痛いぞパンチ！」

ネーミングセンスが長い父（魔王）のパンチでガトウルヴァアは吹っ飛ばす

ジユク「決めさせてもらうか」

ジユクはリーフブレードを繰り出してガトウルヴァアを斬りつける、素早い動きで斬りつけ、さらに斬りつけるそしてリーフブレードをクロスして斬りつけた

レビイはみんなの周りから草花を出現させ、みんなの傷を癒す

ゼラス「私も行くか…闇へと飲まれるがいい…ゴーストダイーン！」

漆黒の闇がガトウルヴァアを襲うが、ガトウルヴァアには闇は効いてないようだった

ゼラス「私では無理があつたか」

ゼラスは悔しがるが

デイシア「いや！まだまだ！行くぞミント！」

ミント「はい！これ以上させません！」

すると時間が止まる

デイシア「これぞ神のなせる技……」

ミント「タイムストップ！」

二人の秘奥義、タイムストップでガトウルヴァアの動きを止めた

デイシア「今こそ時のおさめし私の力……タイムパッション！」

さらに何処からか青いエネルギーが一斉にガトウルヴァアを襲う

パルサ「済むと思うなよゴラア！亜空連斬！！消し飛びやがれえ！！」

パルサは両腕で亜空切断を剣のようにしてガトウルヴァアを斬りつけた、さらにレイはブレイズキックで動きが止まっているガトウルヴァアを吹っ飛ばした、すると時間の拘束がなくなり動けるようになる。だがグロリアルはドラゴンダイブ、リユラは龍の波動でガトウルヴァアを地面に叩きつけた

ガトウルヴァアはまた黒いモヤモヤになるが

シムーン「もうその手は通じませんよ……月光の光よ……かのものに光かのものに罰を……ムーンオブリン！」

月の光がみんなを照らし出し、みんなを回復する、だがガトウルヴァアにとってはダメージを与えた

ガトウルーヴァはすでにボロボロになっていたが最後まで悪あがきを見せようとするが

サーナイト「サイコキネシス！」

チャールム「はっけい！」

ミミロップ「ピヨピヨパンチ！」

チャームズの三人がガトウルーヴァの動きを封じた

ミミロップ「今よ！」

シルム「いくよ！これがオイラの力…燃える炎は心の力！！炎撃舞えんげきぶ荒拳こうけん！！！」

シルムは素早く連続でパンチとキックの連続攻撃を繰り返す、そこからさらにレウスバーニストを使って連続で炎の弾を連発した。

シルム「これで決めるよ！！鳳凰降下斬ほうおうじゆうかざん！！！」

炎をまとい、鳳凰の形に生成し、そこから剣を挿んで急降下して斬りつけた

シルム「ドルク！」

ドルク「任せろ！！！」

ドルクは光をまとった

ドルク「俺の本気見せてやるぜ!!」

ドルクが連続で攻撃、ガトウルヴァアから炎が出たり風や水など様々な属性の攻撃となりダメージを与える、属性はドルクの攻撃からきた、そう、これこそ連続で攻撃できる秘奥義

ドルク「震天裂空斬光旋風滅碎神罰割殺撃!!」

さらに続けてドルクはトドメがくる

ドルク「俺の歌に刻まれな!!ハードロックメドレー!!」

巨大な音符や音波そして色んな色の音符がガトウルヴァアを襲った

ドカ-----  
-----ン!!

爆発が起こり煙が立ち込める

するとガトウルヴァアは倒れていた

すると石版が光を灯っていた。

そこから次々と文字が現れた

シルム「ドルク」

ドルクは頷いて前に出た

ドルク「炎は熱き力…水は静寂する透き通る力…大地は轟く溢れる力…風は自由を求めし流れる力…今ここに…呪いを解けんことを…」

するとさきほど扉に設置した石版がウヨウヨと光輝く石版に向かって光を放つ…7つの光が一つとなって島全体を包み込んだ

…

光がおさまるとそこは元の場所…砂浜に戻っていた。太陽が昇って光を浴びる

ドルク「どうやら今回は成功だったな」

シルム「そうだね」

お宝は見つけなかったが

ドルク「ん？」

ドルクの足元には緑のペンダントが落ちていた

ドルク「そうでないかもな…」

ドルクはそのペンダントを首につけた

ミミロップ「あっ！」

ミミロップは何かを見つけた

それは水晶のようだった

チャーレム「水晶のようだね」

サーナイト「綺麗ですね…」

彼女達もある意味お宝が手に入った感じだった

依頼63 ガトウルヴァ（後書き）

ドルク「なんとか勝てたな」

みんなの絆が闇を打ち砕いたんだよ

シルム「そうだね、みんなが力を合わせればどんな困難をも乗り越えられる…オイラ達はそれでもね」

そう、次回は一部の人達以外別れとなります。

ドルク「誰が別れるんだ？」

それは見てのお楽しみ、次回の依頼64で遠征編も終わりになります。

依頼64 それぞれのお室と別れ（前書き）

ついに別れの時です。

ドルク「一体誰が」

それは見てからの楽しみ…ついに遠征編クライマックス！依頼64

ドルク「またな…！」

依頼64 それぞれのお室と別れ

アレン「ん？これって！？」

カガリ「どうしたアレン？」

アレンは何かを見つけたようだった

アレン「先生！これって」

それは金の塊だった

カガリ「これは金塊のようだな…相当な金額になりそうぞぞ！」

アレン「やった！！先生！私達やりましたね！！」

二人は喜ぶ

その様子をクレスは見ていた

クレス「（なんだろう…カガリさんがあの人に見えるような感じがする…あの声もあの人と同じ声だったし）」

カガリが彼の仲間である召喚士と重なって見える感じがクレスに感じた

シルム「これはなんだろう？」

シルムは本を見つけた、それは少し分厚く、赤かった…シルムはその本を読んでみた

シルム「これって!？」

アーチエ「これ呪文書じゃない!？」

なんとそれは呪文書だった

シルム「しかもこれほぼ読めば覚えられる呪文書のようにだね、かなりの数の呪文が書いてある」

呪文書は主に一つの書で一つしか術を覚えることはできない…しかしシルムが拾った呪文書はかなりの数の術がかかれていた。

シルム「これでオイラも術が使えるかな…」

シルムは呪文書をぎゅっと掴み、トレジャーバックに入れた

ソウ「僕のは…これはなんでしょうか？」

ソウが見つけたのは五星陣のペンダントだった

ミント「それはミスティンボルです。呪文詠唱を早めることができるアクセサリですよ」

どうやらこれはアクセサリのように呪文詠唱を早める効果を持っているようだ

ソウ「それじゃあもらっておきます」

ソウはミステイシンボルを首につけた

ドルク「似合ってるぜソウ」

ソウ「ありがとうございます師匠」

ミステイシンボルが太陽に反射し、輝く

クレス「これは!？」

クレスは何かを見つけた、それは緑色に輝く剣だった

クレス「まさかエターナルソードがあるなんて」

エターナルソードとは時空の力を持つ剣、特定の者にしかその力を使うことはできないのだが

クレス「なんだか力が発揮していないみたい…」

エターナルソードは少し輝きが弱まっていた。クレスはエターナルソードを持った

再びこの剣を持つことになるなんて…クレスはエターナルソードと一緒にあった鞘にしまった

ミント「これは？」

ミントは不思議なペンダントを見つけた

透き通った透明の宝石は綺麗だった、ミントはそのペンダントを拾って自分の首につけた

リードン「ん？これはグローブに木の実がたくさんだな」

リードンにはボクシングで使うグローブだがかなり新しいようで、さらに木の実が入った袋に木の実がたくさん入っていた。さらになんなものまで入っていた

リードン「これはグミか？なんだか形が違う感じだな」

グミが入っていた。グミはそれぞれ丸みを帯びた形だった、それぞれ赤や黄色、さらには桃や紫の色取り取りのグミがそろっていた。

リードン「まあこんなお宝悪くねえかもな」

笑顔でリードンは袋を担いだ、持ってみると軽い感じがした。

リードン「成長したんだな俺…」

リードンは重い物を軽く持ち上げることができた…リードンは成長したのだ…努力が実ったのだから

ジュティア「あたしのは…これは水晶とか金塊とかすごいお宝だわ！…」

ジュティアは喜んだ、数え切れないほどの水晶に金塊、そして金貨などの価値にあるお宝を手に入れた

これで孤児院の子達を養えるほどの大金となっただろう…

ジュティア「これで色々立て直すことできるわ…」

ジュティアは嬉しく涙を流す

ドルク「よかったなジュティア」

ドルクが彼女を慰める

ジュティア「ありがとう…あんたのおかげかもね…あんたを見た時は…あたしもあんたが好きだったかもしれない…」

するとドルクは突然ジュティアを抱きしめた

ジュティア「!?!」

ジュティアは赤くなった

ドルク「俺も…お前は口悪い感じもあるが悪くはねえぜ…こっちはありがとな…」

ジュティア「べ…べべべ…別に…あんに感謝された覚えはな…ないわノノノノ」

すでにジュティアの顔がリンゴのように赤くなった

デビー「ご主人はすごいツスね」

そんな様子をデビーは見ていた

デビー「俺もいい物見つけたッス…」

デビーが口に挿んで持っているのは本だった

そこにはこう書かれていた。

『技集』と

そしてデビーの首には剣を模ったペンダントがついていた。

クラウド「金塊が手に入ったな」

レイ「僕もだよ兄さん」

二人は金塊を手に入れていた。どうやら少しでかい感じだった

ソル「こっちはすげえ！」

ソルは黒いペンダントと金塊を手に入れた

ソル「これでチョコサンデーがたっぷり食える！」

ソルがガッツポーズをとる、金塊で大好物のチョコレートサンデーをたっぷりと食いたい感じだ

ギルガメス「俺も金塊のようだな…ここは本当に宝島のようなだが…なぜ呪いが解けてこちらへんに宝が…しかも大体の者達が別々にお宝を手に入れている。一体どうしたことなんだ？」

ギルガメスは疑問に思っていた。この宝島の呪いが解けた…そして

今砂浜にいた。だがそこにはそれぞれお宝があった

なぜお宝などがこの辺に散らばっていて、みんなのところにあるのか？

ギルガメス「まあお宝つてものは手に入ったからいいか」

ギルガメスは疑問に思いながらもお宝を手に入れたので少し喜ぶ

チエスター「おっ！エルヴンボウじゃねえか！？なぜこんなところに」

アーチエ「あたしはスターブルームじゃん！？」

なんと二人にとっての武器が落ちていた。エルヴンボウはエルフの魔力を込めた矢、スターブルームは星を模った飾りをつけたホウキだ

チエスター「まあ受け取っておくか」

アーチエ「なんか納得できないけど、まあいつか」

二人はそれぞれの武器を掴む

ミゲール「おお！俺は金塊と幻のエクスカリバー！！」

ミゲールは目を輝かせエクスカリバーに触れる

ミゲール「これはいい！これで俺は」

クレス「父さん、それ偽者だよ（汗）」



シエルマルは青く輝く透き通った双剣を掴んだ

シエルマル「俺もこの剣は何か感じるかも……」

シエルマルは二つの剣を腰にそえた

ミネラ「僕はお菓子だ！」

グラデル「私は花の種と木の実です！」

ミネラはたくさんのお菓子、グラデルは花の種と木の実のセット

父（魔王）「うんしょっと！」

父（魔王）はこれほどまでないほどの金塊だった、ただでかいため軽々と持ち上げてしまった

ピツケル「結局は金塊で僕は（泣）」

ピツケルも金塊なのだが少ししかなかった

ジユク「俺は剣のようだな」

レビィ「私は杖よ」

ゼラス「私は魔術書のようだな」

ジユクは緑の剣、レビィは桃の杖、ゼラスは黒い魔道書を手に入れた

ディシア「これは？」

パルサ「なんか俺たちと同じ感じだなこれ」

デイシアは青いオーブ、パルサは桃色のオーブだった、さらにデイシアはタイムシールドと呼ばれた石版、パルサはエアブレードと呼ばれた爪のようなものを手に入れた

デイシア「まさか私達専用の道具が出るとはな」

パルサ「うっしやあ！」

他、グロリアルはマツハスカーフ、リユラはまぼろしのマント、シムーンはみかづきのベールを手に入れた

ノコタロウ「おっ！私はゴールデンハンマーだ！」

ノコタロウは黄金に輝くハンマーを手に入れた

ノコタロウ「叩くのもつたいない感じもあるが…これはすばらしい」

もはやうっとりとしていた。一方のクロー達のは

クロー「ワシのは木の実はいい」

シード「俺は種いっぱい」

シノ「わいは不思議玉いっぱい」

なぜか木の実と種と不思議玉各種だった



クラウド「ああ！」

二人は握手した、信頼できるからまた会える…仲間がいるからまた会える…

ドルク「いいか、お前は一人じゃねえ…俺もいる…また何かあったら…遊びに来いよ」

クラウド「ありがとな！」

レイ「それではみなさんさようなら！」

クラウドとレイはワープした

アレン「ホントにありがとう！」

カガリ「世話になった」

今度はアレンとカガリの二人だ

ドルク「俺達も楽しかったぜ」

シルム「また遊びに来てね」

アレン「うん！絶対にまた会える日を！」

カガリ「元気だな…お前達二人もがんばれ…俺達は離れていても見守っているぞ」

雷吉「さよならじゃけんドルク、シルム」

炎丸「さよならです。ドルク様、シルム様」

アレンとカガリ、そして雷吉と炎丸は黒いワープホールへと消えて行った

ギルガメス「ホントに世話になったな」

シルム「ギルガメスさんありがとうございます」

シルムはギルガメスにお礼を言った

ソル「ドルク…お前のおかげで俺も色々と学ばせてもらったぜ…」

ドルク「ああ、俺もお前に学ばせてもらったかもな」

互いに目を合わせる

ソル「また何処かで会おうな…あとであいつにもシルムの事よろしく言うておくぜ」

シルム「うん、お願いね」

ドルク「今度会った時はまたバトルしような！」

ソルとギルガメスは手を振って魔法陣の中へと入った、魔法陣は光輝きソルとギルガメスを包んで消えていった

ノコタロウ「ホントにお世話になりました」

ノコタロウはおじぎをした

ドルク「何、俺達も探検隊としてのことをしたまでよ」

シルム「ノコタロウさんもお元気で」

ノコタロウは少し涙を流す

ノコタロウ「そう…ですね…」

すぐにハンカチ（火耐性のある）を取り出してゴールデンハンマーを持ったままクロー達に向く

ノコタロウ「さあてお前達を元の世界に戻すぞ」

クロー「あゝやっと戻れる」

しかしクロー達にとってはもはや苦手なアレでの帰還が

ズポッ！

クロー・シード・シノ『うわっ!?!』

それは大砲だった

クロー「まさか作者!?!」

ノコタロウ「それじゃあ先にいってらっしゃい」





リードン「ああ！ありがとな！ドルク！シルム！」

リードンはパワー系の重りをつけたまま空へと飛んでいった

ドルク「行っちゃったな」

シルム「みんなそれぞれ違うお宝だけど…一番はこの達成感だね」

そう、彼等は手に入れたお宝よりもっといいお宝を手に入れていた。それは

ドルク「俺達仲間の絆だ」

たとえ離れていても、彼等は繋がっている。どんな時でもみんながいる。みんな世界は違ってても心は繋がっている。

ドルク「クレス達はどうするんだ？」

残ったクレス達は

クレス「うーん、エターナルソードが今発揮していない感じだから残るよ」

どうやら残るようだ

色々謎があるのだから

ドルク「それじゃあ俺達も帰るぞー！」



依頼64 それぞれのお室と別れ（後書き）

ドルク「あゝやっと終わったぜ！」

シルム「ホントよかったよ」

コラボしてくださいましたスイツクンさん、クラウドさん、ハボックさん、Renさん、ノコタロウさん、sibugakiさんどうもありがとうございました！！

ドルク「ミゲール達が残っているが？」

シルム「ソウはまだいるみたいだね」

まあソウ君もそのうちだし、ミゲールさん達を残したのは次の新章にかかわることになるから

ドルク「それに最後の奴は誰だ？」

それは新章に入ってからのお楽しみだよ

シルム「不安だけど（汗）」

そんな次回は新章突入です。

依頼65 二人の龍の卒業試験と再会（前書き）

はい！新章突入なのですが

ドルク「ですが？」

今回は再びあの作者さんの登場とさらに卒業試験です。

シルム「ああ、あの二人のね」

その二人とは…依頼65

ドルク「いつてこいやー！」

## 依頼65 二人の龍の卒業試験と再会

遠征から数ヶ月…

ここはいつも平和なトレジャータウン、今日も太陽が照りつける

そしてここには二つのギルドがある

一つは有名なプクリンが収めるギルド、プクリンのギルドがある。

このギルドはあの有名な探検隊を卒業させた有名なギルドなのだ

そしてもう一つのギルド…プクリンのギルドを卒業した二人のチー

ム…その名はブレイブ…この世界の時と空間を救った探検隊なのだ、そのブレイブのギルドがサメハダ岩にあるギルド…『ブレイブ』

そんなブレイブのメンバーは遠征から帰ってきて色々と調べたりや依頼をこなしたりしていた。そんなこの頃…

……

ギルド1F ギルド食堂

そこにはみんなが集まっていた。

今現在ギルドにいるのは親方であるドダイトスのドルク、副親方であるゴウカザルのシルム、別世界から来て、ドルクの弟子である銀イーブイのソウ、このギルドの弟子になってまだ数ヶ月しか立っていないフタチマルのシエルマル、ドルクの義理の息子、マナフィの

ミネラ、そして弟子達であるクレセリアのシムーン、シェイミのグラデル、ガブリアスのグロリアス、カイリユールのリュラ、ドルクのペットであるイビルジョーのデビー

元お尋ね者ジュカインのジュティア、ディアルガのディシア、パルキアのパルサ、元ドルクのパートナーであるジュカインのジユク、セレビイのレヴィイ、ヨノワールのゼラス、さらにこっちは別世界から来た、ヨーギラスのミゲール、タツベイのアトリ、トゲチックのデイン、ミゲールの息子であり、テイルズ初代主人公であるガバイトのクレス、法術師であるタブンネのミント、クレスの親友であるゾロアークのチェスター、ハーフェルフであるが今ポケモンのエモンガのアーチェの23人だ

今回は何かあるらしい

グロリアス「ついに俺とリュラは卒業試験を受けるんだな」

ドルク「ああ、ここのお前等もよくやってくれたからそろそろかと思ってな」

どうやらグロリアスとリュラの二人の卒業試験らしい、なので二人に緊張が走る

リュラ「でも僕達は絶対に試験に合格する!」

リュラがめずらしく気合が入っていた。

ドルク「まあ二人とも…がんばれよ」

グロリアス「ああ」

リュラ「はい！」

二人は返事をする

ドルク「では卒業試験の説明をするぞ」

ドルクは卒業試験の説明をした

卒業試験はAランクのお尋ね者バンギラスを捕まえることだ、場所は闇の火口らしい

ちなみにバンギラスはかなりの凶暴らしく、他の探検隊はてこずっているために『ブレイブ』から依頼が来たのだ、ドルク達は色々やる必要があるためできないらしく、今回は二人に依頼を頼んだ

グロリアス「よっしゃあ！なら行くこうぜ！」

グロリアスは勢いよく飛び出した

リュラ「ちよっ！？ちよっと！？勝手に行ってちゃだめだよ！」

リュラも追いかけるように行く

ドルク「あいつらなら大丈夫だろうな」

するとそこから

「?????」おっい！

なんとルカリオが入ってきた

ドルク「クラウド！？お前帰ったんじゃないのか？」

なんとクラウドだった…でもなぜここに来たのか？

クラウド「レイは別の方で頼んだ、俺はこっちで色々やりたいたいとあるからまたよろしくな」

シルム「よろしくクラウドさん」

みんながクラウドを再び歓迎する。

クラウド「そういえばあの二匹のポケモンは何処に行ったんだ？」

クラウドは二匹のポケモンがどうか言った、どうやらさっきグロリアスとリユラとすれ違ったようだ

ドルク「ああ、あいつら二人は卒業試験だ、お尋ね者を捕まえにだな」

クラウド「へえ、そうだったんだな」

クラウドは納得した。

ドルク「まあ俺はクレスのエターナルソードとかなど色々遠征の事で疑問になったことを調べていてな、クラウドも手伝ってくれないか？」

クラウド「わかった、俺も手伝うよ」

クラウドも手伝うことに

……

闇の火口

グロリアス「あちい」

リユラ「ここは本当に熱いね」

二人は闇の火口に来ていた。やはりドラゴンタイプでも暑さは感じているようだ

闇の火口は火山が活発な地域、炎タイプのポケモンはマグマなどの影響は受けませんが他のタイプだと地形ダメージやマグマにのれば火傷などでダメージを受けてしまうのだ

グロリアス「龍破爪斬りゅうはつせん!!」

リユラ「ハートレスサークル!」

グロリアスはドラゴンクローを振りかざして相手を地面に叩きつける、リユラはグロリアスを回復させる、彼女は最近法術…つまり治療術を覚えてきたのだ

ポケモンの技には相手を回復する技もある…しかし問題は自分を回復できても味方を回復する技が少ないのだ、タブンネのように『癒

しの波動』などの技を覚えていれば話は別なのだが、ポケモンの技も色々とあるのだ、リュラは回復系…治療術を覚えるようにはなった、ここまで彼等も遠征から数ヶ月…卒業できるほどの実力はついてきたのだから

グロリアス「いや〜助かったぜ」

リュラ「ううん、僕もミントさんに法術覚えてなければできなかったしね」

それぞれ教えてくれる者もいる。探検隊はただ探検するだけが仕事じゃない…人を助けることやお尋ね者を捕まえるなど、探検隊はすでに危険と隣り合わせの仕事なのだから

グロリアス「そうだな…さて行こうぜ、バンギラスをぶっ潰しによ！」

リュラ「うん！」

二人は闇の火口を進んでいった

…

闇の火口最深部 奥底

闇の火口の最深部、ここは5年前にドルクとシルム…そしてシムーンがダークライと戦った場所だ

ここは今でも火山が噴いてきたりもあつた、そんなところに二人は到着した。さらにそこには一匹のポケモンがいた

全身がトゲの突起を覆っていて、さらに目つきは悪く爪も鋭いポケモンだった。このポケモンこそ今回の標的ターゲットであるバンギラスだ

バンギラス「なんだあゝテメエ等は？」

グロリアス「テメエがお尋ね者のバンギラスだな？」

リユラ「大人しく僕達に投降してください」

二人の龍は構える、だがバンギラスは笑う

バンギラス「ハッハハハハハハ！投降だど？やれるもんならやってみな！！」

バンギラスは二人に襲い掛かる

依頼65 二人の龍の卒業試験と再会（後書き）

グロリアス「おい作者！なんでここで終わるんだよ！」

はいはい、次回からバトルなんだから落ち着け

リユラ「たしかにそうだね…それにしてもクラウドさんが来るなんてね」

本人が再び出たいときたから出演したけどね（汗）

ドルク「これは楽しみだぜ」

今回は二人の龍が活躍します

依頼66 二人の龍の絆（前書き）

ついにバトルです。

グロリアス「やってやるぜ！」

リュラ「僕達は負けない！」

それでは依頼66

グロリアス「燃えるぜ！」

## 依頼66 二人の龍の絆

バンギラス「ストーンエッジ！」

バンギラスはストーンエッジを繰り出す。狙いはリュラだ、リュラはドラゴン・飛行タイプ…氷なら大ダメージを受けてしまうがそれだけじゃない、ストーンエッジは岩タイプの大技、当たれば2倍のダメージがリュラにきてしまうのだ

だがストーンエッジははじかれた

なぜならリュラの前にはドラゴンクローで技を相殺した一匹のガブリアス…グロリアスが立っている。

グロリアス「テメエ…何狙ってきてんだよああ？」

グロリアスの目つきが鋭くなった

バンギラス「チッ！ならテメエからやってやる！破壊光線！！」

バンギラスは破壊光線を繰り出す

グロリアス「そんな攻撃当たるかよ！」

グロリアスとそして後ろにいたリュラは破壊光線を避けた、そこからグロリアスはドラゴンクローでバンギラスを攻め、リュラは術を詠唱する。

グロリアス「蒼破刃！」

グロリアスは青い衝撃波を放つ

バンギラス「その程度！」

しかしバンギラスは右腕を使ってはじいた、さすがはAランクのお尋ね者だ

だがそれはただの囷にすぎなかった。グロリアスはさらに爪を構えて連続でバンギラスを切り裂く、だがバンギラスの硬い鎧の体はそう簡単にダメージは通らない

バンギラス「調子に乗るなよ雑魚が！」

太い腕でグロリアスをなぎ払った

グロリアス「ぐわっ!？」

グロリアスは吹っ飛び岩にぶつかる

バンギラスは今度はリュラに迫る、リュラは今詠唱中だ…このままいくとリュラは攻撃を食らってしまう…もはやピンチに陥る

だが

カキーン!

バンギラス「チッ!しぶてえ〜な〜雑魚の癖して」



バンギラスははじかれて体勢が崩された、だがグロリアスは隙を見逃さない

さらにドラゴンダイブで腹に当てる

バンギラス「ぐおっ!？」

バンギラスは吹っ飛ばされ岩に激突

バンギラス「貴様等!!！」

バンギラスは怒り状態になる。

リュラ「真空の刃よ!切り裂け!ウインドスラッシュ!」

真空の刃がバンギラスの動きを止める

グロリアス「龍爪じゅうすづね連牙!!！」

さらにグロリアスはドラゴンクローを連続で繰り出してバンギラスにダメージを与える

バンギラス「ぐ…このまますむとおm」

言う途中で地面が揺れてバンギラスはバランスを崩した

リュラ「聖なる槍よ…彼の者を貫け!ホーリーランス!!！」

数個の光の槍がバンギラスの動きを封じた



ドルク「このエターナルソードがなぜ力が弱っているかだな…  
ディアの力でどうにかできないか？」

こちらはクレスのエターナルソードの事で考えている。そこでドルクはディアの時の力でなんとかならないかと考案した

ディア「ならやってみよう」

ディアの胸にある金剛玉が光りだす、それと同時にエターナルソードが光だし少しだが輝きが戻ってきた

ディア「これ以上は限界だな…この剣に時の力を注ぐのは逆に私にも負担がかかる…まだこの剣の力を取り戻すにはまだまだ時間もかかる…もしくは同じ時の力を持つ者がこの剣を作った者でないとだめだな」

どうやらこの剣…エターナルソードには相当な力があるためかディアの時の力を分けてもディアには負担をかけてしまう

シルム「この剣…時空の剣だからこれはクレスさん達の世界に行った方がいいかもしれないね」

たしかに、エターナルソードは時空の剣…そうなるとクレス達の世界に行くしかないのだ

クレス「そうかもしれないね…とりあえずもう少し調べてから行った方がいいかもしれないな」

ミント「そうですね…ディアさんの時の力だけではまだ足りない

感じみたいですし…でも力が少し戻っただけで進展したからよかったと思いますよクレスさん」

ミントのいうとおり、エターナルソードはディシアの時の力も込められているのでなんとか少し力は戻っているようだ

クレス「そうだね」

ミゲール「あゝあ、俺もエターナルソードぐらい使えればな」

ミゲールは羨ましがる

……

一方、こちらは何処かの森

?????「感じる…どうやら元凶はあっちだな」

そのポケモンは空を飛んでいた。そしてそのポケモンが見る方向にはトレジャータウンが

?????「世界樹の精霊にも影響が出ている…なら…」

そのポケモンは赤と青の小さい球体がまとっている。そしてそのポケモンは…

ダークライだった

……

ドルク「おっ！やったな！」

グロリアス「ありがとな！」

こちらギルド『ブレイブ』ではバンギラスを逮捕した二人の卒業を迎えていた。

シルム「二人とも、よくがんばったね…おめでとう」

シルムは花束を二人に渡す

リュラ「ありがとうねシルム」

二人は嬉しくなる

ジュティア「まあこういうのも悪くないわね」

ドルク「これからも離れていてもがんばれよ」

どうやら二人は卒業してから二人で別の大陸に行くようだ

グロリアス「それじゃあな」

リュラ「お世話になりました！」

こうして二人は卒業して別の大陸へと旅立った

彼と彼女もきつと

立派な探検隊になるだろう

## 依頼66 二人の龍の絆（後書き）

ついに二人は卒業です。

グロリアス「一時はどうなるかと思っていたけどな」

ドルク「まあよかったぜ、こっちでもがんばれよ」

リユラ「はい！」

ちなみにリユラは です。

と知っている方もいますが ですので

シルム「でも最後のダークライは誰？」

それは後からね、次回はそのダークライと…さらにとある作者さんがポケモン化して登場します！

依頼67 とあるランターンと襲撃（前書き）

ドルク「なんだこのタイトルは？」

今回急展開なことになります。そしてとある作者さんの登場です。

クレス「一体なんだろうね？」

では依頼67

クレス「僕はダオスを倒す！」

寒い…

## 依頼67 とあるランターンと襲撃

次の朝

ドルク「あゝ今日も平和だな」

シルム「そうだね」

二人はいつものようにランニングをしていた。

グロリアスとリュラの二人のドラゴンポケモンはすでに旅立っていたのだから

シルム「グロリアスとリュラがない分、がんばらないとね」

ドルク「そうだな」

二人はギルドへと戻った

……

いつものように朝の朝礼が始まった

ドルク「グロリアスとリュラがない分、今日からみっちりがんばるぞ！」

全員「おおー——————  
！——」

全員が元気に声を出す。すると再び警告音が鳴る、入口に一匹のポケモンが入ってきた。

あんこのような体に頭にはちょうちんのような黄色いものがぶらさがってついている。ライトポケモンのランターンだ、そのランターンはさらに頭に青い『k』と書かれたバンダナをつけていた。

ドルク「ん？依頼人か？」

ドルクがそう言う、このギルドの中には直接依頼を頼む依頼主もいるのだ…それぞれ緊急の時などそういうケースがあるのだ

ランターン「いいえ、僕はこのギルドに入りたくて来たんです。あつ僕はkと申します。4649お願いします。」

と、笑顔でランターン…kは言う

ドルク「そうか入りたいのか…まあいいがそういえばお前何者なんだ？」

ドルクがkというランターンに何かを感じていた。

k「はい、僕は作者でとある作者さんに頼んで来たんです。僕をポケモンにする条件で」

どうやらとある作者によってこちらの世界に来たらしいさらに知っている人も

クラウド「あつ！kさん！」



きない！お前達も早く！」

どうやらかなりやばいことになったようだ

ドルク「つまりマジやばいデンジャーな感じか？」

ペラハ「なんだよそのマジやばいとデンジャーって！！ってかお前はどごぞのギャルが！！（怒）」

と、ドルクにキレツッコミをした。

シルム「何かあったんだ！」

クレス「行こう！」

みんなは急いでトレジャータウンへ

……

トレジャータウン広場

そこには他のポケモン達が倒れていた。さらに店はボロボロで半壊状態と倒壊状態が多かった

その広場に一匹のダークライはいた。そこにドルク達が駆けつけた

ドルク「みんな！」

すぐさまみんなの手当てをする。ドルクとシルムはダークライの前に

ドルク「お前はダークライ！なぜここにいるんだ！」

ドルクはそう言う

5年前：未来を暗黒に変えてさらにドルクを記憶喪失にした張本人  
…それがダークライなのだ

ダークライ「ほう、この姿がダークライというのか…」

ドルク「？」

だがダークライはまるで初めて来たような口ぶりだった

シルム「どうなってるんだ？」

シルムも首をかしげる

ドルク「お前は一体誰なんだ！」

ドルクが叫ぶ

ダークライ「私の名はダオス…」

そのダークライはダオスと名乗った、するとその場にいたクレス達  
ファンタジア組とミゲール達がドルク達に駆け寄る

ミゲール「まさか!？」

クレス「ダオスまでポケモンになった…でも僕達が倒したはず」

ドルク「知り合いか？」

クレス達がドルクの質問に頷く、どうやらクレス達はこのダオスというダークライの事を知っているらしい

クレス「こいつは時間の影響を受けないんだ、だけど魔術や僕の持っているエターナルソードで傷つけることができる…でもなぜお前がここに！答える！ダオス！！」

クレスは怒鳴るように言う、今のクレスは怒ったような顔をしていた。

ダオス「ほう、まさかお前達もこの世界に来たのだな」

ミント「なぜあなたはここを襲ったのですか？なぜ！」

ミントは悲しい顔でダオスに質問する。

ダオス「それは…」

ダオスがドルクを指す

ダオス「お前達は知らぬが、お前達の世界はすでに人間はポケモンとなり、そしてマナが枯渇しつつあるからだ！」

ドルク「どういうことだ？」

ドルクが質問するが







依頼67 とあるランターンと襲撃（後書き）

はい！作者さんのkさんが出演です。

kさん、呼び捨てに言ってますみません、物語上どうかもわからないので（汗）

ドルク「ってか作者！！一体何処に飛ばされんだよ！！」

シルム「しかもファンタジアのラスボスを出しちゃったの!？」

だってファンタジアメンバーいるんだしいいじゃん

チェスター「よくねえだろ！」

アーチェ「ってか何処に飛ばされるのよ！」

ミント「一体私達はどうなってしまんですか？」

クレス「嫌な予感がするよ」

今回はとある世界に彼等は行きます。

依頼68 トーティス(前書き)

はい！ついにとある世界に來ます。

ドルク「一体何処の世界だか」

それでは依頼68

ドルク「行くぜー！」

依頼68 トーティス

……

……お……き……

……起きて！……

……起きてよ！ドルク！

ドルク「ん……」

ドルクが起き上がった

ドルク「ここは……」

そこは何処かの草原だった

他のメンバーも起きている。

k「一体ここは何処なんだろう？」

みんなが辺りを見渡すと……

クレス「ん？あれは！？」

クレスは何か驚いた表情をしていた。なぜなのか？それは

ミント「あれは!?!」

ミゲール「トーティス村!?!」

ドルク達の近くに村があった、それもそのはずそこはクレス達（アーチェ以外）が住むトーティスと呼ばれた村だったのだ

シルム「トーティス?!?!まさかここは!?!」

クレス「僕達の世界に...」

アトリ「まさか戻ってくるなんてな」

デイン「ボゲール、本当に戻ってきたヨ...でも...」

ミゲール「姿はポケモンのままだ」

ドルクはダオスの言った言葉を思い出してみた。

.....

お前達は知らぬが、お前達の世界はすでに人間はポケモンとなり、そしてマナが枯渇しつつあるからだ!

.....

ドルク「（つまりこの世界になんらかの影響でクレス達の世界の間はポケモンになったってこと...だがわからねえことばかりだ...な

ぜダオスは俺を狙っているかだ……」

ドルクはわからなかった、なぜダオスはドルクを狙うのかだ

ドルクはクレス達の世界の住人ではない……ましてや彼はシルムの世界の未来から来た元人間だ

だがドルクには一つ心当たりがある……それは

ドルク「（そういえば俺は人間からポケモンになってから魔法とか使えることができるようになった……それに結構特訓してから魔法も思うように使えるようになった……でもそれだけであいつが俺を狙うとは思わないようだな……もしかしたらあいつは誰かの策略……つまり誰かに何か言われて俺を狙ったってことか？」

そう、ドルクは魔法が使えるのだ……ダークライがタイムスリップの時に当時ジュプトルだったジユクを、ドルクがかばって攻撃を受けてしまい……ドルクはポケモンになった……それと同時に彼に魔法が使えるようになった……だが他に魔法を使うポケモン中にはいる。ジュティアなどもそうだ、シルムはミントに法術を教わって回復の術をある程度使えることはできる。

ドルク「（考えてもしかたないな……）とりあえずここには何も解決しねえからクレスの故郷に行こうぜ」

ドルクの提案でみんなが頷いた、ブレイブ全員はクレスとチェスタの故郷であるトーティス村へと向かった

……

チエスター「ま、マジかよ!？」

クレス「町のみんなが…」

ミゲール「ポケモンになっちまってる…」

トーティス村に入ったブレイブ全員は目の当たりにした。それはこの村全員がポケモンになっていたのだ

シルム「とりあえずまずはこの村の人達に聞こう」

みんなはトーティス村のみんなに聞いた

……

数分後、みんなが集まった

ドルク「どうだった?」

ジユク「さっぱりだ」

k「どうやらこの村のみなさん全員はポケモンになったことを知らないようだったみたいです」

アーチエ「なんかみんな気づいてないというかみんな姿見ても違和感がなかったみたい」

みんなの情報によるとこの村の人達全員はポケモンになったことに気づいていなく…さらに変わりなく普通にしていた。技は使い方を

知らないためかみんな技は使っていないようだった。さらにみんなはポケモンになった違和感などを感じていなかったのだ、後はこの世界の単位はガルドだけでなく、ポケでも可能らしい

ドルク「そうなると気づいているのは俺達だけってことだな」

どうやらそうらしい

クレス「そうみたいだね…しょうがない…ここは僕の家に行こう、父さんもいいよね？」

クレスは自分の家に行こうとするが

ミゲール「え、あいつのところに帰るのか、俺は嫌だね！」

ミゲールは嫌がる

シエルマル「どうして嫌なんですか？」

シエルマルが質問した

ミゲール「だってあいつがいんだぜ？あいつに殺されるし」

????「誰が殺されるだって？」

ドルク達が振り向く、そこにいたのは一匹のポケモンがいた。透き通るような水色のモミアゲに結晶のような耳のポケモン、このポケモンはしんせつポケモンのグレイシアだ

シルム「あなたは？」



ミゲールの叫びがトーティスに木霊した。

依頼68 トーティス（後書き）

ドルク「トーティスか…結構いい村だなクレスのとは」

まあクレスの住んでいる村だからね、もちろんチエスターもただけど、なりダンX設定もあるから大体いる人物もかぎりがあるから

シルム「なるほどね」

依頼 69 法術師モリスン（前書き）

今回はあのキャラがポケモンになって登場です。

では依頼 69

マリア「見てみなさい」

## 依頼69 法術師モリスン

現在ドルク達はクレスの住んでいる村、トーティスにあるアルベイン道場にいた。クレス達の家は道場になっており、剣の稽古などをおこなっている。もちろんアルベイン道場にいる弟子達もみんなポケモンになっており違和感がないようだ、だが気づいているのはマリアだけのようだ

マリア「どうぞ」

マリアがマーボーカレーをドルクの前に差し出す

ドルク「おっ！うまそうだな いただきぜ」

ドルクはすぐさまマーボーカレーを食った、もちろん他のメンバーも食べていた。

シルム「おいしいですよ！」

マリア「おかわりはあるからたくさん食べてね」

すぐにドルクはガツガツと食い

ドルク「おかわり！」

おかわりを要求した。マリアはドルクの皿にたくさんマーボーカレーを入れた

クレス「さすがドルクだよ(汗)」

チエスター「あいつの腹の中はどうなっているんだ(汗)」

クレスとチエスターはドルクの異常な食力に啞然と棒読みになっていた。

……

ドルク「あゝ食った食った」

ドルクは満足そうになる

シルム「さすがに50回おかわりしすぎだよ(汗)」

シルムは呆れたように言う

マリア「まあドルクちゃんはよく食うのね」

これにはさすがのマリアも驚くが、逆に嬉しそうだ

シムーン「とりあえず今後の事を話しましょう」

シムーンがみんなを仕切る、みんなはとりあえず真剣になる

デビー「まずは状況をまとめるッス」

めずらしくデビーが言う

まず話をまとめよう

まずダオスがドルクを狙ってトレジャータウンを襲撃、そしてダオスのダオスレーザーとドルクのエナジーフルバスターによって次元に穴が開きドルク達を吸い込んだ。そして気づいたらクレス達の世界にまで飛ばされた、しかしみんなポケモンになっていた。

シムーン「以上になりますね」

ミネラ「でもこれからどうするのパパ？」

ミネラがドルクに言う

ドルク「そうだな…それにこの世界を知るのにもクレス達以外はこの世界の事なんて知らねえしな」

そう、クレス達はこの世界の事は知っている、しかしドルク達ブレイブのメンバーはクレス達の世界に関しては知らない

マリア「ならまずはモリスンのところに行きましょうか？」

ドルク「モリスン？誰なんだ？」

モリスンという人物にハテナが頭に浮かぶドルク

マリア「私とこのポケナ夫（ミゲールの事）の親友よ、何か知っていたそうなんだよね」

シルム「それじゃあモリスンさんに会ってみようドルク」

ドルク「みんなもいいか？」

みんなは首を縦に振り頷く

クレス「モリスンさんの屋敷なら僕も知ってるから案内するよ」

というわけでドルク達はモリスンのいる屋敷へと向かった

……

トーティスから西に行ったところに一軒の家があった、玄関は2階にあり下には庭園がある。

コンコン

クレス「モリスンさん！クレスです！」

クレスは玄関のドアを叩く、すると

ギイ…

ドアが開くとそこに一匹のポケモンが出てきた

お腹にはマントで隠しているが、少し見えて丸い模様をしていて、熊のようでさらに頭にはターバンを巻いたポケモンがいた。それもそのはず、このポケモンはリングマだったのだ

????? 「ん？君は？」

クレス「クレスです」

クレスは自分がクレスだと答える

????? 「おお、クレス君達ではないか…しかもそれとは別に他のポケモンまで来るとはな」

チエスター 「俺達がポケモンになってもわかるんですか？」

????? 「もちろんだ、私は占い師だからな、それにこんなことになつたのも占いで出た」

どうやら彼は占いなどもやっているようだ

ドルク 「とりあえず聞くが？あんたがモリスンか？」

????? 「いかにも、私がモリスンだ元人間のドダイトスの君が来ること知っているよ」

シルム 「オイラ達に来ることも事前にわかっているんだ!？」

シルムは驚く、姿はリングマでも未来がわかるとは驚くのも無理はない

モリスン 「とりあえずみんな入ってくれ」

とりあえずみんなはモリスンの家へと入った

……

ドルク達はモリスンにこれまでの事を説明した。

モリスンはそれをちゃんと聞く

モリスン「なるほど…大体はわかった…だが原因は私にもわからない」

モリスンでもわからないようだ、ドルク達はがっかりする。

モリスン「だが方法はなくもない」

何か方法があるようだ

ドルク「それはなんだ？」

モリスン「精霊に会ってみればいいとは思っが？」

k「精霊？」

精霊…クレス達の世界ではそれぞれ精霊という存在がいるのだ、さらにそれぞれ属性を持っている精霊や属性を持たない精霊もいる。だが精霊にはそれぞれ事情というのもあり、さらに契約するのにはその精霊に合う指輪でなければ仲間にすることはできないのだ

クレス「そうなるとクラスさんかあの双子のなりきり士に会わないといけないかもしれない」

クレスは精霊を操る者などを知っている。それに会うには時限を越えないといけないのだ…つまり『時間転移』をしなければならぬのだ

クラウド「で？そのクラスって奴と双子のなりきり士に会わない

と無理ってことだな」

モリスン「うむ、そうだ……」

ミント「過去の時代にいるクラスさんと…100年後の未来にいるディオ君とメルちゃん…となるとトールに行く必要がありますね」

どうやらトールというところに行かないかぎりは会えないようだが

クレス「レアバードは今持っていないし」

チエスター「そういえばレアバードはたしかディオとメルが持つて  
るはずだったような気がするな」

レアバードとは、電気の魔力で空を飛べるものだ、それも必要らしい

ドルク「とりあえずまずはトールに行くか」

まず最初の目的地はトールに決定

モリスン「とりあえずだが、私も同行しよう」

どうやらモリスンも同行するようだ

ドルク「ありがてえ、なんかあなたはポケモンの事詳しいようなんだが？」

モリスン「なんだろうか…前世で何処かの博士をやったような感じがしてね…私にもわからないが」



みんな準備万端だ

ドルク「それじゃあ出発だ！」

ブレイブ一同は北へと進んで行った

依頼69 法術師モリスン（後書き）

クレス「まさかのモリスンさんと母さんが仲間になるなんて（汗）」

まあ腕はたしかだからいいとは思っし

ドルク「そうだな、マーボーカレーうまかったしよ」

シルム「それに前世が博士って（汗）」

モリスンさんとオーキド博士の中の人と同じだからそうしたんだよ、リングマもアニメで中の人と同じだからモリスンさんはリングマなんだよ

ドルク「そうなのか」

今回は北にあるベネツィアへ！

依頼70 ベネツィア市へ(前書き)

ドルク「ファンタジアの世界はいいな」

シルム「でも他はどうなんだろうね？」

どうなんだろうね…そしてついに70話突入だよ！そんな依頼70

シルム「どうぞー！」

依頼70 ベネツィア市へ

ドルク達はまず北にあるユークリッドの都へと向かった、魔物もいるがそこはドルク達ブレイブ、ほとんどの敵を一掃してしまった

何もなくなるとかユークリッドへといった

ユークリッドの都は綺麗な町でかなりのものだった

ドルク「ここがユークリッドか」

だがユークリッドでもこの町の人間はポケモンになっていた。

シルム「ここもポケモンになってる人達ばかりみたいだね」

ソウ「情報収集しましょう」

まずは情報収集をした

……

ユークリッドの宿でみんなが集まった

ドルク「情報はあったか？」

みんなは首を横に振る、どうやら収穫はなかったようだ

ドルク「ここでもだめか」

アーチエ「でもなんか疑問に思わない？」

突然アーチエは口に出す

アーチエ「あたし達以外はみんな違和感を感じなかったし気づかなかったのはおかしくない？」

たしかに、トーティスでもそうだがユークリッドもトーティスと同じようにポケモンになったことに気づかない人達ばかりだった、なぜこんなに知らない人達が多いのかだ

シムーン「たしかにそうですね…この世界の元人間の者達はみんな知らないだけでなく、違和感まで感じなかったなんて…これはあきらかにおかしいですね」

モリスン「うむ、たしかに…」

みんな頭にハテナが浮かぶ

シルム「とりあえずここで休んで明日ベネツィアに行こう」

みんな頷きそれぞれの部屋で休んだ

……

次の朝

ブレイブ一行はユークリッドからさらに北にあるベネツィアへと向かう

ドルク「それにしてもこの魔物は一瞬で倒しちゃうな」

ドルクは物足りないような気持ちでそう言う

クレス「まあそれでも僕達は目的地まで行かないといけないし」

それでも世界を救わないといけないのだ…なぜクレス達の世界の間はポケモンになったのか？ドルクが狙われた理由とは？

……

シルム「ここがベネツィアだね」

ブレイブ一行は目的地のベネツィアに到着した。

ベネツィアはほぼ海がある町で、川へ移動することもある町だ…もちろんここにも

ミネラ「みんなポケモンになってる」

そう、この人間のほとんどがポケモンへとなっている。

モリスン「まずは船からトールまで行こう」

とりあえずトール行きを探す

数分後

?????「いらっしやい！トール行きの船はないがそこまで送っていくよ」

モリスン「ありがたい」

この船の船長であろうポケモンを見つけて何とか船でツールまで行けるようだ、船長はサメのようなポケモン、サメハダーだ

ドルク「で？ここまでいくぐらいかかる？」

ドルクはここまでいくらかかるかを聞く

船長「全員でいうと10750ガルドもしくは10750ポケだな」

単位もここではガルドかポケになっている。ポケモンになった影響で最近ポケを使うこともできるようだ

ドルク「とりあえずこれで足りるか？」

ドルクは麻の袋に入っているポケを差し出す

船長「おお！こいつはすげえな、よし乗ってきな！」

ドルク達の船旅が始まる

依頼70 ベネツィア市へ（後書き）

シルム「やっぱりほとんどポケモンになってる人が多いみたいだね」

そして次回は船旅&時間転移です。

シルム「なんだかワクワクしちゃったよ」

ドルク「シルムの探検魂に火がついたな」

依頼71 トールのマザーコンピューターシステム・オズくそれぞれの歩みく

ついにトールに来ます

ドルク「おっ！ついにか」

シルム「なんだかオイラ、ワクワクしてきたよ」

シルムにはワクワクするようなものがいっぱいだよ

シルム「うわあ〜これはいいね」

それじゃあ依頼71

シルム「行くぜ！」



モリスン「まあそのうちわかるだろう…未来の事が占いではわからない感じになっている。ドルク達が来るのはわかっているがその先がな…」

どうやらモリスンの占いはここまでのようだった

ミネラ「気持ちいい」

ミネラは潮風にあたる、ミネラはマナフィなので海が自分の故郷のようだ…5年前、彼は卵から孵ってドルクとシルムに出会った、でもミネラはまだ幼く病気になってしまったが…ドルクとシルムが万能な薬をもってきたため熱は治った…一時ミネラは海で生活し…そして帰ってきた。今はブレイブのメンバーでドルクを義理の父として尊敬している。

ミネラ「（こうして僕がいるのはパパとシルムのおかげ…なんだか僕にとっても思い出になったかも…）」

そんなミネラだった

……

ジュティア「……」

ジュティアは一人海を眺めていた。そこに

ドルク「どうした？孤児院の子達がいなくて寂しいのか？」

ドルクがジュティアに話しかける

ジユティア「まあ…ね…みんな無事だといいいのだけど…」

するとドルクがジユティアの肩を軽く叩く

ドルク「あいつらならきつと大丈夫だ、プクリン親方もいることだしあっちに任せるしかないしな」

ジユティア「そうね…大丈夫よね…ありがとう…」

ジユティアはそう言い甲板から部屋へと戻った

ドルク「（あいつも色々と心配があるんだな…俺がなんとかできればいいけどな…）」

ドルクはそう思っていた。

ソウ「師匠、そろそろ部屋に戻りましょう」

ソウがドルクに声をかけてきた

ドルク「ああ、ありがとな…すぐ行く」

ドルクは部屋へと戻った

……

何事もなかったのでなんとかツールまでたどり着いた

ドルク「ここがツールか」

ツールは古代の技術や現代の技術が混ざり合ったようなところだった、ここには機械や技術も進歩した封印された場所だ、ここに時空転移できる装置があるらしい

シルム「それにしてもすごい！まるで遺跡だよ！」

シルムの目がキラキラする

k「神秘的だね、すごいね」

ミネラ「すごい」

みんなツールを見て探検心がくすぐる

マリア「まさかこんなところがあるなんて知らなかったわ」

クレス「そりゃそうだよ(汗)」

まあクレス達は行ったことあるのでわかるだろう

……

シルム「これは？」

ドルク達はそれぞれ部屋にカギをかけている部屋がいくつもある部屋に来た、入口はすでに閉じてしまっている。

クレス「この部屋はランダムでコモン・キーというのが必要なんだ、この宝箱のどれかにあるんだ」

ドルク「めんどくせえ〜な〜こりゃ」

そう、部屋はそれぞれランダムとなっていて、入口に戻されるかもしれない。別の部屋かもしれない。マザーコンピュータールームのどれかになる。とりあえずそれぞれ宝箱を開けてコモン・キーを見つけて力ギに合う部屋を選ぶ

……

数時間後

ドルク「はあはあ…こりゃ結構部屋が多くて疲れるな」

クレス「僕達もそうだったよ（汗）ホントにこの仕組みには苦労するよ（汗）」

数時間たっても部屋は見つからない

シルム「これかな？」

シルムはコモン・キーを使った、すると扉が開いた。果たして正解なのか

シルム「ん？こいつて!？」

シルムは見た、ほぼ機械があり、その中心には人数分転移できるような装置があった

シルム「見つけた!」

シルムの声に反応してみんなが駆けつける

……

マザーコンピュータールーム

そこには転移機械があった、龍の石像が4つもおいてあり、緑のよ  
うな機械が設置してあった

シルム「すごい!？」

すると声が聞こえる

『メインシステム起動、バイオロムチェック、システムは自己管理  
モードに入りました』

すると何か顔のようなホログラムが現れた

シルム「うわっ!？」

ドルク「こいつは一体?」

????? 『マザーコンピュータールームへようこそ私はツールシテ  
イの全機能をサポートするマザーコンピューターシステム・オズ、使  
用目的を選択してください』

このホログラムはこのトールの全機能をサポートするマザーコンピ  
ューターシステム・オズと言っらしい

ドルク「驚いたな、まさかこんなのがあったなんてな」

デイシア「私の時の力とは違う感じだな」

デイシアも驚く、ちなみにここではデイシアの時の力やレビィの時渡りで時間転移はできるのだがあいにく何かの障壁があつてかそれができないようだ

ジユク「ここから時間転移ができるんだな」

クレス「そう、僕達も時間転移したんだ」

クレス達ファンタジアチーム（ミゲール・マリア・モリスン以外）はすでに経験済みだ

みんなが行こうとした時

デイシア「ちょっと待ってくれないか？」

突然デイシアが待ったをかけた

ドルク「どうしたんだ？」

デイシア「私はここで残ろうと思つのだがいいか？」

なんとデイシアはここに残ると言った

ドルク「どうということなんだ？」

デイシアは説明した

ディシア「この世界がこうなっているだけでなく…時間も何かうずうずと嫌な予感がしている。それに気になることもある。なので私はここに残って調べた方がいいと思うのだ、大丈夫だ、私も後から追いつく」

すると

ドルク「わかった、こっちは頼んだぜ」

ディシア「かたじけない」

すると

パルサ「なら俺も手伝ったほうがいいと思っぜ」

グラデル「一人よりも多く手伝ったほうが私はいと思います」

デビー「なら俺も手伝っツス」

ゼラス「なら私もディシア様やみんなをお守りした方がいいと思う、なので私も残る」

パルサ、グラデル、デビー、ゼラスが手をあげる

ドルク「わかった、なら残った方は原因など色々調べてくれ」

ディシア「こちらも任せたぞ」

どうやらここからディシア達5人と別れての旅となる

……

オズ『音声認識、タイムワープ・デバイスドライバー起動、反重力エネルギーチェック』

機械の音が流れる

オズ『時間転移に要するエネルギーの蓄積確認：転移相対年数を述べよ』

するとクレスは答える

クレス「今から103年前のユークリッド村へ！」

クレスはそういう、それに答えオズのホログラムは消えた

オズ『音声認識、時間転移先空間座標、安全条件クリアメインプロセスを開始します。乗員は所定の位置に移動してください』

ドルク「デイシア、こっちは頼んだぜ！」

デイシア「ああ、私もかならず追いつく、待っていてくれ」

ドルク達は時間転移の装置のそばへ

オズ『乗員を確認しました。転移空間を隔離します……空間の隔離を完了しました。界面を現在の時間から切断します』

するとドルク達の周りから電気が発生し、ドルク達を包む

オズ「反物質エネルギー解放……ワームホール発生、ベビータニ  
バス確認タイムワープオペレーションシステム」オールグリーン  
タイムワープ・スタート」

するとドルク達は消えて行った

デイシア「行ったようだな」

オズ「プロセス終了を確認しました」

どうやらドルク達は時間転移をしたようだ

パルサ「さて、ここからどうするんだ？」

パルサが質問した

ゼラス「デイシア様は何か案があるのですか？」

するとデイシアは答えた

デイシア「ああ、色々とおこの事やクレスという青年のエターナル  
ソード…そしてダオスとポケモンがこの世界にあったのかなど色々  
調べなければならぬ、もちろんオズの力も借りる、すでにクレス  
達にはトール市長の代理を私達にも許可してもらった…ドルク達に  
は別々の調べることがある。私達はドルク達をサポートする。みん  
な、いいか」

パルサ「ああ！兄貴のために俺はやる！」

グラデル「今私達にできることをやりましょう」

デビー「俺もツス！」

ゼラス「なら私も全力でやりましょう」

四人は承諾した。

デイシア「ありがとう…それでは私達も動くぞ」

全員『おおーーーーー！！！！』

デイシア達はそれぞれ調べにトールの古文書などを手当たり次第に探った

それぞれの歩む道とそれぞれの事を

依頼 71 トールのマザーコンピューターシステム・オズとそれぞれの歩み

科学力はすごいもんだね

シルム「すごいよ！ クレスさん達の世界！ こんな遺跡みたいなのがあったなんてオイラ驚いたよ！」

クレス「気に入ってるみたいだね」

シルム「だってトールってすごいもん！ 科学技術もすごいしオイラすごくワクワクだよ」

さて、今回は新たな仲間の登場でクレス達との再会になります。

依頼 7 2 精霊術師 クライス (前書き)

はい！今回はあの人が登場です。

ドルク「ついにだな」

そんな依頼 7 2

ドルク「行くぜ！」

## 依頼72 精霊術師クライス

シュン！

ドルク「ここは？」

ミント「どうやらユークリッドの村に時空転移できましたね」

ここは過去の世界、アセリア暦4203年…AC4203

モリスン「驚いたな、本当に時間転移できるとはな」

モリスンは驚いていた。それもそのはず彼は時空転移の研究をしているがまだまだ自分の時空転移には未熟なのだ

ミゲール「俺のあれでもいけるとは思えるけどな」

と、ミゲールは少しふてくされる

マリア「時間転移なんてすごいわね」

マリアも時間転移で喜ぶ

ジュティア「ここもやっぱりポケモンになってるのもいるわね」

過去でもここもポケモンになる影響が出ていた。過去でもやはり影響は大きい…つまり時空を越えても未来などもきつと同じだろうとドルク達は思った

ドルク「とりあえず、クラーヌって奴のここに行こうぜ」

みんなは頷いた

……

ドルク達は坂を登った、坂を登りきったところに大きな家があった

ドルク「ここか？」

クレス「うん、ここがクラーヌさんの家だよ…いるかな？」

とりあえずドルク達はクラーヌの家に入った

ガチャツ！

クレス「ごめんください！」

クレスが声をかける…すると奥から誰かが来た…それは一匹のポケモンだった

魔女がかぶる紫の帽子に布のような体…そして口はギザギザしたような赤い口に首には赤い宝石のようなものが埋め込まれてるポケモン、マジカルポケモンのムウマージだ

????? 「誰なんだ？」

声からして男のようだった

クレス「あっそうか…僕はクレスです」

するとムウマージは反応して

ムウマージ「クレス！？クレスなのか！？」

クレス「はい…ということはクラースさんですか？」

そのムウマージは「ああ」と頷いた

このムウマージこそ、クレス達の仲間である時空戦士の一人、クラース・F・レスターなのだ

……

クレスはこれまでの経緯などをクラースに話した、今この世界が狂い始めたことなど色々と

クラース「なるほど…つまり再び私の力を貸してほしいってことだな？」

ドルク「ああ、だからあなたの力を貸してほしいんだ…いいか？」

クラースは思い悩んだように頷く…数分後

クラース「よし！いいだろう…ちょうど私もなぜこのような姿になったのか…それに私とミラルダ以外はみんなポケモンという姿になったことは知らないらしい…どうやら記憶か何かが村のみんなに影響したのだろうと私は思う…それにドルクと言ったか？なぜかわからないがものすごい魔力を感じるのだが？」

クラスはドルクを見て、ドルクにはものすごい魔力があると感じていた。

ドルク「それはわからねえが俺もタイムスリップの事故とかから魔力が出てきたのは」

クラス「うむ…わからないことばかりだな…」

クラスもドルクの事で頭をかしげる

ミント「それよりクラスさん…私達、精霊に力を貸してもらいたくて…それで契約の指輪とかはどうしていますか？」

契約の指輪とは、精霊と契約するために必要な物で…それぞれの指輪によって召喚できる精霊は違う…なのでどの指輪がどの精霊に適合するかも重要になる。

クラス「今のところ持っているのはガーネット、アクアマリン、オパールにルビーだ」

クラスは契約の指輪を見せた、ガーネットは赤く光輝き、アクアマリンは水のように透き通った輝き、オパールは緑色に輝き、ルビーは土色に輝く

ジユティア「で？最初は何処の精霊から契約するのかしら？」

そう、最初は何処の精霊から契約するのかだ

クラス「ここからだと言われない風の中の精霊、シルフの方がいいだろう」

北東にある溪谷…それがローンヴァレイらしい

チエスター「なあ？ディオとメルとかどうするんだ？」

ドルク「とりあえずは4大精霊と契約してからの方がいいんじゃないかね  
えか」

シムーン「それもそうですね、その方がいいとは思いますが」

モリスン「うむ…それにどっちみち精霊とも話さないといけないからね」

ミゲール「それじゃあ俺はここで酒でも」

マリア「飲むんじゃないやねえよボケ！！（怒）」

再びマリアの肘打ちがミゲールに炸裂した

クラス「（汗）」

みんなが唾然とする。

とりあえずみんなは先に精霊と契約するに賛成した。

クラス「決まりだな…ちょっと待ってくれ」

クラスは席をはずした

それから数時間後

クラス「お待たせ、それじゃあ行くぞ」

ドルク達はクラスの家を後にした

家の机にはこう書かれていた。

ミラルダへ

私は再びクラス達と旅に出る。今回はクラス達が新たな仲間を連れてきたらしい…また留守番ってことになるがよろしく頼む…終わったら帰る…すまない

クラス・F・レスター

依頼 72 精霊術師 クライス（後書き）

クライス「いや、私がムウマージとはな」

でも似合ってますよ

クライス「まあ私もポケモン技が使えるってことか？」

使えるのは使えます

ドルク「ポケモンになったなら使えるはずだぜ？」

クライス「なら次回あたりで使えれば」

使えるかどうかはわからないけど

クライス「これじゃあ私がポケモンになった意味がないじゃないか  
（汗）」

依頼73 絆！VSシルフ（前書き）

さて、いきなり精霊戦です。

ドルク「一体どういう奴と戦えるかな」

そしてさらに今回は少し重要なことが出てきます。それでは依頼73

ドルク「吹き飛ばせ！！」

依頼73 絆！VSシルフ

ローンヴァレイ

風が吹き付ける谷だ

ここは風が吹いてきて吹き飛ばされそうだ

ドルク「風が強いな」

クラース「ここは風が強いんだ…まあドルクみたいなのは吹き飛ばされる心配ないかもしれないな」

苦笑するクラース、だが油断はできない…風が強いためアーチエが飛んでも逆に飛ばされるのだから

k「にしてもここに精霊がいるんですね」

クレス「うん、ここに精霊はいるよ」

クラウド「なんか風に混じって何か感じるな」

クラウドは早速波動で感知した。

シルム「それじゃあ行こう」

ドルク達はローンヴァレイの奥へと進んで行った

……

ローンヴァレイは風が強く吹き続ける、それほど強い風だがドルク達が吹き飛ぶほどではないので吹き飛ばされないようしっかりのみんなは手をつないでいる。

ミント「あいかかわらずローンヴァレイは風が吹いていますね」

クラース「ああ、それにポケモンでもここまで苦労するなんてな……」

クラースは少し疲れ気味だがまだまだいけるようだ

ドルク「クラースも疲れているなら休憩したほうがいいんじゃないか？」

ドルクは声をかけるが

クラース「いや、ここからもう少しだから大丈夫だ！何私も最近あまり運動していなかったこともあるからちょうどいいしな」

クラースはまだ大丈夫のようだ

シルム「とりあえず無理なら少し休憩してくださいね」

シルムがそうクラースに告げる

……

ローンヴァレイの谷の最奥部、一本の枯れた木が立ってる場所だ

シルム「ここに風の精霊がいるんですか？」

クラース「ああ…」

すると何処からか声が聞こえた

「誰ですか？」

それは美しい女性の声だった、枯れた木の前から長い髪の女性が現れた

ドルク「!？」

ドルク達（クレス・ミント・アーチエ・チエスター・クラース以外は驚く

モリスン「これが精霊…まさか目の前で姿を見せるとは」

ミゲール「これが精霊なのか」

モリスンやミゲールも驚く

「私の名は風の精霊シルフ…それとお久しぶりですねクラース」

クラース「ああ、久しぶりだ…それより…」

クラースが言う前にシルフは言った

シルフ「この世界に起こっている異常ですね…それはわかっています」

ドルク「それが俺に原因があるかわからねえんだ！風の精霊シルフ！何か知っているなら教えてくれ！」

ドルクがシルフに頼む

シルフ「ならまずは私達と戦ってください」

シルフは戦えと言ってきた

ドルク「いいぜ…精霊の実力つてもものもみてえしな」

シルム「やるしかないね」

ドルク達が構えるが

k「あれ？私達って？それってどういうことですか？」

kは疑問にもっていた。シルフは今一人なのに私達というのはどういうことなのか

シルフ「ああ、そうでした…」

すると何処からか同じシルフ…しかも体が赤いのが出てきた。

シルフ1「これならわかりますよね？」

シルフが言う私達というのはシルフは一人ではなく…二人や三人ぐらいいるのだ

ドルク「二人相手でも行くぜ！」

ドルク達は構えた

……

ドルク「エナジーバスター!!!」

ドルクのエナジーバスターが青い方のシルフに攻撃する。だが赤いシルフはその間術を詠唱していた。

シルム「させない! ヒートパレット!」

シルムはレウスバーニストを使ってもう一方のシルフの術詠唱を止める

シルフィー「(中々の実力ですね…ブレイブのリーダードルク…あなたは気づいていない…あなたの正体を)」

シルフィーはエナジーバスターを避けて、攻撃していく

ドルク「守る!」

ドルクは守るで防いだ、そこからエナジーボールを繰り出す。エナジーボールがシルフィーにあたる

ちなみにメンバーはドルクとシルムの二人だけ、なぜかというと…

……

バトル数分前

シルフ1「実はですが今回そのドダイトスとゴウカザルの二人で戦ってもらいます」

クレス「つまり僕達は見ていろってことだね」

アーチエ「え〜なんでドルクとシルムなのよ〜」

「ぶーっ」と頬を膨らまし、機嫌悪くするアーチエ

シルフ1「それでは行きますよ」

シルフ1は構えた

ちなみに青い方がシルフ1で赤い方がシルフ2とします。

……

相手は精霊…油断はできない

ドルク「だがそれでも俺達は負けねえ！！ストーンエッジ！」

ドルクは少しダメージを受けた状態だがまだまだ行けるようだ、シルフに向かってストーンエッジを繰り出した。

シルム「虎牙破斬！！」

シルムは素早く上下2段の攻撃でシルフ2を真下に落とす、そこからさらに蹴りを2発繰り出す、この技は飛燕連脚ひえんれんきゃくという技だ、実は

シルムはクレスに技を教わっているため大体の技はマスターしている。そのため技も覚えがよく、クレスが使う技も習得したのだ

だがシルフも術で応戦する。

ドルク「シルム！こっちはどうだ！」

シルム「さすが風の精霊ってとこだよ…オイラ達には苦戦するね」

へへっとシルムは苦笑する。実際はシルムもボロボロで少し血が出ているようだった

ドルク「だが俺達の絆を見せてやるうぜ！」

シルム「うん！」

二人は互いに目を合わせてから素早く移動した。ドルクはロックカッパで素早さをあげていたので素早く行動することはできる。

お互いがそれぞれの技を繰り出す

ドルク「エナジーボール！」

ドルクはエナジーボールをシルムに向かって打つ

シルフ「（一体どういうことでしょうか）」

シルフ「（これではあのゴウカザルは！）」

だがシルフ達の予想が覆された、それはシルムがエナジーバスター

を蹴ったのだ

シルム「連携技！エナジーアトミック！！」

蹴られたエナジーボールは炎に包まれ、シルフ1にあたった、さらに爆発が起こりシルフ2を巻き込んだ

煙が収まると二人のシルフは倒れていた。

ドルク「おっしゃあ！！」

シルム「やったあ！！」

二人はハイタッチする

クレス「すごいよ！！」

ミント「さすがです」

クラウド「それでこそドルクだな」

k「すごい！！」

モリスン「なるほど…！これほどの強さを持つてるとはな」

ミゲール「ガタガタブルブル」

マリア「震えるなんて情けないわよあなた」

ミネラ「パパとシルムはすごいよ！！」

シムーン「さすがです」

ソウ「さすが師匠！」

シエルマル「さすがですよ」

みんなが喜ぶ

クラース「（この二人の絆…あなどれないほどだな）」

クラースはそんな二人を見る、これほどまでにやれるのは二人の絆があるからだ

シルフ「では契約ですが…実は契約の指輪をそのドダイトス…ドルクに渡してくれますか？」

クラース「何か意味があるのか…わかった」

クラースはドルクにシルフとの契約の指輪、オパールを渡した

ドルク「それで俺に渡してどうなんだ？」

シルフ「はい…今に分かります」

するとシルフの周りに三角の契約陣が現れ、シルフは消えた

クラース「契約の言葉を言わずにか！？」

そう、契約には誓いの言葉という契約の言葉を言わなければ契約は

できない…だがドルクに指輪を渡したただで契約できるのだった

シルフ「実は少し話しがあります…ドダイトス…いやドルクには精霊の力を使うことが可能なのです」

何処からかシルフの声が聞こえる

シルム「それって…どういうこと？」

シルムも疑問に思っていた。

シルフ「まずは残りの4大精霊…私だけでなく…他の3人の精霊に会ってください…そこでドルクの事についてお話ししましょう」

ドルク「まさか俺に何かあるのか？」

ドルクは誰もいないこの場所で話す

シルフ『はい…今はまだ話せませんが…とりあえず先にですがあなたの仲間に私の力を少し分けます…私を召喚してください』

シルフはドルクに召喚の命令をした

ドルク「でもどうやってだ？」

シルフ『私の名前を言えば召喚できますよ』

ドルクは早速シルフの名前を言った…すると三角の契約陣が現れ、そこからシルフが現れた…だがシルフの姿が変わっていた。モコモコした綿のような綿毛につぶらな瞳をしていた。さらに耳にはカー

ルした緑の耳がついている。かぜかくれポケモンのエルフーンだ

クラース「姿がポケモンになってる！？一体これは！？」

シルフ「実はポケモンになるのはあなた達だけでなく…私達精霊も契約すると何らかの影響でポケモンになるのです。とりあえずまずは私の力ですが…そのジユカインさん…男の方の」

指名したのはジユクだった

ジユク「俺か？」

シルフ「はい…それでは…」

シルフは目を瞑り、意識を集中した…するとジユクの体が緑の光に包まれた…数分後に光は収まり…シルフは再び契約の指輪へと戻った

クレス「どうだい？」

ジユク「なんだか力がわいてきたような感じだ…」

レビィ「でも一体どうなっているのかしら…」

一体クレス達の世界に何が起きているのか…

ドルク「次に行こうぜ」

k「次は何処に行けばいいんですか？」

すると再びシルフの声が

シルフ『次は精霊の洞窟にいるノームに会ってください』

次の目的地は精霊の洞窟のようだ

モリスン「ここからだと何処になるんだ？」

クラーズ「ここから南西にいけば」

どうやら南西に行けばノームがいるようだ

ドルク「俺の正体…俺は一体…」

シルム「ドルク？どうしたの？」

シルムが声をかける

ドルク「いや、なんでもねえ」

しかし

シルム「ドルクの正体とか気になってるの？」

ドルクは足を止める

シルム「でもオイラはドルクがどんなのでもドルクはドルクだよ」

ドルク「ありがとな…相棒」

ドルクは再び足を動かした

彼等は次の精霊がいるダンジョンへ！

依頼73 絆！VSシルフ（後書き）

シルム「ドルクの正体…元人間だけじゃないの？」

そう、それは後に明かしていくよ

ドルク「なんだか違和感ねえな」

まあ元人間だからだから違和感というのがないんじゃない？

ドルク「たしかにな」

## 依頼 7 4 精霊の洞窟（前書き）

今回、色々ありましてなんとか更新できるようになりました。

ミゲールさん本人は続けてほしいという事でこうして更新することができました。

色々ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

それでは依頼 7 4 をどうぞ

## 依頼 74 精霊の洞窟

ドルク達は南西を歩き…精霊の洞窟へとたどりついた

だがそこは

クレス「これは!?!」

チエステー「どうなってやがるんだ!?!」

ドルク達は驚いていた。なぜかというところは…

シルム「不思議のダンジョンになってる!?!」

そう、精霊の洞窟が不思議のダンジョンになっていた。

クラス「不思議のダンジョンというのは一体?」

シルムが説明した

シルム「不思議のダンジョンは入るたびに地形が変わって落ちていく道具も変わるんです。でも途中で倒れてしまうとダンジョンの入口に戻されてさらにお金と道具が半分なくなるんです。それがこの不思議のダンジョンなんです」

クラス「これは気をつけないとな」

ドルク「大丈夫だ、俺達の世界では不思議のダンジョンはあるんで

な  
」

もちろんクレス達もだ

k「油断できないですね…この先」

kもなんだか何かを感じていた。

ドルク「とりあえず進もうぜ」

ドルク達は先へと進んだ

…

ドルク「それにしてもここは広い感じもあるな」

シルム「でも敵の中には小さい魔物がいるみたい…」

ドルク達は先へと進んでいるのだが、魔物も強いだけでなく…ドルク達の攻撃が通じない魔物までいるのだった…それは

クレス「たしかにね…クレイアイドルはトラクタービームでないと倒せない魔物だからね」

どうやらそのクレイアイドルという小さい魔物に苦戦しているのだが

アーチエ「トラクタービーム！」

アーチエが重力の術であるトラクタービームで倒した、どうやら効く術もあるらしい

ドルク「まあ俺もトラクタービームは覚えてる…このぐらいで入コたれないぜ」

ドルクもそう言ってトラクタービームを繰り出した。

……

ドルク達はなんとか最深部までたどり着いた、そしてドルク達の前には一匹のまるでモグラ叩きで見るとような姿をしたものがいた

????? 「侵入者なのら」

そのものは口調が特殊だった

ドルク「お前がノームか？」

????? 「そうなのら…：だけど侵入者は倒すのら」

と、ノームが襲い掛かってくる

クラーズ「どうやら私達を侵入者だと思っているらしい、私の話を聞かないようだな」

モリスン「ここの精霊は聞く者と聞かない者がいるもんだな」

精霊にも色々と性格的な者もいる。住処を荒らされると勘違いして襲い掛かる者などだ

チエスター「そんなこと言ってる場合じゃないぜ！来る！」

ノームはミサイルみたいに突撃してきた！ドルク達のところで爆発した。

#### 依頼74 精霊の洞窟（後書き）

ドルク「あいつ精霊なのにモグラ叩きみたいな奴だな」

精霊はそれぞれ姿が違うんだよ（汗）ファンタジアノームはモグラ叩きでよくみるようなんだけど…ムーミのあれに近いかな

シルム「それよりオイラ達ノームの攻撃受けちゃったけど大丈夫なの（汗）」

次回でわかるよ

依頼 75 VS ノーム (前書き)

さて！前回の話でノームの攻撃を食らってしまったドルク達！果たして無事なのか！？

## 依頼 75 VS ノーム

爆発によってドルク達はどうなったのだろうか？

ドルク「あぶねえ〜」

ドルクは咄嗟にロックフェンスで、他のみんなはそれぞれの武器や守るなどで防いだのだ

クラース「にしてもさすがはポケモンだな…私は攻撃が効かないよ  
うだ」

クラースはムウマージでゴーストタイプのためかあまり効いていなかった、それもそのはず…ゴーストタイプのポケモンはノーマルタイプには効果がないのだから

クラース「（ためしてみるか…）シャドーボール！」

クラースは黒い塊をノームに飛ばした、ノームは少しひるんだような感じだった

クラース「どうやら技を使う感覚さえ覚えれば技は使えそうだな」

元々クラースの戦い方は精霊を使った召喚術での戦いだった…しかし彼には本を武器に通常攻撃しかなく、召喚術以外の攻撃技と術がなかったのだった…しかしポケモンになった今、ポケモンの技は使えるのだ…なので彼にとってはメリットになる。

クレス「クラースさんは今まで僕達と旅していて本で攻撃していた



連続の突きがノームを襲う

ミゲール「俺も！秋s」

マリア「ブレスト！！」

ミゲールも秋沙雨をやるうとしたがマリアがブレスト（肘打ち）でノームを攻撃した

ミゲール「俺の活躍（泣）」

ミゲールは涙目で見るしかなかった

ドルク「これで行くぜ！オメガリミット！…ウッドハンマー！」

ドルクはウッドハンマーで一撃をノームに食らわせ…そして奥義を発動した

ドルク「響け！燃え上がる俺のシャウトを！！イグニクスシャウト！！！」

赤い音符が大量にノームを襲い、ダメージを与えた

ノーム「やられたのら〜」

ノームはやられて降参した。

ドルク「それじゃあ契約しねえとな」

ドルクはルビーの指輪を取り出す

ドルク「我今土の精霊の願い奉る…指輪の契約のもと、我に精霊を  
従わせたまえ…我が名はドルク」

ノームは光だし、そのまま指輪に吸い込まれた

ノーム『契約ありがとうなのら〜それじゃあ一人僕の力を与えるよ  
…それじゃあそのピンクの子に力を与えるのら〜』

レビィ「私!?!」

今度はレビィのようだ

ドルクはとりあえず召喚した、召喚したノームの姿はモグラのよう  
なポケモン、モグリユード

こうしてノームの力はレビィに、そしてノームとの契約を成功させた

ドルク「次は何処にするんだ?」

クラーズ「なら船で浸食洞に行こう、そこには水の精霊ウンティー  
ネがいる。そして熱砂の洞窟にいる火の精霊、イフリートと契約す  
れば4大精霊と契約は成立となる」

シルム「ドルクの正体…色々気になるけど、精霊は知っているのか  
な?」

すると何処からか声が

シルフ『はい、それは残りの二人の精霊との契約をしてから話しましょ』

ノーム『ドルクにはとある力があるのら』

ノームはドルクのとある力しか教えてもらえなかった

段々とドルクには見えない何かがある…今刻々と知っていく

依頼 75 VS ノーム (後書き)

クラス「爆発も結構なものだな…それにしてもポケモンは奥深いな」

まあそれぞれの特徴があるんですよ

クラス「こりゃ色々調べないとな」

ドルク「次回は浸食洞へ行くぜ！」

依頼76 浸食洞と3匹のポケモン(前書き)

さて、ついに浸食洞です。

ドルク「ついにだな」

そして少しですがとある3匹が登場します。では依頼76

ドルク「切り抜ける!!」

## 依頼 7 6 浸食洞と3匹のポケモン

ドルク達はベネツィアで船に乗り浸食洞へ

そして何事もなかったかのように浸食洞へと到着したがまたしても

ドルク「ここも不思議なダンジョン化しているな」

なんとここも不思議のダンジョンと化した

モリスン「うむ、どうやらここにも影響が出ているようだな…この先不思議のダンジョンがいくつか出来るって可能性もなくはないな」

モリスンは冷静に分析する

マリア「なんでもいいけど行きましょう。次の精霊もここにいるのですから」

マリアの一言でみんなは頷いて先へ進んで行った

そんな浸食洞の入口を数分後さらに他の者が、それは3匹のポケモンだった

一匹は半分がクリーム色の体毛、背中からの半分は黒い色の体毛で背中には火が吹いているポケモン、一匹は両耳がヒレに青い体色で四足のポケモン、もう一匹はライオンのよう目で目が鋭いポケモンだ

順番からバクフーン、ラグラージ、レントラーだ

バクフーン「うわぁ〜すげえ〜ここ迷路のような感じになってるぞ」

バクフーンはもの珍しく洞窟の中を見ていた

ラグラージ「それにしてもここは何処なんだろう?」

のんきそうに少年声で言うラグラージ

レントラー「この先気配がする…どうする?」

レントラーは冷静に言う

バクフーン「そりゃあいくっきゃないだろ」

ニカッとバクフーンが笑う

ラグラージ「そうだね、それじゃあ中に入ろう」

3匹は中へと入っていった

依頼76 漫食洞と3匹のポケモン(後書き)

今回の登場した3匹のポケモンはコラボキャラです。

そして次回ぐらいで明らかになります。

依頼77 VS ウンディーネ ～ 思わぬ助っ人～ (前書き)

ウンディーネ戦です。今回は前回登場したあの3匹の事がわかります

ドルク「それじゃあ依頼77」

バクフーン「行くぜ!!」



????? 「また貴様等か…それに見たことない奴等がいる…二度ならず三度までも、だがわらわの眠りを妨げたことを後悔するがいい！…わらわは命令されるのと眠りを妨げられるのが一番嫌いなものじや！」

その女性はいきなり襲い掛かってきた

ドルク「うわっ！？いきなり襲い掛かってきやがった！？」

クラース「こいつがウンディーネだ、だが彼女も説得が聞かないよっだ」

シルム「これはなんとかしないと、ショット！」

シルムはレウスバーニングでウンディーネを狙うが

ウンディーネ「わらわにその程度の攻撃が効かぬ！」

ウンディーネは持っている剣でシルムの弾を斬りつけた、弾は水に沈んで消えた

シルム「水！？」

ウンディーネ「なら貴様からだ！！アイスニードル！」

ウンディーネは呪文の詠唱が早く、アイスニードルをシルムに向かって発射する

シルム「！？」

シルムは咄嗟に防御して目を閉じた…しかし痛みはなかった

シルムは目を開けた…するとそこには

ドルク「くっ！」

ドルクだった、ドルクがシルムをかばってアイスニードルを受けたのだ

シルム「ドルク!?!」

シルムはドルクに駆け寄る

ウンディーネ「ほう、仲間をかばうとは…だがこれを食らうがいい  
アクアストライク」

ウンディーネの剣が弓に変形し、水の矢が二人に迫ろうとした、その時

k「10万ボルト!!」

kの10万ボルトが水の矢を消滅させた

k「大丈夫二人とも？」

シルム「オイラは大丈夫です。それよりドルクの治療しないと！」

ミント「なら私も」

シルムとミントは回復術でドルクを治療する。

k「ならその間僕が」

クラーズ「たしかにkはランタンだったな」

モリスン「ウンディーネは水なら雷が有効だな」

たしかに、アクアストライクを打ち消したのだから水は電気を通すはずだ

ウンディーネ「ならそなたからだ！避けてはならぬぞ！」

再び剣を弓に変形させて水の矢を数発放つ、しかしk自体には効いていなかった

ウンディーネ「なぜじゃ！？わらわの攻撃が通っていない！？」

ウンディーネは驚いた表情を見せる

k「僕の技、ステルスバリアでああなたの攻撃を無効にしたんですよ」

そう、kの周りには見えないバリアがある。そのため攻撃が通らなかったのだ

ウンディーネ「調子に乗る出ない！アイストーネード！」

今度は氷の竜巻がkを襲う

パキパキとバリアの周りが氷始める

k「しまった!?!」

クレス「ここは僕も加勢するよ!」

クラス「待て!クレス、お前は今ガバイドの姿だろ!今行けば凍っってしまう!」

そう、クレスは今ガバイドの姿だ、ドラゴンと地面のため4倍のダメージを受ければクレスも倒れてしまう

アーチエ「ここはあたしの魔術で!」

アーチエはサンダーブレードを詠唱するが

ウンディーネ「遅い!」

アーチエ「きゃっ!?!」

ウンディーネが攻撃してアーチエの詠唱が失敗してしまった

ウンディーネ「これで終わりにしてやるっ!」

ウンディーネは再び詠唱をする。呪文が発動されればおしまいだ!だがその時!

?????「フレイズスピア!」

何処からか火炎放射が槍状に現れてウンディーネにダメージを与えた

ウンディーネ「うっ！」

ウンディーネの詠唱が失敗した

?????「ふうく来てみれば危ないところだったな」

来たのは一匹のバクフーンだった

すると今度は

?????「!?!?猿！」

一匹のレントラーがシルムを威嚇しようとする

?????「落ち着いてヴォル！今はそんなことしてる場合じゃないよ！助けるよ！」

一匹のラグラージがヴォルという名のレントラーを落ち着かせる

k「あなた達は？」

バクフーン「おお！そうだった、俺はバクフーンのレオだ、よろしくな！」

元気いっぱいバクフーン、レオは自己紹介する

ヴォル「僕はレントラーのヴォル…助けてやる」

ヴォルはウンディーネを睨む

アクア「僕はラグラージのアクア、ここは僕達も加勢するよ」

アクアと呼ばれたラグラージも構えた

ウンディーネ「フン！3匹増えようがわらわの優勢には変わりはない」

ウンディーネは余裕の表情をする

レオ「それはどうかな！」

ウンディーネ「!？」

なんとウンディーネの目の前にレオが迫ってきたのだ

ウンディーネ「(いつの間にわらわの前に!?)」

だがそれでも

ウンディーネ「だがわらわの前に立っていることを後悔するな、アクアキャノン！」

ウンディーネは水の砲弾を放つ、極太のレーザーのように水がレオに襲うが

シュン!

ウンディーネ「何っ!？」

なんと素早くレオは避けたのだ



k「やった！」

ドルク「ふう〜一時はどうなることかと思っただぜ」

ドルクはすぐに回復して復活

シルム「ありがとう、おかげで助かったよ」

シルムがお礼を言う

レオ「いや〜俺達もここが何処なのか迷ってな〜それに困った時はお互い様だよ」

アクア「そうだよ、僕やレオ、ヴォルもだよ」

ヴォル「……」

しかしヴォルはシルムを睨む

シルム「あれ？なんだかオイラを睨んでいるような（汗）」

シルムはタジタジする

アクア「あっごめんね、彼女はちょっと君みたいな猿系のポケモンには執念があってね」

ドルク「そうか…まあ助けに来てくれてありがとな」

ドルクもお礼をする

ウンディーネ「ゆ、許してたもれ……」

ウンディーネは負けてしまい、ボロボロだ

ドルク「とりあえずウンディーネ、俺達の力を貸してくれ！」

ウンディーネ「いいだろう…ではアクアマリンの指輪を」

こうしてウンディーネを契約し、ウンディーネを召喚したときにはウンディーネはポケモンに変わっていた。

シエルマルの進化系でフタチマルから進化するポケモン、ダイケンキになっていた。

ウンディーネ「それではわらわの力を与えよう…そのフタチマルとマナフィとのジユカインよ」

指名したのはシエルマルとミネラとジユティアだ

シエルマル「俺か…でもウンディーネの力を使いこなせるかな」

シエルマルは不安になるが

ミネラ「でも使いこなせるようにがんばろう」

ミネラは笑顔で言う

シエルマル「そうだね」

シエルマルは納得する

ジュティア「まあ元々あたしにも水の力あるけどね」

ウンディーネ「ではいくぞ」

ウンディーネの力がシエルマルとミネラとジュティアに注ぎ込まれる、こうして三人はウンディーネの水の力を得た

……

一行は浸食洞を出た

ドルク「これではイフリートを残すのみだな」

シルム「そうだね」

残る精霊は後一人、すると

レオ「なあどうせこのまま行ってもラチがあかなそうだしドルク達ブレイブのメンバーに入れてくれないか？」

アクア「たしかにそうだね、ドルク達についていけば僕達の世界に戻るかもしれないし」

しかし二人は納得しているが一人納得していない者が

ヴォル「ボクはあんな猿と一緒になのは嫌だ」

彼女はシルムがいることが気に入らないようだった

レオ「あのな、ヴォル、たしかにシルムは猿かもしれないけど、優しいし襲ったりしないだろ」

アクア「そうだよ、それじゃあシルムとかに失礼だよ？このまま僕達だけだとまた迷ったりもしちゃうからそう言わないで」

二人がヴォルを説得する。

ヴォル「わかったよ…」

彼女はしぶしぶと承諾する。

レオ「というわけでよろしくな」

アクア「ヴォルの事は気にしないでシルム、ちょっと事情があつてね」

シルム「うん、わかった」

ドルク「それじゃあ改めてよろしくな」

こうしてドルク達ブレイブに3匹が仲間になった

モリスン「それにしてもkよ、すごい技だな」

k「うん、僕はこれでも強いからね」

今回はkの活躍により、なんとかあったが最後の精霊はフレイラントというところにあるのだ…油断はできない

アーチエ「あゝあ、あたしも活躍したかったな」

チエスター「そりゃ俺もだ」

ミント「でもなんとかなつてよかったです」

クレス「でも油断はできないよ」

そして彼等は、最後の精霊の場所へ！

依頼77 VS ウンディーネ〜思わぬ助っ人〜（後書き）

はい！パルポンさん作『パルとポケモン達』からバクフーンのレオ、ラグラージのアクア君、レントラーのヴォルの3匹が来てくれました！

レオ「来たぜ！」

アクア「よろしくお願ひします」

ヴォル「よろしく」

パルポンさんから出演してほしいということでも3匹に来てもらいましたがどうですか？

レオ「俺達の出演ありがとうございます」

アクア「それにしても僕達元の世界に戻るか」

大丈夫、そこはどうするかも考えておくよ

ヴォル「……」

アクア「どうしたのヴォル、黙ってて？」

ヴォル「なんで猿がいるのかボクには理解できない」

あゝ今回は彼女、ヴォルの過去や後は色々なんだけど？

ヴォル「(怒)」

アクア「落ち着いてよ!?でもシルムがいるんじゃないとだめ  
だと思っし」

これじゃあ俺がゴウカザル好きだからということもあるからヴォル  
にはなれておいた方がいいかも、誰だって過去に色々あるんだし

ヴォル「……」

アクア「収まってくれたよ(汗)」

レオ「すみません、いつもこうなんで」

気にしないで、さて、次回もお楽しみに

依頼 78 過去と夜（前書き）

今回はヴォルちゃん過去の…そしてシルムの話です。

シルムの出番多いです（汗）では依頼 78

シルム「行くよ！」

依頼 78 過去と夜

ブレイブ一行のみんなは一度ベネツィアに戻り、そこから再び船でアルヴァニスタへと向かった、アルヴァニスタについた一行はここで買い物をして荷物をまとめて再び出発、途中で日が沈んでいた。

クラース「今晚は野宿だな」

ドルク「とりあえずテントでも張って準備でもするか」

みんなは準備をした。

ヴォル「……」

彼女：ヴォルは納得できない表情をしていた。これほどまでにイライラしているのはシルムだった。だがシルムはなんも彼女を恨むこととはやってはいないのだ。だが彼女は最初シルムに会ってから妙に睨みつけている。ドルク達以外は睨みつかれることはなかった。だがなぜシルムなのか？

彼女がこれほどまでにシルムを睨む理由は？そんな中シルムが彼女に声をかける

シルム「どうしたの？オイラ何か悪いことした？」

しかし彼女は無視をした

シルム「あ……」

シルムは何も声をかけることができなかった

そこにアクアが駆けつける

アクア「彼女、ちょっと過去に色々あってね…少し時間があつたら話すよ」

さらにそこにドルクも来た

ドルク「たしかにな、あいつなんかシルムに恨みでもある感じの目だぜ」

アクア「うん、でもちょうどいいから後で話すよ、なんで彼女はそうなったのか」

そういうとアクアは元の作業に戻る

ドルク「シルム、まずはこっちの作業してからにしような…気になるが気持ちをきりかえねえと大変だぜ？」

シルム「うん…わかったよ」

シルムは少し暗くなりながらも作業に移る

……

なんとかテントの準備を完了したドルク達、そろそろ夕食の時だろう

ドルク「今回は俺とシルムが作るぜ」

クラウド「ドルクって料理できるのか？」

シルム「うん、オイラも料理とかできるからクラウドさんとか手伝ってもらっていいかな？」

「どうやらドルクとシルムが作るらしい、はたして二人が作る料理とは？」

数時間後

ドルク「できたぜ」

シルム「お待ちどうさま」

ドルクが作ったのはカレーライス、シルムは麻婆豆腐だ…つまり今夜は

ドルク「俺とシルムの特製マーボーカレーだ！」

シルム「たくさん食べてね」

クレス「わあ、すごいよ二人とも！」

レオ「おっ！うまそう、早くくいてえ〜」

レオは待ちきれないほど食べたいようだった、みんなはそれぞれ自分の分を分けて座った

全員『いただきまーす！』

全員は二人のマーボーカレーを食べた、お味の方は

クラース「これは!？」

チエスター「ホントにあいつらが作ったのかというほどうめえ!」

クレス「二つの辛さのハーモニーが引き立てているよ」

マリア「すごいわね二人とも」

アトリ「二人して料理うまかったなんてな」

デイン「すごいヨ!」

レオ「うめえ〜おかわりほしいぜ!」

シルム「おかわりはたくさんあるから遠慮しないでね」

ドルク「かなりの分作ったからな〜おかわりもたくさんあるぜ」

ドルクだとかかなり食うためかなりの量は作ったようだ

アクア「すごいよ、この味は ヴォルも食べなよ」

ヴォル「いらん」

ヴォルは断るが

レオ「シルムが作ったのだからってそんなに警戒するなよ」(汗)

アクア「食べないと次の場所とかでバテちゃうよ……だからねえ……」

二人はヴォルを説得する。

ヴォル「……わかったよ……」

ヴォルはしかたなく食べることに……

数分後、みんなは夕食を食べ終えた

……

夜

ヴォル「……」

彼女は一人、二つの月を見ていた。なぜ月が二つなのかというと、  
クレス達の世界には月が二つもあるからだ

ヴォル「……」

彼女の目には涙が出ていた。

自分の過去を思い出して

……

別の場所ではドルクとシルムがアクアとレオの元にいた。さらにク  
レスとミントもだ

シルム「ねえ、どうしてヴォルはオイラのような猿系のポケモンには攻撃的になったりとかしてるの？さっきの夕食の事だって、なんか」

たしかにシルムの料理、ドルクも含めるがなぜ彼女はそんな態度になったのかだ

アクア「そうだね…色々と警戒心が強いんだ…過去に辛いことが」

ドルク「辛い事？」

アクアは頷いて話をした

…

ヴォルは過去に他のトレーナーに捨てられた、その時の彼女は進化前のルクシオだった。

冷静な彼女にとっては捨てられるってことはそのトレーナー自体は見捨てたってことだ…そしてその捨てたトレーナーは彼女にこう言った

「お前は身軽なサル以下の奴だ！俺はそんな奴が嫌いなんだよ！」

アクア「これは僕のトレーナーから聞いた話なんだ…その言葉で警戒心が強くなって、さらに猿系のポケモンには攻撃的になって…」

ドルク「それでシルムには攻撃的なんだな…俺は元人間だがそこまで過去を引きずっては何もかわらねえよ…」

ドルクは冷静に言う

シルム「でも…たとえ過去でも辛い気持ちはわかるよ…」

シルムは自分の事をレオとアクアに話す

シルム「オイラはドルクに会う前は臆病で意気地なだった…でもドルクと一緒に探検したりと自分に勇気をもつことができたんだ」

クレス「そうなんだ…」

ミント「シルムさんにもそんなことがあったんですね…でも…どうしたらヴォルさんが変われるのでしょうか…心配です」

過去はたしかに辛いこともある。でも

ドルク「過去にこだわってはいは…あいつは変わらないと思うぜ？」

レオ「たしかにドルクの言うとおりがもな〜」

アクア「僕のトレーナーでも慣れるのに大変だったから」

変われるのか…だが彼女の気持ちは心に闇を抱えたままだ、シルムが立ち上がる

シルム「オイラ、彼女に話してくるよ」

アクア「えっ！？でもシルムを攻撃するかもしれないんだよ！」

シルム「わかってるよ…でもこのまま変われなければ一生オイラを憎むかもしれないだよ…ならたとえぶつかってもオイラに慣れさせる!」

そう言っつてシルムはヴォルのところへ

アクア「ドルク…いいの?」

ドルク「どっちみち喧嘩になったら大変な事になる。そうなるの大変だからな…なら俺達も行っつてみるか…もし攻撃したら俺達が止めよう」

レオ「なるほどなくたしかに、なら行こう」

アクア「うん、僕も行くよ…ヴォルのストッパーは必要だからね」

ドルク、レオ、アクアはシルムを追いかけた

クレス「ミント、僕達も!」

ミント「はい!」

クレスとミントも三人を追いかける

……

ヴォル「なんで思い出すんだろう…頭から離れられないな…」

ヴォルはまだ月を見ていた。すると

?????「ヴォル！」

ヴォルは振り向いた、そこにいたのは

シルム「はあはあ、なんとか見つけた」

だがヴォルは

ヴォル「なぜ来た！ボクはお前が嫌いなのに…」

シルム「待つて！話をk」

ヴォル「来るな！」

シルムは近づくがヴォルは少し後ずさる

ヴォル「来るならお前を倒す！」

シルム「待つて！過去にあったことは話聞いているけどその気持ちはわかるよ…でも過去は過去なんだよ？オイラだつて…最初は臆病で意気地なしだった…だからその気持ち…わかるよ…」

シルムはヴォルに警戒されながらも話をする。

シルム「みんな優しいよ…それにオイラはヴォルが過去を断ち切ることを信じてるよ」

ヴォル「うるさい！！」

ヴォルはいきなりシルムに攻撃をしかけてきた

シルム「わっ!? 待って! そのまで攻撃」

ヴォル「うるさいうるさいうるさい!!」

ヴォルは爪で攻撃する

シルム「くっ! (爪がまるで幻に見える感じで痛い)」

シルムはダメージを受けてしまった。

ヴォル「僕にかかわるな!!」

ヴォルはスパークでシルムに突撃する。

シルム「うわっ!?!」

シルムはスパークを受けてしまった。

ヴォル「僕が過去の事がどうだろうとお前に関係ない!! 僕は嫌なんだよ! 身軽なサル以下…猿系のお前なんか嫌いだ!!」

さらにヴォルはシルムに攻撃を仕掛ける、だが

がしっ!

シルムがヴォルを両手で防ぐように構えた

ガブツ!

だがヴォルはシルムの右手を噛んだ

シルム「うっ！」

シルムは噛まれた右手を左手で抑える

だがヴォルは容赦なくシルムに攻撃する。

シルム「がっ！くっ！うっ！」

だがシルムは攻撃を受けても技を使っていない…

だがヴォルはこれでもかとシルムを攻撃する。

…

ヴォル「はあ…はあ…」

ヴォルは疲れた表情をする。目の前にはシルムが倒れていた。シルムはすでにボロボロだった

ヴォル「もう…僕に…」

だが

シルム「だ…だめ…だよ…」

ヴォル「！？」

シルムはボロボロになりながらも立つ

シルム「かかわるなって…言われても…仲間…なんだから…」

ヴォル「くっ！」

だがヴォルはシルムに攻撃する

シルム「うっ！」

シルムはしりもちをついて倒れる

ヴォル「お前なんて仲間でもなんでもない！！言っただろう！僕は  
お前みたいな猿は嫌いなんだ！！」

だが

シルム「それでも…慣れるまで…：…オイラは…何度でも受け止める  
よ！たとえ過去が辛くても…オイラは受け止める！！」

ヴォル「！？…お前みたいな奴には慣れない…慣れないんだ！！」

だがヴォルはそれでもシルムを攻撃する

シルム「うわあああああああああああっ！！？」

シルムは吹き飛ばされた

シルム「くっ！」

シルムは立ち上がろうとするが力が出ない

ヴォル「これで…トドメだ!!」

ヴォルはスパークでトドメを刺そうとする。

シルム「う…」

だがシルムは立つ、もうシルムの体力も限界に近い…

ヴォル「お前の言葉なんて…僕は認めない!!これで…!!」

ヴォルが電気を纏いながら突進してくる。

だが

?????「ロックフェンス!!」

ヴォル「なっ!?!」

ヴォルの目の前から岩の壁が発生してヴォルは吹っ飛ばされた

ヴォル「くっ!」

シルム「ド…ドル…ク…」

シルムの目の前にはドルクが立っていた。

ドルク「もうやめろ!!猿系のポケモンが憎い感じもあるがやりすぎだ…!!」

ドルクはヴォルに一喝する。

ヴォル「邪魔をするな!!!ならお前も!」

アクア「もうやめてヴォル!」

そこにアクアが止める

レオ「これ以上やったらシルムが死んじゃうだろ!」

さらにレオも一喝する。

ヴォル「レオ…アクア…」

アクア「シルムだって、ヴォルの事思っていたんだよ!たしかに過去の事は辛いけど、でも今を考えないと何も変わらないよ!もうやめて!これ以上シルムに手を出しちゃだめだよ!」

アクアはヴォルを説得する。

ヴォル「……」

ヴォルは黙ってしまった。

シルム「ごめん…みんな……」

バタツ!

ドルク「シルム!」

クレス「ドルク！」

そこにクレスとミントが駆け寄る

ミント「急いでシルムさんを運んで治療しましょう！みなさんも手伝ってください！」

ドルク達は急いでシルムをテントへと運んだ

……

シルム「……………」

シルムは包帯や湿布を張っていて、ただいま落ち着いて寝ているようだ

ドルク「とりあえずは安静にした方がいいな」

ミント「そうですね、それにしてもこれほどまでシルムさんみたいな猿系のポケモンに……………」

ミントは暗くなる

アクア「ごめんどルク、ヴォルも謝って」

ヴォル「…すまない…」

二人は頭を下げる

レオ「俺もごめんな…」

レオも頭を下げた

ドルク「いや、ここまでトラウマだったなんて思わなかった…ただ  
どヴォル…たとえ嫌いって思っても過去は過去だ…俺も今度本気で  
シルムにやつたら…俺も本気だからな」

ドルクがヴォルを睨む

アクア「ホントにごめんね…」

クレス「でもヴォルのトラウマは異常な感じもあるね」

ミント「はい…とりあえずは休みましょう。他のみなさんも寝てい  
ますし」

ドルク「そうだな…それじゃあ寝るぞ」

ドルク達は寝た

……

次の朝

シルム「う…う…ん…」

シルムは何とか起きた

シルム「あれ？ここは…っっていたっ」

シルムは痛んだ腕を押さえる

ドルク「目え覚めたか？」

シルム「ドルク」

ドルクがテントの中に入ってくる

ドルク「とりあえずミントの法术である程度はなんとかなったから  
もう少ししたら治るだろう」

シルム「そうか…わかったよ」

シルムは頷いた

……

マリア「シルムちゃん大丈夫？」

シルム「はい、おかげさまで」

シルムは数時間後、なんとか完治した。

するとヴォルがシルムに近づくと

シルム「ヴォル…」

ヴォル「…め…ん…」

シルム「え？」

よく聞こえないが彼女は

ヴォル「ごめ…ん…」

シルム「！」

シルムは笑顔になる

シルム「うん！」

シルムは元気よく返事をする

ヴォル「か、勘違いするな！…まだお前の事…認めたわけじゃないからな！」

と、咄嗟にシンデレレのように言うヴォル

レオ「素直じゃねえな」

ニカッとレオは笑う

ヴォル「う、うるさい！」

ミゲール「それじゃあ俺と一緒にデートでも」

マリア「死ねや！！クソミゲール！！（黒激怒）」

マリアのプレストにより吹っ飛ばされた一匹のヨーギラス（汗）

ドルク「それじゃあ出発するぞ！」

ドルク達はフレアランドへと向かった

依頼 78 過去と夜（後書き）

過去のトラウマって怖いね…

ドルク「そうだな、作者もこれ書くの嫌だったか？」

いや…できるだけ書いたけど酷い感じだったかもしれない（汗）パ  
ルポンさん酷かったらすみません（汗）

シルム「まあなんとかあったからいいけど慣れるまで時間かかるか  
も」

次回はついにイフリート戦です。

ドルク「もうかよ」

依頼79 VSイフリート〜灼熱の戦いとドルクの正体〜（前書き）

ついにドルクの正体&イフリート戦です。

まあちょっとぐだぐだになってしまいましたが（汗）

ドルク「ついにだな」

では依頼79

ドルク「のってるか!?!」

## 依頼79 VSイフリート〜灼熱の戦いとドルクの正体〜

ドルク達ブレイブはフレイランドへと到着して、イフリートがいる熱砂の洞窟へと入っていった

シエルマル「ここは不思議のダンジョン化していませんね」

クラス「どうやら不思議のダンジョンの影響がなくてよかった、とりあえずまずはここにあるソーサリーリングを探そう」

シルム「ソーサリーリング？」

ソーサリーリングという単語でクラス達以外は首をかしげた

クラス達はソーサリーリングというのを説明した。

ソーサリーリングは炎を出して遠くの的を狙ったりするリングで魔法のアイテムだ…もちろん人に向けてはいけないのでよいこはまねしないように

アーチエ「まずはソーサリーリングね」

ドルク達はこの洞窟の地下へ

……

敵もかなり強い魔物が多い、そのほとんどが炎のためか

シエルマル「アクアエッジ！」

シエルマルは水の術、アクアエッジを放つ、同時にミネラもだった

ミネラ「アイストルネード！」

ミネラは氷の塊を竜巻に合わせた術魔物を倒していく

ジユク「切り裂け、風の刃！エアスラスト！」

ジユクは魔物の周囲に風の刃を発生させて魔物を切り裂く、魔物は切り刻まれて血を流す

レビィ「大地の力を今ここに、グランドダッシュャー！」

大地の破壊のエネルギーが魔物を襲い飲み込んでいった

シエルマル「まさか精霊の力で術が使えるなんて」

シルム「オイラは回復術と少しだけど炎の術は使えるけどね」

レビィ「それぞれの属性でそうだったってことね」

ジユク「だが属性でも俺達のタイプとは一致しないのもあるな……」

ジユクの言うとおり、タイプ的には適合していないのがある、ジユクは風属性：タイプなら飛行タイプなら適合はしそうなのだ、だがシルフはジユクに風属性の力を与えた：レビィは草・エスパーで地属性の力をもつが、草は元は大地から生まれたものだ、それでレビィには地属性の：ノームの力が使えるだろう

k「精霊もすごいってことですね」

kはそう言いながら10万ボルトで魔物を倒す

ドルク「とりあえず…宝箱だ」

ドルクは宝箱を見つけた…中には指輪みたいなのがあった」

クラス「これがソーサリーリングだ」

どうやらこれがソーサリーリングのようだ

なんとか手に入ったドルク達はこの後ソーサリーリングを使って行けなかった扉をソーサリーリングでその鍵となる的を撃って扉を開けた

…

なんとか最深部までたどり着いたドルク達、途中溶岩のカギを見つけて最深部の扉を開けて、ソーサリーリングで柱を倒して道をあけた…そして奥には体を炎で纏った上半身だけの魔人の姿がいた

ドルク「お前がイフリートか？」

ドルクはその炎の魔人に言う

イフリート「左様、しかも久しい者までいるな…わしに何か用か？  
強き大樹の者よ」

ドルク「俺達に力を貸してほしいんだ、今この世界がポケモンになつていてそれぞれの精霊の力を貸しにここまで来たんだ！」

イフリート「わしに力を貸してほしいという覚悟があるのなら、力づくで従わせるがよい！」

イフリートは構える、どうやら戦って勝つしか方法はないようだ

ドルク「なら行かせてもらおうぜ！」

ドルクは構えた

イフリート「ほう…草タイプを持っているがわしが有利だぞ？それでも覚悟あるならそれを受け入れよう…骨の髄まで溶かすわしの炎を恐れるのならばな！ゆくぞ！」

イフリートは自分の右手から炎をためて放った

ドルク「ロックカット！」

ドルクはロックカットで素早さをあげて避けた

イフリート「ほう、わしの炎を避けるとはな」

シエルマル「僕達を」

ジユク「忘れるな！」

シエルマルはアクアエッジ、ジユクはエアスラストでイフリートを  
攻撃

イフリート「ぐわっ！中々やるな〜だがわしはまだ倒れん、本気を  
出すとしよう…火球の塵とかせ！」

横から火球が数発も放たれる

ジユク「ぐわっ!?!」

シエルマル「くっ!」

ジユクは食らってしまい後退、シエルマルはホタチでガードした

シエルマル「くっ!あ、熱い!」

だがホタチは熱くなっていた。

レビィ「ジユクさん、とりあえず回復しますね…ファーストエイド  
!」

レビィはジユクを治療していた。

ジユク「すまない、油断した」

ミゲール「ここは俺が!」

ミゲールは行くが

イフリート「フン!弱き者に勝てるわしではない、塵とかせ!」

再び火球が数発も放たれる

ミゲール「ぎゃあああああああああああああああ！あちいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

ミゲールは火ダルマとなった

マリア「何やつとんじゃポケエ！！（怒）冷凍ビーム！！」

カキーン！

ミゲールは氷状態になった

クレス「父さん（汗）」

アトリ「あのクソ親父（怒）」

みんな啞然とした

レオ「ここは俺が行くぜ！」

今度はレオが行く

アクア「炎なら…水だけど…レオ！ここはなるべく炎技は使わないで」

レオ「わかった！」

たしかにレオは炎タイプの技を持っている。

イフリート「フハハハ！同じ炎でわしに挑むか？だがわしに炎は吸

収されるぞ?」

精霊でも同じ属性で回復することもあるのだ

ドルク「だが俺も忘れるなよ!ストーンエッジ!」

ドルクはストーンエッジでイフリートにダメージを与えた

イフリート「ぐわっ!?!」

レオ「つばめがえし!」

レオは素早くつばめがえしを繰り返した

イフリート「くっ!」

だがドルクも負けてられない

ドルク「草タイプ舐めんなよ!!オメガリミット!」

ドルクの体が光を纏う

ドルク「行くぜ!貫く魂のロック!刻め俺のソウルビートを!」

レイブロックシャウト!」

色々な色の音符と岩の音符がイフリートを襲った

イフリート「ぐわあああああああああああああああああああああああ  
あああああつ!?!?!?!?!」

イフリートは倒れた

……

イフリート「フハハ！貴様らの戦い楽しかったぞ！よかるう、わしの力を貸そう、契約のための指輪を示せ」

ドルクがガーネットの指輪を取り出す

ドルク「我今炎の精に願ひ奉る…指輪の契約のもと、我に精霊を従わせたまえ…我が名はドルク」

イフリートは光だし、ガーネットの指輪に

ドルク「今度は誰が力をもらうかな…出て来い！」

ドルクはイフリートを召喚した。イフリートの姿は豚のようで顎が炎で燃えているポケモンだった、おおひぶたポケモンのエンブオーだ

イフリート「ではそのゴウカザルに与えよう」

指名したのはシルムだ

シルム「オイラ？でも炎の術はある程度は」

イフリート「だが上級の炎系の術は覚えておらんようだな」

どうやらシルムはある程度の炎系の術は覚えているようだ

シルム「うん、オイラはまだ上級術を覚えていないんだ…呪文書に

は中級までの術しか書いていなかったから」

イフリート「ならわしの力をもらうがいい」

イフリートの力がシルムに流れ出す

シルム「なんだろう…燃えるような感じがした！」

シルムはイフリートの力をもらった、これで4大精霊をドルク達は集めた

ドルク「これで4大精霊はそろったな」

だがまだ感心なところを聞いていない

ドルク「なあイフリート、なぜ俺には精霊の力を使うことが可能とシルフは言っていた。何か知っているか？」

イフリート「そうか…なるほど…では話をしよう…貴様が何者なのかを…」

するとイフリートは信じられない言葉を言う

イフリート「貴様は世界樹自体…そしてディセクターだ」

ドルク「ディセクター？それに世界樹自体ってどういうことだ？」

シルム「えっ？でも世界樹って人に化けるものだったっけ？」

クレス「いや、そんなはずないよ…でもなんでドルクが世界樹自体

でデイセンドーなんだろう?」

その疑問にイフリートは答えた

イフリート「デイセンドーとは世界に危機が訪れた時…世界樹から舞い降りる者だ…だがドルク自体は特殊だ…なぜ世界樹自体なのかだが…まずはそこから話そう」

イフリートは語る

…

ポケモンの世界には世界樹の存在があったのだ…だがしかし世界樹は突如として消えたのだ…なぜそうなったのかわからなかった…だが…

未来世界で一人の人間が現れた…そしてその人間は記憶はなかったのだ

ジユク「まさか!?!あの時!?!」

ジユクは何かを思い出した。

シエルマル「ジユクさんは何か知っていますか?」

ジユク「ああ、実はドルクと会った時…あいつは光に包まれて舞い降りてきたんだ…赤ん坊の姿で」

ソウ「師匠が!?!」

ドルク「信じられねえ…」

イフリート「だがそれは事実…そしてダークライというポケモンがタイムスリップ事故を起こし、ドルクはジユクをかばった…そしてそれが世界樹の…いや世界樹自体と同調した、そしてポケモンの姿がナエトルだったのは…世界樹自体の力がドルクの中に入り込み…そしてダークライの攻撃を受け、世界樹の意思でナエトルになったのだ…」

ドルクが世界樹自身…世界樹はマナの動力源でもある…なのでドルクは魔術を使うことができるのだ

ドルク「だかなぜイフリートや4大精霊は知っているんだ？」

そう、別世界なので矛盾しているのだ

イフリート「それは…4大精霊を統治しているマクスウェルから伝えられたのだ」

クラス「マクスウェル！？たしかにマクスウェルなら世界を見ているなら有り得るだろう」

マクスウェル…それは4大精霊を統治している精霊だ

ドルク「ならマクスウェルに会いに行こうぜ！このままくずくずしちゃいられねえ…」

ドルクは元気出して言う

イフリート「ならこの宝箱を開けるがいい」

イフリートの後ろには青い宝箱があった

イフリート「それにはマクスウェルと契約するための指輪、ターコイズが眠っている」

するとイフリートは消えた

早速中身を見てみると契約の指輪だった

シルム「ドルク…」

シルムがドルクに声をかける

シルム「オイラ…ドルクが世界樹自体でも頼れるパートナーだよ」

ドルク「ありがとなシルム…なんだか俺も吹っ切れたぜ」

たとえ姿がどうだろうと…

自分は自分なのだから

レオ「でも世界樹自体でも頼りにしてるぜ」

クレス「でも不思議だね…まだドルクが世界樹自体なのは違和感あるけど」

ミント「でもドルクさんはドルクさんですし」

シムーン「そうですね…」

ミネラ「パパはパパだから僕はそれでもパパを信じてるよ」

ドルク「みんな…くすっ…」

ドルクの目から涙が溢れる

ドルク「ああ！吹っ切れたところでマクスウエルのとこに行こうぜ  
！！」

全員『おおー——————！！』

ドルク「（世界樹自体ならマクスウエルという精霊に聞くしかねえ  
な…待ってるよ！）」

ドルク達はマクスウエルがいる場所へ！

依頼79 VSイフリート灼熱の戦いとドルクの正体（後書き）

ドルク「俺がディセクターって作者もディセクターじゃ？」

まあそうだけどフリーだからね

シルム「でも世界樹自体ってすごい大胆だね（汗）」

それはマクスウェルに会わないとね、マクスウェルは星の監視もしてるからポケモンの世界も見ていたってところかな

ドルク「だがマクスウェルって何処にいるんだ？」

次回でね（汗）

依頼80 モーリア坑道の不思議のダンジョン(前書き)

はい！ついにモーリア坑道です。

ただゲームとは違い、このモーリア坑道も変わっています。

なぜなのかは見てからのお楽しみです。それでは依頼80

ドルク「行くぜ！」

## 依頼 80 モーリア坑道の不思議のダンジョン

ドルク達はフレアランドから一度船でアルヴァニスタのに戻り、そこからアルヴァニスタからモーリア坑道というマクスウェルがいる洞窟に入る許可証をもらい、フレアランドに行く港の近くにあるモーリア坑道にドルク達は向かった

……

モーリア坑道

ドルク達はアルヴァニスタの許可証をアルヴァニスタ兵士（ポケモンになっている）に見せて入った、ドルク達は1階の仕掛けをなんとか解いたが、2階は…

モリスン「ここも不思議のダンジョンのようだ」

2階からは不思議のダンジョンになっていた。

レオ「ここも魔物だけじゃねえみたいだぜ」

そう、ここには魔物だけでなく…ポケモンの姿も見られた

クラス「どうやらこのポケモン達は襲ってくる感じのようだ」

ドルク「色々と影響してポケモンも出てきて暴れているってことだな」

どうやらポケモンまでもこの世界に来て暴れているようだ

出てくるのは岩タイプのポケモンとかがここは多いようだ

ドルク「どっちみちマクスウェルって奴のどこにいかねえといけねえからな！！エナジーバスター！！」

ドルクはエナジーバスターで敵ポケモンと魔物を倒していく

ジュティア「やるしかないわね！アイストルネード！」

シエルマル「アクアエッジ！」

シルム「エクスプロード！！」

それぞれ技や術で次々と倒していく。

ヴォル「くっ！」

ヴォルは一匹のポケモンに苦戦していた。岩・地面タイプのイワークだ

ヴォルは電気タイプのため地面タイプ対策の技がない

ヴォル「やばい…」

すでに彼女の息がやばくなっていた。その時

シルム「飛燕連脚！」

シルムが飛燕連脚でイワークを倒した

シルム「大丈夫！」

シルムは声をかけるが

ヴォル「フン！助けてくれなんて一言も……」

ヴォルはそんなシルムを無視した。まだ慣れないこともあって過去とも決別できないでいるヴォル

アクア「ヴォルも変わればいいけど……」

アクアはハイドロポンプで魔物を倒していく

ドルク「グランドダツシャー！」

ドルクがグランドダツシャーで魔物と敵ポケモンを一掃、敵ポケモンは気絶、魔物はやられて粒子となって消えた

……

なんとか地下10階まで来たドルク達、目の前には石版があった、その石版の前に一人の黒いローブの老人がいた。

?????「ん？おぬしらは？」

クラーズ「久しぶりですマクスウェル」

クラーズは目の前の老人……マクスウェルに言う

マクスウェル「ほほう、久しいの。話は聞いておるぞ」

どうやらマクスウェルはドルク達がここに来ることを知っているらしい

シルム「えっ！？どうしてオイラ達に来ることがわかったんですか？」

マクスウェル「わしは4大精霊を統治する精霊じゃ、4大精霊のものがここに来るのを知らせてくれたのじゃ」

どうやら精霊が連絡をくれたようだ

ドルク「それよりじいさん！」

マクスウェル「ほほう。じいさんか。まあわしはじいさんだがなんじゃ？」

ドルクが言う

ドルク「俺がディセクターで世界樹自体ってことだ、あんたなら知っているみたいだな」

マクスウェル「なるほどな。…まずはお前さんの詳しいことなどやなぜそれを知ったのかを詳しく話そう」

マクスウェルは語りだした。

依頼 80 モーリア坑道の不思議のダンジョン（後書き）

ドルク「あのじいさんがマクスウェルか？知っているのか？」

まあ4大精霊を束ねる精霊だからね…次回はそんな真実を語っていきま

依頼 8 1 真実と新たな仲間（前書き）

今回は色々と真実がわかります。

そしてさらになりダンXから四人が参加です。

ドルク「誰だよ」

それは見てからだよ、では依頼 8 1

ドルク「俺は俺だ!!」

## 依頼 81 真実と新たな仲間

マクスウェル「わしは別の世界の方を見てみたく、他の世界を見た……」

それぞれわしと同じ者も多く、世界樹がある世界やない世界もある。しかしわしはとある世界を見た……それがお前さん達ポケモンが住んでいる世界なのじゃ

だがこの世界の未来は暗い未来じゃった……それはダークライというポケモンの仕業じゃった……わしはなんとかできないかと考えた……そこで世界樹のディセンドラーの力を借りようとわしはポケモンだけの世界に世界樹の精霊マーテルにポケモンだけの世界に世界樹を生み出した……じゃが世界樹は枯れてしまったのじゃ

ディセンドラーは生まれたのじゃが……消えることはなかったのじゃ

ドルク「つまりそのディセンドラーというのは俺ってことなんだな？」

マクスウェル「その通りじゃ」

そしてディセンドラーであるドルクは成長していき、時空の叫びという能力を身に着けた……そしてお前さんは未来から過去に行ったのじゃが

ドルク「そこでダークライの攻撃が来た」

ジユク「タイムスリップの事故だな」

マクスウェル「そうじゃ」

そしてお前さんは相棒である今のジユクという者をかばった…そしてお前さんはその攻撃で致命的にダメージを負ってしまったのじゃ…お前さんはその時にはもうだめになる感じじゃったのじゃ

ドルク「つまり俺は…死んでいたってことか？」

マクスウェル「そうじゃ…しかし」

世界樹の意思がお前さんの体に流れ込み、お前さんは世界樹と同調したのじゃ…そしてお前さんの姿がポケモンになり海岸に倒れた、記憶は失ってしまったじゃがの…

シルム「それでオイラはドルクに会った」

マクスウェル「デイセンドーは最初に世界におりた時には記憶がないじゃ…お前さんは二度も記憶を失ってしまったのじゃ」

ドルク「そうか…だから俺には」

ジユク「ドルク…」

ジユクは心配そうにドルクを見る

ジユク「俺もその時にはなぜ赤ん坊が空から来たのかわからなかったのか…ようやく理解できたな」

アクア「それでドルクは」

ドルクはポケモン世界の世界樹に生まれたデイセンター

マクスウェル「世界樹が枯れた時はわしもその時はデイセンターであるお前さんは生きることではできなかったのじゃが…世界樹と同調したおかげでお前さんはこうして生きているのじゃ」

ドルク「俺が…」

ドルクは驚きを隠せなかった

シルム「でももしそうしなかったら…オイラはドルクと会っていなかったんだな…」

そう、ドルクがもし世界樹と同調して一体化していなかったら…ドルクの存在はなくなっていたのだ

マクスウェル「じゃが世界が救われたことはわしも安心した、さてとお前さんはこの世界がポケモンだけという原因がわかってないんじゃない？」

ドルク「ああ、何か知っているのか？」

クレス「もしかしてダオスが？」

しかしマクスウェルは首を横に振った

マクスウェル「お前さん達には知らぬと思っているが…ダオスはマ―テルが大いなる実として捧げられたのじゃ」

クレス「えっ!?じゃああのダオスは一体!？」

そこに

?????「残留思念だよ…ダオスのね…」

ドルク達の後ろから一匹のポケモンが出てきた。

それはミニロップだった

?????「クレスさん!」

?????「みなさん!」

そこに二匹のポケモンがいた

二匹とも赤いレンズの目に黄緑の両翼、尻尾はしましまで尻尾の先端にはダイヤの形をしたものがくっついている。せいいいポケモンのフライゴンというポケモンだ

ドルク「誰だ?」

ミニロップ「あたしはロンドリーネ、ロディって呼んでね」

フライゴン1「俺はディオ」

フライゴン2「私はメルです」

クレス「ロディ!？」



そこに

????? 「クルール！」

さらにそこから一匹のポケモンが出てきた。

つぶらな瞳に周りが綿のポケモン、わたたまポケモンのモンメンという

メル「あっ！クルール！」

クルールと呼ばれたモンメンはくるくると回る

……

クレス「じゃあドルクを襲ったダオスは残留思念で…ドルク自体が世界樹だから大いなる実りをとるためにか…」

ロンドリーネ「ええ、私や双子ちゃんは独自に調査したの…でも結局わからなかったからクレス達のとこに来たのよ」

どうやらロンドリーネ…ロディはディオとメルと共に調査していた。だがそれでもポケモン化の原因はわからないままだ

マクスウェル「まあこれからわしが話す…なぜポケモン化した原因なのじゃが…ドルク…お前さんの世界に…デリス・カーラインが現れたのじゃ」

ドルク「デリス・カーライン？」

デリス・カーラインとは、母なる大地であり…聖地という場所だ

それぞれの世界でもデリス・カーラインは異なる

マクスウェル「デリス・カーラインがなぜ現れたのかはわからぬが…実は世界が今消滅という危機に陥っているのじゃ」

シルム「えっ!?!」

世界の消滅…それはどうということなのか

マクスウェル「デリス・カーラインはそれぞれの世界とは別の大地じゃ…じゃが時に邪悪な感じにもなるのじゃ…そして今の世界はすでにデリス・カーラインと一緒に鎖が打ち込まれたのじゃ…このままなんとかしないかぎりは無理じゃ」

クラーズ「何か方法があればいいんだが」

それぞれの世界にドルク達の世界に鎖が打ち込まれ…それがどんどん近づいて…つとなり消滅しようとしているのだ

マクスウェル「方法なんじゃが…デリス・カーラインには結界があつて入れないのじゃ…なのでそれぞれの世界から大いなる実りを手に入れなければならんのじゃ」

だが大いなる実りを手にいれる方法…それがあればいいのだが

ドルク「だが大いなる実りを手に入れるにはどうしたらいいんだ?」

マクスウェル「そうじゃのう…お前さんがある程度何かによってそ

の世界の大いなる実りを手に入れることはできるはずじゃ……」

そこに

ピルルルル！

何処からか何かか聞こえる

ドルク「探検隊バッジからだ」

探検隊バッジが鳴る、実はそれぞれ連絡できるように探検隊バッジに連絡機能を追加したのだ……その連絡は

ドルク「もしもし」

デイシア『ドルクか、今何処にいる？』

デイシアからだ、探検隊バッジからデイシアの声が聞こえる

ドルク「今モーリア坑道にいるんだが」

デイシア『こつちもなんとかわかったことがある。一度現代のトールに戻ってきてくれ』

どうやらこつちでも何かわかったらしい

ドルク「わかった！そつちに向かう！」

ドルクは探検隊バッジを押して通話をきった

シルム「トールに行こう」

行こうとしたその時

ロンドリーネ「待って、なら私のペンダントで」

ロデイが取り出したのは古びたペンダントだ

ディオ「真・デリス・エリユシオンっていうんだ、それで俺達は時間を移動したんだ」

どうやらロデイのペンダントには時間転移能力があるらしい

ロンドリーネ「ついでにすすちゃんもクレス達のいる時代に送っておいたから」

クレス「すすちゃんも来ていたんだ!？」

すすというのはクレス達の仲間の一人で時空戦士の一人である。

ロンドリーネ「まあディシアというディアルガには会って事情は聞いてあるわ、今すすちゃんと調べものの作業していると思うわ」

ジュティア「助かるわ、一度戻った方がいいわね」

これでドルク達はトールに行かなくてもロデイの指輪で時間転移ができるのだ

マクスウェル「ならわしも行こう、ターコイズの指輪で契約をしてくれ」

マクスウェルは契約をしたらしい

ドルク「ああ、じいさんよろしくな！」

ドルクはマクスウェルと契約した。

ちなみにマクスウェルは伝説のポケモンであるミュウの姿となっている。

ドルク「それじゃあロディ、頼んだぜ！」

ロディ「わかったわ！」

ロディのペンダントが光り…みんなを包んで消えていった

## 依頼 8 1 真実と新たな仲間（後書き）

シルム「もしドルクが世界樹の力を与えていなかったら…オイラは会っていなかった…」

まあ思いっきりドルクがナエトルだからというからこうしようと思っ  
ってね

ドルク「だが真実は見えてきたな」

そしてロンドリーネ、ディオとメルが登場です。ロディがミミロツ  
プなのはロディには合う感じのポケモンだからですね、ディオとメ  
ルはディオの中の人がポケモンに出ているため、というかトレーナ  
ーですが手持ちのポケモンでフライゴンがあつたためと服装が同じ  
色なので双子はフライゴンにしました。

ジュティア「ようやるわね（汗）」

さて、今回は

ドルク「デイシアから聞かされた方法、そして俺はついに残留思念  
のダオスがいるダオス城へと向かった」

シルム「そこに待ち受けるものとは…！」

ジュティア「次回！依頼 8 2 ダオス城へ！」

ドルク「次回も冒険の旅へ行くぜ！」

依頼 8 2 ダオス城へ！（前書き）

ドルク「ついにだな！」

そしてそろそろファンタジア編も終わりになるつとじています。

それでは依頼 8 2

レオ「燃えるぜー！！」

依頼 82 ダオス城へ！

AC・4306 トール

マザーコンピュータールーム

ドルク達は戻ってきた。

ディシア「戻ったか」

ここに残ったメンバーが迎える、その中には

すず「みなさん来たみたいですね」

一匹のセミのようなポケモンで忍者が来ている装束の服を着ていた。

テッカニンというポケモンで彼女がすず…藤林すずなのだ

クレス「すずちゃんなんだね！久しぶり！」

クレスはすずに挨拶する。

すず「お久しぶりですクレスさん」

すずは頭を下げる、忍者のためか顔は冷静だ

ドルク「で？ディシア、何かわかったか？」

ドルクはディシアが何かわかったのかを聞く

デイシア「ああ、どうやらここの世界だけではないようだ…実は別の世界にもポケモンの影響が出ているようだ…原因は私達の世界にあるようだ」

シルム「オイラ達の世界に？」

デイシアが言うには、クレス達の世界だけの影響ではないのだ…さらに原因はドルク達の世界にあるようだ

デイシア「パルサの空間能力で異様な反応が出てきたのだ…」

シルム「それが他の世界に影響しているってことだね」

「そのとおりだ」とデイシアは頷く

デイシア「ここから私達の世界に戻る方法を見つけたのだが…それにはこのトールの時間転移に必要な力が必要なのだ、私とパルサの力で元の世界へ転移できるようにしておく、時間はかかるようだから待ってくれないか？」

時間はかかるようでデイシアとパルサはマザーコンピューターに他の世界の転移の作業をする。

ドルク「その間どうするかだな…」

すると

シュン！

クレス「ダオス!?!」

なんとダオスが現れた

ドルク「お前は!?!」

ロンドリーネ「ダオス…!」

ロディはなぜか暗くなる。

レオ「もしかしてロディはダオスを知っているのか?」

ロディ「まあね…知っているし…知り合っているわ」

ロディはダオスを知っているらしい

ダオス「…ダオス城で待っている。そこで私と戦え…ディセンドー」

再びダオスは消えた

ドルク「ダオス…!」

ドルクは何か決断したように

ドルク「あいつの城に乗り込むぞ!」

ドルクはそう言うが

シルム「でも、ダオス城は何処にあるの?」

そうだ、ダオス城が何処にあるのかわからないのだ

ディオ「それなら俺達は知ってるぜ」

ディオはそう言う

メル「ここの先の時代にあるの……何処も暗黒でデリス・カーラインのある時代なの」

ドルク「ならそこに行こうぜ！」

ロンドリーネ「ならあたしが送ってあげるよ」

モリスン「なら私はここに残ってディシア達を手伝おう」

モリスンはここに残るようだ

クレス「なら行こう！僕達はダオスをたおす！」

クレスのダジャレみた言葉でみんな寒気を感じた

全員「……」

クレス「アハハ！」

なぜか本人は自分だけ面白がっている。

ドルク「と、とにかく行こうぜ！」

ドルク達はロンドリーネのペンダントでダオス城へ

……

ダオス城

ドルク「でつけえな」

見渡すとまさに城だった、だがガイコツなどの不気味なものまで飾っている。

アクア「ここにダオスが」

ロンドリーネ「正確には残留思念だけだね」

と、ロディが付け足す

ドルク「なら行こうぜ、あいつに会って決着をつけねえとな」

ドルク達は歩き出した

……

ダオス城は不思議のダンジョンになっていた。ほとんどゴーストタイプのポケモンなどが特に多い

ドルク「こりゃあー苦労するな」

ドルクはエナジーバスターでゴーストを倒すが他のゴーストタイプのポケモンがシャドーボールを放つ、それをドルクはビートフェン

スでシャドーボールを打ち消した

シルム「たしかにそうだね、シャドーバレット！」

シルムは黒い炎の弾を撃つて、魔物とゴーストタイプのポケモンを倒した。

クラーズ「私自身もゴーストタイプだから同じタイプで通用するのだな」

クラーズは他のゴーストタイプのポケモンの攻撃を食らってしまい休んでいる。

それでもなんとか先を進むドルク達

……

ダオス城中間地点

ドルク「ここは中間地点か……」

シルム「それにガルーラ像まであるよ……」

どうやら基本的にダオス城も不思議のダンジョンと同じ中間地点は存在していた。

シエルマル「ということはこの先にダオスが待ち構えているみたいですね親方様」

ドルク「ああ、不思議のダンジョンの中間地点あるところボスあり

だな」

レオ「そうなのか？」

レオは首をかしげる

クレス「たしかに中間地点もあるようだね」

クレス達はダンジョンの奥に行ったことないため知らないのだ

ソウ「油断できないですね師匠」

ドルク「だが行くしかねえ！行くぞ！！」

ドルク達は奥へと進んだ

……

ダオス城最深部

ドルク「やっと到着だな」

シエルマル「はあはあ…この城…結構あるんですね…」

みんな疲れた表情をしている。このダオス城は35階もあるのだ、  
ほぼ半々で中間地点がある感じだ

ドルク「ゼロの島よりはマシな方だな」

ドルクはもっと深いダンジョンを知っている。深いところもあった

り、かなり登っていくのもあるのだ…

そしてたどり着いた最深部…床は六角形のガラスばりに外は丸い惑星が見えるのだ

そこに

シュン！

ダオスが現れた

ダオス「来たか…」

ダオスは構える

ドルク「ああ、決着つけようぜ」

そこに

ディオ「俺も行くよ！なりきり！クロスシフト！！」

ディオは黄金剣士のコスチュームを着た、黄金に輝く鎧に兜をつけている。

メルは魔女の帽子をかぶってホウキに乗っている。ハイウィッチのコスチュームで戦う

シルム「オイラも！」

シルムは構えた

ダオス「面白い…なら来い！」

今ここにダオスとの壮絶な戦いが始まるうっとしている！

依頼 82 ダオス城へ！（後書き）

ドルク「ついにダオスとの戦いが始まった！」

クレス「ドルク達とダオスの戦いが今ぶつかる！僕達はダオスをた  
おす！！！」

シルム「次回！『激突！そして…』」

ドルク「テメエ等のハートに刻んどきな！！！」

依頼 83 激突！そして…（前書き）

ついにダオス戦です。

クレス「ダオス！覚悟！」

いや、今回はドルクとシルムが！！では依頼 83

クレス「ダオスを倒す！」

依頼 83 激突！そして…

ダオス「テトラアサルト！」

ダオスは連続で蹴りやパンチをかます

ドルク「ぐっ！うっっ！」

ドルクは構えて防御する。

ドルク「こりゃあかなりのもんだな…だがその程度で俺は倒れないぜ！」

ドルクはテトラアサルトを耐えた、そこから反撃のエネルギーバスターでダオスから離れる

ダオス「ぐおっ！？」

ダオスは至近距離からのエネルギーバスターを避けきれずにダメージを受けた

ダオス「ここまでやるとはな…！」

ダオスはドルク達から離れる

クレス「ドルク…！」

クレスはドルク達が戦ってるのを見ていた。

ディオ「双牙！」

ディオは斬り下ろしかあら斬り上げの特技、双牙斬でダオスを打ち上げる

シルムはそこからヒートバレットでダオスにダメージを与える

メル「インディグネーション！！」

メルはインディグネーションでダオスにダメージを与えた、爆発が起こり、黒い煙に包まれる

ドルク「やったか？」

ドルク達は煙がおさまるのを待った…煙がおさまると

ドルク「まだ倒れねえか」

ダオスは若干ボロボロだがまだ倒れなかった

ダオス「中々やるな…ならこれでも食らうがいい！スーパーダオスレーザー！！」

ダオスの背後から巨大な魔法陣が現れ、そこからレーザーが放たれる

ディオ「うわっ！？」

シルム「くっ！？」

メル「きゃっ!?!」

ドルク「ぐわっ!?!」

四人はスーパーダオスレーザーを食らってしまい倒れてしまう。

ダオス「どうした?この程度なのか?」

ダオスはドルク達を見る

ドルク「誰が…倒れるかよ…」

ドルクはボロボロになりながらも立った

シルム「そうだ…ここで…あきらめるわけには…いかないんだ!」

シルムも苦しい表情をしながら立つ、ディオとメルもなんとか立った

ディオ「それでも俺達は!」

メル「負けない!」

四人はダオスを見る…四人の目はまだ希望を失っていない感じの目だ

ダオス「ほうくならもう一度食らうがいい!」

ダオスは再びスーパーダオスレーザーを繰り出そうとしている。

ドルク「だが秘奥義でも俺達の絆は貫けない!!どんな事があってもだ!!うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお



ダオスはドルクを睨む

ダオス「ならこれならどうだ…はあああああああああああああ  
あああああああつ！！」

するとダオスの背中から天使の羽が現れる

シルム「これは！？」

ディオ「本気になってきた！？気をつける！」

メル「ここからが本番みたい…ドルクさん！シルムさん！」

シルム「でもオイラ達はここであきらめないよ！」

ドルク「そうだ！それでも俺は！お前を倒すぜ！ダオス！！」

ドルクはエナジーバスターを繰り出す、しかし天使と化したダーク  
ライのダオスは別のレーザーでエナジーバスターを打ち消していく、  
さらにダオスラッシュという大技で蹴散らそうとダオスはドルク  
に襲い掛かる

しかし

カキーン！

シルムがバーニストベルジュで防ぐ

シルム「ドルクはやらせはしない！」

ダオス「なら貴様からだ！」

ダオスは至近距離からダオスレーザーを発射しようとしている。だがシルムは

シルム「オイラはあきらめないよ！それでもドルクを守る！」

シルムの体が炎をまとった

シルム「えっ？」

それはダオスをも巻き込むかたちとなる

ダオス「何っ!？」

ダオスは咄嗟にダオスレーザーを中断して後退した。

シルム「これは…力が…みなぎる…」

シルムには力を感じていた。

ドルク「シルム！」

シルム「ドルク！」

二人は手をつなぐ…二人の力が増していく

クレス「これは!？」

クレス達も感じていた。二人の力に

チェスター「なんかすごいことになっていったるぞ!?!」

アーチェ「一体どうなってるのよ!?!」

二人は互いを見つめる

ドルク「行くぜ!シルム!」

シルム「うん!」

二人は素早く移動する。

ダオス「(なんだ…力や魔力が上がっている…一体…)」

ダオスは二人の様子を見る、二人の力と魔力が上がっているのだ

シルム「行くよ!セイントバレット!」

シルムはレウスバーニストで光弾を連発する

ダオス「フン!」

ダオスはそれを軽く避ける、しかし

シルム「まだまだ!」

ダオス「!?!」

いつの間にかシルムはダオスの懐に

シルム「龍炎斬！」

シルムのバーニスベルジュが炎の龍を纏いダオスを切り裂く

ダオス「ぐおっ!？」

ダオスは落ちていく、そこからドルクが追撃をしようとする。

ドルク「ギガントウッドハンマー!!！」

ドルクの強化ウッドハンマーがダオスに炸裂し、ダオスは真下に叩きつけられた

ボロボロになりながらもダオスは立つ、ダークライの姿で白い翼を生やした奴はドルクとシルムを睨む

ダオス「くっ!ならダークホール！」

ダオスは初めてポケモンの技を使った、黒いボールは数個もドルクとシルムに向かう

ディオ「やべえ！」

メル「ドルクさん!シルムさん！」

双子が叫ぶ、しかし黒いボールはドルクとシルムに当たらなかった  
…いや…消されたと言った方がいいだろう、黒いボールはドルクとシルムの何かによって防がれたのだ

ダオス「馬鹿な!？」

ドルク「そろそろトドメと行こうか!」

シルム「行くよ!」

ドルクは黄金の光を纏い、シルムは炎のオーラを纏う

シルム「いくよ!これがオイラの力!燃える炎は心の力!炎劇舞荒拳!」

シルムの神速の連続攻撃が繰り出す、殴ったり蹴ったりと素早い動きで叩き出す

ダオス「ぐおっ!?!がっ!?!ぐっ!?!」

ダオスも連続攻撃で太刀打ちできない、さらにシルムは炎を纏い、鳳凰を生成する。剣を掴んで急降下した。

シルム「これで決めるよ!鳳凰降下斬!」

鳳凰を纏ったシルムが急降下してダオスを吹っ飛ばした、そこからドルクが構えた

ドルク「行くぜ!貫く魂のロック!刻め!俺のソウルビート!ブレイクロックシャウト!」

色んな色の音符と岩でできた音符がダオスに襲い掛かってきた



ドルク「お前は！」

ハハコモリ「私はノルン…あなたが来るのを待っていました」

シルム「ドルクを？」

ノルンと呼ばれたハハコモリは頷いた

ノルン「この世界だけでなく…別の世界も同じ現象になっ  
てること…そして世界を救うために来たあなたを私は待っていたのです」

ノルンの美しい声が響く

ミゲール「おお！なんとという美人」

ドゴーン…！

ミゲール「ピクピク」

ミゲールは鼻血を出しながら気絶した。

マリア「あなた（黒）ナンパはしないっていったでしょ？（黒怒）」

マリアは満面の笑みでミゲールを見る…いや笑顔が怖いですよマリアさん（汗）

ドルク「ということは何か知っているのか？」

ドルクの問いにノルンは頷いた。

ノルン「はい、そしてこの大いなる実りはマナが溢れています。受け取ってください…ディセクター…ドルクよ」

大いなる実りはドルクの体にスツと入った

ドルク「大いなる実りか…」

ドルクは安心したようになる。

ディオ「でもなんでノルンがいんだよ？」

メル「たしかあなたは罪をした者を裁くんでしたよね？前に私達みたいに魔科学兵器を使ったことで私達を裁くつもりだったんじゃないですか？」

ディオとメルは前にノルンに裁かれそうだったことあった…彼らには魔科学兵器を使った罪を…二人は背負っている。

ノルン「実は私も別の世界からポケモン化現象の事を調べていたんです」

クラス「なんだって!？」

みんなは驚く

ノルン「そして調べたら他の世界にも同じ現象が起こっているんです。原因はまだわからないままでしたが…ドルク…あなたの世界がポケモン化の発信源になっているんです」

ドルク「なんだと!？」

ジュティア「じゃあ急いであたし達の世界に行きましょう!」

しかし

ダオス「待て…」

突然ダオスが止める

ドルク「なんだよおい」

ダオス「慌てるな…まだ本当の破滅は起きていない」

シルム「どういうこと?」

ダオスは語った

ダオス「今はまだ大丈夫だが…そのうちその影響が出てくる」

どうやらまだ破滅は起きないようだ

クレス「……」

クレスは黙る

ダオス「とりあえずは私も情報を集める…さらばだ」

ダオスは消えた

ロンドリーネ「ダオス…」

クレス「ダオスはなぜその事を…」

クレスは納得できない表情をする。

ドルク「とりあえずどうする？」

ディオ「なら俺達の家に行こうぜ」

ディオが自分達の家に行こうと提案する。

メル「そこでこれからの事考えましょう」

ジユティア「そうね…たしかにここで慌ててちゃ何もできないわ」

ドルク達は結局ディオとメルの家、エトスハウスへとロディのペンダントで時間転移をした。

ノルン「あなたが世界を救うことを…見守りますよ…ドルク」

ノルンはそう言うと消えた

依頼 83 激突！そして…（後書き）

ディオ「まさかノルンまで来るなんてな」

まあなりダンXも入ってるからね、それにディオはポケモン出てるから

ディオ「あれ？出ていたの俺？」

出てたよ…さて、次回はついに！

依頼 8 4 俺達の世界へ！ (前書き)

ついにドルク達に世界へと

ドルク「これでなんとかなるが一体」

まあまずは依頼 8 4

ドルク「始めるぜ」

## 依頼 84 俺達の世界へ！

ドルク達はアセリア暦4408年にあるとある家へと向かった

AC・4408 エトスハウス

ディオ「ここが俺達が住む家、エトスハウスだ」

ドルク「しつかりとした木の家だな」

エトスハウスは1階しかない木でできた家だ

メル「それじゃあ入りましょう」

ドルク達はエトスハウスへと入った

……

メル「ただいま！」

?????「おかえり〜二人とも！」

玄関から目の前にある扉から一匹のポケモンが出てきた。緑の膜に包まれていて。中に赤ちゃんが入っているポケモン、増幅ポケモンのランクルスだ

ディオ「帰ったぜ！エトス」

デオはエトスというランクルスに言う

エトス「ん？それにお客さんもいるね、いらっしやい、僕はエトスっていうんだ、よろしくね」

エトスは挨拶する。ランクルスにはない4枚の薄い羽が目立つ

……

ドルク達はこれまでの事をエトスに説明する。幸いエトスハウスに  
いるのはドルク達だけで他に預かっている子供達もいるのだが今は  
遊びに行っていない

エトス「なるほどね…でもポケモン化がなぜ起こったのかわからな  
いね」

たしかにノルンが調べても原因はドルク達の世界にあつて、そもそ  
もの原因がなんなのかわからないのだ

ジュティア「それにしても子育て大変ね」

エトス「そうかな、僕もなれちゃって」

ジュティアはエトスが親がいない子供を面倒みてるのを共感してい  
た。ジュティアも孤児院の子供達のことを心配している。

ドルク「とにかく問題は俺達の世界へはどう行くかなんだよね」

どうドルク達の世界へ戻るかだ、すると探検隊バッジが鳴る。ド  
ルクは探検隊バッジを取り出す

ドルク「もしもし」

デイシア『ドルクか、今からツールに来てくれ!』

デイシアからだ、本人はツールに来てくれと電話してきたのだ

シエルマル「とりあえずツールに行きましょう。ロディさん、頼めますか?」

ロンドリーネ「わかってるわ、とりあえず行くわよ」

ディオ「それじゃあ俺も行くぜ」

メル「そうだね、私達も行くからエトは留守番お願いね」

エトス「うん、気をつけてね二人とも」

エトスは心配そうに言うが

ディオ「大丈夫だって!俺達はこれでもつええし」

メル「とりあえずお願いね」

エトス「うん、いつてらっしやい」

エトスに別れを告げてロディのペンダントでツールへ

……



シエルマル「絶対にできます！」

ジュティア「伝説のポケモンだからしっかりしなさい！」

みんなが応援する。

デイシア「（皆が期待している。私は今まで星の停止によって闇に捕らわれてしまった…だが私はこの罪を償うためにブレイブに入っ  
た…私はそれでも…！）」

デイシアの時の出力が上がる…するとトールが揺れた、外ではトールは光に包まれ…消えた

全員『うわあああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああつ…！！！！！！！！  
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

はたしてみんなは無事元の世界へ戻れるのか！

依頼 8 4 俺達の世界へ！（後書き）

ドルク「ついに俺達の世界へ帰ってきた俺達」

シエルマル「だが俺達に待っていたのはトレジャータウンにある黒い世界樹だった」

レオ「次回依頼 8 5 『黒い世界樹』」

アクア「見てね」

依頼 85 黒い世界樹（前書き）

ついに帰還です。

ドルク「俺達の世界はどうなっているんだ？」

それは見てからのお楽しみ、では依頼 85

ドルク「行くぜ！」

依頼 85 黒い世界樹

ドルク「う…う…ん…」

ドルク達はマザーコンピュータールームで倒れていた。

ドルク「シルム！みんな！」

ドルクがみんなを起こす

シルム「ドルク…ここは？」

シエルマル「俺達は元の世界に戻れたのでしょうか？」

ジュティア「その前にディアとパルサが！」

ジュティアが倒れているディアとパルサを指す

ミネラ「ディアさん！パルサ兄！」

ドルク達は倒れているディアとパルサに駆け寄る

パルサ「へへっ…力を使いすぎちゃったな…」

ディア「これで…元の世界に…戻れたはずだ…」

二人は力を使ったためフラフラしていた。

ドルク「とりあえず外に出ようぜ」

ドルク達は外へ出た

……

ドルク「ふう〜どうやら海岸の近くにワープできてよかったぜ」

外に出たドルク達、ここは海岸、ドルクとシルムが出会った海岸なのだ、トレジャータウンは少しボロボロになってるが復興している様子が伺える

ミネラ「やっと帰ってきたよ、急いでギルドに戻ろう」

シムーン「ここにも始めて始まりませんしね」

ドルク達が移動しようとしたその時

?????「ドルクさん！シルムさん！」

海岸から一匹のポケモンが現れた、背中には硬い薄紫の甲羅、まるで小さな島のようなポケモン、ラプラスだ…このラプラスは5年前にドルク達を幻の大地まで送ったポケモンだ

シルム「ラプラス！」

シルムはそのポケモンの名を呼んだ

デイシア「ラプラス…か…」

ラプラス「大丈夫ですかデイシア様」

ラプラスは心配な顔でディシアを見る

ディシア「何、私も力を使いすぎた…しばらくは休もうと思う」

ラプラス「そうですね…それより大変です。正面を見てください」

ドルク「一体どうしたっていうんだ？」

ドルク達は正面を見た

クレス「あれは!?!」

ミント「世界樹…」

マリア「だけど黒いみたい…」

そう、樹が生えていた。世界樹という名の樹を、だが世界樹は黒かった…その世界樹の周りには紫に染まった雲が上空に包んでいた。

ラプラス「ドルクさん達がダークライと戦って消えた後、この黒い樹が生えたんです。そしたら異変が起きました」

アクア「異変? 一体?」

その異変とは

ラプラス「他の不思議のダンジョンでもポケモン達が凶暴化し、さらにポケモンとは異型のものまで現れたんです」

シルム「それって!？」

ドルク達が思う事は一つ…

魔物までこの世界に来たということだ

ラプラス「僕も調査しましたが、どうやらあの黒い樹には恐ろしい感じがしたんです。しかも結界みたいなのが張ってあって近づけることができないんです」

黒い世界樹は黒い禍々しかった、世界樹とは対をなしている感じだ

ドルク「どうすりゃあいいんだ」

その時、ドルクの体が光る

そこから大いなる実りが光だし、レーザーを黒い世界樹に発射する。黒い世界樹は少しだが色が薄くなっていた。

ドルク「これはどうなっついていやがるんだ…」

ヴォル「これって…」

ドルク達は驚く

ノルン『これがすべての原因です。そして大いなる実りをすべて集まれば黒い世界樹をなんとかできます』

何処からかノルンの声が聞こえる

ドルク「つまり他に大いなる実りがあるってことか？」

ドルクは何処からか声がするノルンに声をかける

ノルン『はい、大いなる実りはそれぞれの世界にあります。なので次の世界に行くための魔法陣をすでに用意しています。準備ができたらトールのマザーコンピュータールームに』

するとノルンの声がそこで途切れる

ドルク「とりあえずディシアとパルサをギルドに運ぶぞ！」

ドルク達はギルド『ブレイブ』へ

……

ドルク「どうだシムーン？」

シムーン「ディシアさんとパルサさんに命の別状はないです。とりあえずは安静にしていればなんとかかなりますね」

ドルク「そうか」

ディシアとパルサはなんとか安静で今自分達の部屋で休んでいる。

クレス「でも問題は大きいなる実りが別の世界にあるってことだね」

そう、この世界の黒い世界樹が原因でダンジョンのポケモン達は凶暴になり、さらに魔物までも現れたのだ

ドルク「そうなる」と別の世界に行くには誰が残るしかないかもしれないな…そこだが…ソウ、お前は自分自身の世界に帰った方がいい、それにこっちにも影響しているはずだ」

ソウ「そんな！師匠！？僕は師匠と！」

しかし

ドルク「だめだ！たしかに一緒だと助かるが、お前の世界が魔物たちなどで大変なことになったらどうするんだ！そうなたらお前の住む場所がなくなるだろ！」

たしかにドルクの言うとおりだ、そうなる手遅れになる可能性もある。

ソウ「わかりました…師匠…また会えたら…」

ソウの目に涙が浮かぶ

ドルク「ああ、またいつか会おうな」

ソウ「はい！それじゃあ師匠！さようなら！」

ソウは泣きながら去って行った

ドルク「ソウ…元気だな…」

ドルクはそんな弟子を見送った

……

ドルク「他はどうするかだな」

クレス「僕達の世界は大丈夫のようだし僕達はいい？」

クレス達の世界は大いなる実りを手に入れているため大丈夫だが

ドルク「たしかにそうだな、ここは誰かここに残っていつでも行けるようにするしかないな」

シルム「そうだね、どうする？」

シルムはドルクに問う

ドルク「ならシムーン、ミネラ、グラデル、ゼラスとかは残ってくれるか？」

シムーン「たしかにそうですね、わかりました」

ミネラ「でもパパ」

ミネラは納得できない表情だ

ドルク「大丈夫だ、ミネラはここでジュティアの子供達を守ってくれないか？」

するとミネラは

ミネラ「わかったよ、僕はここを守るよ」

ドルク「よし、いい子だ」

ドルクはミネラの頭を撫でる

ジユティア「子供達も無事みただけどプクリンのギルドのメンバーが見てくれて感謝してるわ」

そう、ドルク達がクレス達の世界に行ってる間、プクリンのギルドのメンバーが面倒を見てくれたのだ

ドルク「デビーはここに残って守ってくれ」

デビー「わかったッス」

ジユク「それじゃあ俺とレビィ」

シエルマル「精霊に力をもらった俺達もですね」

そう、ジユク、レビィ、シエルマルは精霊の力をもらっているため魔術を使うことができるのだ

そうなるよ

ドルク「マリアは無理して行かなくてもいいんだが？」

クレス達の方はマリアがまだ病気などもあってマリアは残った方がいいと言つがマリア自身は「大丈夫よ」という

シルム「でもマリアさん」

だがそれでも

マリア「それでも行くわ、だってミゲールがまた何かやらかしそうだし」

たしかにそれもそうだが

ドルク「しゃくねえな、それじゃあ無理があるなら休んでてくれ、いいな？」

マリア「わかったわドルクちゃん」

マリアはそれを承諾した。

クラス「ここは私も残ろう」

モリスン「なら私も残ろう、ここで色々と方法をクラス殿と一緒に調べる」

モリスンもクラスと共に残るようだ

ディオ「なら俺もここに残る！」

メル「そうだね、いつ何処で起こるかわからないし」

ロンドリーネ「あたしも残るよ、ダオスも調べている感じがするし」

ディオ、メル、ロデイが残ることになった

レオ「俺も行くぜ！」

アクア「僕達の世界がそうになったら嫌だから」

ヴォル「私も…」

レオ達も行くようだ

k「僕も行きます!」

クラウド「俺も行く!」

kとクラウドも行くようだ

ドルク「決まりだな、それじゃあ休んで明日行くぞ」

……

次の朝

マザーコンピューターの前にはドルク達が出た、その転送装置の地面には魔法陣が敷かれていた。

クラス「何かあったら連絡する」

モリスン「探検隊バッジにはいつでもここに戻れるように夜、クラス殿と改造しておいた」

クラスとモリスンは探検隊バッジをみんなに渡す

ドルク「ああ、それじゃあ頼んだぜ」

シムーン「行ってらっしゃい…ドルクさん」

ミネラ「パパ…無事に帰ってきてね」

ミネラは涙を流す

ドルク「ああ、かならず戻ってくる、頼んだぜみんな！」

ジユク「ゼラス、頼んだぞ」

ゼラス「フン！行ってくるがいい」

ゼラスはそっぽを向く

ドルク「行くぞ！」

ドルク達は探検隊バッジを上に掲げた、すると魔法陣がそれに反応してドルク達を包み込む…そしてドルク達は消えた

ミネラ「パパ…」

ロンドリーネ「大丈夫よミネラちゃん、きっとドルクは帰ってくるわ、それでも大いなる実りが手に入ったらまたここに戻るわよ」

ミネラ「ロディさん…」

ドルク達は次の世界へ！

はたしてこの先、何が待ち構えているのだろうか！

依頼 85 黒い世界樹（後書き）

さて、次回は新章突入です。

ドルク「次は何処の世界なんだろうか…」

それは彼にかかわる重要なことになります。

ドルク「誰だ？」

コラボキャラの誰かだよ、次回でわかるよ

追記：守り人さんコラボありがとうございました！

依頼 86 運命く絆とレオの真実く（前書き）

ついに新章突入です。

今回からはデステイニー2編というか少しですがデステイニーも加えて、名づけて『運命の冒険くデステイニー・デステイニー2編』をお送りします。

そして今回はレオ君の事がわかります。

それでは依頼 86

レオ「燃えるぜ!!」

依頼 86 運命と絆とレオの真実

ドルク達は次の世界へと旅立った、そして

シュン！

何処かへとたどりついた

ドルク「ここは？」

シルム「うわっ！下は空だよ！？」

みんなが下を向くとそこは一面空だった…しかし地上はなぜか荒れているようだった…だが町は3つしかなく…それぞれカプセルに包まれていたのだ

クレス「一体ここは？」

チェスター「わかんねえな…しかもなんで空の上にいるんだよ」

アーチエ「ねえ？あれ何なの？」

アーチエが指指した方を見ると…黒い何かに包まれていて、さらにオレンジの剣のようなものがついていた

レオ「まさか！？ここは！？」

アクア「どうしたのレオ？」

ヴォル「なんか落ち着かないようだが？」

レオは慌てた

レオ「い、いやなんでもないよ…それより中に入ろうぜ」

レオは歩き出す

ドルク「あいつ一体どうしたんだ？」

レオ「（なぜダイクロフトがここにあるんだ？たしか俺達は…）」

レオはダイクロフトという謎の施設を見る、だが一体彼は何を知っているのだろうか…

……

中に入ると奥に続く道があった…ドルク達が歩いていった…するとそこで声が聞こえた

なにやら女性の声や少年の声…さらには青年の声や少女の声まで聞こえていた。

シルム「誰か話しているのかな？」

ドルク「隠れて見て見ようぜ」

ドルク達は慎重に進んで話している場所の近くに着いたら隠れた

目の前には王座みたいなものがあり、一匹のポケモンがいた…8つ

に分かれた黒い突起に白いローブを着ており、さらに白い信者がかぶる帽子をかぶっていた。このポケモンはてんたいポケモンのゴチルゼルというポケモンだ…そのゴチルゼルの目の前には5匹のポケモンがいた。

一匹はレオの姿であるバクフーンの進化前のポケモン、マグマラシ…しかも剣を持っていた。

一匹は頭に赤い花を二つ飾っていて、葉っぱのスカートをはいていてピンクのローブを着たポケモン、クレイハナ…杖を持っていた。

一匹はワニのようなポケモンでへそが出て白い服を着ているオーダイルというポケモン、重たい斧を持っている。

一匹は剣を両方持っていて、頭には長い葉っぱに細い身体をして、さらに仮面をかぶったポケモン…ジュプトルだ、しかしなぜジュプトルが仮面をつけているのかわからない…

そしてもう一匹は細い手足でスツキリとしたスタイルの狐獣人のように弓を持っているポケモンだった…ぶじゅつポケモンのコジョン  
トだ

なにやら話しているようだ…それも対峙するような…そんな感じだ  
マグマラシ「世界がこんな風になっちゃったのは…お前の仕事なんだな!？」

マグマラシの少年はゴチルゼルに訴えかける、しかしゴチルゼルは態度を変えずに言う

ゴチルゼル「世界を作り変えたのはたしかに私だ、だが…それを望んだのは他ならぬお前達人間だ」

ドルク「（なんだと!?!）」

隠れていたドルクもゴチルゼルの言葉に驚く

シルム「（つまりあんな風になったのは…すべてこのゴチルゼルのせいってこと!?!でも普通のポケモンでこういうことできるのかな?）」

シルムは疑問に思った

ドルク達はとりあえず落ち着いて彼らの話を隠れて聞く

ゴチルゼル「悩みや苦しみが無い世界、幸福だけがある、そんな世界を…」

オーダイル「レンズなしでは生きられないこんな世界が幸福だと!?!そんな馬鹿な話あるか!」

斧を持ったオーダイルの青年は怒りを込めてゴチルゼルに言う、彼らはすでにこのゴチルゼルに対しての怒りが込められている。

レオ「（レンズだって!?!それにこの世界は俺の…）」

レオはらしくない感じで冷や汗が出る。

ゴチルゼル「今はまだ、<sup>かとき</sup>過渡期にすぎない…神がより完全な形で降臨を果たした時…完全な世界、完全な幸福が<sup>げんしゅつ</sup>現出するのだ」

マグマラシ「完全な形…？」

クレス「（どういうことなんだ？）」

彼女が言う完全な形…それに完全な幸福

マリア「（なんだか幸福に思えないわ…何か苦しい感じが…）」

マリアは病気なのだがなぜか身震いがした。

さらに話は続け、ゴチルゼルはここで本来なら早い段階で神は完全  
に降臨すると言った…そして彼女は神の使いだったことを…

ドルク「（なんかあのゴチルゼル…とんでもねえこと企んでやがる  
な…）」

ドルク達は何かこのゴチルゼルがとてつもない企みをしていること  
を感じていた。

この世界が神を信仰していることが…

だがゴチルゼルは話を続ける

ゴチルゼル「このままでは、完全なる神も完全なる世界もままなら  
ない…そう考えた私は、レンジを集め…神の力を高めることを、思  
いついた。しかし、その計画もお前達によって阻まれてしまった…  
私に残された道はさらなる過去にさかのぼってすべての民が神を崇  
める世界に変えること。結果は見ての通りだ、神への信仰を宿した  
レンズもこうして大量に集めることができた」

ドルク達はこのゴチルゼルは敵というのを判断した。とりあえずはまだ隠れたまま話を聞く

ジユプトル「そのために天地戦争を利用したわけか、バルバトスを送りこんで天地戦争の結果を逆転させ地上を荒廃させる。そこに、救世主が登場し救いの手を差し伸べる…救世主は、神の恩恵と称して人々の信仰を一身に集める…か、とんだ三文芝居だな」

仮面を被ったジユプトルは冷静に言う

レオ「（天地戦争！？それにバルバトス！？）」

レオは何か知っているような感じで慌てていた。一体彼は？

するとそのゴチルゼルが仮面のジユプトルを見て言う

ゴチルゼル「せっかく舞台上に上げたというのに…脚本通りに動かない役者に何も言われたくはないな」

ジユプトル「……………」

仮面のジユプトルは黙ってしまふ、すると今度はキレイハナの少女が言う

キレイハナ「こんなやり方は間違ってる！歴史を歪め、過去を変えてまでそしてポケモンの姿に変えてまで人は幸せになるうとは思わない！」

キレイハナの少女が訴えかける

すず「(どういうことなんでしようか？つまりあのゴチルゼルが歴史だけでなく…ポケモンに姿を変えたということ…何か禍々しい感じがします)」

すずは禍々しいのをゴチルゼルに感じた

ゴチルゼル「…リアラ、お前は、まだわからないのか？どんな綺麗事を口にしたところで消してしまいたいほど辛い過去が誰にでもある。たとえばそう、そこにいるジューダス…いや、リオン…マグナスのように」

この言葉にみんなが驚く

レオ「(リオン！?)」

オーダイル「リオン…マグナス!?!」

コジョンド「神の眼をめぐる騒乱でスタン達四英雄を裏切ったっていう、あの!?!」

ドルク「(リオン…マグナス…あの仮面の男…ジューダスと呼ばれていたみてえだが…本当の名はリオン…マグナスということか…でもなぜなんだ?)」

ドルク達もこれには疑問をもってしまった、ドルク達は神の眼をめぐる騒乱や天地戦争の事を知らないためか戸惑う、だがこの事を知っている人物は一人だけだった

レオ「(まさか!?!リオンが生きてるなんて!?!俺と同じ!?!)」

レオだった、彼は一体何を知っているのだろうか…

話をマグマラシ達に戻そう

ゴチルゼル「そう、無念を残して死んだ彼に機械を与えたのだ」

マグマラシ「デタラメを言うなッ！」

マグマラシの少年はゴチルゼルに、向かって叫ぶ

ゴチルゼル「でたらめかどうかは本人に聞けばわかること……」

マグマラシ達がジユプトル…ジューダスに視線を向ける、しかしジューダスは黙っている。

マグマラシ「なんで黙ってるんだ！？僕はリオンなんかじゃないってそう言ってやれよ、ジューダス！」

しかしジューダスは仮面を脱いで

ジューダス「そうだ、僕はリオン…リオン…マグナスだ」

隠れているドルク達とマグマラシ達は驚く

マグマラシ「そ、そんな、どうして…！」

ゴチルゼルは目の前のものに振り向き何かをやる

マグマラシ「しまった！」

ゴチルゼル「神よ！大いなる御魂<sup>みたま</sup>をここに…！」

光が輝きみんな何処かへと消えた

……

ドルク「う…ここは…」

ドルクが目を覚ました。だがドルクとリアラと呼ばれたキレイハナ  
しかいなかった

リアラ「うっ、うっ……」

リアラもなんとか立ち上がる

リアラ「あなたは？」

ドルク「あ…すまねえ…実はお前等の事仲間と一緒に聞いていたん  
だ、話を…俺はドダイトスのドルクだ」

ドルクはリアラに自己紹介する。

リアラ「私はリアラ…姿はキレイハナだけど本当は私は聖女…もう  
一人そこに浮かんでいるエルレインと一緒に聖女なの」

彼女の表情は暗かった

ドルク「エルレイン…」

リアラ「それよりこれは…！」

辺りはカプセルのようなものがあり、そこに何人かのポケモンが眠っている。そして目の前には大きなダイヤモンドのようなものが

エルレイン「ようやく目覚めたな…しかも隠れて見ていた不屈き者まで来るとはな…どうだ、新しい世界の感想は？」

リアラ「エルレイン！あなた、一体何を…！？」

エルレインは口を開く

エルレイン「案ずるな、彼らはフォルトウナの力でただ夢を見ているだけだ」

リアラ「夢…？」

ドルク「どういうことだ？」

だがフォルトウナとはなんなのかもドルクはわからない…それに他のみんなの姿はない…一体？

エルレイン「現実では不可能なことも夢の中ではなにもかも思い通りになる。痛みも苦しみも、感じることはない…これこそが、神が望み…そして、人々が望んだ完全なる幸福…」

リアラ「そんなの、まやかしに過ぎないわ！夢の中で幸せになることにどんな意味があるというの…！」

ドルク「俺達の仲間をそうしてお前は何が目的なんだ！」

ドルクが怒りが爆発し叫ぶ

エルレイン「目的と意味はある。なぜなら彼らは、永遠に夢から覚めないのでから」

ドルク「なんだと!?!」

ドルクは驚く

エルレイン「覚めない夢は現実と同じ、そして永遠の夢の中では幸せも、また永遠…これこそがすべての民を幸福へと導く唯一ゆいにして絶対の法」

ドルク「ふざけるな!?!」

ドルクが怒鳴る

ドルク「何が幸せで何が幸福だ!?! テメエはそんな風にして歴史を変えようとしたのか!?! ふざけるんじゃないやねえ!?!」

リアラ「ドルク…そうドルクの言うとおりよ! そんなの絶対間違ってる!」

ドルク「シルム達を何処へやった!?! 言え!?!」

ドルクの怒りが頂点へと達する、仲間をこのようにさせたことへの彼の怒りだ

リアラ「カイル達は何処!?! 一体、みんなを何処へやったの!?!」

エルレイン「彼らもまた永遠の夢を見ている。もうお前達の声も届かない…」

リアラ「そんな…！」

リアラはショックを受ける

エルレイン「お前達の声に伝えてくれる者は、もう誰もいない…リアラ、お前の役目は終わったのだ」

リアラ「終わってなんかない！」

ドルク「そうだ！！テメエみたいな奴に神の好き勝手させるかぁ！！」

二人は必死に叫んだ

リアラ「カイルは必ず私の声に応えてくれるわ！だから…！」

エルレイン「無駄な足掻きはよせ、彼らの精神世界に入ったところで目覚めさせることなどできはしない、永遠の幸福を捨てられる人間…いや今はポケモンなどいない…人ははかなく弱い、だからこそ彼らには神と神の救いが必要なのだ」

しかし

ドルク「勝手に決めんじゃねえ！！俺達の絆…ブレイブの絆を舐めんじゃねえ！！テメエのような奴にシルム達が負けるはずはねえ！！」

リアラ「ええ、私は信じてるわ…人間…いやポケモンの強さを…  
カイル達を！」

二人は勇気を出して言う

エルレイン「仮に目覚めさせたとしても、お前達に待っているのは  
悲劇だけ…それなのになぜお前達は自らを苦しめてまで進もうとす  
る？」

するとドルクは高々と立ち

ドルク「聞きてえか？その苦しみがあつてこそ俺達は進めることが  
できるんだ！テメエの作った世界を空から見た時…逆に俺はこの世  
界の事で色々苦しんだ…だがな！！テメエのそう都合いいようなこ  
とで余計な事されることが一番腹が立つんだよ！！」

続けてリアラも

リアラ「私もこの世界を見て思ったわ…もしこれが、人々の望む幸  
福なら私の役目は終わり、使命からも解放される…そうすればカイ  
ルと、いつまでもいられると…でもそれは間違いだった…たとえど  
んな結末が待ってようと、歩んでいく過程にこそ、人の幸せはあ  
る…あの人はそう言ったのだから私も、カイルと共に歩むわ……」

ドルク「たとえどんな結末が待ってようと…俺はシルムと一緒に  
いてえ…あいつが俺の相棒だからだ！」

リアラ「私はカイルと一緒にいたいから……カイルを愛しているか  
ら！」

ドルクは光に包まれ消え、同時にリアラも自分のペンダントの光に包まれ消えて行った

……

ドルク「ここは？プクリンのギルドだな」

ドルクはプクリンのギルドにいた、だがここはセピア色に染まっていた。

ドルク「ん？あれは？」

プクリンのギルドの前にはシルムがいた。ただ怖くて一步前に出な  
いでいた。

ドルク「（シルムの記憶かここは…あいつ怖がっていたな…これがあいつの夢なのか…）」

シルム（ヒコザル）「ああ…やっぱりだめだ…オイラには探検隊向いてないのかな…もう一度戻ってきたけど…やっぱり…」

シルムはうまく一步を踏み出せずネガティブになる。そこにドルクがヒコザルになったシルムに声をかける

ドルク「シルム！」

シルムが振り向く

シルム「君は？誰？」

シルムはドルクの事をわからないようだ」

ドルク「（やっぱり夢だから俺の事）目を覚ませシルム！お前は臆病でいくじなしじゃねえ！」

シルム「何言ってるの？オイラは臆病でいくじなしなんだよ！オイラ探検隊にはなりたい…でも怖いんだよ…この穴だって、足跡を見るみたいで怖い！オイラには探検隊は！」

するとドルクが叫ぶ！

ドルク「違う！お前はゆうかんで臆病でいくじなしじゃねえ！！俺という大切なパートナーがいるじゃねえか！！」

シルム「パー…ト…ナー…？」

突然シルムは頭を抑える

シルム「うっ…！頭が！頭が痛いよ…！」

ドルク「痛くても辛いのはわかるでもがんばれ…！お前は俺の最高のパートナーなんだ…！」

ドルクの叫びでシルムは立ち上がる

ドルク「思い出すんだ…！俺と一緒に探検したあの事…そして世界を救って俺と再会したことを…！」

シルム「オイ…ラ…そうだ…オイラは…」

二人に光が包み込んだ…光が収まるとシルムはゴウカザルに戻って  
いて倒れていた。

ドルク「シルム…」

シルム「これは…夢なんだね…温かくて心地いい…でも…もうオ  
イラは…迷わないよ…だって…オイラにはドルクという最高のパー  
トナーがいるんだから…」

光が包み込む、そこからさらにシエルマル、ジユク、レビィ、ジユ  
ティアもいた。

シエルマル「ここは…?」

ジユク「ドルク…シルム…あれは夢だったんだな」

レビィ「危づく夢の中を永遠にさまよるところだったわ…」

ジユティア「そうね…」

なんとか無事のようにだ

シルム「でもドルクは平気のようだね」

ジユク「もしかするとディセクターの力と世界樹の力が働いている  
ってことが…」

ジユクはそう応えた

ドルク「たしかにそうかもな…それじゃあ他の奴等の目を覚ませようぜ」

ドルク達は光に包まれた

……

次についたのは

ドルク「ここは何処だ？」

レヴィ「田舎のようね…一体誰の記憶なのかしら？」

ドルク達は誰の記憶か疑問に思っている。ここも同じようにセピア色に染まっていた。

とりあえず進んでみることに…

彼らとはある場所についた、そこは孤児院だった

ドルク「!？」

ドルク達は見た、それは長い髪をした男が長髪で顔がごつい男に斧で殺されたところだった、さらにそこには二人の少年と短髪の女性もいた、さらにそのごつい男は女性にも斧を振って斬りつけてしまった。その少年は父親である男に駆け寄り男を揺するが…反応がなく少年は泣いてしまった。

ドルク「これって一体？」

ジユティア「酷いわ…」

すると場面が急に暗くなった…ドルク達の目の前にはさっきの男…セピア色ではつきりしなかったが黄色の長髪の男だった…すると彼に変化が現れた…彼の身体はポケモンの姿へと変わっていったのだ…もふもふとした白い体色…背中も黒い体色をしていた。それがドルク達が知っている人物だった

シルム「ドルク！あれって…」

ドルク「レオだよな？あいつ…元人間だったのか…」

シエルマル「しかもあのジューダスという人と同じ生き返ったみたいですよ」

どうやらこれはレオの記憶らしい

ドルクはレオの元へ駆け寄る

ドルク「おいレオ！レオ！」

ドルクはレオを起こすが起きない

ジユク「起きないようだな…どうすれば」

するとシルムは何かを思い出す。

シルム「そうだ！アクアから聞いたらフライパンとおたまを叩けば起こせるみたいなんだって」

シエルマル「たしか『死者の目覚め』でしたよね？」

そう、レオはそれでなければ起きないのだ

シルム「ならやってみるよ…ちょうど用意していたんだ」

シルムはトレジャーバックからおたまとフライパンを取り出した

シルム「みんな！耳をふさいで！」

ドルク達は耳をふさいだ

シルム「行くよ！死者の目覚め！！」

ガンガンガンガン！と周りにおたまとフライパンが鳴る音が響いた、すると

レオ「うおわあああ！？」

ドルク「起きろよねぼすけ野郎」

ドルクがレオの前に立つ

レオ「あ、おはよ〜」

まだ眠たそうに目をこするレオ

シルム「レオ、さっきの黄色の長髪の男の人…あれってレオだよね？」

シルムが質問すると

レオ「ああそうだ…そうか…じゃあもう話すか…」

レオは話した

レオ「俺…本当は人間だったんだ…そして俺の本当の名前は…スタン・エルロン…」

ドルク「そういえばスタン達四英雄とか言っていたな」

シルム「まさかレオって!？」

そう、レオはスタンそのものだった

ジユク「なるほどな…だから声も同じ感じでさらにアクア達がこのおたまとフライパンで起きるといのが似ていたみたいだな」

レビィ「でもどうして？」

レビィの質問にレオ…スタンが答える

レオ（スタン）「俺はあの時バルバトスに殺された…ロニを身代わりにされて俺は死んだ…でもその時俺はバクフーンになっていたんだ…知らない俺をとあるトレーナーに拾われてポケモンの姿で俺はアクア達には俺がスタンだと話さなかつたんだ…しかもここは俺の世界だった…でもまさか俺の世界に来るなんてな…俺も正直驚いた」

レオ（スタン）はたんと話した

レオ（スタン）「正直死んだ実感がわかなかった…でもポケモンとしての生活は悪くなかった…俺もこのままでいいと思っていた。でも夢は夢…現実じゃないんだと」

ドルク「レオ…」

ドルク達の場に重い空気が流れる

ドルク「だからあのジューダスと言うジュプトルがリオンだとわかって落ち着かなかったんだな…」

レオ（スタン）「ああ、でもリオンを攻めないでやってくれないか…本当はあいつ…マリアンさんというお姉さんを人質に取られてしまつて裏切つたわけじゃないんだ…だから…リオンを信じてくれないか？」

レオはそう言う

ドルク「……わかった…お前がそういうならいいぜ…きっと何か理由があつたんだろうな…ジューダスという奴には」

レオ（スタン）「ありがとなドルク…」

レオはドルクに感謝した。

レオ（スタン）「あつ、それと俺がスタンだというのは内緒にしてくれないか？時が来たら話そうと思つんだ」

するとみんなは

ドルク「ああ、そうしておく」

シルム「レオは四英雄のスタンでもオイラは仲間だと信じてるよ」

シエルマル「そうですね！レオさんはそれでも優しいから」

ジユク「その時にはみんなにちゃんと話せるようにな」

レビィ「無理しないでね」

ジユティア「みんなあんたの事信じているのよ」

レオ（スタン）「ありがとう…みんな…」

レオはドルク達に感謝し

レオ（スタン）「そんじゃ行くこうぜ！他のみんなを目覚めさせるために！」

ドルク達は光に包み込んだ

依頼 86 運命と絆とレオの真実（後書き）

ドルク「あいつがそうだったのか…」

本人から秘密を打ちかけると来たからどうしようかと思って、デステイニーとデステイニー2あたりで秘密を打ち明けようとしてここで書いたんだ…まあみんなのバレるのは先の事になるけど

シルム「でもオイラ達にはいいの？」

まあ少し知ったほうがいいと思ってね、ちなみにドルクはエルレインには通用しません、なぜならディセクターの力+世界樹自体の力によって永遠の夢を見れません

ジユク「だが他のみんなを助けないとな」

うん、次回は他の仲間を助けに行きます。

依頼 87 運命くどんなに辛い過去があってもく（前書き）

ドルク「にしてもレオ、お前寝すぎだろ」

レオ「いやゝすごく眠かったし」

シルム「ホントにスタンそのものなんだね（汗）」

レオ「とりあえずやろうぜタイトルコール、それでは依頼 87！」

ドルク・レオ『燃えるぜ!!』

依頼 87 運命くどんなに辛い過去があっても

前回、ドルクはシルム、シエルマル、ジユク、レビイを目覚めさせ  
…さらにレオが四英雄の一人であるスタン・エルロンだと知った、  
彼はバルバトスという者に殺されて死んでしまったがバクフーンへ  
と転生し生きていた。レオ（スタン）を『死者の目覚め』で目覚め  
させ、ドルク達は他のメンバーの夢の中へ

……

ドルク「ここは…」

ドルク達が次に来た夢の中は…なぜか暗かった

シルム「ここは誰の夢の中なんだろう？」

するとレオが

レオ（スタン）「おい！あれって!?!」

ドルク達が視線を変えると…そこには一匹のルクシオとトレーナー  
がいた。

ドルク「ルクシオ…これってヴォルの夢の中か」

ヴォルはレントラー…つまりその進化前の事だ

するとそのトレーナーはヴォルにこう言ったのだ

トレーナー「よしヴォル、今度は何処に遊びに行こうか？」

ヴォルは嬉しそうな笑顔になる。

ドルク「あいつ……」

シルム「オイラが行くよ」

シルムが行く

レオ（スタン）「またやられなければいいんだけど……」

レオはそんなシルムを心配する。彼女は猿系のポケモンが嫌いなのだ…それでもシルムは彼女に近づく

シルム「ヴォル！」

ヴォルがシルムに向く

ヴォル「誰？」

ヴォルは首をかしげる

シルム「そうか…やっぱり記憶を封じられているんだ…お願いヴォル！目を覚まして！この人間は君をサル以下と言ったんだよ！この言葉をかけていたの！」

ヴォル「嘘だ！そんなはずはない！僕のご主人は！」

シルム「違うよ…君はオイラみたいな猿系のポケモンが嫌い、過去に『お前は身軽なサル以下の奴だ！俺はそんな奴が嫌いなんだよ！』と…でも辛いのはわかるよ！でも過去を断ち切らないと何も変わらない！思い出して！ヴォル！！」

するとヴォルは

ヴォル「う…！」

突然頭を抑え始めた

ヴォル「頭が…僕は…！」

すると光が包み込んだ

シルムの目の前にはレントラーであるヴォルが倒れていた。

ヴォル「そうだ…これは夢なんだ…僕はお前が嫌いだ…でも…僕は少し…認めるよ…ありがとう…シル…ム…！」

ヴォルは気絶した。

シルム「ヴォル！？」

レオ「大丈夫だ、気絶しているだけだ…ここまでフォルトウナの力が広がっていたんだな…」

ドルク「とりあえずレオ、ヴォルを抱えてくれないか？」

ドルクがレオに言う

レオ「…わかった…ヴォルは俺が運ぶ」

レオはヴォルを抱えた

さらに今度はアクアも倒れていた。

レオ「アクア！」

レオはヴォルを抱えたままアクアに駆け寄る

アクア「ここは…？」

レオ「お前は夢を見ていたんだ…大丈夫か？」

レオは心配そうにアクアに声をかける

アクア「うん、僕はもう大丈夫だよ…それよりヴォル…」

レオ「今は気絶している。大丈夫だ」

アクアは安堵の表情をする。

ドルク「それじゃあ次行こうぜ」

ドルク達は光に包み込んだ

…

ドルク「ここは…トーティスか…」

ドルク達がついたのはセピア色に染まったトーティス

そこに一人の少年がいた、赤いハチマキを頭に巻いていて短髪だった

ドルク「考えると……」

レオ「クレスの夢の中だな」

そう、クレスの夢の中だ……ドルクは幼いクレスに声をかける

ドルク「クレス！」

クレス「君は……誰？」

幼い声でクレスは言う

ドルク「目を覚ませクレス！お前はそれでも剣士か！旅をしたことや……ミゲールの事……そして俺達の事を思い出してくれ！」

クレス「思い……だ……す……？」

するとクレスは頭を抑えた

クレス「うっ！頭が！頭が痛いよ！」

ドルク「辛くても思い出せ！俺もいる！みんながいる！だから夢から覚ましてくれ！！クレス！！」

クレス「み……ん……な……そうだ……僕は……」

光が包まれていった…光が収まるとクレスが倒れていた。

ドルク「クレス！」

ドルク達がクレスに駆け寄る

クレス「そうか…これは…夢なんだ…心地よく…平和な…」

さらに今度はミゲール、アトリ、デイン、マリア、ミント、チエスター、アーチエ、さすが倒れていた。

クレス達は目を覚まし、なんとか夢から覚めた

ミゲール「綺麗なお姉さんの夢が〜（泣）」

マリア・アトリ『いい加減にしろやクソボケミゲール』（親父）！  
『！』

マリア&アトリの怒りの攻撃でミゲールは夢の中へ

クレス「いやいや違うから！？」

ミント「夢がこんなに心地いいなんて…」

チエスター「俺達にあんな幸せな夢を見させるなんてな」

アーチエ「あたし達を舐めないでほしいわ！（怒）」

これでなんとか全員がそろったようだ

ドルク「それじゃアリア達と合流しようぜ！」

みんなは頷いて光に包まれた

依頼 87 運命くどんなに辛い過去があってもく（後書き）

運命は厳しいものです。どうしてこういう風になるのか…

ドルク「時にそうだよな…それに過去ばかりを見ていては未来はねえしな」

シルム「うん、ヴォルみたいに辛い過去はあるから…」

今回はジューダス…リオン…マグナスの夢の中です。

ちなみに物語上デステイニー2中盤あたりから新章はそうなっています。



依頼 88 リオン「マグナス

ドルク達は次なる夢へ……

今度は

少年の姿の人間がいた

ドルク「考えるとkだな」

ドルクはkに声をかけた

kも何とか夢から覚めさせさらにクラウドもいてなんとか二人を夢から覚ました。ドルク達は次なる夢へ……

次の夢に着いた時にはリアラだけでなく……マグマラシの少年達までいた

リアラ「ドルク！」

ドルク「リアラの方もほぼ夢から解放できたな」

とりあえず合流したドルク達は互いに自己紹介する。

マグマラシ「俺はカイル」デュナミスっていうんだ、よろしく」

マグマラシの少年、カイルが言う、カイルは四英雄であるスタンとルーティの息子である。

ちなみにレオがスタンだということは、ドルク・シルム・シエル  
マル・ジユク・レビィ以外は知らない

オーダイル「ロニ＝デュナミスだ、よろしくな！」

オーダイルの青年、ロニが言う

コジョンド「ナナリー＝フレッチ、よろしく」

コジョンドの女性、ナナリーが言う

ドルク「そういえばここは何処なんだ？」

見たところドルク達は洞窟にいた、もちろんセピア色に染まっ  
ている。

カイル「最後は、ジューダスの記憶か…」

ロニ「正確にはリオン＝マグナスの記憶ということになるがな」

そう、ここはジューダス…リオン＝マグナスの記憶だ

ドルクは小声でレオに言う

ドルク「なあレオ、ここは何処か覚えているのか？」

レオ「（たしか海底洞窟で俺達）」

ナナリー「ちょっと、誰か来るよ！」

ドルク達はジューダスがいるところに視線を向ける、すると光が包まれてセピア色に染まった洞窟は元の自然の色に染まった、さらにそこには一人の青年がいた。黒い短髪に青い騎士の服：両手には剣を握っていた。

そう、この青年はリオン＝マグナス：ジューダスである彼の姿

岩の階段を降りたりオンは構える、そこにスタン達四人が来た

スタン「なんのまねだリオン!？」

リオン「見てのとおりだ、ここから先へ進みなければ僕を倒してからにするがいい」

マントが風もなくなびく、さらにレオの夢でも登場した黒い短髪の女性：ルーティ＝カトレットが怒鳴る

ルーティ「なに言ってるのよあんた！今が非常時だってことぐらいわかってんでしょ!？」

だがリオンはひるまずに言う

リオン「そんなことは関係ない、僕は与えられた役割を果たすただお前達を殺すというな」

スタンとルーティの後ろにいる長髪の男性、ウッドロウ＝ケルヴィンが必死にリオンに説得する。

ウッドロウ「目を覚ますんだリオン君！君はヒューゴに利用されて

いるだけだ！」

だがリオンは表情を変えず

リオン「そのとおりだ、僕はヒューゴにとって使い捨ての駒のひとつに過ぎない」

彼はそう認めてしまう。自分が使い捨ての駒だということ、さらにウッドロウの後ろにいる女性：フィリア＝フィリスが言う

フィリア「そんな…！そこまでわかっていてどうして…？」

そう、リオンはヒューゴに利用されているのはわかっているはずだ…だがリオンにも理由というのがある

リオン「僕には守るべき者がある、それだけのことだ」

そう言いリオンはスタン達に向く

リオン「覚悟はいいか！いくぞッ、スタン！」

リオンはスタン達に迫ってくる。

レオ「（あの時俺は…リオンと戦ってしまった…リオンの守るべき者…知ったのはその後だった…）」

……

スタンとリオンのソーディアンが火花を散らす、スタンはそこからリオンを斬りつけた

リオン「…がはっ！」

リオンは斬られてひざまついてしまった、斬りつけた跡には血が流れていた。

スタン「…リオン、なんで…」

スタンは心配そうにリオンに声をかける

リオン「スタン…」

ゴゴゴゴゴゴ

スタン「な、なんだっ!？」

何処からか音が聞こえる。それは水が流れる音だった

リオン「…終末の時計は…動き…出した…もう…誰にも…止められ…ない…」

ウッドロウ「この音は…!？まさか、水が流れ込んできているのか!？まずいぞ…早く逃げないと！」

だが

フィリア「でも、リオンさんが！」

ルーティ「ダメ！間に合わない！」



ジューダス「…そんな、もの…欲しく…ない…貴様の作り出す…  
まやかしの、愛や…名誉など…なんの、意味もない…」

そう…夢などで作り出す愛と名誉…そんなものは愛でも名誉でもな  
い…愛や名誉は誰かに認められるか…他の大勢の者に認められてこ  
そのものだ…

エルレイン「…この悪夢を永遠に繰り返すと言うのだな？リオン」  
マグナス」

ジューダス「…フツ、だから…貴様は…何も、わかって…ない  
…僕は…僕は、リオンではない」

ジューダスは一息おいて…

ジューダス「…僕は…ジューダスだ…！」

そう…彼はリオンとしてではなく…ジューダスとしてだ…

エルレイン「…ならば、望み通り永遠の悪夢を…」

そこへカイルとドルクが駆けつける

カイル「やめろッ！」

ドルク「それ以上苦しめるんじゃない！」

エルレイン「…！」

その後からシルム達が駆けつける

カイル「これ以上好き勝手にはさせないぞ！」

ドルク「永遠の悪夢を見せるなんて卑怯じゃねえのかおい！」

二人が必死にエルレインに言う、しかし本人は困惑していた。

エルレイン「わからない…なぜお前達はその男をかばい立てする？  
その男：リオンは私利私欲のために仲間を捨てた裏切り者なのだぞ  
？」

しかしみんなは不定した

ロニ「リオン？そんな奴の事は知らねえな」

ナナリー「あたし達は、ただ仲間を助けるだけさ、ジューダスって  
いう大切な仲間をね！」

シルム「私利私欲でもない…本当は守りたかったんだ！守りたい者  
のために！そんな事を言う資格なんてない！」

シエルマル「そうだ！たとえそうでもみんな仲間だ！」

ジユク「お前がそう言うが関係ない」

レビィ「会ってる時点でもう仲間みたいなものよ」

ジユティア「みんながみんな大事なのよ！」

レオ「そうだ！俺達は助けに来た！大事な仲間を！」

ヴォル「僕は認めたくはない…でも信じていることができるもの…それが仲間だ！」

アクア「そうだよ！僕は仲間なんだ！」

クレス「そうだ！みんなそれぞれ違いはあるけど夢でかなえるほど甘くないよ！」

ミゲール「俺達は俺達の明日があるんだ！」

アトリ「おめえの夢など見たくもねえんだ！」

デイン「おれっちは苦しんでも幸福を手にいれるヨ！」

マリア「それでも私達は進む道がある！」

ミント「あなたがどうだろうとしても道はずすわけにはいきません」

チエスター「永遠の夢なんてごめんだ！」

アーチエ「そんな夢なんていらないわ！」

すず「こんなものが幸福でもなんでもありません！」

k「そうだ！僕達は！」

クラウド「夢ごときで惑わすほど甘くない！絆があるからいるんだ」

ジューダス「お前達…」

彼等はジューダスをかばう…彼等にとっては仲間なのだから…

エルレイン「その男はお前達をいつ裏切るのかわからないのだぞ？  
すべてを知った今でもなおそのような者を信じられると言うのか？」

だがみんなの答えは一つだ

カイル「知つてるとか、知らないとか、関係ない！俺はジューダスを信じてる！今までもそうだった！そして、これからもだ！」

ジューダス「カイル…」

そしてさらにドルクも

ドルク「その時はその時だ…だがよ…最後に信じる奴は…裏切るなんてねえよ…それはみんなを信頼している証だ」

ジューダス「知らない奴なのに…そこまで…」

カイルとドルクがジューダスに近寄る

ドルク「立てるか？」

ジューダス「ああ…」

ジューダスはカイルとドルクに支えながら立った

カイル「さあ、戻ろうジューダス！俺達の世界へ！」

リアラ「そして続けましょう。私達の歴史を……」

ジューダス「…ああ！」

ジューダスは決心する。

ジュティア「みんな一緒よ」

シルム「うん！行こう！」

リアラのペンダントとドルクが光だし、みんなを包み込んだ

依頼 88 リオン II マグナス (後書き)

ドルク「あいつは超えられるな」

どうして？

ドルク「辛くても自分の信念があるからな」

ジューダス「そうか…」

レオ「リオン…」

さて今回は1000年前に転送…前です

ジューダス「なぜ前なんだ(汗)」

依頼 89 1000年前へ！（前書き）

ドルク「連続か」

色々ドルク達のセリフ何処から出したらいいのかなど色々だしね

（汗）

シルム「さて、ついにだね」

そう、では依頼 89

レオ「行くぜ！」

エルレイン「……」

ドルク達は戻ってきた。ここはドルクとリアラが最初に会った場所だ

ロニ「克服してきたぜ、忌まわしい過去とやらをな」

エルレイン「わからない…なぜ、自ら苦しい道を選ぶのだ？神の力でまどろんでいればあらゆる望みが叶うというのに」

エルレインはわからなかった…なぜ彼等は苦しい道を選ぶのかを

ナナリー「そんなので叶った望みに一体、どんな価値があるっていうんだい？」

ジュティア「価値なんてありはしないわ！」

ナナリー「自分の手で掴んでこそ価値があるものさ！」

そう、望みは…自分で叶うものだ、ジュティアとナナリーは子供を育てている経験がある。自分で叶えるように…

ジューダス「いつも正しい道を選ぶはしない以上誰にだって辛い過去や悲しい思い出はある。でも、取り返しのない過ちも数え切れないほどの後悔も、そのすべてが僕等の生きた証なんだ…それを不定することは誰にもできない…いや…させはしない！」

ヴオル「嫌いな奴でも受け入れてくれる奴だっている。嫌いな奴はすべて悪いってわけでもない…僕等は…同じ生き物だから」

レオ「俺達の進む道はここにあるんだ！みんなが進み…その道が！たとえ辛くても最後はがんばって勝ち取る未来がある！」

それぞれが辛い過去をもっている。それでも突き進む未来はみんな違う…どんなに辛くても…悲しくても…怒っても…実ればそれは…望みが叶うのだ

エルレイン「お前達はそうかもしれん、だが…彼等は違う…人々はみな、苦しみからの解放を望んだ…自らの欲望が、叶えられることを望んだのだ」

リアラ「いいえ、人々はただ忘れてるだけよ、偽りの幸福の無意味さを…そして、歴史という人の営みの中にこそ本当の幸福があることを、そのことにいつか、必ず気づくわ！カイル達のように」

苦しみがあるからこそ…人はいる…死んだものもいるが…苦しみを解放しても…逆に悲しさを増やすものだ…偽りの幸福は…彼等にとつて…人類（今はポケモンだけの存在だが）にとつての無意味なものだから…

カイル「そうだ、俺達は気づいたんだリアラのおかげで…」

リアラ「カイル…」

ドルク「俺達には…ここがある」

ドルクは胸をドンと叩く

ドルク「生きるという幸せをな！」

シルム「夢でも永遠に生きるのは幸せなんかじゃない…今ある人生を生きることが幸福だよ」

カイル「だから、俺達はお前に奪われた歴史を取り返す！そして、俺達の本当の幸せを取り戻す！絶対に！」

本当の幸福…偽りでもない…本物の幸福…それぞれが違う思いでも…今いる自分達の今を生きる…みんなは頷いた

エルレイン「…無駄なあがきは、よすががいいお前達が、どう思おうと何一つ変えられはしない」

しかしリアラは首を振り言う

リアラ「いいえ、変えられるわ…人の思いの力は、なんだってできる、だから…！今から時間移動をするわ、時代は…天地戦争の頃」

ロニ「歴史を元に戻そうってわけか…！」

ナナリー「やってやるうじやないか！」

ジューダス「望むところだ！」

シルム「オイラ達もやるよ！勇気はみんなにあるんだから！」

シエルマル「俺達の絆を見せましょう！」

ジユク「俺達が歴史を変える！」

レビィ「未来がこんなのに変えるのは嫌だしね！」

ジユティア「もちろんよ！神様に未来を変えるなんてたまったもんじゃないわ！」

レオ「そうだな！せつかくの歴史を台無しにされるのは嫌だ、だから俺達の世界を！」

ヴォル「未来を！」

アクア「変えてみせるよ！」

クレス「お前に未来をめちやくちやにさせない！」

ミゲール「そうだ！これはカイル達の世界なんだ！」

アトリ「テメエに未来は変えさせねえよ！」

デイン「そうだヨ！こんな未来は嫌だヨ！」

マリア「偽りの幸福なんてただの夢よ！私達みんながいるんだから！」

ミント「これ以上好き勝手させません！」

チェスター「そうだ！俺達は歴史を変えてやる！」

アーチエ「本当の幸せをね！」

「まず、覚悟はできています！」

k「行くこう！」

クラウド「俺達はいつでもついてるぜ！」

カイル「リアラ、行くこう！俺達の歴史を取り返しに！」

ドルク「そして俺達も行くぜ！歴史を取り返す旅によ！」

リアラ「ええ！」

みんなは頷き、ドルク自身とリアラのペンダントが光り、ドルク達は1000年前へと時間移動した。

残されたのはエルレインのみだった

エルレイン「おろかな…その先には悲しみしか待っていないというのに…」

そう彼女は言った…

誰もいない彼等に

依頼 89 1000年前へ！（後書き）

カイル「みんなそれぞれ思いがあるんだね…ドルクもすごいな」

ドルク「そうか？」

ジューダス「ここまで説得力あるような感じだが…かなり威圧感も感じるな」

ドルク「おいそれどういう意味だよりオン」

ジューダス「僕はジューダスだ！」

レオ「まあまあリオン」

ジューダス「お前もか！」

次回は天地戦争時代：1000年前に行きます

依頼90 天才科学者登場！（前書き）

ついにあの天才科学者の登場です。

ドルク「どんな奴なのかだな」

まあ見てからの楽しみ、依頼90

ドルク「刻んどけ！」

## 依頼90 天才科学者登場！

1000年前の何処かの場所

みんなは倒れていたがすぐに目を覚まして起きた

そこは吹雪が吹いていて、雪が降り積もっていた。ここは何処かの基地のような場所みたいだ

カイル「ここが1000年前の世界、天地戦争時代か…」

シルム「ついたのはいいけどこれからどうする？」

ジューダス「まずは情報を集めなくてはな、エルレインがどうやって天地戦争の勝敗をひっくり返すつもりなのか…それがわからないことには動きようがない」

たしかにジューダスの言うとおり、情報を集めておかなければわからないのだ

クラウド「情報は基本だしな…それにしても…」

k「ここは何処なんだろう？」

ドルク達は何処にいるのかわからない、そこにロニが口を開く

ロニ「ここって…地上軍の拠点じゃねえか？ほら、イクシフォスラーが置いてあった」

シエルマル「イクシフォスラー？」

ドルク達はイクシフォスラーという言葉に首をかしげる

ジューダス「そういえばドルク達は別の世界から来たんだっただな」

カイル「でも、なんで俺達の世界に来たの？」

シルム「そういえばそうだね、それじゃあ話すね」

……

シルムはカイル達にこれまでの事を説明した。

ジューダス「なるほどな……つまりこの世界に来たのは大いなる実りを手に入れてドルク達の世界にある黒い世界樹をなんとかするとい  
うのか……」

ロニ「だからドルク達もこの世界に来たんだな」

ドルク「ああ」

なんとかドルク達の説明が終わり、カイル達もドルク達にこの世界に何が起こっているのかを説明した（ほとんどジューダス（リオン）が説明しているのだが）

ジユク「なるほどな、お前達はそれぞれ違う時代から来て」

レヴィ「歴史を元に戻す旅をしているのね」

ドルク達は納得した。

ジューダス「それにここはちょうどいい、ここなら情報も集めやすい」

シエルマル「じゃあまずはここにいる人達から話を聞いてみましょう」

ドルク「シエルマル…普通にタメ語とかでいいぜ？」

シエルマル「え？でも？」

シエルマルは戸惑うが

ドルク「みんな仲間だ、このぐらいの方が話しやすいだろうしな」

シエルマル「そうですか…いや…そうだね」

とりあえずシエルマルはタメ語で話すことになった、ドルク達は情報を集めるべく地上軍の拠点で情報収集をすることに

……

ドルク達が歩いていると何処からか何かに向かってきた、それはロボットのようだが…人形の形ではなく…リングのような形をして真ん中に緑のコアがあった

カイル「…なんだ？」

すると誰かの声が聞こえる

????? 「待ちなさい〜い！」

そこから一匹のポケモンがロボットを追いかける、足は細く、蛇のようなポケモンだ…草蛇ポケモンのジャノビーだ、声からしてと  
いうか女性のようだ

ジャノビー「こらあつ！あんたのマスターはこの私なのよっ！言う  
こと聞きなさい！」

さらに逃げるロボット、ドルク達は避ける

ジャノビー「ちよつとばかり試作パーツを組み込んだぐらいで暴走  
するなんて！こらあ〜い〜い〜！」

ロニ「なんだ？」

ナナリー「さあ…！」

ドルク達も何がなんだかわからない状態だった、だがジャノビーは  
ロボットを追いかけるがロボットは逃げてしまう。

ジャノビー「止まれているのがわからないのこのポンコツが！ス  
クラップにして、ジャンク箱行きよ！」

するとそのロボットはジャノビーに振り返り見る

ジャノビー「な、何よ…！」

今度は逆にロボットがジャノビーを追いかける

ジャノビー「こらあゝゝゝっ！私にあんたのマスターだって言  
ってるでしょうがっ！」

シルム「あのゝちよつとすみません」

シルムが声をかけるが

ジューダス「無駄だシルム、どうやら取り込み中らしい」

するとジャノビーはドルクの後ろに隠れる

ドルク「うわっ！？おい！？」

ロニ「ちょ、ちよつとあんた！何隠れてんだよ！」

ジャノビーはドルクから離れる

ジャノビー「ちよつとあんた達！あれ、チャツチャと片付けちゃっ  
て！」

ロニ「…もしかしてそれは俺達に言っているのか？」

ロニが振り返りジャノビーに言う

ジャノビー「他の誰に言ってるように聞こえる？」

ミゲール「ってか俺達関係ないじゃん！」



カイルは安堵の表情を浮かべる

ロニ「まったく、いきなりこんなことに巻き込まれるとは…おい姉ちゃん、怪我はなかったか？」

ドルク達は振り向いてさっきのジャノビーへと視線を向ける

ジャノビー「……」

するとジャノビーは黙ってロニの元に向かう

ロニ「な、なんだよ？俺の顔になんかついてるのか？」

?????「……とっつ！」

すると突然ジャノビーはロニを飛び蹴りというか正確的には尻尾を使って叩いたと言った方が正しいだろう

ロニはいきなり叩きつけられて倒れたがすぐに立ち上がる

ロニ「てえ！なっとなっとなっ、何しやがるこの野郎！」

突然の事でロニはキレてジャノビーに怒る

しかしジャノビーは平然としていた。

ジャノビー「何って？仕返し」

ロニ「はあ!?!」

ロニは訳が分からずだった

仕返しとはどういうことなのだろうか？

ジャンビー「私のHRX-2型壊したでしょ？だから仕返し」

と、彼女はそう言う

どうやら暴走していたあのロボットはHRX-2という名前らしい

ロニ「仕返して……お前自分で「片付けちゃって！」とか言っただけだろが！」

たしかに彼女は「片付けちゃって！」とは言った……しかし彼女は平然とした顔で

ジャンビー「いいじゃない、本来なら軍法会議ものところが飛び蹴り……というか尻尾叩きで済んだのよ？」

それにドルクとカイルが驚く

ドルク「軍法会議だと……？」

カイル「それじゃこれって……地上軍のものなの……？」

すると彼女はとんでもない事を言う

ジャンビー「ま、しょうがないわよねえあんなたち、未来と別世界から来たんだから事情もわからなかったんだろっし」

ジューダス以外の全員』!?』

なんとジャノビーはなぜか彼等が未来から来たとか別世界から来たと言ったのだ、だがなぜ彼女はカイル達が未来から来て、ドルク達が別世界に来たのを知っているのだろうか？

カイル「ちょ、ちょっと待ってよ！何にも言っていないのにどうして!?」

ドルク「俺達が別世界に来たのかも言っていねえのに言いやがった……」

すると彼女は少しすつとんきゆうな感じで

ジャノビー「あ、当たってた？一番可能性がないものを言ってみただけだ」

ジューダス「カマをかけた、というわけか…まんまと乗せられたな」

ミゲール「ってかあんたって預言者か何かか？」

ミゲールはジャノビーに言う

ジャノビー「あら、私は預言者でもなんでもないわよ？」

どうやら本人は違ったらしい

ジューダス「それにしてもどうして、僕達が未来人だなどと思ったんだ？それにドルク達がなぜ別世界から来た住人だと思ったんだ？」

ジャンビーは説明した。

ジャンビー「根拠は、時空間の歪みから生ずる大気中の成分の変化からあくびの仕方まで、36通りほどあるけど、ま、一番大きかったのは「勘」ね」

リアラ「勘…？」

リアラは勘の事で疑問に思った

ジャンビー「ほら、女の勘はカオス理論をも超えるってよく言っじゃない」

ドルク達はみんなで輪になって集まった

カイル「ね、ねえ？」「かおすりろん」って何？」

ナナリー「さあ…」

レオ「俺にもさっぱりだ」

ある意味こつちがカオスに思えるのは気のせいだろうか…

ミゲール「俺もさっぱりでわからない」

マリア「頭に矢でも刺したら頭よくなるわね（黒）」

マリアは何かやばいことを考えていた。

k「カオスってたしかかなり面白いこととか」

ククラウド「DS的な感じって意味じゃねえ？」

kとククラウドはどのように考える

シエルマル「でもよくみんなカオスとか言う時ってあるよね(汗)」

ジユク「そういえばそういうのあったな(汗)」

レビィ「そこは事情があるんじゃないかしら(汗)」

シエルマル、ジユク、レビィはカオスという言葉に嫌々な事だと思っ  
っている。

ロニ「ってかなんか別の話になってるじゃねえか(汗)とにかくこの  
姉ちゃんはやばいぞ、とっととずらかるうぜ」

ロニはずらかると言うが

ジューダス「しかしあのロボットを操っていたということはおそらく、  
軍の関係者だろう、しかも機械を操っているということはハ  
ールド博士の助手かもしれん」

カイル「たしかハールド博士って俺達…というかドルク達は使っ  
ていなかったけどイクシフォスラーを作った人だよな？」

シルム「そのイクシフォスラーって何なの？」

シルムもイクシフォスラーが何なのかわからないというかドルク達

にはわからないだろう

ドルク「そのハロルド博士って奴はすげえんだな…でもイクシフォスラーってのも見たことないな」

クレス「僕もだよ…レアバードぐらいならわかるけどそれは見たことないな」

ジューダス「そりゃそうだろう、まあ後で説明してやる。とりあえず博士ならばエルレインの介入に関しても何か掴んでいるかも知れない、それに博士は、軍師カールレルの双子の弟だ、軍関係の情報に詳しいだろう…やはりハロルド博士に面会を…」

すると話の輪から外れているジャノビーが口を開く

ジャノビー「呼んだ？」

ドルク達が彼女に振り向いて

カイル「よ、呼んでないよ！」

再び話の輪へ

アクア「でもあの人本当に学者なのかな？」

ロニ「まずそれが疑わしいよなあ〜泣く子も黙る天才科学者の助手っていうには無理がねえか？」

ジャノビー「ねえ、呼んだ？」

再び彼女が言い、またドルク達が振り向く

ドルク「だから呼んでねえって！」

ジャンビー「だって今「天才科学者」ってそれ、私の事でしょ？」

彼女はそう言う、なぜ彼女は天才科学者が自分の事を言っているのか？

ロニ「……あんたじゃねえよ、あんたの上司……かどつかは知らねえがハロルド博士って知ってるんだろ？」

ジューダス「もしできるのなら会わせてほしい、話したいんだ」

ジャンビー「話がしたいの？それならお安いご用よ」

彼女は承諾した。

シルム「ホント？ねえそのハロルド博士って人のところまで案内してよ！」

しかし彼女は首を横に振って

ジャンビー「その必要はないわ、さ、話して」

なぜか彼女が話し相手だった……どうということなのか？

ドルク「ちょっと待ってくれ！話がちげえんじゃねえか？俺達はハロルド博士って人に話があって……」

ジャンビー「だからここで話せばいいじゃない！わかんない奴ねえ！」

ロニ「だあーかあーらあー！俺達はハロルド博士に話があるんで助手であるあんたには…」

すると彼女は助手に疑問に思い

ジャンビー「助手？私が？誰の助手なの？」

ジューダス「お前はハロルド博士の助手じゃないのか？」

ジャンビーは首を横に振り

ジャンビー「私は助手なんかじゃないわよ」

ロニ「ハア、アホらし…さ、行くうぜ」

すると彼女の口から衝撃的な言葉が

ジャンビー「だって私がハロルドだもの」

ロニ「はいはいわかったわかった、あんたがハロルド…」

すると全員が驚いた

ミント「えっ！？ホ、ホントですか！？」

ジュティア「あんたがハロルド博士本人？」

ハロルド「うん」

ハロルドは頷いた

ジューダス「くだらない冗談はよせ、お前がハロルド博士なわけが…」

ハロルド「あなたの背中にあるのシャルティエでしょ？」

彼女はジューダスの背中にある剣というか背中についている黒いマントに隠れている…ソーディアンであるシャルティエを指す

ハロルド「細身の曲刀で刃渡り67.3cm、柄も含めた全長は81.7cm重さは2.64kg柄はシャルティエ自身の手に合わせ若干ふくらみを持たせてる、レリーフに刻まれてるのはジェルベ模様、属性は地、主に石や岩などを用いた晶術しやうじゆつを使用…あ、初期状態で使える晶術も聞きたい？」

ちなみに晶術とはこの世界で言う魔術の事である。

ジューダス「そこまで詳細なデータを…」

ジューダスは冷静ながら驚く

ハロルド「把握していて当然よ、設計者なんだから」

しかしロニなど納得できない者達が

アトリ「でもおかしいぜ？たしかハロルド博士って男だったって聞いたぜ？」

しかし彼女…ハロルド本人は嬉しそうな表情で

ハロルド「あ、やっぱりそういうことになってるんだ！いや、男の名前にしとけばみくん勘違いすると思ったのよねえ、案の定みんなまんまと騙されてるってわけね！グフ、グフフツ」

面白く笑うハロルド…天才科学者が女だったたというのはドルク達には驚きだった

リアラ「じゃ、じゃああなたは本当にハロルド博士…」

ハロルド「ああ、ハロルドでいいわよ「博士」って言葉の響きが硬すぎてかわいくないし」

ナナリー・ジュティア「かわいくないって…」

ナナリーとジュティアは同時に啞然と言う

ハロルド「さて、じゃ行きましょうか」

ドルク「ちょっと待てよ！行くって何処へだ？」

そう、何処に行くのかわからないのだ

ハロルド「みんなにあなた達を紹介するわ、私の部下ってことでね、そしたらラティスロウの中でも動きやすいでしょ？…それにこれは真面目な話、あんた達がこの時代に来た理由、絶対に内緒にしておいてね」

カイル「うん、わかった！ハロルド以外の人間には絶対に言わないよ」

しかしハロルドは首を横に振る

ハロルド「違う違う！私にも内緒にしておくの！」

カイル「え？だって…」

彼女には理由があった

ハロルド「こんな面白い問題があるのに答えをいきなり聞いちゃつたらつまらないじゃない！いい？私が考えてる最中は答えを絶対に言っちゃダメよ！」

みんなは呆れた表情をする

チエスター「何がなんだかな（汗）」

アーチエ「先が思いやられそう（汗）」

ハロルド「それじゃ、ラティスロウの中へレッツゴー！」

ドルク「とにかく行くこうぜみんな」

ドルク達はハロルドの案内でラティスロウへと向かった

依頼90 天才科学者登場！（後書き）

ハロルド「やっと私の登場ね、みなさんどうも！こんにちは、こんばんわ、ごきげんよう！私ハロルド＝ベルセリオス、天才科学者のハロルド＝ベルセリオスでございます」

おい、何俺の司会的なのとっちゃってるわけ？

ハロルド「まあまあ作者、あんただけだと余計不安な感じになりそうだから私がこの場をしきらせたいのよ」

ドルク「ある意味変わり者だな」

ハロルド「グフフツ！ポケダンでまさかの私の活躍が見れるなんて光栄ね」

活躍っておい（汗）

ハロルド「さて今回は私の魅力を語るわよ」

語りません（汗）何嘘予告してるんだよ（汗）次回はついにあの者達がポケモンの姿で登場！

依頼 9 1 再会と作戦（前書き）

ついにあの者達とのご対面です。

ドルク「誰だ？」

ハロルド「まあ見てみればわかるわよ、それじゃあ依頼 9 1、行くわよ」

## 依頼 9 1 再会と作戦

前回、ドルク達は1000年前の天地戦争時代へとやってきた。そこに ジャノビーがHRX-2の試作パーツにより故障でドルク達に片付けさせられる。なんとかドルク達はHRX-2の暴走をおさめた…

しかもハロルドは女性で目の前でジューダスの背中にあるソーディアン、シャルティエの事を詳細に言い、さらに彼女自体がソーディアン開発者だったのだった

そんなドルク達はハロルドと一緒にラティスロウへと向かっていた。

……

その道中

ナナリー「ねえハロルド、あんた未来の事が気にならないのかい？」

ナナリーがハロルドに未来の事が気にならないのか聞いてきた。しかし彼女は

ハロルド「どうして？未来なんか知っちゃったら楽しみが減っちゃうじゃない」

ドルク「でもよ、未来がわかればこれからの戦いが楽になるとかになるんじゃないか？」

しかしハロルドは指を立て

ハロルド「あんたアホね 答えがわかってる問題を解いたって面白くもなんともないじゃん」

シルム「面白いのか面白くないのかが判断基準なのね（汗）」

つまりたとえで言うとアニメやゲームがネタバレになったら楽しめというか面白くないということだ

ドルク「なるほどな、それがお前の判断ってわけだな」

するとハロルドは面白い笑みで

ハロルド「そ！ちなみにあんた達と一緒に行動してるのも面白そうだからよ」

すると突然ハロルドは目をキラキラさせ

ハロルド「時を越えてきた未来人と別世界の者達との対面なんてめつたにできない体験じゃない」

たしかに言われてみればそうだろう、時を越えてきた未来人と別世界の住人が過去の者と対面するなどめずらしいことだ

ロニ「しっかしあのハロルド、ベルセリオスが女だったなんてビックリしたよなあ！歴史学者の驚く顔が目に浮かぶぜ」

ロニがそう言うが

ジューダス「現代に戻って、学者達に話したところで信じてはもら

えないだろうがな」

レオ「（そうかもなあ〜やっぱリオンは変わらないな）」

レオはそんな親友？の顔を見てホツとする。

ジューダス「（そういえばあいつ…僕を見ているようだ…そういえばアクアがスタンみたいとか言っていたが…ドルク達も何か知っ  
ていそうだな、後で聞いておくか）」

ジューダスは冷静にそう思っていた。何かわかったような感じだ

ハロルド「語り継がれた歴史なんてみんなそんなもんよ、自分達に都合がいいようにねじ曲げられたり、改ざんされたり、噂が一人歩きすることだってあるしね」

ミゲール「噂が一人歩きって…あんたのが計画的犯行に思えそうだが」

ミゲールはそう言うがハロルド本人は逆に嬉しそうな顔で

ハロルド「グフフツ！1000年間も騙しとおせるなんて、すべて私の思惑通りってワケね」

クレス「はあ〜（汗）」

クラウド「あんたってある意味天才かもな（汗）」

みんなが呆れたようになる。

ハロルド「そういえばドルク、あんたって元人間で世界樹自体なのよね？」

突然ハロルドがドルクに言う

ドルク「そうだが？」

するとハロルドは目を再びキラキラさせて

ハロルド「ちょっとあんたの体を調べたいのよ いや調べさせてください あんたを解剖すれば何かわかりそうだし」

しかしドルクは

ドルク「いやわかっててもそれは無理だ、ってかお前なく解剖って俺を殺す気か」

ドルクはそんな予感がした。

ハロルド「え〜調べたかったのにな〜世界樹を取り込んだ人間の生態とか色々な事がわかりそうなのにな〜」

と、残念そうに言う

シルム「ハロルド、ドルクを実験に利用しないでよ（汗）」

シルムはハロルドに注意した。

クラウド「まあ俺もドルクとかの仲間をそんな風にはしねえけど…敵とかの死体を利用したりはするぜ（黒）」

と、なぜかダークな感じになるクロウド

アクア「怖いよ（汗）」

マリア「じゃあこいつを実験にさせるとか（黒）」

マリアは逃げるミゲールを掴んでそう言う

ハロルド「あら、それもいいわね〜」

と、何処からかハロルドはドリルを取り出した

なぜかチュイ〜ンと嫌な音が聞こえる

ミゲール「や〜め〜て〜!!（泣）」

ミゲール、涙目（汗）

そんなバカ騒動している間に大きな建物についた、そこにある入口から入った

……

中に入ると他の者達が集まっていた。さらに広く、何処かの司令室のようだ

ハロルド「ここが作戦会議室よ、ちょうど全員そろってるみたいね」

ハロルドが今いる者達を順に紹介した。ちなみに全員ポケモンの姿

だった

ハロルド「まず上において一番偉そうなのがリトラー」

リトラーと言う者の姿は頭に王冠のようなものがついていて、手が平たいポケモン、ペンギンポケモンのエンペルト

ハロルド「後、私から見て左から、デймロス、シャルティエ、イクティノス、そして私の前にいるのが兄貴のカーレルよ」

デймロスと呼ばれる者の姿は龍のような顔にオレンジ色の体色に両翼、尻尾には炎が灯っている。かえんポケモンのリザードン、シャルティエの姿は両目は赤いコンタクトのような半球体のものに覆っていて尻尾には3つのひし形を合体させたものがついていて、翼の端らへんは赤くそっている。精霊ポケモンのフライゴン、イクティノスと呼ばれた者の姿は赤いトサカのようなものが頭についていて鳥のような姿をしている。もうきんポケモンのムクホークだ、そしてハロルドの兄であるカーレルという者の姿は蔓のようなものが体についていて上品な姿のポケモン、ロイヤルポケモンのジャローダだ、それぞれ軍服などを着ていた。ちなみにハロルドはピンクのブーツにローブ、両手首などには黒いファーがついている。

レオ「(デймロス!?)」

レオは驚く、それはそうだろう。レオはデймロスの事を知っている。なぜかというところ。レオはスタンのソーディアンがデймロスなのだから。かつて一緒に戦った相棒が今ここにいるのだから。しかしここは1000年前なのでレオ自体の事は知らないだろう

レオ「(そうか。そうだよな。デймロス達がいるならそう考えら

れるからな)」

レオはとりあえず再会をぐっところえた

ドルク達は入ってきて、そこにデймロスが彼等に気づき言う

デймロス「なんだハロルド？今は会議中だぞ後にしろ」

厳しい表情でハロルドを注意する。しかしハロルドはお構いなしに

ハロルド「すぐ済むからちょっと待って、私の新しい部下よ、みんなよろしくね」

そんなハロルドにデймロスは

デймロス「新しい部下？誰の許可を得たんだ？」

許可とかなんとかを言うデймロス、そこにイクティノスが言う

イクティノス「しかも一般人の子供を？何を考えているのですハロルド」

一般の子供とはたぶん見た目からしてカイルとかリアラとかのことだろう、ドルクとシルムは年齢的には未成年、クレスとミントも同じだ、見た目からまとめるとカイルとリアラ、アトリやデイン、クロウドやk、シエルマルだろう

ハロルド「私のHRX-2型を倒したと言えば納得してくれるでしょ？」

と、リトラリーに向かって言う

シャルティエ「あれをですか！？そりゃすごい…」

シエルティエは絶賛したがデймロスは納得していなかった

デймロス「しかし一般人は一般人、子供は子供…それにそのグレイシアもなんだか大丈夫なのかも心配になる…認めるわけにはいかないな」

しかしドルク達などが反論する。

カイル「ちょ、ちょっと待ってください！子供子供って」

ドルク「だが俺達は」

デймロス「君達二人は黙っていたまえ！」

デймロスは二人を一喝

ハロルド「とにかくそういうことだから、この子達は工兵隊に所属させるわ、工兵隊の人事権は部隊長である私にあるはずよね？」

ハロルドは負けじとデймロスに言う、しかしデймロスも

デймロス「認められん、全兵士の人事権は中将の私が握っている」

だがハロルドはさっと呆れた感じに

ハロルド「あっそ、なら私はこれから別行動を取るから、ダイクロ

フト突入作戦も勝手にやってもらおうことになるけどそれでもいいのね？」

そこに彼女の兄：カーレルがハロルドに向かって言う

カーレル「おい、ハロルド！」

彼は止めようとしたその時

リトラー「そこまでだ」

リトラーが話を止める、みんながリトラーに視線を向けた

リトラー「彼等を地上軍の正式な兵士として認める」

リトラーはドルク達を正式な兵士として認めた

デймロス「リトラー総司令！」

デймロスは反論するが

リトラー「デймロス中将、我が軍の最終決定権は私にあるはずだが？…それにハロルド君の事だ、一度言い出したら聞かないだろうしな」

ハロルド「さっすが、話がわかる！」

カーレル「ハロルド！総司令に向かってなんて口を…！」

しかしリトラーは落ち着いた感じで

リトラ「まあまあカーレル中将、そんなことよりも自己紹介してくれないかね？」

リトラはドルク達に視線を向け、自己紹介をしてくれと言う

カイル「あっ、はい！」

とりあえずはドルク達は自己紹介した。

ドルク「ドルク…ドルク…グランハートだ」

と、ドルクは名前にグランハートをつけて言う、前に氏名とかの事が前々からあったのでもしもの時に氏名を考えていたのだ

シルム「シルム…フレアライトといいます」

シエルマル「シエルマル…タチツキです」

ジユク「ジユク…ラプターだ」

レビィ「レビィ…ラプター…っていいいます」

ジュティア「ジュティア…アクアリスよ」

ドルク達の自己紹介が終わり、ミゲール達だ

ミゲール「ミゲール・アルベイン、よろしくな」

クレス「クレス・アルベインです」

アトリ「アトリ・アルベインだ、赤ちゃんでもやれる、よろしくな」  
デイン「デインだよ」

マリア「マリア・アルベインといいます、足手まといにならないようにしますのでよろしくお願いします」

ミント「ミント・アドネートといいます」

チェスター「チェスター・バークライトっています」

アーチエ「アーチエ・クラインよ…」

すず「藤林すずと申します」

ミゲール達の方の自己紹介が終わり、レオ達の紹介だ

レオ「レオといます」

アクア「僕はアクアです」

ヴォル「ヴォルだ…」

クラウド「クラウド、よろしくな」

k「僕はkと申します」

残ったカイル達も自己紹介した。

カイル「えっと、カイルニデュナミスです」

ロニ「同じく、ロニニデュナミスだ」

リアラ「リアラと申します」

ジューダス「ジューダスと名乗っている」

ナナリー「ナナリーニフレッチさ」

リトラー「うむ、よろしく」

全員の挨拶がすみ

リトラー「君達はハロルド君の部下として工兵隊に配属される」

デймロス「だが勘違いしてもらっては困る、現場の指揮をとるのは私だ、私の命令には必ず従ってもらう」

ハロルド「はいはい！わかってるって」

ハロルドは厳しいデймロスに対してわかったような態度をとる

ハロルド「それよりデймロス、作戦の説明してたんでしょ？もう一回最初からしてくれる？」

デймロスは呆れたような表情で

デймロス「こいつらも連れて行くつもりか？」

ハロルド「私の護衛だからね、文句ある？あるなら…」

言う途中でディムロスは強制的に納得し

ディムロス「わかったわかった」

ディムロスは作戦を説明する。

ディムロス「本作戦の目的は二つある、一つは我が軍に投降の意を示したベルクラント開発チームの救出だ、そして…」

そこでカイルが質問してきた

カイル「あの…ベルクラントってなんですか？」

ロニ「あのなあ、前に話しただろうが、ダイクロフトにある兵器だよ」

ディムロス「続けていいかね？」

不機嫌そうにディムロスは言う

ディムロス「そしてもう一つ、すでにその任にあたり敵将ミクトラの策におちた同志二人の救出にある…すなわち、クレメンテ殿とアトワイトだ」

ドルク「なるほどな…で？俺達の任務は？」

そこでハロルドが説明する

ハロルド「ダイクロフトまでの移動手段の確保よ、もう目星はついているから後は人手がいるだけ」

しかしここで問題が

アクア「人手って言われても僕達は機械とかいじれないよ？」

シルム「オイラも少ししか機械に詳しくないから」

だがハロルドは余裕の表情で

ハロルド「ああ大丈夫、ただのゴミあさりだから」

リアラ「ゴミ…あさり？」

ハロルド「まっ、行けばわかるわよ」

ハロルドはディムロスに視線を向けた

ハロルド「ディムロス、これで終わりよね？んじゃ、私達は出かけるから」

ディムロス「頼んだぞハロルド、お前の無理は飲んだんだ、今度はそっちが…」

言いかけようとしたとき

ハロルド「はいはい、わかってますって」

わかったようにハロルドは言っただルク達に視線を向け

ハロルド「じゃ、行きますか！」

と、ラディスロウから出た

……

外に出たドルク達

ドルク「なあハロルド、そろそろ何処に行くのか教えてくれよ」

ハロルドはドルク達に視線を向ける

ハロルド「ここから東にある『物資保管所』よ、ベルクラントに撃たれて今は使われてないけどね」

チェスター「でもそんなところで何をするんだ？」

と、チェスターは質問した。

ハロルド「言ったじゃない、ゴミあさりよ、移動手段を確保するつたつて飛行艇が丸ごと落ちてるわけないでしょ、だから使える部品を集めて作るの、とにかく黙ってついてくる！部品さえ集まれば、チヨチヨイのチヨイでできるんだから」

ジュティア「ついていくのはいいけど、あたし達、この時代の地図なんて持ってないわよ？」

ナナリー「東って言われてもどっちに行けばいいんだい？」

そう、ドルク達はこの時代の地図をもっていない

ハロルド「そんなことだろうと思ってね、ホイ、地図！それがあればわかるっしょ」

ドルク「これでなんとかいけるな」

ドルク達は出発した

……

歩いてる途中

マリア「ハア…ハア…」

クレス「母さん、あまり無理しちゃ」

マリアは突然疲れだした

クレス「みんなちょっと休憩していいかな？」

ドルク「ハロルド、いいか？」

ドルクはハロルドに聞く

ハロルド「そうね、少し休みましょう」

少し休憩することに

ジューダス「レオ、ちょっといいか？それとドルクとシルムも」

レオ「え？」

ドルク「俺達は構わないぜ」

ジューダスはレオ、ドルク、シルムを連れて少しみんなと離れた所に

ドルク「で？何のようだ？」

ジューダス「ちょっとな…レオ…お前、スタンだろ？」

ドルク・シルム・レオ『！？』

ドルク達は驚いた表情をする

ジューダス「フツ、やっぱりな…どうもレオを見るとあいつだと思  
ってしまってたな」

レオ「やっぱりわかつちやったか…お前も変わらないなりオン」

レオはジューダスにかつての親友の名を言った

ジューダス「お前もな…とりあえずは内緒にしておく…特にカイル  
もどうかかわからない」

レオ「そうだな…俺はバルバトスに殺され、気づいたらバクフーン  
に転生した…あの時俺は死んだ感じだった…でも俺は生きている」

レオは自分の胸を軽く叩く

ドルク「今のところは俺達はわかっているがクレス達やカイル達はわかってないからな」

シルム「内緒にはしてるけど」

ドルクとシルムはそう言う

ジューダス「そうか…まあ僕もまさかあいつがポケモンに転生したとは思ってなかったからな」

レオ「リオン…」

ジューダス「今はジューダスだ…たとえバレてもお前は僕の事をジューダスと呼べ、もしバレた時は…リオンでもいい」

ジューダスは少しツンとした態度で言う

レオ「わかったよりオン…とりあえずはそうしておく」

ドルク「それじゃあ戻ろうぜ」

シルム「もうマリアさんの方もよくなったと思うし」

レオとジューダスは頷いて四人はみんなの元へ

依頼 91 再会と作戦（後書き）

ドルク「デймロスがリザードンって…作者、たしかラッシュのイ  
メージCVもデймロスだったよな？」

本当はバシャーモでもいいけど…やっぱりリザードンということだ

シルム「どっという風の吹き回し（汗）」

ジューダス「だが一応言うが、1000年も前だ、デймロスはス  
タンの事を覚えていないからな」

それがもう一つの運命って感じかもね…次回はコミあさりです。

ジューダス「お前が言ってどうする（汗）」

いいだしっぺハロルドだし



## 依頼 9 2 物資保管所

物資保管所

緑色の建物でなぜか荒れ果てていて大きく穴が開いた場所が上からだと見える

ミント「ここが、物資保管所ですね」

アクア「ずいぶんと荒れ果てているね」

だが

ハロルド「建物の原型を留めてるんだからマシな方よ、直撃じゃなかったらこの程度で済んだのよ」

ロニ「ぞつとしねえなあ〜なんでベルクラントみたいなもん作っちゃまったんだか…」

たしかにロニの言うとおり、なんでベルクラントみたいなのが作られたのか

ハロルド「なんでって、新しい地表の生成のためじゃない知らなかったの？」

カイル「え？そうなの？」

カイルは知らなかったようでわからなかった

レオ「俺は知ってるけどな」

レオはスタンのため知っている。ただ知っている者と知らない者もいる。ハロルドが説明する。

ハロルド「元々ベルクラントは地表を細かく粉碎し空に巻きあげるためのシステムだったので、その巻き上げた石や岩を使って空に浮遊大陸を作って街や村を作るつもりだったのよ」

ジューダス「本来ならば、すべての人がその浮遊大陸に移民するはずだった、だが、天上人と呼ばれる特権階級の間人達だけが使うことになったんだ」

と、ジューダスは背を向けて言う

ナナリー「それに反発した地上人が反旗をひるがえしたのが天地戦争なんだよね」

ジューダス「そうだ、そして戦争になった途端、ベルクラントはその姿を兵器へと変えた…」

ベルクラントは元々兵器でなくシステムだった…しかし移民は天上人と呼ばれる特権階級の間人達のもしか使うことはできなかった。それが地上人への反発となり、天地戦争は起こってしまった。

レオ「（ヒューゴもイレーヌさん…みんなどうしてそうなってしまったんだ…俺にはわからない…どうしてそうなったのか…）」

レオはあの時…つまりカイルがいる時代の18年前の事を思い出していた。

操られて利用された者…一緒に夢を競い合った者…色んな人をレオは出会ってきた。そして彼は英雄となった…しかしレオは殺されてポケモンへと転生した。スタンという名前を隠し、レオと名づけてとあるトレーナーと仲間達と一緒に…

だが思い出はそう簡単に消せない…スタンとして旅立った記憶、デイルロスと出会った記憶…そして今いるアクアとヴォルとの記憶…記憶の中でスタンとしての記憶…過去を封印したが…もう自分の時代に来てしまった。そして…古い友であるジューダス…リオン…マグナスとの再会、運命というのは何が起こるのかわからない…それが運命である。

さて、話を戻そう、カイルが建物に入ろうとしたらハロルドが止める

ハロルド「ちょい待ち！…なんだか変なニオイがするわねえ」

ハロルドが入口近くに行つてニオイを嗅ぐと

ハロルド「あちゃあ、マズった！科学物質がもれちゃってる」

ドルク「何っ！？それじゃあ中に入れないのか？」

ドルクは中に入れないのか？とハロルドに言う、だがハロルドは

ハロルド「ああ、だいじょぶだいじょぶ、かなりヤバイけど10分くらいなら我慢できるわよ、たぶん」

ミゲール「マジで？」

ハロルド「マジで」

ハッキリとマジでと言うハロルド

ハロルド「いい？よく聞きなさいよ？目的のブツは資材置き場の一番奥にあるコンテナに保管されてるわ、でもそれを開けるには何個ものプロテクトを突破しなくちゃいけないの、あちこちに『プロテクト解除用のキー』が落ちてるはずだからそれを全部手に入れるのよ」

ドルク「わかった、だがホントに中に入って大丈夫なのか？」

ドルクの質問にハロルドは

ハロルド「10分くらいならだいしょぶつて言ったでしょうが…でも、10分過ぎたら命の保障はできないわよ、いい？10分よ10分！」

10分と強調して言うハロルド、これは命がけの作業だ

クレス「でもちよつと待つてくださいハロルドさん、僕の母とか病気持ちとかは大丈夫なんでしょうか？」

マリアなのだが彼女は元気に思えるが病気持ちだ、なぜミゲール自信を厳しくするときだけは元気なのかは…大人の事情である（汗）

ハロルド「そうね、病気持ちだと命の保障ないわね、後でガスマスクぐらいは作ってあげるけど、ここに残った方がいいわね」

マリア「ごめんなさいみなさん」

マリアは謝るが

ドルク「ここは俺達に任せてくれ、あんたの体に無理させちまうかならな」

クレス「そうだね、ここは僕が残るよ」

ミゲール「それじゃあ俺は」

マリア「お前はここに残れ!!」

マリアの一喝でミゲールは留守番（強制的に）

アトリ「俺も赤ちゃんだから影響受けそうだから残るわ」

ハロルド「そうね、こっちも後でガスマスクは作っておくわ」

チエスター「俺達も残った方がいいかもな」

アーチエ「そうね、あたしも残るわ」

すず「私も残ります」

ミント「私も、ドルクさん達だけでお願いします」

結局ファンタジアチームは残り、残ったメンバーで中に入ることに  
なった

……

中に入ると毒ガスのおいなどがツンと鼻にくる

シルム「ゴホッゴホッ！これは10分どころじゃないかも」

ドルク「たしかにな、ここは分かれて探すしかねえかもな」

ハロルド「そうね、それなら確実に探せるわ」

ここでドルク達は分かれて探すことにした。

ジャンケンなど色々やった結果

ドルク班はドルク、シルム、シエルマル、ジユク、レビィ、ジユデ  
イア

カイル班はカイル、リアラ、ロニ、ジューダス、ナナリー、ハロルド

クラウド班はクラウド、k、レオ、アクア、ヴォルとこのようなメ  
ンバーとなった

ジューダス「それからソーサラーズコープを渡しておく」

ジューダスはドルクとクラウドにソーサラーズコープを渡した、ソ  
ーサラーズコープはこの世界で使われるレンズという物質を使って  
見えないものを見つけることができるすぐれものだ

ドルク「ありがとな…俺達は1階だな」

ドルク班は1階へ

カイル「俺達は地下の方に行くよ」

カイル班は地下1階へ

クラウド「俺達は2階だな」

クラウド班は2階へ

……

ドルク「エナジーバスター！」

ドルクがエナジーバスターで魔物を一掃する

ドルク「ここは敵が多いな」

悪態をつくようにドルクは言う

シルム「ソーサリースコープで探してるけど…ん？」

シルムは何かを見つけた…それは2階からだった

シルム「これって」

とあるコンテナ部分を空けてみた、そこにはチップがあった、そこに

カイル「みんな〜！」

クラウド「こっちもチップ持ってきたぞ！」

他の班が戻ってきた

ドルク「これで3つ全部だな」

ハロルド「そうだけどこかにマスターキーはあるはずよ、でもこのチップを持ったまま外に出したらだめだからね」

シルム「え？なんで？」

ハロルドが説明した、この3つのチップは温度変化に弱いため外は吹雪になっているため出ると今までの苦勞が水の泡になる

ジユク「そうなるとマスターキーを探すか…残された時間はないしな」

たしかにここに入ってますでに7分も経過しているのだ

クラウド「あ、それなら入口近くのコンテナにマスターキーがあるぜ」

クラウドが言う、ルカリオ特有の波動感知能力があるためすぐにマスターキーは見つけられた

……

入口付近のコンテナに3つのチップを使った、そこにはマスターキーがあった

ハロルド「これがマスターキーね、これで大抵のプロテクトは外せ

るわ、マスターキーは温度変化で壊れたりしないからいったん外に出て休憩しましょう」

ドルク「そうだな…急がないとな」

ドルク達は急いで外へと出た

……

クレス「おかえり、大丈夫だった？」

クレスが心配そうにドルク達に声をかける

k「さすがにここはきついよ…でもまだマスターキーだけ手に入れて残った二つのキーを手に入れないといけないし」

そう、マスターキーを手に入れても高レベルのプロテクトを解除していない

シエルマル「やっぱ新鮮な空気は吸っておかないと」

シエルマルはスーハースーハーと息を吸ったり吐いたりしてる

すず「かなりのものですねこれは」

マリア「ごめんなさい…」

マリアは悲しそうに謝る

ドルク「謝ることじゃねえよ、色々負担かけたら大変だからな」

ドルクがマリアを気遣う

アクア「でもまだ二つの解除プロテクト用のキーを手に入れないとね」

クロウド「大丈夫だ、ここは波動で一気に見つけりゃあいいし…それに毒ガスは鋼タイプをもってる俺には効かないしな」

シルム「あつ！」

そう、クロウドはルカリオの姿をしている。つまり毒ガスは毒タイプのようなもので鋼タイプや同じ毒タイプのポケモンには効果はない

ハロルド「あら〜それならポケモンを調べたいわね…ちょっとクロウド、あんたの体解剖していい？」

ハロルドは目をキラキラさせて言う

クロウド「ちょっと待て！？そこまでやるな！ってか死体なら大丈夫だが」

なぜか怖いことを言うクロウド

ジューダス「ふざけてないで入るぞ」

ジューダスが保管所に入る

ドルク「行くつぜ」

ファンタジア組はここに残り、他のメンバーも入った

……

まずは2階で

ハロルド「これはセルキーね」

セルキーを手に入れた

ハロルド「これが上位レベルのプロテクト解除キーよ、『マスターキー』、『セルキー』、『バイオキー』この3つのキーを資材コンテナにえばプロテクトを解除できるわ、でも『セルキー』、『バイオキー』は温度変化に弱いから、外に出ちゃだめよ」

シルム「つまりさっきのと同じだね」

シルムは納得する

ドルク「後はバイオキーか、クラウド」

クラウド「わかってる!」

クラウドは波動を使って集中する

……

地下1階

レオ「あった!」

機械に刺さっていたバイオキーをドルク達は手に入れた

ドルク「後は…」

アクア「資材コンテナに急ごう！」

ドルク達は奥の資材コンテナへと向かう

……

ドルク達は3つのキーを使って資材コンテナを開けた、ハロルドが必要な物をコンテナから取り出す

ハロルド「ん〜と、必要な部品はバルブとノズルと耐熱材と…」

色々を選んで

ハロルド「よし！これだけあれば十分だわ、あとは組み立てるだけね」

ドルク「こんなガラクタの寄せ集めで空を飛ぶ乗り物なんてできるのか？」

ドルクがハロルドに質問する

ハロルド「これだけの材料があるのよ？普通作れない？」

シエルマル「いや…それできるのハロルドさんだけだと思うよ（汗）」

「

たしかに普通の人なら絶対にできないだろう

クラウド「俺はできるんだけどな」

自信よくクラウドは言う

ハロルド「みんなそう言うのよねえよくわからないわ」

いや大体がハロウド自体しかできないことだからだ、よくわからないと言われても違和感がない

ドルク「用は済んだんだろ？とつとと戻ろつぜ」

レオ「そうだな」

みんなは急いで物資保管所から脱出した

## 依頼 92 物資保管所（後書き）

さて、久しぶりの更新で遅れてすみませんでした…バトル部を終わ  
りまで更新して荒らしなどで色々とかける気分になかなかつた事申  
し訳ありませんでした！

ドルク「まあなんとか更新できたな」

シルム「そうだね」

ハロルド「まあ色々あるだろうし、さて次回いくわよ！」

へいへい…次回はベルグラント（1回目）に突入します

依頼 93 作戦開始（前書き）

ついに作戦開始です

ドルク「さて…どういくかな？」

そんな依頼 93

ドルク「突撃だー！」

### 依頼93 作戦開始

ドルク達は物資保管所から地上軍拠点へと戻ってきた

ハロルド「じゃあ私は早速マシンの製作にとりかかるからリトラ  
ー司令への報告、よろしく」

ドルク「お、おい！」

カイル「えっ！？ちょ、ちょっと待ってよ！」

ハロルドは「飛べ〜飛べ〜ロケット〜」と歌いながらマシン製作  
に向かう

ジユク「なんか不安だな（汗）」

ロニ「ああ、あいつに任せて本当に大丈夫なのか？」

ジユクとロニは不安になる

ナナリー「さあ……」

ミント「たしかに大丈夫なのでしょう（汗）」

シルム「と、とにかくリトラーさんのところに行こうよ」

ドルク達はラティスロウへと向かった

……

ラティスロウ

作戦会議室にはリトラー、ディムロス、カーレルがいた、だがディムロスに焦りが感じられた

ディムロス「ダイクロフト内部の見取り図はまだ出来ていないのか？時間がかかりすぎてるぞ」

カーレル「構造も複雑だし、作成班はここのところ徹夜作業が続いている仕方がないだろう」

ディムロス「しかし…」

ディムロス自体はまるで急いでいるように思える…それは誰かのためなのか…イラだちがディムロスに響く

カーレル「言いたくはないが、今回の作戦は、準備期間が短すぎる…普段の君なら、ここまで時間に余裕のない作戦スケジュールは組まないはずだ」

ディムロス「わかってている、しかし我々には時間がないんだ」

入口でドルク達は話を聞いていた

ロニ「…なんか入りづらい雰囲気だな」

たしかに…今話しているためか入りたくても入りにくい、カーレルの聲が話し声が聞こえる

カーレル「ここで焦ってもしょうがない、どのみちハロルドのマシンが出来ないことには動きようがないしな」

ディムロス「それにしても遅いなハロルドは、どこで油を売っているのか…」

カイル「入ろう、みんな…」

入りづらいだろうがドルク達はラティスロウの中へと入った

……

### 作戦会議室

リトラー「おお、君たちが、首尾はどうだったかね？」

ドルクは報告する

ドルク「必要な材料はそろっている…今ハロルドが組み立て作業に取り掛かっている」

リトラー「うむ、ごくろうだった、ハロルドのマシンが完成するまで待機していてくれ」

待機を命じられたが

カイル「あの…まだそんなに疲れてませんか、手伝えることありませんか？」

カイルが手伝えることがあるのかと聞く、しかし

ディムロス「その必要はない、作戦開始まで休養を取りたまえ」

カイル「あの、でも…」

ディムロス「これは命令だ」

ディムロス自体ピリピリとしていた。

ドルク「……」

カーレル「まあ好意はありがたく受け取っておくよ、ありがとうカイル君」

カイル「はい…」

カイルは落ち込んで顔を下げた、カーレルはディムロスに視線を向ける

カーレル「ディムロス、見取り図は完成したら私室に持って行かせる、君も休んでくれ」

ディムロス「…わかった、後は頼む」

ディムロスは私室に戻っていった

カーレル「ふう、やれやれ…」

カーレルは呆れたような表情をした

リトラリー「気苦労をかけるな、カーレル君」

カーレルはリトラリーに視線を向く

カーレル「本来なら、部下への配慮はデймロスの専売特許なんですけどね…ま、たまにはいいです」

その疑問にナナリーが問いかけてきた

ナナリー「部下への配慮って…あのデймロスさんがかい？」

カーレルはドルク達に向く

カーレル「ああ、君達は知らないのか、彼はね…兵達の間でもっとも人気があるんだ、『突撃兵』と異名を取るほどの強さも理由の一つなんだがそれ以上に部下への接し方がある。えこひいきや差別をせず、常に公明正大、辛いときには励まし、喜びは共にわかちあう」

『ま、人気があって当然だな』と付け加えて言った

ロニ「へえ〜こう言っちゃなんだが正直、見えないねえ〜」

レオ「（デймロス…いつもああなのはらしくないな…どうしたんだ…）」

スタンであるレオは自分のパートナーでもあったデймロスの事を思っていた

カーレル「デймロスも余裕がないのさ」

シルム「え？」

カーレル「今度の作戦は、必ず成功させなくてはいけないそのプレッシャーのせいだろう」

カイル・レオ「そうなのか…」

同時にカイルとレオは言う

カイル「え？」

レオ「あ、いやなんでもないんだ…」

レオは恥ずかしそうになる

カイル「？」

カイルは首をかしげる

カーレル「だから、彼の事を悪く思わないでくれ、今度の作戦が終わればいつものデймロスに戻るはずだ」

カイル「はい！わかりました！」

カイルは頷いた

レオ「（あいつがプレッシャーなんてなかった…デймロス…）」

レオは不安になりながらもドルク達と一緒に士官用の部屋で休むことにした

……

士官用の部屋はカーレルの部屋となっている。

カイル「なんかさ、ワクワクしてくるよね！あのソーディアンチー  
ムと一緒に戦えるなんてさ！」

カイルは嬉しそうだった

ジューダス「浮かれていると怪我をするぞ」

カイル「言われなくてもわかってるよ！」

カイルは怒った表情をする

ドルク「そうだな…戦場に行くから油断はできねえ」

カイル「ドルクは見た目からして慎重だね」

カイルはドルクに視線を向ける

ドルク「まあブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方だからな」

ドルクは胸を叩く

クレス「たしかにね、ドルクは見た目は怖い感じもあるけど優しいからね」

クレスは付け足すように言う

カイル「へえ〜そうなんだ」

カイルは納得する

ロニ「まあたしかにな…それにソーディアンチームといやあ伝説上の英雄、しかもとびきり有名ときてる、落ち着けて方が無理な話さ、ましてやこいつ…カイルの英雄好きときたら筋金入りだからな」

リアラ「ふふっ！そうね」

リアラは笑う

ドルク「まあでもカイルって結構そうかもしれないね〜な（笑）」

ドルクも笑う

カイル「あ、リアラとドルクまで笑った！ひでーなー！」

カイルは怒るが

リアラ「でも…カイルだって私から見たら立派な英雄なんだけどな」

カイル「そ、そうかな…」

カイルは照れる

ドルク「おっ！照れちまいやがってこの」

ドルクはカイルをじゃれる

カイル「なんだよドルク」

カイルも返す

シルム「よほど仲良くなってるね」

クレス「そうみたいだね」

シルムとクレスはそう言う

ナナリー「はいはいごちそーさま！なんせカイルはリアラだけの英雄だもんね」

ナナリーはこの場をおさめる

レオ「俺ちよつと風に当たってくるよ」

アクア「大丈夫？」

アクアは心配そうに声をかける

レオ「大丈夫だ」

レオは部屋を出た

ドルク「俺も腹減ったからどつか食いに行つて戦いに備えてくるぜ」

シルム「オイラもドルクが心配だから一緒に行くね」

ジューダス「僕も風に当たってくるか」

ジュティア「あたしも」

カイル「えっ？」

ドルク、シルム、ジューダス、ジュティアは部屋を出た

ミゲール「さてその間俺は」

マリア「ナンパしたらどうなるかわかってるんだろっな？」

マリアがミゲールを引っつかんでボコボコにする

ミント「クレスさん、話が…」

クレス「ん？あ…僕も風に当たりたいな」

アーチエ「え？ちよつと！」

ミント「私もちよつと」

クレスとミントも部屋を出た

アーチエ「気になる」

アーチエは気になる様子

チェスター「おいおい、色々あんだから行くなよな？」

チェスターに止められぶーと頬を膨らませるアーチェ

k「なら見学とかしとこうよ」

kの提案でみんなは頷くが

ロニ「俺はちょっと外の空気吸ってくるわ、おいナナリーお前も付き合えよ」

ナナリー「え？なんであなたに付き合わなくちゃいけないのさ！」

ナナリーは反論するがロニが近づいて小声で言う

ロニ「いきかせるよバカ」

ナナリー「わ、わかった、けど、勘違いしないでよ！仕方なくなんだからね！」

ロニ「へいへい、行くぞ」

ロニとナナリーは部屋を出る、他のメンバーも出るがkは『カイルとリアラは残ってて』と言って部屋を出た

残されたカイルとリアラだけとなってしまった

……

外ではドルク、シルム、ジュティア、レオ、ジューダスの4人が囲んでいた

レオ「あゝようやく喋れる〜」

レオは解放したような感じで言う

ドルク「まあ正体がスタンだってまだ明かすわけにはいかねえしな」とりあえず5人はこの場で話すことができる機会をうかがっていた。理由はやはりスタンであるレオの事だろう

ジューダス「とりあえずスタン、お前の話を聞かせてもらおうぞ」

レオ「あ、ああ…」

レオはジューダスに今までの事を話す、バクフーンに転生したことなどを

ジューダス「なるほどな…お前は僕と同じようというわけだな」

ドルク「正確にはジューダスはエルレインによって生き返ったんだろ?」

ドルクはそう言う

ジューダス「そうだ、それにしても驚いたな…スタン、お前がそのトレーナーの元で育ててられていたとはな」

レオ「いや、死んだと思っていたけど…転生した理由はまだわからないんだ、それにその間カイルも立派になっていたなんて…俺はカイルを見守ってるしかできない…ましてや今術とかも練習してるが

うまくできないんだ…」

そう、スタンであるレオはソーディアンであるディムロスを使ってでないと言術は使えない…練習はしているがほとんどポケモン技などで中々術を発動することができない

ドルク「たしかにな…でもジューダスは他の術覚えてるしな」

ジューダス「まあ僕のは色々あつてだがな」

ジューダスは言えない…ある意味大人の事情というのが入っているだろう、そこに

クレス「そうだったんだ…」

ミント「まさかこんなことが」

5人『!?!?』

そこにクレスとミントが来た

シルム「クレスさんにミントさん!?!?」

ドルク「まさか聞いてたのか?」

クレスとミントは頷いた

レオ「すまないな…内緒にしてくれ、この事はみんなに言わないでくれ…そのうち明かそうと思うんだ、その時まで」

クレス「うん、君がそう言うならそうするよ…」

ミント「みなさんの事が気になっていてついていったんです。まさかそんなことが」

クレスとミントは悲しい表情をする

ジュティア「それより気になるわね…デймロス自体のあのピリピリした感じは」

ジュティアはデймロスの何かを感じていた

レオ「元々あいつはそんなんじゃない…俺もデймロスと一緒にいる時はあんな風にはなっていない…何かあいつにも事情があるんだろうな」

レオはそう考える

ドルク「たしかにな…あの雰囲気は何かあるだろうと思っぜ？」

ドルクもデймロスから感じた気持ちを感じていた

クレス「たしかに、部下を思っているのならこのような行為はしないよね」

クレスはそう言う

ドルク「きつと何かあるんだろうな…大切な人とか何かだと思っぜ？」

ドルクはそう考えた

レオ「大切な人が…わからなくなった」

レオは混乱する

シルム「無理しない方がいいよ、とりあえず戻るつか…デймロスさんもきつと大丈夫だと思っし」

ジューダス「そうだな、僕はハロルドの様子を見に行ってくる」

ジューダスはハロルドの元へ

ドルク「そんじゃあ戻るっぜ」

ドルク達は戻っていった

……

次の朝

作戦会議室

ドルク達は作戦会議室に集まった

リトラ「君達、ちょうどよかった、これから作戦の説明を行うところだ始めてくれ、デймロス」

ちょうどみんな作戦の説明を始めるところだった、デймロスが作戦の説明をした

ディムロス「まず、ハロルドのマシンでダイクロフトに強行着陸する、その後、チームを二手にわけろ… Aチームはベルクランド開発チームおよびクレメンテ、アトワイトの両氏の救出、Bチームは敵の攪乱をおこなう、Aチームが救出した後は制御室を奪取、ダイクロフトの全機能を一時的にマヒさせる、ダイクロフトがマヒしているスキについてAチームとBチームは合流、脱出ポッドでラティスロウへ帰還する」

という内容だった

シャルティエ「あの…ハロルドさんのマシンは帰りは使えないんですか？」

シャルティエはそう質問する。それにハロルドが応える

ハロルド「ああ、強襲用につてことだったから片道しか想定してないのよ」

イクティノス「マシンを帰りにも使うとすれば敵に破壊されないよう守備人員を割かなくてはいけなくなる、少数精鋭で突入するこの作戦でこれ以上の兵力分散は愚行だろう」

さらにイクティノスが付け加えてシャルティエに説明した

ディムロス「そういうことだ、では各チームの割り振りを発表する。Aチームは私、イクティノス、シャルティエ、カーレルだ」

Aチームはディムロス、イクティノス、シャルティエ、カーレルの4人だ

ディムロス「Bチームはハロルドだ、護衛の人間は…」

ディムロスが話してるところでハロルドが割って入る

ハロルド「もちろんカイル達とドルク達よ、構わないでしょ？」

ディムロス「了解した…以上だ、質問は？」

誰も質問で手をあげる者はいなかった

ディムロス「今回の作戦は必ず成功させなくてはいけない…何があってもだ、よろしく頼むぞみんな！」

リトラ「会議はこれまでだ、各員格納庫にて集合せよ、健闘を期待している」

ディムロス達は先に格納庫へ

ジューダス「さすがはディムロス、地上軍の総司令官だけのことはある、作戦の前だというのに平常心を忘れていない」

ロニ「なるほどねえ…これなら兵士に人気があるのもわかるな」

レオ「（あれ？何か忘れてるような気が…）」

レオは何か心に引っかかるような感じがした、その何かがわからな  
い…

ハロルド「…やれやれ、兄さんの言うとおりホントに余裕ないみた

いね」

カイル「え？だってディムロスさん、すごく堂々としてたけど……」

カイルはそう言うがハロルドは首を振る

ハロルド「いつもの言葉が出てないのよ」

リアラ「いつもの言葉？」

リアラは首をかしげる

シルム「その言葉って？」

シルムがハロルドに問いただす

ハロルド「あいつは作戦前に部下にこう言うのよ」生きて、帰ってこい』って」

レオ「（そうだ…あいつあの時もそうだった…いつもこの言葉を言っていた…引つかかっていたのはこういうことだったのか…）」

レオは心に引つかかる忘れていたのを思い出した

ジュティア「あら、部下思いのいい人に思えるわよ？」

ジュティアはそう言うが

ハロルド「でも、今日は言わなかった…他人の事が目に入ってないなんてらしくないわ」

カイル「そうだったのか……」

カイルは心に何か重いのが降ったような感覚がした

ハロルド「ま、ともかく格納庫へ向かいましょ」

ドルク達は格納庫へと向かった

……

格納庫からハロルドの作ったマシンがロケットのように発射し、ダイクロフトへと向かって飛ぶ、ダイクロフトの何処かの場所へとぶつかった

ドルク達はダイクロフト内部へと着いた

ドルク「あゝいつてえゝなあゝ」

カイル「イテテテ……もうなんなんだよこのマシン！飛び方も着地もメチャクチャじゃないか！」

痛々しくなるドルク、カイルは作った本人であるハロルドに文句を言う

ハロルド「メチャクチャじゃないわよ、ちゃゝんと揺れ方とか衝撃も計算して軌道を入力したもの」

ロニ「……ちょっと待て、ってことはわざとこういう風に飛んだのか!?!」

しかしハロルドは反省せず

ハロルド「このぐらいドツタンボタンしないと飛んでるって感じがしないでしょ？」

シルム「そこまでやるんだね（汗）」

ハロルドが天才なのかを疑うように思える…これが本当に天才科学者なのだろうか（汗）

ハロルド「うんうん、計算通り格納庫に到着したわね、ほら、これが脱出用ポッドよ覚えておいてね」

視線を脱出用ポッドに向ける、古い薄茶色をした機械がそっくりしい、そこから兵士達の声が聞こえる、どうやら気づかれてしまったようだ

カーレル「まずいな、思ったよりも早く気づかれてしまった」

デймロス「なに、いつかは見つかるんだ、それが少しばかり早まっただけのことさ…よし、作戦開始だ！ハロルド、攪乱は任せたぞ、他の者は私に続け！」

デймロス達4人は先に行った

そこから敵が現れた

ドルク「お前等の相手は俺達だ！きやがれ！！」

ドルク達は構えた

剣を持った魔物が襲ってくる

シルム「スライディングバレット！」

シルムはスライディングで滑り込んで撃つ

シルム「そこから裂空斬！！」

シルムは滑り込んでから飛んで回転斬りで圧倒する

ドルク「大地のエネルギーよ！食らえ！！グラントダツシャー！！」

大地の破壊のエネルギーが敵をのみこむ

カイル「火炎放射！さらに爆炎剣！」

カイルは火炎放射を放つ、さらにそこから剣を炎で纏い斬りつける

……

数分後

敵は倒れてしまっている

ロニ「ほいー丁上がりっ！さ、俺達もとっ！と！行こう……」

行こうとするが

ハロルド「ちょい待ち！」

ハロルドが待ったをかけた

ドルク「どうした、ハロルド？」

ハロルド「あんた達、このモンスターと戦ったことがあるの？」

それは今襲ってきた魔物と戦ったことがあるのかを聞かれた

ドルク「いや、俺達は初めてだ」

クレス「僕達も戦ったことなかった魔物だよ…カイル達は？」

カイル「俺達はあるけど…それがどうしたの？」

ハロルドはモンスターの死体を調べる

ハロルド「なるほど…ドルク達は別世界から来たのだからないわね…つまりカイル達と同じように未来から来た奴がいるってわけね」

リアラ「どうということ？」

倒したモンスター達はドルク達やクレス達でも見たことがない

マリア「たしかに気になることがあるわね…」

ミゲール「俺達でもこんなモンスターは対峙していなかったしな」

ドルク「俺もどんな奴だろうとかかかってきたがこういう奴は初めてだな」

それぞれそう言う

ハロルド「そうよね…カイル達以外このモンスターは私見たことないもの、こいつと似たようなのは今も存在してるけど、それよりも異常なまでに進化してるわ…つまりこれは誰かが未来から連れて来たってこと、心当たりある？」

カイル達には心当たりがある人物といえば…

ロニ「ありもあり、大ありさ…エルレインって奴の仕業だよ」

ジューダス「おそらく奴の手下がすでに天上軍に入り込んでいて支援しているのだろうな」

考えられるならエルレインしかないとかイル達はそう思っているだろう

ハロルド「ふむふむ…つまりあんた達の目的の一つは歴史修正のわけね、そのエルレインって奴が天上軍に肩入れしてこの戦争を勝たせようとしている。で、それを阻止するためにあんた達はこの時代に来たよ」

リアラ「ええ、その通りよ…私達はエルレインの歴史介入を防ぐためにここに来たの」

リアラがハロルドに説明する

ドルク「でも俺達は歴史介入目的もあるが別の目的だけ」

ドルク達は別世界に来た目的は言わなかった：ハロルド本人が答えを知るのはつまらないという彼女の考えも考えてのことだ

ハロルド「わかってるわ…それにしても歴史をいじるなんてずいぶんと面白そうなことやってるじゃない、そいつ神様気取りね」

リアラが首を振る

リアラ「いえ、神の名を語ってるんじゃないわ…本当に神を降臨させてその力を使っているの」

ハロルド「本物の神の力！？ってことは、あんた達神様に喧嘩売ってるわけ！？」

ハロルドは驚く

カイル「ま、まあそうなるかな」

するとハロルドは

ハロルド「…フフ、フフフッ！」

カイル「ハロルド！？ど、どうかした！？」

ハロルドは笑っていた。それはまるで何か面白いことでもしたいような気分に思える

ハロルド「面白くなってきたじゃない！神様と喧嘩なんて最高だわ！よし！私の頭脳が神をも凌駕じょうがすること証明して見せるわっ！」

気合が入るハロルド

カイル「は、はあ……」

カイルは呆れたような表情をする

ハロルド「さ、そうとわかったらこんなところでグズグズしてられないわ！作戦続行！行くわよみんな！」

ハロルドは気合十分に言う

クレス「ハロルドさんすごい気合入ってるね…ハハ（汗）」

クレスは苦笑いをする

ドルク「まあいいや…とにかく暴れてやるぜこのやろ…！」

ハロルド「あら、ドルクが言うなら私も暴れるわよ…！」

もはや気合十分なのはドルクもだった

クラウド「よしトコトン暴れて（黒）」

クラウドは何か企んでるようだった

ドルク「よっしゃあ！行くぞテメエ等…！」

ロニ「なんでお前が仕切るんだよ…！」

ロニはつつこみをするが

ドルク「聞きてえか？」

ロニ「あ？」

ドルク「聞きてえよなあ、俺の事…」

ハロルド「聞きたいけど答えわかるのもね」

ハロルドは困る

ドルク「じゃあハロルドは俺が何者か応えられるのか？」

ドルクの言葉にハロルドは

ハロルド「応えてやるわよ！あんたってポケモンだけど本当は…人間でしょ？」

クレス「あ、当たってる!？」

クレスは驚く

ドルク「ほう、やるじゃねえか…それじゃあ言わせてもらっぜ!!俺はドダイトスのドルク！元人間だ！テメエ等のハートに刻んどきな!!！」

ドルクはポーズを決め、そこからエレクトリックギターのシャウトが響いた

ハロルド「後は他になんなのかだけど…とりあえず行くわよ!!！」

ドルク達ブレイブは早速行動を開始した

依頼 93 作戦開始（後書き）

ハロルド「面白くなってきたわね」

あなたの脳自体もどうなのか（汗）

ハロルド「あら、どうせドルクとかいい戦力がいるんだから暴れな  
いとね」

なんだか頭が痛い（汗）

依頼 9 4 救出と誘拐（前書き）

ドルク「なんかいやなタイトルだな」

シルム「でも油断できないよ」

それじゃあ依頼 9 4

ドルク「待ってるよ！！」

## 依頼94 救出と誘拐

ドルク達はダイクロフトを現在勢いよく敵を次々と倒して進んでいく  
ダンダン！！

シルム「敵に見つかる厄介だな」

シルムは愚痴りながらレウスバーニストで敵を撃つ

ドルク「この敵は見つかり襲ってくるようだしな」

ハロルド「たしかにそうね、どっちみち見つかるわよ、どうせだから派手に暴れちゃいましょう」

ハロルドはノリノリだ

ロニ「ノリノリしすぎだろ(汗)」

ロニは斧を振りながらハロルドにツッコミをいれた

ヴォル「油断するな！」

ヴォルは電気技で敵を倒していく

カイル「でもドルクやハロルドノリノリしすぎのようなんだけど(汗)」

カイルの言つとおり、ほとんどドルクやハロルドによってモンスター  
の残骸が転がる、ほとんど機械できてる敵はボロボロで機械の一  
部が出ている

ドルク「とにかく見つかったちゃーやるしかねえしな…ウラァ！！」

ドルクのエナジーバスターが空中に浮いている敵を、まるでハエた  
たきのように落とす

……

ドルク「なんとかここまで来たな」

ドルク達はなんとかダイクロフトの迷宮じみた場所を突破した

シルム「まるで迷宮みたいだったね」

シエルマル「はあはあ…む、無理がありますよ」

マリア「ここまで来ると…きつくなってきたわ…はあ…はあ…」

みんな汗が出てくる

クレス「ハロルドさん、この先は？」

ハロルド「この先に捕らえられてはいるとは思っけど、とりあえず  
合流しましょう」

ドルク達は頷いて先へと進んだ

…

扉の前にはデймロス達4人がいた…だが何か困った様子だった、そこにドルク達が到着した

デймロス「無事かハロルド！ 欠員は出てないか？」

ハロルド「ごらんの通り全員無事よ」

全員の無事をハロルドが報告する

デймロス「ほう…初めての实战にしてはよくがんばっているな」

ハロルド「そつちこそ、平気なの？」

ハロルドがデймロスに平気なのかを言う

デймロス「見ての通りだ、だが扉が開かなくなてな…これから破壊しよう…」

デймロスが話してる途中でハロルドが扉の前へ、扉は白く固く閉ざしている

ハロルド「やれやれ、こんなところで手間取ってるとはね、扉の向こうにみんながいるんでしょ？ さっさと助けて帰るわよ」

カーレル「ムチャを言うなハロルド、扉の鍵はパスワード式になっていておそろくミクトランにしか…」

「

ピー！ガチャン

カーレルが言い終わる前に扉が開いた

ハロルド「なんか言った兄貴？」

ハロルドはとぼけたようにカーレルに視線を向ける、パスワード式の扉をハロルドは解いてしまったのだ

デймロス「お前の妹に常識は通用しないらしいなカーレル」

まさしくその通りであった

ドルク「（あいつの頭脳はスーパーコンピューターみてえだな）」

うんうんとドルクは頷く、ハロルドを先頭にドルク達は中へと入った

……

中に入るとそこには白衣を着た数匹のポケモンと年老いたポケモン一匹と美しいポケモンが一匹いた

年老いた方のポケモンは赤い鼻に丸い小さい突起のポケモン、きんこつポケモンのローブシン…もう一方の美しいポケモンは尻尾は扇のようになっている鱗はまるでステンドグラスのような美しさ、赤く伸びたものに赤いもみあげに突き立っている頭の突起、その突起にはペレット帽を被っている。このポケモンはいつくしみポケモンのミロカロスという

デймロス「地上軍ユンカース隊所属、デймロスIIティンバー中

将ただいまお迎えに上がりました！」

するとそのミロカロス<sup>ミロカロス</sup>は驚いた表情をして静かに言う

ミロカロス「デймロス……！中将閣下……」

そしてローブシンも口を開く

ローブシン「おおデймロス！よう来てくれたな」

デймロス「クレメンテ殿、よくぞご無事で」

ローブシン「クレメンテは元気そうだった

クレメンテ「まあこんな場所にくたばるわけにもいかんて」老兵は死なず「じゃ」

デймロス「地上軍総司令リトラ<sup>リトラ</sup>の命により参上しました。我々はあなた方を歓迎します」

すると一匹の白衣のポケモンが礼を言う、名はラティツツと言う、このベルグラント開発陣の代表らしい……姿は大きな両翼のふさふさした羽毛のポケモン、ピジョットだ

ラティツツ「ベルグラント開発陣を代表して礼を言う、ありがとうデймロス君」

イクティノス「急ぐぞデймロス中将、ここにもじきに追っ手が来る」

ディムロス「うむ、わかった」

ディムロスはイクティノスに頷いて彼等に再び視線を向けた

ディムロス「これより格納庫目指して敵中を強行突破します。我々から決して離れないでください」

再びドルク達に振り向く

ディムロス「当初の予定通り、制御室を乗っ取ってダイクロフトの機能を一時的に停止させてくれ」

ハロルド「任せときなさいって」

ハロルドは頷く

ディムロス「制御室を落とされたとわかった時点で敵の注意はすべてそちらに向く、十分気をつけるんだ」

ハロルド「わかってるってば、それより急ぎなさいな」

ディムロスはハロルドに忠告をした

ディムロス「カイル君、ドルク君」

カイル「は、はいっ！」

ドルク「おう」

ディムロスと呼ばれカイルとドルクは返事をした



兵士達は倒れるが無線で知らせようとすると…増援を無線でもとめて撤退した。ハロルドはメインコンピュータをハッキングする作業に移る

ロニ「お前一体なんだよ!？」

ロニはドルクにツッコミをいれる

ドルク「探検隊ブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方」と、ボケていう

ジューダス「しかしダイクロフトの制御を奪うなんてことが本当にできるのか？」

ハロルド「私の辞書に不可能の文字はないわ！」

ハロルドは作業しながらそう言う

ハロルド「いい、5分間だけ時間を稼いで、それだけあればメインコンピュータをハッキングできるわ」

カイル「わかった、その間ここを守ればいいんだね！」

ドルク「そうと決まれば行くぞメエ等!！」

全員「おお——————!！」

全員が団結する。そこから敵がうじゃうじゃと攻めてきた

……

5分後

ナナリー「まだかいハロルド!? あたし達もそろそろ限界だよ!」

ハロルド「ふんふんふん 　ふんふんふん」

とうのハロルド本人はのんきに鼻歌を歌っていた

ヴォル「のんきに鼻歌歌ってる場合じゃないだろ!」

ロニ「そうだ! なにやってんだよ! 聞いているのかハロルド!？」

ハロルド「3…2…1…0!」

ハロルドがカウントダウンをしてみんなに振り向く

ハロルド「これで脱出用ポッド以外のダイクロフトのすべての機能が停止したわ、ベルクラントもおやすみ中よ」

ドルク「おっしゃあ! 俺達も急いで脱出だ!! 格納庫まで一気に突っ走るぞ!」

ドルク達は制御室を出て急いで格納庫へと向かった

……

ダイクロフト格納庫

カイル「なんとか間に合った！」

レオ「はあ…はあ…ギリギリセーフか？」

格納庫にはデймロスと…さきほどのミロカロス…アトホワイトがいた

アトホワイト「よかった…無事だったのね、あなたたち」

デймロス「敵の追っ手が来ているはずだ！急げ！」

ドルク達は急いで脱出用ポッドに乗り込もうとしたその時、何処からか声が聞こえた

「クツクツクツ…遅かったな、カイル」デュナミス

すると空間が捻じ曲げ、そこから一人の男がいた…姿がポケモンの姿をしていなかった

長い水色の髪にゴツイ顔…そして服装は青で斧を持っていた

カイル「お、お前は…！」

ドルク「（あいつはレオの映像に出てきた奴？）」

ドルクはレオの夢の中で出てきた奴を見る

ヴォル「（なんだ…このまがましい威圧感は…）」

ヴォルの毛が逆立つ

カイル・デймロス「バルバトスIIゲートティア!？」

同時にカイルとデймロスが声を合わせてその男の名を言う

バルバトスという男はデймロスに視線を向ける

バルバトス「ほう、地上軍の…ポケモンへとなったデймロス中尉閣下が小官ごときを覚えておいでは…まこと、光栄の極みですな」

デймロス「なぜ、お前がここにいる!?お前はあの時確かにこの手で…!」

レオ「(バ…バルバトス…)」

レオはなぜか固まってしまった…いや…何かの恐怖に怯えてしまった…そんな感じだった、レオ…スタンは一度バルバトスに幼いロニを人質に取られ、一度死んだ…そしてポケモンのバクフーンとして転生した…知っているのはドルク達ブレイブの連中とクレスとミントだけだ、話をバルバトスの方へと戻そう、デймロスが言った言葉…それはデймロスはバルバトスと対峙して倒したということだ…しかし死んだはずのバルバトスはこうして生きている…考えるとするなら…エルレインの蘇生しか他ないだろう

バルバトス「たしかに俺は一度死んだ…だが、貴様への尽きぬ憎しみが俺に再び命を与えたのだ!さあ、始めようか…次は貴様が死ぬ番だ、デймロス!」

デймロス「ぬかせッ!!!生き返ったのならもう一度倒すまでだ!」

ディムロスは剣を抜いて構えた

ディムロス「貴様との積もりに積もった因縁…今度こそ、ケリをつけてやる！」

ディムロスはバルバトスに迫る、しかしバルバトスは剣というより斧のような剣で防ぐ…だがディムロスは違和感をおぼえた

ディムロス「くっ！バカな！私の剣をこつも軽々と…！？」

以前戦ったバルバトスにおされているのだ…

バルバトス「どうした、この程度か？ならばこちらから行くぞ！」

強力な力によりディムロスは壁におされてしまった

ディムロス「ぐわっ！？」

ディムロスは感じた…以前と比べて力が強すぎると

バルバトスがディムロスに近づく

バルバトス「…失望したぞディムロス、俺は時を越えて多くの英雄どもと戦ってきた…とはいえこの力の差はどうだ？」

レオ「（多くの英雄…まさかフィリアやウッドロウさん！？）」

レオはかつての仲間の二人がバルバトスにやられたことを知った…いや…バルバトスの口ぶりからそう悟ったのだ

ドルク「(あいつから感じるな…圧倒的な力という邪悪な力が…一体なんだこいつは…それになぜポケモンとかになっっていないんだ?)」

ドルクはバルバトスから感じる威圧感を感じていた。さらにポケモンになっっていないこともだ…

ドルク「(ばるばとす…ゲイティア…こいつがレオ…スタンを死なせた野郎ってことか!)」

ドルクは怒りがこみ上げてくる

バルバトス「つまらん…なんともつまらん結果だ、貴様も俺の渴きを癒せはしないというのか」

バルバトスは剣を構える

ドルク「(チツ!あいつには力しか脳がねえバカ野郎だな!)」

ドルクは怒りのボルテージがあがる

バルバトス「ならば、せめて最後は楽しませてくれ…そう、断末魔の叫びをな…少しずつ、切り刻んでやろう、まずは…右足から!」

ドルク「(ディムロスが危ない!あいつを止めねえと!)」

ドルクが動こうとしたその時

アトワイト「やめなさい!バルバトス!」

アトホワイトが叫ぶ

アトホワイト「あなたが殺されたのは、仲間を裏切り、天上軍に寝返ろうとしたためでしょう！だというのに…おめおめと生き返りこんな形で復讐を遂げようとするなんて…逆恨み以外の何者でもないわ！もしあなたに軍人としての誇りが少しでも残っているのなら、すぐ剣を収めて退きなさい！」

するとバルバトスはディムロスからアトホワイトに近づく

バルバトス「…いつもそうだ、アトホワイト、お前はなぜ命をはってまでこの男をかばう？」

さらにアトホワイトに近づくバルバトス

バルバトス「いつそ俺の女になれ、そうすれば何もかも手に入る、力も、金も、永遠の名声さえも！」

ディムロス「や、やめるバルバトス！彼女には…アトホワイトには手を出すな…！」

ディムロスは弱弱しく訴える

バルバトス「まだ、そんなふざけた口を聞く余裕があったか、この死にぞこないがッ…！」

バルバトスは剣を振る…すると何かよからぬことをたくらむ

バルバトス「…待てよ、フツ、あつたぞ、貴様を最大限に苦しめる法が！貴様の弱点は、これだ！」

アトホワイト「……!!」

なんとアトホワイトを人質に剣を向けたのだ

デймロス「やめるバルバトス！お前の相手は私のはずだ！アトワ  
イトを放せ！」

だが奴は放すことはない

バルバトス「クツクツクツ、残されたわずかの間、死をも上回る苦  
しみを味わうがいい」

バルバトスはアトホワイトを連れて空間へと消え去った

カイル「き、消えた……!!」

デймロス「待て！バルバトス……!!」

だがすでに遅かった……すでに空間は何もなくなっていた

デймロス「……くっ！」

ドルク達が駆け寄る

カイル「デймロスさん！大丈夫ですか!？」

デймロスはドルク達に振り向く

デймロス「カイル君……ああ、問題ない」

ドルク「デймロスはここで待ってる！俺達はアトワイトを探しに行く！」

シルム「まだそんなに遠くには行ってはいないはず、まだこの近くに……」

しかしデймロスは首を横にふる

デймロス「……いや、このまま脱出だ、君達も早くポッドに乗りたまえ」

それにロニが反論する

ロニ「何言ってるんだ！？あんた！仲間が人質にされたんだぞ！それを見捨てて帰るって言うのか！？」

しかしデймロスは冷静に

デймロス「開発メンバーの救出は成功した……これ以上の犠牲を増やさないためにも一刻も早く退却すべきだ、彼女とて軍人だ、死を伴う危険も常に覚悟していたはず、あえてそれに甘えさせてもらう」

レオ「そんな……」

カイル「本気ですかデймロスさん！？俺は納得できません！！」

ドルク「俺もだ、仲間一人を助けないのはほっとけないぜ！それにあんたは言ったはずだ！みんなで無事に帰るとな！」

しかし断固拒否でデймロスはイラ立ちながら首を横に振る

デймロス「これは命令だ！…ラティスロウに帰還する、急げ！」

シルム「でも！」

そこにハロルドが話から割って入る

ハロルド「はいはい帰るって行ったら帰るの！とっとと乗る！」

ドルク「おい！待てよハロルド！！」

ハロルドはカイルとドルクを押し出し…いやつるのむちで押し出して脱出用ポッドに乗り出す、他の者達も脱出ポッドに乗る

残されたハロルドとデймロス

ハロルド「これでいいのよね？」

デймロス「…すまん、ハロルド」

デймロスはハロルドに謝る

ハロルド「正直、私も納得できないけどね」

そう言い、ハロルドはデймロスと一緒に脱出用ポッドに乗った

依頼 9 4 救出と誘拐（後書き）

レオ「デイルロス……」

ドルク「納得できねえ……」

そっだよね……

レオ「あいつ……きつと……」

シルム「アトワイトさんの事……」

次回はそんなドルク達は決意する。

依頼95 仲間だから(前書き)

ドルク「……………」

カイル「……………」

二人して機嫌悪くなってる(汗)

シルム「そつとしておいた方がいいね」

ロニ「ってかどうすんだよタイトルコール」

誰か言うしかないから…代わりにジューダスよろしく依頼95

ジューダス「なぜ僕なんだ(汗) まあいい、僕は…過去を断ち切る  
……………」

## 依頼 95 仲間だから

ラティスロウへと帰還したドルク達、すぐさま作戦会議室で報告をすることにした

ディムロス「……………以上で今回の作戦の結果報告を終わらせていただきます」

ディムロスは報告を読み終える

リトラ「開発チームを無事に救出できたことで作戦は成功したと言っ  
ていいだろう…諸君、ご苦労だった…なお、捕らわれたアトワ  
イトについてだが彼女の捜索を行うかどうかは上層部で会議にかけ  
て決めたいと思う」

リアラ「そんな…！」

カイル「どうして！今すぐアトワイトさんを探しに行かないんですか！？」

カイル達は納得できない様子だ

ディムロス「だめだ」

カイル「どうしてですか！？」

ディムロスが釘を刺すように言う

ディムロス「ベルクラント開発チームの協力によってハロルドが研

究中の武器がまもなく完成するだろう、それを待つて発令される天上軍との最終決戦をひかえた今、戦略的に無意味な行動をとるべきではない」

ドルク「無意味なんかじゃねえ！！アトワイトいないとこの戦争は！！」

カイル「そつだよアトワイトさんがいないと！」

ジューダス「ドルク！カイル！」

ジューダスが一喝した

ディムロス「彼女一人を助けるために他の人間を危険にさらすことはできない、組織とは、軍隊とはそういうものだ」

カイル「でも共に戦う仲間じゃないんですか！アトワイトさんだつて信じてるはずです！きつと仲間が助けに来てくれるつて！」

だがそれでも

ディムロス「仲間だからこそ理解しているはずだ、私の判断が間違いでではなかったことを」

レオ「（ディムロス：本当はお前が辛いんだろ…アトワイトだつて仲間なんだ…だからつて見捨てるなよ…）」

レオは辛い表情をする。一番のパートナーであるレオ…スタン＝エルロンを

カイル「本当にそう思うんですか！？アトワイトさんは…殺されるかもしれないんですよ！」

デймロス「…軍の勝利には代えられない」

レオ「（デймロス！なんでそうなるんだよ！そうでなかったら…そうでなかったら…）」

レオの目から少し涙がこぼれる

カイル「俺…俺はずっとあなたを英雄だと思っていました。誰よりも強くて、誰よりも優しく…仲間のためなら命をかけられる本当の英雄だと…でも、あなたはそうじゃなかった！本物の英雄なら決してアトワイトさんを見捨てたりしない！あなたは英雄なんかじゃない！！ただの腰抜けだッ！！」

カイルの怒り…英雄は仲間を見捨てたりしない、だがカイルの思う英雄ではない…仲間を思っているから英雄なのだから

ドルク「俺も同じだ…仲間を見捨てたら、それこそ大事な物を失いかねえ…あんたが一番辛いんだろ？カイルがそう言ったのだから…辛さだけははずせないぜ…」

デймロス「……………」

デймロスは黙ってしまった

レオ「（カイル…ドルク…）」

レオも同じだった…本当のデймロスに戻ってほしい…仲間を大切

にしているから信用している。辛いのはデймロスだけではないのだから

するとクレメンテがドルク達の元へ

クレメンテ「もうよい、もうよい…それくらいで気が済んだじゃろう、たしかに非情な決断かもしれないんが人の上に立つ者は時にこうした難問に直面することがある。その辛さをお前さん達もわかってやっほしい」

ドルク・カイル「……………」

ドルクとカイルは黙ってしまふ

リトラ「では会議はこれにて終了する。あとは各自、次の命令があるまで待機してほしい、デймロスの言うとおり、最終決戦の日は近い、十分に休んで英気を養ってくれ」

会議が終わり、デймロスは自分の部屋へと戻る

レオ「ちょっといいかドルク？」

ドルク「あ、ああ」

レオはドルクを呼ぶ

レオ「悪い、ちょっと時間くれないか？」

カイル「え？いいですけど？」

レオ「その間みんなは外で頭冷やしてくれ」

ドルクはレオの後を追ってカーレルの部屋へ

……

ドルク「どうしたんだレオ？」

レオ「……」

レオは黙ったまま

ドルク「やっぱディムロスの事か……」

レオは頷いた

レオ「俺：本当はあいつの事もっとわかっていなかったかもしれない……あいつは辛い思いをしてアトワイトを助けに行きたいと思っているんだろう、アトワイトは……ルーティのソーディアンだ、いなかったら……ルーティも寂しくなると思う……」

ドルク「レオ……」

レオの気持ち……わからないこともある……でも互いに気持ちは辛いのだ

レオ「俺があいつと出会ったのは……飛行竜に密行していてピンチの時……その時にあいつと出会った、俺はあいつと一緒に脱出用ポッドで脱出した……でも湖に落ちて俺はここで死ぬのか……そんな時あいつが声をかけてくれた……あいつがいなかったら……俺はここにいなかった」

レオは拳を握る

レオ「ドルク…お前は仲間思いだからディムロスと同じ立場になっ  
たらどうする？」

レオはドルクに向けて質問する

ドルク「そうだな…俺はシルムがいたからここまでやれた…辛いのは嫌だな…でも俺は助ける…俺の命に代えてもな」

ドルクは胸を叩く

レオ「ドルク…」

ドルク「お前のパートナーなんだろ？ならあいつのためにアトワイトを助けるべきだ…クレメンテのじじいの言うとおりかもしれないねえ…でも俺達は仲間だ、仲間の辛さを俺達がかち合うべきだ」

ドルクは必死に言う

同じ立場でも…仲間を見捨てたくない、仲間を失いたくない…仲間がいるから一人ではないのだから

レオ「そうだよな…ならあいつの辛さを解放してやらないとな！」

レオはそう決意する

ドルク「気が済んだか？」

レオ「お互い様だ、行こうぜ…みんなのところへ」

ドルクとレオはみんなの元へ

……

一方カイル達は集まって話をしていた

カイル「やっぱり、そんなのってないよ…！仲間を見捨てるなんて絶対にだめだよ！」

シルム「そうだね…オイラも納得できないよ…気持ち的にもそんなの嫌だよ！」

ハロルド「だから助けないって選んだんでしょ」

ハロルドは呆れたような口癖で言う

ロニ「おいおい、それ違ってんぞ、仲間を見捨てちゃいけないのになんで助けに行かないんだよ？」

ここでハロルドが話を変えた

ハロルド「ねえ、人の命の重さってどれぐらいだと思っ？」

ロニ「は？」

シルム「人の命の重さ？」

人の命の重さ…それは何を意味するのか

クラウド「考えたことなかったな…俺は容赦ないから人の命ってわかってないからな」

クラウドはそう言う

ハロルド「デймロスは地上軍の全兵士について責任をもってる…つまり、あいつはそれだけの重さの命を預かってんのよ」

ジューダス「…つまりデймロスはアトワイト一人の命と引き換えに地上軍の全兵士のことを優先したと？」

「そういうこと」とハロルドは言う

ハロルド「そして一度決めたからにはそれを貫く義務がある。それがあいつの持つてる『中将』って肩書きの意味よ」

カイル「……………」

カイルは黙ってしまふ

シルム「デймロスさんにとっては覚悟なんだね…」

ハロルド「そうね」

すると

ドルク「話は済んだか？」

レオ「ごめん遅くなって」

ドルクとレオが戻ってきた

アクア「話はどうだったの？」

アクアがレオに聞く

レオ「あ、ああたいたしたことじゃないよ」

レオは苦笑して言う

ハロルド「ちょうどよかったわ、みんなちよつといいかな？私これからソーディアン完成に向けて総仕上げにかかんなきやいけないの、でね、この前行った物資保管所の奥に開かない扉があったつしよ？あの奥でこれからやんなきやいけないことがあるのよ、だからもつかい、物資保管所へ連れてってくんない？」

ドルク「いいがまだ毒ガスとかうようよしてんだろ？大丈夫なのか？」

ドルクの疑問にハロルドは

ハロルド「大丈夫よ、それにガスマスクもついでに作っておいたから、はい」

ハロルドはマリアにガスマスクを渡した

ハロルド「健康そうなあんた達には作ってないけどあの扉からはそんなに離れていないわ」

たしかに、開かない扉は入口からそんなに離れてはいないのでマリ  
ア以外のみんなは耐えられるので大丈夫だろう

k「でも開かない扉の部屋とかに毒ガスとか漂っていないよね？」

kの不安にハロルドは応える

ハロルド「大丈夫、あの部屋に毒ガスは漏れていないわよ」

ハロルドはそう言う

ミゲール「とりあえず行ってみるか」

ドルク達は物資保管所へ向かった

……

物資保管所入口前

ハロルド「ここでいいわ、送ってくれてありがとね、いつもなら兄  
貴に頼むんだけどあっちはあっちで大変そうだったしね」

リアラ「ソーディアンの仕上げ、がんばってねハロルド」

リアラがハロルドを応援する

ハロルド「完成したら、あんたたちにも知らせるわ、それじゃ」

ハロルドは物資保管所の中へ入って行こうとしたときハロルドは入  
口前に止まる

ハロルド「あ、そういえばさ、恋人同士なんだよね、あの二人」

カイル「あの二人って？」

あの二人とは一体？ハロルドはドルク達に向く

ハロルド「もちろん、デймロスとアトワイト」

全員『！？』

全員が驚く

レオ「(えっ！？デймロスとアトワイトが！？)」

レオもこの事に一番驚いている

カイル「だったら、どうしてデймロスさんはあんな…！」

シルム「もしかして…デймロスさんに責任を感じているんじゃないかな？重い責任を前にして自分の思いを貫くことができないからだと思う」

カイル「シルムさん…」

リアラ「たしかにシルムさんの言うとおりだと思う…それはものすごい重い責任だから…」

リアラは複雑そうに言う

カイル「リアラ…」

ジューダス「しかし、今更なぜその事を僕達に告げた？」

ジューダスは理由を聞くためハロルドに言う

ハロルド「触媒」

ロニ「は？」

わからない単語をハロルドは言う

ハロルド「内的要因に見込みがないなら外的要因によって変化を促す…たとえそれが毒であってもね、あ、でもあんた達は薬だと思ってるから安心して」

シルム「とりあえずなんとなくだけでもわかったような気がする」

ドルク「わからないようでもわかるようだけど俺には」

シルムはわかった様子だがドルクはわかっているのかわからないのかわからなくなった

ミゲール「わかんねえ〜」

クラウド「あ、わかってきたかも」

ミゲールは頭を抱え込み、クラウドはなんとなくわかったような顔をしていた

ハロルド「あゝ実験結果が観察できないのが残念ねえ」

そう言いながらハロルドは物資保管所へ入って行った

ドルク「このまま放っておけられねえな」

カイル「もう一度デймロスさんを説得してみるよ…それでもダメならその時は…」

クレス「たしかにそうだね…デймロスさんが一番辛いんだ…その時は僕達が」

ドルク達は何か決心したようにデймロスの元へと向かった

……

デймロスの部屋

カイル「デймロスさん、お話があります」

デймロス「…疲れているんだ、後にしてくれ」

だがカイルは一步も引かない

カイル「デймロスさん！アトワイトさんを探しに行きましょう！」

デймロス「同じ事を何度も言わせるな、アトワイトの捜索に関しては上層部の決定が…」

だがカイルはそれでも

カイル「そんなの関係ない！アトワイトさんはデймロスさんの恋人なんでしょう!？」

デймロス「…ハロルドめ、余計な事を…」

デймロスは苦い表情をする。そしてドルク達に振り向いて一歩踏み出す

デймロス「…たしかにアトワイトは私の恋人だ、だがそれと今回の件とは…」

ジュティア「無関係ってことはないわよね？少なくともあたしはこだわっているように見えるわ」

ナナリー「あたしもよ、捕まったのがアトワイトさんだから動けないんだとしたら、それこそ公私混同こうしこんどうって言うんじゃない？」

デймロス「……………」

反論できない…デймロスはジュティアとナナリーの言葉で黙ってしまう、するとそこから一人の地上軍兵士が入ってくる

兵士「デймロス閣下！」

デймロス「何事だ、騒々しい」

兵士「こ、これを」

兵士はデймロスから綺麗なブレスレットを渡された

兵士「自分にも見覚えがあります。これ、アトワイト大佐のプレスレットですよね!？」

デймロス「…これは、どうして!？」

兵士の話によると巡回の兵士が見つけたようで、さらに手紙つきで…内容は『スパイラルケイブにて、待つ』とだけ書いていなかった

デймロス「…わかった、下がっていい」

兵士「閣下、あの…」

兵士が何か言いたげだが

デймロス「下がっていい」

そう言われ、兵士は部屋を出た

カイル「デймロスさん、これは絶対バルバトスからの挑戦状です!」

デймロス「…そして、奴が組んだ罠でもある。こんなものに易々と乗るわけにはいかない」

ドルク「たとえ罠でもアトワイトを助けるべきだ!」

カイル「そうだ!行かなきゃアトワイトさんは助けられないんですよ!？」

ドルクとカイルは強く反発して言う、だがデймロスは黙ってしま  
う、するとドルクとカイルは部屋を出ようとす。さらにレオまでも

デймロス「待て、何処へ行く!？」

カイル「アトワイトさんを助けに行きます!」

レオ「俺も…アトワイトを助けに行く!」

ドルク「俺もだ!」

3人は強調して言う

デймロス「勝手な行動は憤りたまえ!形はどうあれ、君達もこの  
軍の兵士ならば…」

カイル「なら!俺達は辞めます!」

ドルク「ああ、あんたがどうあれ俺達は軍を辞めてまで行くぜ!」

デймロス「なっ…!」

デймロスは驚いた反応をする

ドルク「これから起こることは、デймロス、お前には関係ねえ…  
俺達が勝手にやることだ」

カイル「そう、デймロスさんには関係ない…これは俺達が勝手に  
やることです」

レオ「仲間のために俺達に行く…それが俺達の信念だから」

3人は部屋を出た

ロニ「お、おい、カイル！」

シエルマル「え！？親方〜！」

アクア「ちよつと、レオ！」

リアラとシルム以外、ドルク達3人を追いかける

デймロス「…一つだけ教えてほしい」

リアラとシルムはデймロスの方に振り向く

デймロス「君達にとって私は元よりアトワイトも赤の他人のはずだ…なのになぜそこまで？」

その質問に二人は応えた

リアラ「カイルはデймロスさんが大切な人を失おうとしているのを黙って見ていられないんだと思います」

シルム「オイラも同じですよ…ドルクもオイラや仲間を大切だから行くんです。アトワイトさんも仲間だから…そしてデймロスさんにとって大切な人だから…」

デймロス「大切な人…」

ドルクはシルムや仲間を大事にする。カイルは他人が失うのが嫌だから

リアラ「それがカイルなんです。まっすぐすぎるぐらい、まっすぐな人…」

シルム「一緒の時、カイル君と同じそのまっすぐさが辛い時があるけど…だからこそ信じられるんです。信じられる大切な相棒だから」

リアラとシルムも他のみんなを後を追って部屋を出た、一人取り残されたデймロス

デймロス「あの時の私の判断は決して間違っただけじゃなかった、間違っただけじゃ…いなかったんだ」

デймロスは迷ってしまう…自分の判断はどうなのかを…

…

ドルク「すまないな…スパイラルケイブへ行くって勝手に決めちまっただがそれでいいか？」

シルム「みんな同じ気持ちだよ」

クレス「うん、みんなだってアトワイトさんを助けたい気持ちは変わらないよ…カイルも」

カイル「うん…行こうみんな」

レオ「ああ…」

アキラ「そうだね…」

ヴォル「色々あるが助けださないと気がすまないしな」

みんな気持ちは同じ…仲間だから助けたい気持ちは一緒だから

ドルク達はスパイラルレイブへと向かった

依頼 95 仲間だから（後書き）

カイル「アトワイトさんを救出しないと！」

慌てないで、次回は救出＋です

ドルク「＋？一体なんだ？」

依頼 9 6 救出と罾ゝ助っ人登場ゝ（前書き）

ドルク「よし！あの野郎ぶっ飛ばしてやる！！」

気合はいるねゝ今回はコラボであの人が登場だよ

シルム「気になるね」

そんな依頼 9 6

リアラ「我が呼びかけに応えよ！」

依頼 96 救出と罠く助っ人登場く

地上軍拠点の遙か北あるスパイラルケイブ

そこは水が湧き出る洞窟だった

ドルク「とにかく慎重に行こうぜ」

レオ「そうだな、ここの洞窟にどんな罠をあいつは仕掛けたのかわからないからな」

ドルク達は慎重に進む

ドルク「ん？」

シルム「どうしたのドルク？」

ドルクは辺りを見渡す

ドルク「気のせいかな誰かに後をつかれてるような気がするな？」

カイル「気のせいじゃないかな？」

カイルは気のせいだと言う

ドルク「そうかもな（やっぱ誰かついて行っているよつだな…俺達以外の誰かに）」

ドルク達は先へと進んだ…その岩陰から一匹のポケモンが顔を出す、目つきはぐるぐるとした目でまわりは紫と黄緑のような模様がいくつも顔についていて、さらに石のすきまから出ている。このポケモンはふういんポケモンのミカルゲだ、このポケモンがドルクの後をつけているようだ…目的はなんなのか…敵か…味方が…

……

スパイラルケイブの奥地

カイル「いた！アトワイトさんだ！」

アトワイトは三角の赤い結界で動けない、カイルは行こうとするが

ジューダス「待てカイル！上だ！」

上からなにやら機械の部品が落ちてきたが…それが合体して魔物となった

ドルク「ったく、余計な罫を作りやがって！ギガンドウッドハンマー！！！」

ドルクは巨大なウッドハンマーの一撃で魔物を倒す

カイル「い、一発で!？」

ロニ「おいおい!?!お前ホントに元人間なのかよ!?!」

ロニはドルクの強さに驚く

シルム「ま、まあ結果オーライでいいんじゃないかな？」

たしかにその通りだろう

カイル「アトホワイトさん！待っていてください！今行きますから！」

ドルク達はアトホワイトの元へ

アトホワイト「……！ダメツ！来ないで……！」

彼女は叫んだ

カイル「……えっ!?!」

ドルク「なんだ!?!」

辺りが黒い何かに包まれる、それがドルク達を包んでいた

リアラ「これは、魔法障壁……！」

するとアトホワイトの前からバルバトスが空間から現れた

バルバトス「ディムロスめ臆したか……まあいい、貴様達が網にかかったのならそれはそれで楽しめる」

カイル「バルバトス、貴様ツ……！」

ドルク「テメエ！卑怯な事してふざけんじゃねえ……！」

カイルとドルクが怒りをあらわにする

バルバトス「ああ、言い忘れていたが、その魔法障壁に触れると夕  
ダではすまんぞ」

ジューダス「くそっ！みんな障壁から離れる！」

レオ「やばい！このままじゃ俺達！」

魔法障壁に触れればドルク達もタダでは済まされない、もちろん攻  
撃も中ではできない

バルバトス「みな、まとめて殺してやる、それなら寂しくないだろ  
う？ククク…」

魔法障壁が縮まりドルク達に迫る

クラウド「くそっ！このままじゃ！」

バルバトス「どうした？もう逃げ場はないぞ！？ククク…アーツハ  
ッハッハッ！」

バルバトスは高笑いする。彼は勝利を確信したその時

ミカルゲ「この人達を放せ！！ダークエアウィンド！！」

バルバトスに向かって黒い風がバルバトスを襲う

バルバトス「ぐおおおああッ！！」

攻撃したのは先ほどドルク達の後をついてきたミカルゲだった、さ

らに

デймロス「はあああああッ！」

デймロスがやってきた、そこには鎖など装飾が施された剣を持っていた、その剣を掲げるとそこから炎の弾がバルバトスに向かって襲い、バルバトスを焼きつくす

バルバトス「ぐおおああッ！」

バルバトスが叫ぶ、それと同時にドルク達を覆っていた魔法障壁が消えた

ジューダス「今は…じゅじゅ晶術！？」

カイル「…ってことは」

ドルク達はデймロスの方に向く

レオ「デймロス！」

デймロス「貴様の相手は私ではなかったのかバルバトス！！」

アトワイト「デймロス…中将！？」

バルバトス「デймロス…！」

そこからハロルドも駆けつけてきた

ハロルド「はあいアトワイト、元気？」

アトワイト「ハロルド！」

彼女：ハロルドがアトワイトに声をかける

ハロルド「ごめんねえ、ちよつと遅れちゃったわ、こいつを引つ張り出すのに時間かかっちゃって」

ドルク「それはそうだが…ってかそのミカルゲ！お前俺達の後を ついてきたんだろ？」

ドルクはミカルゲを睨む

ミカルゲ「ヒイヒイ！ごめんなさい！声をかけたかったけどうまくかけられなくて」

ミカルゲは声をかけたかったらしい

ディムロス「まんまとだまされたよ、新兵器のテストだと言われて来てみれば…」

ハロルド「はいはいちよつとミカルゲの方は黙る、でもこいつが相手なら思っ存分やれるでしょ？」

こいつとはバルバトスのことだろう

バルバトス「その剣は…！」

ディムロス「新兵器の味、その身で確かめるがいい…！」

ディムロスは構える

バルバトス「ぬかせ！ソーディアンを手にいれたぐらいで俺に勝てると思ってるのか！！」

ディムロス「貴様こそ、状況をよく判断するんだな」

バルバトス「何…！？」

そう、ドルク達もいるためバルバトスは囲まれた状態だ、もちろん逃げ場はない

ドルク「テメエ…よくも俺達を封じ込めやがったな、ああ！！（黒激怒）」

パキポキとドルクの指…というか爪の音が響く

カイル「バルバトス、覚悟！！」

全員武器などを構える

シルム「よくもやってくれたな！覚悟はできてるだろうな！！」

ジュティア「倍返ししてやるわ！」

ナナリー「さっきはよくもやってくれたね！倍にして返してやるよ！！」

クラウド「俺を怒らせたらテメエ…死ぬぞ」

k「フルボッコにしてやる」

クレス「僕達をこんな目に合わせたのだからその分やらせてもらうよ」

ミゲール「覚悟できてるかテメエ!!」

アトリ「オメエマジでぶち殺す(黒激怒)」

デイン「倍返しだヨ!!」

チェスター「もちろんその分テメエの命で払わせてもらうぜ!!」

アーチエ「あたしの術でギッタンギッタンにしてやるわ!!」

マリア「覚悟できてんだろうなおい(黒激怒)」

すず「お命頂戴いたしますよ」

ミント「あなたを許しません」

シエルマル「覚悟しろ!!」

ジユク「売られた喧嘩は買わせてもらおうか?」

レビィ「許さないわ!!」

レオ「お前だけは許さない!!」

アクア「こっちも倍にして返してあげるよ!!」

ヴォル「貴様、覚悟はできてるだろうな？」

ミカルゲ「僕もあいつをぶっ殺す（黒激怒）」

ロニ「さっきはあんな姑息な罠を使ったんだ、今更一对二十八で卑怯とは言わねえよな？」

全員怒りなどバルバトスに視線を向ける

バルバトス「…ちっ！ 他にも邪魔立てが入るか…！」

するとバルバトスは消えていった、それと同時にアトワイトを覆っていた結界はなくなつた

カイル「デймロスさん！」

デймロスはドルク達に向く

デймロス「すまないカイル君にドルク君、君達を危険な目にあわせてしまった」

シルム「オイラ達は大丈夫です。早くアトワイトさんのところに行つてあげてください」

デймロス「…ああ」

デймロスはアトワイトの元へ駆けつける

デймロス「…今更だと君は言うかもしれない、一度は見捨てたじ

やないかとなじるかもしれない、だが…だがそれでも私は、君を助  
けたいと思った、君を失いたくなかった、だから…」

バシーン！！

アトワイトはディムロスの頬に尻尾でビンタした

リアラ「ア、アトワイトさんっ…！」

アトワイト「あなたは関係ないドルクさんとカイルさんや多くの部  
下を従える自分の身を危険にさらした、しかも私情のため… たった  
一人の女のためです。決して許されることはありません、あな  
たは軍人失格です！ だけど…」

するとアトワイトはディムロスに抱きついた

アトワイト「だけど私は、そんなあなたを愛しています！ あなたが  
来てくれて、私、本当に…！」

ディムロス「アトワイト…！」

二人は愛し合った… たとえ軍人失格でも… 二人の愛だけは… そつと  
雪が解けるような感じだった

そんな様子を見ていたドルク達

シルム「よかった…」

ドルク「そつだな」

カイル「ああ！二人ともホントに嬉しそうだね」

リアラ「当たり前よ、好きな人が自分の事を助けに来てくれたんですもの、それがどれぐらい嬉しいことか私にはわかるわ」

「…そっか」とカイルはリアラに振り向いて言う

レオ「（デймロスよかったな…お前と出会えてなかったら…俺はルーティと結婚してなく…カイルも生まれなかった…俺は一度死んで転生したけど…お前と過ごした運命は変わらない…変わらないんだ）」

レオはそんな二人を見つめる

リアラ「…ねえカイル、もしも…もしもよ、今回のデймロスさんのようにすごく大事な事と、私のどちらかを選ばなきゃいけないとしたら…」

カイル「もちろん、俺は何があってもリアラを選ぶよ！」

元氣よくカイルは言った

リアラ「……………」

リアラは黙ってしまっ

ドルク「（リアラ…なんか悲しい表情だな…何かあるっていうのか？）」

ドルクはリアラが気になっていた

カイル「…どうしたの？まさか選ばないって思ってるの！？ひつどいなあ！俺はぜったいにリアラを選ぶよ！」

リアラ「…うん、そう、だね…」

するとハロルドが一步進んで

ハロルド「おゝい、デймロスゝいちゃつくのはいいんだけど先にソーディアン返して」

二人はハツとして話す

デймロス「いちゃついてなど…！」

デймロスは恥ずかしそうに言う

アトワイト「もう、ハロルドったら！」

アトワイトは少しムツとした感じになる

ハロルド「はいはい、わかったわかった」

デймロスはハロルドの元に向かい、ソーディアンを返した

ハロルド「二人とも、まずはラディスロウに戻って、まだやることがあるっしょ？」

デймロス「そうだな…まだやるべきことは残っているからな」

ハロルド「あ、私達は別行動をとるから帰り道はお二人でどーぞー」

ハロウドはニヤニヤして二人に言った

ディムロス「ハロルド！…あーオホン！行くぞアトワイト」

アトワイト「はい…」

ディムロスは咳払いしてアトワイトと一緒にラティスロウへと向かった

マリア「ハロルドさん、意外と気が利きますね」

ハロルド「ま、たまにはね〜これからあの二人大変だろうし」

ジューダス「上層部の決定を待たずしてアトワイトを救出に向かったんだ、処罰は免れないだろう」

たしかに勝手なことをしてしまったのだから処罰されるだろう

ドルク「たしかにそうだな…」

ハロルド「さて、私達も帰るとしますか」

みんな頷くが

ドルク「ちよつと待て」

ドルクが待ったをかけた

ハロルド「どうしたのよ？」

帰る前にこいつなんだが？

それはドルク達を助けたあのミカルゲのことだ

ドルク「こいつをどうするかなんだよね〜おいお前はどっしたいんだ？」

ドルクはミカルゲに聞く

ミカルゲ「僕実はとある方に頼んでブレイブの方に会いに来たんです」

ジューダス「つまりお前は別世界の者というわけか」

ジューダスの言葉にミカルゲは頷く

ミカルゲ「僕は元人間なので」

シルム「えっ！？じゃあ君はドルクと同じ元人間なんだね？」

ミカルゲ「はい」

ミカルゲはこくりと頷く

ハロルド「これまた面白くなったわね〜」

ハロルドは嬉しそうだ

ドルク「俺がブレイブのリーダーのドルクだ、別世界のか…ついていくか？」

するとミカルゲの顔は明るくなる

ミカルゲ「はい！！連れてってください！マジお願いします！」

何処からか腕が現れてミカルゲはお願いする

ドルク「とりあえずこいつも連れていくか…？で？お前名前なんていうんだ？」

ドルクはミカルゲの名前を聞く

ミカルゲ「僕はデュランダルといいます」

ミカルゲはデュランダルとそう言った

ドルク「デュランダルか…そんじゃあよろしくな」

カイル「よろしくね」

みんなデュランダルに挨拶する

デュランダル「よろしくお願いします！」

デュランダルを仲間に加えてドルク達はラティスロウへと戻っていた



依頼 96 救出と罾く助っ人登場く（後書き）

はい！今回デュランダルさん本人が登場しました！

ドルク「ついにか」

活躍させてもらいましたよデュランダルさん

シルム「よかったくもし来なかったらオイラ達危なかったよ」

ロニ「にしてもドルクお前あの攻撃でかすぎだろ！？しかも一発でお前何者なんだよ！？」

ハロルド「やっぱり解剖したいわく」

ハロルドはやめれ（汗）

ドルク「元人間だがダイエットだ」 ドヤ顔で言う

ロニ「頭が痛くなってきたぜ（汗）」

依頼97 いざ！最終決戦へ！（前書き）

ドルク「ついにか」

天地戦争時代編もそろそろクライマックスが近づきました。はたして歴史を変えることができるのか！それでは依頼97

カイル「行くぞ！」

## 依頼 97 いざ！最終決戦へ！

ドルク達はラティスロウがある地上軍拠点へと戻ってきた、そこに兵士がやってきた…

話によるとハロルドに用があり、至急作戦会議室まで来るようにとの事、ドルク達は急いで作戦会議室へと向かった

…

### 作戦会議室

みんなすでに集まっていた。ハロルドが来たことなので会議が始まった

リトラー「デймロス中将、君から先ほど申告があった話、再度確認するが本当かね？」

リトラーは真剣な目でデймロスに視線を向ける

デймロス「はい、間違いありません、ハロルド博士との新兵器の実験中、私は勝手な判断でアトワイトを救出しました。私のとった行動は上層部の決定を無視したものです。到底許されるべきものではありません」

デймロスは淡々と正直に話した、ここで

カイル「待つてください、リトラーさん！悪いのはデймロスさんじゃありません！俺がそのかしたから…！」

ドルク「俺もそうだ、俺にも責任がある、だから…！」

デймロス「いいんだカイル君、ドルク君」

デймロスが二人をなだめる

カイル「デймロスさん！」

ドルク「そういつても悪いのは俺達だ」

しかしデймロスは首を横にふって

デймロス「結果がどうあれ犯した罪は罰せられねばならない、それに私は、これでも人の上に立つものだ、処罰されないことには下の者に示しがつかない」

カイル「でも！ねえハロルドからもなんか言つてよ！」

カイルはハロルドに助け舟を出す

リトラ「ハロルド君、デймロス君の証言に相違はないかね？」

ハロルド「相違ありません」

カイル「ハロルド！」

ハロルドも一応軍人、助けを求めるわけではない

リトラ「…わかった」

リトラーは考え、そしてディムロスの処分を言い渡した

リトラー「作戦行動中の独断専行および、上層部の指示無視は厳罰に値する、よって中将に…」

その処分とは…

リトラー「『ダイクロフト突入作戦』の前線指揮官の任を命ずる」

ディムロス「…は？ど、どういふことですか司令！」

ディムロスは慌てる、まさか意外な結果になるとは思ってもみなかったのだ

リトラー「前線指揮官といえば、もっとも死ぬ確率の高い役職だ、十分厳罰に当たると判断した」

つまり死ぬ確率が高い役職で全力で戦って散るといふことだ

ディムロス「からかわないください！私とその職務に当たることはずでに決定済みで…！」

クレメンテ「ほほう、わしのいない間にそんなことになったのか？奴等に捕らえられる前はわしが、前線指揮官の任に当たることになったのははずだが？」

クレメンテが自分が捕らわれる前に前線指揮官の任に当たっているはずだと言っ

ディムロス「し、しかし！クレメンテ殿は高齢なので私が代わりにとカーレルと話を…」

カーレル「確かに、話には出ましたがそれは口約束であって正式な軍の命令ではなかったはずですよ」

からかうような感じでカーレルは言う

ディムロス「カーレル、お前…」

リトラ「あきらめたまえディムロス君、すでに処分は決定済みだ」

ディムロス「司令…」

ディムロスは納得できない様子だ

リトラ「君なりの責任の取り方もわかる、だが、君を失いたくないという者達の気持ちも察してやれ」

みんな気持ちは同じなのだ…みんな仲間を失いたくない…軍人でも仲間は仲間…なのだから

ディムロス「はい、ダイクロフト突入作戦の前線指揮官の任、謹んでお受けします！」

ディムロスは喜んで受けることにした

リトラ「さて、前線指揮官も決まったことだし、そろそろ突入作戦を発令したいところなのだが…」

カーレル「ハロルド、ソーディアンはどうだ？」

カーレルはハロルドのソーディアンの完成度を聞く

ハロルド「実戦データはばっちり！後は調整だけよ、すぐにでも用意できるわ」

実戦というのはさっきのバルバトスの時にやったのだ…どうやら完成してすぐに用意できるようだ

リトラ「ならばソーディアンチームはハロルド君と共に研究所に向かってくれ、ソーディアンのレクチャーを受け、作戦開始までに使いこなせるようにしておくこと、以上だ、これにて解散！…それとカイル君とドルク君」

ドルク「なんだ？」

カイルとドルクが呼ばれる

リトラ「地上軍の総司令として、それとディムロスの友人として礼を言わせてくれ…ありがとう、君達のおかげでディムロスとアトワイト、二人を救うことができた」

ドルク「ああ、胸の中にしまっておくぜ…で？これから俺達はどうするんだ？」

ハロルド「せっかくこの時代に来たんだから見たいでしょ？」

見たいというとあれしかない

シルム「もしかして！」

ハロルド「ソーディアン誕生の瞬間よ、ま、ディムロスの件のごほうびってことでね、というわけで、物資保管所までの護衛よろしく！」

ドルク「ああ」

シルム「オイラも気になるよ」

シルムはワクワクしていた

クレス「僕もそれ気になるね」

クラウド「ソーディアン誕生の瞬間ねえ、俺もワクワクしてきた」

デュランダル「マジ！」

みんなワクワクしてるのもあった、何せソーディアンの誕生を間近で見られるのだから

デュランダル「そんじゃあ…どこだっけ？」

ドルク「お前空気読めよな」

ドルクはデュランダルに注意した

……

物資保管所

マリアとかはガスマスクをつけているためなんとかなった

デュランダル「不気味だね」

デュランダルはのんきに言う

クレス「君も人の事言えないよ（汗）」

クレスは静かにツツコミを入れる

そして大きなドアの入口に入る

レオ「（ソーディアン誕生の瞬間…ディムロス…）」

レオは特に見ておかないといけない場面だろう、ここでディムロス自体がソーディアンになったのはわからないがそのソーディアンが誕生する瞬間が見れるのだ

……

中に入るとソーディアンチームはスタンバイしていた

ハロルド「んじゃ、ちゃっちやと終わらせますか」

ハロルドは機械を操作した

ハロルド「これでよし…と！」

ハロルドはドルク達の方へ向いた

ハロルド「いいあんた達？しつかり目に焼きつけなさいよ、この歴史的瞬間を！」

ソーディアンチームが機械の前に立つ…すると光がまぶしいほど輝いて6人の目の前に剣が6本も出てきた、それぞれ違うデザインで剣の長さや厚みや装飾など違いが出ている。

カイル「す、すごいや…」

レオ「（これが…ソーディアン誕生の瞬間か…）」

ナナリー「どうなってんのさ、一体？まぶしくてなんにも見えやしない」

ドルク「すげえ！これがソーディアンだな！」

ソーディアンチームは早速剣を掴んでみた

ディムロス「驚いたな、試作品よりもはるかに使いやすくなっている」

イクティノス「これは…本当に剣なのか？持っている感覚さえない、まるで自分の手の一部のようにだ」

シャルティエ「握っただけで、すごさがわかります、この剣さえあれば誰にも負ける気がしません」

ソーディアンチームは驚いている。ソーディアンはまるで…自分の一部のようなそんな感覚だった

ハロルド「この程度で驚かれちゃ困るわ、ソーディアンにはもっとうごい力があるんだから」

ハロルドは指というか蔓で振る

カーレル「すごい力…？」

ハロルド「ちよつと貸してみて兄貴」

カーレルは自分のソーディアンをハロルドに貸した…ハロルドは神経を集中させ

ハロルド「ハアーーーーッ！！」

ハロルドは力を込めた、するとハロルドが握っているソーディアンから稲妻が流れる…稲妻は一部の機械に集中した…するとその機械は壊れてしまった

ハロルド「あちゃ〜やりすぎちゃったかな」

カーレル「い、今のは…！？」

これほどの破壊力をもつソーディアン…つまり

シルム「これって…！？」

シルムは気がつく

ハロルドが元の場所に戻り説明する

ハロルド「デイルロスは知ってると思うけどこの剣ツルギを持つ者は晶術クリスタルマジックという特殊な力が使えるのよ」

デュランダル「マジいいな」

デュランダルはうらやましそつに言つ

ハロルド「晶術は…」

デュランダル「ねえねえ！晶術って何？」

ドルク「お前は黙れ！」

ゴチン！

ドルクがげんこつでデュランダルを黙らせた

デュランダル「あひっ」

目を回して気絶

シルム「ごめんハロルド、続けて（汗）」

ハロルド「まったく私の説明の邪魔をしないでほしいわ」

ハロルドは納得できない表情をしていた

ハロルド「晶術は一人一人特性が違うから六人もいればお互いの弱点を補いあえるってわけ、どう、すごいですよ？」

ハロルドは目をキラキラさせて言う

カーレル「まったくお前は天才だよ、我が妹ながらときどきぞら恐ろしくなる……」

ハロルド「あら、今頃気づいたの？まったく兄貴ってアホね」

ハロルドは両蔓を使って表現する

デймロス「ところでカイル君、ドルク君、申し訳ないがこの吉報きっほうを司令に届けてもらえないだろうか？我々はハロルドに晶術の操り方を学ばねばならないんでね」

ドルク「ああ、任せろ」

カイル「わかりました、任せてくださいデймロスさん」

ドルク達は急いでラディスロウへと戻った

……

### 作戦会議室

カイル「リトラーさん、ソーディアンが完成しました！」

リトラーは兵士と一人話していた、そこにドルク達が来てソーディアン完成を喜んだ

リトラー「そうか、ソーディアンが……よし、工作班に伝達、ラディ

スロウ浮上の準備を急がせる」

兵士「では司令、ついに…！」

そう、文字通り最終決戦が近いということだ

リトラー「ソーディアンチームが戻り次第ダイクロフトへの総攻撃をかける、二交代制で兵達に休息をとらせる、少量ならば酒を出してもかまわん」

兵士「ハッ！みんなも喜びます！」

兵士は急いで他の兵士などに伝えに出て行く

リトラー「ごくろうだったな、ドルク君にカイル君、君達も休息をとってくれたまえ」

ドルク「わかった」

ドルク達は休息を取りに部屋へ向かった

明日はついに決戦…大事な戦いなので緊張がドルク達によぎる

……

カーレルの部屋

シルム「ついに最終決戦だね」

ミゲール「あゝなんか緊張してきた」

ミゲールは震える

アトリ「だらしねえ〜な！まあたしかにこええ〜しな」

そう、戦争はもはや遊びではない…生きるか死ぬかの戦いでもある

ナナリー「アトワイトさんもいるし」

ジュティア「ダイクロフトでバルバトスという奴の動きを封じれば」

カイル「歴史改変は防げる！」

みんな喜ぶが…ジューダスは浮かない表情をしていた

ジユク「どうしたジューダス？」

ジューダス「たとえそうだとしても…カーレルは死ぬか…」

レビィ「どうということ？」

レビィが質問する

ジューダス「天地戦争の結末を知らないのか？」

ドルク「俺達は別世界から来てるからそれはしらねえが…そのカーレルが死ぬってどうということなんだ？」

ドルク達は別世界のため天地戦争の結末を知らない

ロニ「ソーディアンチームが天上王ミクトランを倒してめでたしめでたしだろ？」

ジューダス「それは間違っではない、だが重要な事が抜けている。圧倒的な強さを誇るミクトランにはソーディアンチームといえど苦戦したんだ、一人の男が捨て身の攻撃をし、ミクトランと刺しちがえなければ勝利はおぼつかなかっただろう」

シルム「まさか…それがカーレルさんってこと？」

ジューダスは頷く

レオ「まさか…あの時ミクトランはベルセリオス…カーレルさんのソーディアンを持っていたのはこのことだったのか…」

レオは知ってしまった、レオはスタンのため記憶でミクトランと対峙していた。その時6つ目のソーディアンであるベルセリオスを持っていた。だがベルセリオスにはデймロス達みに意識…つまり彼等の魂が吹き込まれていたがなかった…なぜ吹き込まれてなかったのか…その理由がレオにはわかった

レオ「(デймロス達は意識はあった…でもベルセリオスだけは感じられなかった…だから)」

ベルセリオスには魂が吹き込まれていなかった…デймロス達5人と違って

カイル「どうしよう!? そうだ! ハロルドに相談してみようよ! そうすればカーレルさんは死なずに済む!」

しかし

ジューダス「だめだ、それは歴史を改変することになる、エルレイ  
ンと同じことをお前もするつもりか？」

カイル「あ……」

そう、結末を変えることは、歴史を改変することにもなる

ジューダス「…とにかくこの事はハロルドには黙っておくんだ」

シルム「そうだね…正直嫌な気分だよ…隠し事なんて」

クレス「人の命に関わることだからね…黙っているのは…」

場の空気がどんよりとなった

デュランダル「ねえみんなどうしたの？」

シエルマル「空気読んでくださいよデュランダルさん！」

シエルマルがデュランダルの口をふさぐ

デュランダル「もがもが」

ジューダス「人はいつかかならず死ぬ、それが遅いか早いかの違い  
だ…そう割り切るしかないんだ」

カイル「……………」

レオ「……………」

アクア「そんな……………」

死というのはいつ起こるのかわからない…運命というのは残酷で厳しいものだ、生き返ることも手段にあるが、蘇生というのはそう簡単なものでもない、いつか誰も死というのは訪れる

ヴォル「……………」

ドルク「寝ようぜ…明日は早い、ここで気持ちをどんよりしては明日の決戦とかで足を引っ張ってしまう…」

ドルクの言うとおり、明日は決戦、油断はできないのだ

ジューダス「ドルクの言うとおりだな…悪い……………」

ドルク「いや、でも今は俺達のやるべきことをやらないといけねえからな…みんな気持ちは同じだ、とりあえず解散して寝ようぜ…」

レオ「そうだな……………」

みんなは明日に備え寝た

……………

次の朝

作戦会議室

ドルク「待たせたな」

リトラ「ちょうど話を始めるところだ、君達も聞いてくれ、諸君：本日1300（ひとさんまるまる）をもって我が軍は敵本拠地ダイクロフトに対して総攻撃をかける、文字通りこの一戦で世界の命運が決まる、どうか死力を尽くして戦ってほしい」

ディムロス「ハッ！」

ディムロスは大きく返事をした

リトラ「この作戦においてカギとなるのはもちろん君達ソーディアンチームだ、隊長ディムロス、副隊長カーレルを中心に最終目標である敵将ミクトランのもとへなんとしてもたどり着いてくれ」

カーレル「任せてください、必ずこの手でミクトランを仕留めてみせます！」

カーレルはそう言うが彼は知らない…彼への死のカウントダウンが刻々と迫っていることを

ディムロス「君達は遊撃隊として敵の攪乱にあたってくれ、前回の作戦があつたので敵も警戒を強めているはずだ、困難を伴うが君達ならできるはずだ、信じているぞカイル君、ドルク君」

ドルク「任せろ！」

カイル「はい！任せてください！」

ディムロスはみんなに振り向いて

ディムロス「私から、一つだけ言っておくことがある」

ディムロスは力強く言う

ディムロス「死力を尽くすことと、死ぬことは別だ…必ず生きて帰ってきてくれ！」

全員『了解！』

レオ「(やっとお前らしくなったよディムロス…俺…)」

レオの目から涙が出る

アクア「どうしたの？」

レオ「い、いやこれは汗だ汗なんだ！」

レオはあたふたしてごまかす

リトラ「これより、作戦を開始する！ラティスロウ発進！！」

表面の氷が割れてラティスロウは発進した、そこから高エネルギーの反応がきた、ベルグランドからのレーザー攻撃がこようとしていく。それでもラティスロウは上昇する。エネルギーがたまり、ベルグランドからの攻撃が発射された、ラティスロウにレーザーが当たりみんなが叫び声をあげる

ラティスロウは黒い煙をあげながらベルグランドへ突入した

……

ドルク「大丈夫かみんな？」

みんなさっきの衝撃で倒れてしまったがみんな無事だった

ハロルド「まったく司令もムチャするわ、一歩間違ったら全員あの世行きだったわよ」

たしかに一歩間違えればみんな死ぬところだったのだ

カーレル「ハロルドを呆れさせた男か、ぞっとしませんな司令」

リトラ「私の墓にはそう刻んでもらおう、ともかくも突入には成功した、早速次の行動に移ってくれ」

ディムロス「ハッ！ソーディアンチーム出撃します！」

ソーディアンチームが先に出撃した

ドルク「おっしゃあ！行くぞー！！」

……

ダイクロフト内部

ソーディアンチームは構えた

ディムロス「来たな……！どうやら敵の備えも万全のようだ」

敵がわんさか出てくる

カーレル「では早速新兵器の実戦投入といきましょう！」

ディムロスが剣を掲げて詠唱した

ディムロス「ファイアフルフレア！」

炎の輪が竜巻のように舞い上がり、敵を一掃させた

イクティノス「サイクロン！」

イクティノスが敵の周囲に竜巻を発生させる術を詠唱し、敵を蹴散らす

シャルティエ「プレス！」

敵の上空から大きな岩が敵を押しつぶして敵を倒す

するとアトワイトとクレメンテの背後から敵が攻撃する、対象はクレメンテだ

アトワイト「クレメンテさん！」

クレメンテはダメージを受けてしまったが

アトワイト「ファーストエイド！」

アトワイトが回復術であるファーストエイドでクレメンテの傷を癒した

クレメンテ「老兵だからといってあなどるなッ！メテオスオーム！」  
敵上空からたくさんの隕石が敵を襲い、倒れていった、だが敵はまだ残っていた

カーレル「では私も、ブラックホール！」

敵周辺から亜空間が発生して敵を飲み込んでいった

カイル「さすがソーディアン、あんなにいたモンスターが一瞬で…！」

ドルク「すげえ〜これがソーディアンの力か…！」

驚いて口をあぐりさせるドルク、カイルも驚いている

デймロス「よし、道は開けた、先へ進むぞみんな！」

ソーディアンチームは急いでミクトランの元へ向かう転送装置へとのる、ここでデймロスだけドルク達の元へ

デймロス「ここでお別れだ、カイル君、ドルク君」

カイル「えっ!?!」

ドルク「なっ!?!」

カイルとドルクは驚く

デイルロス「後は我々の仕事だ、歴史はその時代の人間の手によって作られるべき…そうだろうか？」

カイル「デイルロスさん、まさか俺達の事…！」

ドルク「ということは俺達もか…！」

デイルロスは頷いた

デイルロス「君達のいる未来が創れるのなら我々もたいしたものじゃないか？それにドルク君達のいる世界も平和な世界に創れるのなら我々にとってもだ」

ドルク「デイルロス…」

デイルロスは知っていた。カイル達は未来から、ドルク達は別世界から来たのを

デイルロス「君達は君達の道を進め、歴史の流れを元に戻すのは君たちにしかできない」

カイル「はい！」

ドルク「おう！」

二人は力強く返事した

デイルロス「がんばりたまえ、カイル君！ドルク君！」

デイルロスは行くこうとして立ち止まる

デймロス「それと…レオ」

レオ「え？」

デймロス「お前がいてよかった…でもまた会えるかもしれない…  
そんな感じがするんだ」

デймロスはレオにそう言う

レオ「デймロス…」

デймロス「お前もがんばれ…レオ…お前は…」

デймロスは何かいいたそうな感じだったが中断して転送装置にの  
った

レオ「（デймロス…わかっていたのか…俺の事が…）」

レオの思いはデймロスに届いていた。きつてもきれない絆を

ロニ「さて、俺達も行こうぜ、最後の最後でバルバトスに邪魔され  
ちゃ今までの苦労が、パーだ」

ハロルド「そう言うこと！んじゃレッツゴー！」

すると

カイル「待つて！ハロルド！」

カイルが待ったをかけた

カイル「ハロルドはディムロスさんを追いかけて、今ならまだ間に合うから！」

ジューダス「カイル！」

ジューダスはカイルに注意する。未来が変わればエルレインと同じになるということを

カイル「わかってる！わかってるけど…やっぱりだめだよ！このまま黙ってるなんて俺…！」

ハロルド「……」

ハロルドは黙ってしまふ

カイル「ハロルド！」

カイルは叫ぶが

ハロルド「あんたアホね、あんたたちの目的は歴史の修正でしょ？それなのに歴史をひっくり返すようなことしちゃダメじゃない」

カイル「でもハロルドきつと悲しむよ！それでもいいの!？」

カイルは必死に叫ぶ

ハロルド「私に歴史を変えろっていうの？自分が嫌な結果を回避するためには？じょーだん！そんなことしたら例の神様と同じレベルじ

やない」

カイル「ハロルド……」

ハロルドはそれでも拒否する。たとえ嫌な結果でも彼女は

ハロルド「私は未来を知りたいと思わないし、たとえ知ったとしても行動を変えたりはしない、今やるべきことをやるだけ、そうやって人間つてのは手探りで歴史を作ってきたのよ、私だけインチキする気はさらさらないわ、わかった？」

カイル「……わかった」

カイルは暗くなりながらも承諾した

ハロルド「よろしい！それじゃ改めてレッツ……」

デュランダル「ゴー……！！」

ドカーン……！！

何処からか地響きが響く

リアラ「な、何！？」

シルム「この音は一体！？」

ハロルド「ベルクラントの発射音ね、予想通りの展開、まったく芸がないわねえ」

デュランダル「決めようと思ったのに」(泣)

デュランダルは涙目になる

シエルマル「まさか！？ベルクラントによる無差別攻撃なんですか！？」

ドルク「こりゃ急がねえとやべえぞ！みんな急ぐぞ！！目指すは制御室だ！！」

ドルク達は急いで制御室へと向かった

依頼 97 いざ！最終決戦へ！（後書き）

うん

ドルク「どうした？」

デュランダルさんがKYと言ったからやってみただちょっと弄られたような感じもあるかもしれないというかげんこつやったから、すみません

ドルク「もう少し空気読んでほしいけどな」

表現というのは難しいんだよ、色々と

ハロルド「まあ作者は表現しても何処かで引っかかって表現がおかしくなるのよね」

うん（泣）

シルム「とりあえず次回は何作者さん？」

あゝ次回は奴との対決と…あの展開にきます

依頼 98 対峙…残酷な結末（前書き）

今回は…かなりシリアスな部分が後半あります

ドルク「一体どうなるかだな…」

さて、これで天地戦争編も終わりになります。では依頼 98

ハロルド「行くわよ…」

依頼 98 対峙…残酷な結末

ドルク達は急いで制御室へと向かっていた

天上軍兵士1「くそっ！この前は妙なガキ共に張り倒されるし、今日は今日で地上軍の攻撃かよ！」

天上軍兵士2「ああ、やっぱりミクトランなんかについていったのが間違いなんだ…なあトンスラしまおうぜ！」

前に制御室を見張りしていた兵士二人だ

天上軍兵士1「逃げ場所なんかねえよ！それに地上軍に奴等に捕まってみろ、何をされるかわかったもんじゃない！」

そこからドルク達が入ってきた

ドルク・カイル「そこをどけえ！！」

天上軍兵士1「こ、この前のガキ共！？」

ジューダス「逃げ場所はない！大人しく投降しろ！」

二匹の兵士は逃げ場はない

天上軍兵士2「ど、どうする！？」

兵士2は慌てる

天上軍兵士1「やられっぱなしで終われるかよ！こいつを食らえ！」  
すると電磁のバリアが扉周辺に張られ、その隙に兵士2匹はエレベーターに乗って逃げた

シルム「しまった!？」

ロニ「くそっ！このエレベーターしばらく戻ってこないぞ！」

モンスターが周囲からうようよと現れる

クレス「しかたない！戻るまでここの敵達を相手するしかない！」

ヴォル「行くぞ！」

レオ「おう！」

……

数分後

シルム「ブレイジングフレア！」

シルムが花びらのような炎で敵を焼き尽くす

ドルク「くそっ！ストーンエッジ！」

ドルクはストーンエッジを飛ばす

レオ「バニシングフレイム！」

レオは熱霧を周囲に纏い敵を倒していく

レオ「くっ！一体いつになったら来るんだ！」

全員エレベーターが来るまでひたすら敵を攻撃している

レオ「ヴォルテックドライブ！」

つばめ返しとさっきのバニシングフレイムを組み合わせた技で一掃する

クレス「鳳凰天駆！」

クレスは炎を纏って上昇してそこから降下していき敵を倒していく

カイル「牙連蒼破刃！」

カイルは青い真空波を放ってから突進突きで敵を倒す、その時

ゴウンゴウン

エレベーターが上がってきた

ドルク「ふう、なんとか来たな」

レオ「急いで行こう！」

ドルク達はエレベーターへと乗り込んだ

……

下の階に来た時には天上軍の兵士達がいた

カイル「全員、武器を捨てて投降しろ！」

天上軍兵士1「地上軍！……もはやここまでか」

天上軍指揮官「わかった！降伏する！」

兵士達は全員武器を捨て両手をあげる

ドルク「さて、制御室の扉を開けてもらっせ」

天上軍兵士2「負けた……俺達これからどうなっちまうんだろう？」

シルム「殺したりはしないと思うよ……ただ辛い流刑生活（ろけい）が千年ほど待ってるけどね」

ドルク達は制御室へと入っていった

……

制御室には奴が待ち構えていた……そう……奴が……

バルバトス「ようやく来たか……待ちくたびれたぞ、ドルク」  
グラン  
ハート！カイル」デュナミス！」

そう……バルバトス」ゲートティアである

カイル「バルバトス！やっぱりお前か！」

ドルク「テメエ、よくもこの前はやってくれやがったなおい（激怒）その分の倍返しとこれ以上人の歴史がポケモンの歴史になってもてあそぶその腐った根性叩き潰してやるぜ！！」

ドルク達は構える

バルバトス「人の歴史…ポケモンの歴史…？ハッ！そんなものもはやどうでもいい！」

カイル「なんだと…！？」

バルバトスは歴史をどうでもいいと言う

バルバトス「もはやディムロスも、英雄と呼ばれる連中もどうでもよくなった、俺の目的は…カイル！ドルク！貴様等を倒すことだけだ！！」

ハロルド「なるほど、あんたは生まれ変わったとしてもディムロスに勝てないわけだ」

ハロルドは挑発したように言う、バルバトスは「…何！？」と怒りの表情を見せる

ハロルド「ディムロスみたいな信念も持たず、ただ敵を求めるだけなんて猿でもできるわ」

シルム「いやオイラとかのポケモンもそうなんだけど（汗）」

シルムはハロルドに軽くツッコミを入れた

ハロルド「はいはいシルム、あんたは頭いいからあんたは別よ……」

ハロルドはシルムにそう言いバルバトスに視線を向ける

ハロルド「悪役ぶるんならせめて最後まで歴史を変えてやるってあがきなさいよ、みつともない」

バルバトス「…フツ、歴史を変えたいのは他ならぬ貴様ではないのか？」

ハロルド「…なんですって？」

考えられるのは一つだ

バルバトス「貴様の兄はミクトランとの戦いで刺し違えて死ぬ、これが今の段階での史実だ、だが今すぐ向かえば十分に間に合う、歴史を変えることができる、さあ、足掻いてみせろ、歴史を変えてやるとな！フッフ…ハーハッハッハッハ！」

ハロルド「……………」

ハロルドは黙ってしまっ…彼女は知ってしまっ…自分の兄が死ぬという結末を

カイル「バルバトス、貴様…ッ！」

ドルク「テメエ…覚悟できてるだろうな!!」

二人は怒りをあらわにする

バルバトス「そうだ、その目だカイル！ドルク！憎しみに満ちたその目を俺は待ち望んでいた！それでこそ殺しがいるというもの！さあカイル、ドルク、かかってこい！俺の乾きを癒せ！」

ドルク「テメエの乾きなんて知ったこつちゃねえ！！エナジーバスター！！！」

ドルクはエナジーバスターでバルバトスに向かって放つ、エナジーバスターはバルバトスに直撃した

バルバトス「さあ、見せてもらおうか、貴様等のもがきとやらを」

ドルク「テメエなんかもがく必要なんてねえ！！テメエは俺達を怒らせた！！その単細胞な脳を脳天直撃でぶちのめす！！オラァ！」

ドルクはウッドハンマーでバルバトスを攻撃、だが斧のような剣でバルバトスは防いで剣を振るう

ドルク「へっ！そんな単調なので俺達にダメージなんて受けるかよ！ストーンエッジ！」

ドルクは近距離からストーンエッジを放ちバルバトスにダメージを与える

シルム「古の炎よ、敵を焼き浄化せよ！エンシエントノヴァー！」

シルムはエンシエントノヴァーを詠唱した

ドルク「これもついでだ！唸れ！大地！グランドダツシャー！！」

大地の破壊のエネルギーもついでにバルバトスに襲いかかる

バルバトス「クズが！殺戮さつりくのイービルスファイア！」

魔空間がドルク達を襲う

ドルク「ぐわっ！？」

アクア「リカバーレイン！」

アクアは雨を降らした

シルム「ありがとう！」

この技は味方を回復できるアクアの技らしい

レオ「くっ！（体が…動かない…バルバトスを相手に戦えるのに…  
なのに震えが）」

レオは震えてしまう、それに気づいたジューダスが声をかける

ジューダス「おい！しっかりしろ！」

レオはハッと我に返った

レオ「リオン…」

ジューダス「バルバトス相手に無理になつてきたのか？」

凶星だった、レオは頷いた

ジューダス「とりあえずはドルク達に任せた方がいい、無理だけさ  
れたらお前はまた死にいくものだぞ？」

ジューダスに言われレオは黙ってしまった

ドルク「倍に返してやるぜ！！ロックカウンター！！」

周囲の岩がバルバトスに襲いかかる、この技はダメージを受けた時に倍にして返すオリ技だ

カイル「爆炎剣！」

カイルの剣が炎を纏いバルバトスを斬りつける

バルバトス「ぐおっ！？」

バルバトスは後退する

デュランダル「ウゼエエンだよ！！テメエは消えな！！ヒヤッハア  
アアア！！」

デュランダルは暴走して連続シャドーボールをバルバトスに食らわせる

バルバトス「貴様等…！！」

ドルク「どうだ！テメエみてえな力任せな野郎に戦う資格はねえ！  
」

ドルクは叫ぶ

そこから無線が聞こえる、あちらこちらから来援や降伏などの声がある

カイル「観念しろ、バルバトス！」

ドルク「逃がさねえぞ！」

追い詰められるバルバトス

バルバトス「つまらん…この時代ではダメだ…もっと…もっとふさわしい場所を！」

カイル「待てツ！何処へ行くバルバトス！？」

バルバトスは消えかかっている

バルバトス「俺とお前達二人の勝負にもっともふさわしい場所だ…カイル…デュナミス、ドルク…グランハート…時を越えた先…『神の眼』の前で、待っているぞ…！」

バルバトスは消えていった

カイル「結局、逃げられたか…」

ジューダス「バルバトスにはこれ以上の手出しはできまい、放って

おいていいだろう」

ロニ「それよりもカイル……」

バルバトスの言葉…ハロルドは知ってしまったている。ドルク達はハロルドに視線を向ける…だが彼女はそのままメインコンピューターを起動させる

ハロルド「ロックをかけておかないとね、またベルクラントを起動させちゃたまないから」

何事もないように作業するハロルド

カイル「ハロルド…その、さっきバルバトスが言ったこと…」

ハロルド「言ったでしょ、たとえ未来を知ったとしても私は、変えるつもりはないって…私は、自分のやるべきことをする…それだけよ」

ハロルドはなぜか悲しそうな感じがした

カイル「ハロルド……」

ハロルド「…終わったわ、さあ行きましょみんな…ミクトランのいる玉座の間へ」

レオ「……」

ドルク達は玉座の間へと向かった

……

玉座の間

カイル「いた！ディムロスさん達だ！」

玉座の間にはディムロス達が一匹のポケモンと対峙していた。長い紫の尻尾に鋭い目、3本指の白い両手のポケモン、遺伝子ポケモンのミュウツーだ

こいつがどうやらミクトランのようだ

カール「ミクトラン、覚悟ッ！！」

カール「ソードィアンを突き刺す

ミクトラン「ぐおおおおああッ！！」

ミクトランは叫び声をあげる

ミクトラン「私とて天上の王と呼ばれた男、無駄死にはしないッ！」

ザシユッ！

カール「ぐああああッ！」

カールの体が貫かれる、血がドボドボと流れていく…だが

カール「…離しは…ゲフッ！……離しは…しない！」



カーレル「にいちや……は……いつ……も……おま……え……  
……いつ……しょ……だ……」

カーレルの手がパタリと下がって地面についた

ハロルド「兄さん？兄さん！目を覚まして！兄さん！！」

ディムロス「ハロルド……カーレルはもう……」

彼は目を開けることはなかった……静かに……彼は最後の力を振り絞って……そして……息を引き取った……

ハロルド「にい……さ……兄さあああああ……」

ハロルドは泣いた……最愛の兄を目の前で……

そんなハロルドの様子を……ドルク達は辛そうに見ていた

シルムは涙し他の者も涙を流したりなどしていた

天地戦争は一人の男……いや一匹のポケモンにより戦争は終結した

戦争とは……生死をさまよう戦いなのだ……

運命というのは残酷なものである。いつ何処で自分は死んでしまうのか……いつ何が起きるのか……

それが……運命というものなのだから……

依頼 98 対峙…残酷な結末（後書き）

ハロルド「……………」

ハロルド……………」

シルム「そつとしておこつ……………」一番辛いから

そうだね……………」

ドルク「戦争は終わったが……………」バルバトスを逃がしちまったしな」

大丈夫、次回は18年前に行くよ

レオ「……………」

依頼 99 18年前へ決意と最終決戦 (前書き)

ついに18年前へとタイムスリップです。

ドルク「バルバトス、あいつを絶対に倒してやるぜ！」

それでは依頼 99

ドルク「負けるか!!」

依頼 99 18年前へ決意と最終決戦

こうして天地戦争は終わった

俺達もこれでなんとかあったが…

ハロルドはまだ悲しんでると思う…

あいつはカーレル…兄を失っちゃったからな……

これで歴史改変は阻止できたからな……

それで俺達はというと

……

地上軍拠点

ドルク「終わったな……」

シルム「うん…それにしてもリトラーさんの演説はすごいね、終戦宣言がこんな形で開くなんてね」

ドルク達はリトラーの演説を上からみていた、吹雪はすでにやんでいた

ナナリー「それに…こんな気持ちで聞くことになるのはね」

みんなが暗くなる

カイル「なあロニ…あれで本当によかったのかな？」

カイルは振り向いてロニに聞く

ロニ「ん？なにがだカイル？」

カイル「あの時、俺達はカーレルさんを救えるはずだった、バルバトスの言ったようにすぐにミクトランのところへ向かっていれば、もしかしたら…」

ハロルド「あんたアホね、それじゃあの猿（バルバトスの事）とレベルが同じよ」

そこからハロルドが来た

リアラ「ハロルド！」

ヴォル「もう大丈夫なのか？」

ハロルド「言ったでしょ？未来を知る者が自分の都合だけで歴史を変えちゃいけないって」

彼女は大丈夫のようだった、いつもの彼女だ

カイル「それはわかってるよ、でも…」

ハロルド「それにね、兄貴の死は運命でもなければ無駄死にでもなかった、兄貴は兄貴なりに生きてきた、その結果だもの、だから悔いは残らない幸せな人生だったと思うわ」

カイル「ハロルド…」

運命でもカーレルは悔いを残していない…死は覚悟はしていた…  
たとえ自分の命の代えても平和などそういう信念があったのだから

……

リアラ「たとえ死が決まっていたとしても、精一杯生きて、幸せをつかむ…」

ハロルド「なぐんかしんみりしちゃったわね、というわけでこの話はここまで！で？あんたたちこれからどうすんの？」

ハロルドがこれからどうするのかを聞いてきた

カイル「バルバトスを追おうと思ってる」

ドルク「あの野郎はネジがものすげえぶつとんでるからな、倒しておかねえと腹の虫がおさまらねえからな」

ドルクは怒りの表情で言う

ジューダス「『神の眼』の前というのはおそらく、先の騒乱の時のダイクロフトのことだろう、世界の命運を決する場で、自らの運命をも決する…奴の考えそうなことだ」

リアラ「でも、レンズが…時間移動するためにはレンズの力が足りないわ」

そう、時間転移するにはこの世界のレンズというのがないと時間を

移動することができない

ハロルド「そんなことだろうと思ってね」

ハロルドは何処からか自分の作ったソーディアンを6本すべて出したのだ

シルム「ハロルド、これって…」

ハロルド「ソーディアンはレンズ技術の粋を集めたものなのよ、エネルギーだつて半端じゃないわ」

これで時間転移することができるようだ

カイル「それじゃあハロルド、色々ありが…」

カイルが言いかけた時

ハロルド「さあ！未来に向かってレッツゴー！」

ロニ「おい？何してんだ？」

ロニの質問にハロルドは

ハロルド「前に言ったでしょ？私の頭脳が神をも越えること証明してみせるって」

シエルマル「まさかハロルドさん…ついていくんですか（汗）」

考えられるとそうだが

ハロルド「嫌ならソーディアンは使わせないわよ」

シルム「どうするドルク？カイル君」

シルムはドルクとカイルに聞く

ドルク「まああいつの術は助けられてるしな…それに言っても聞か  
ねえと思うぜ？ならつれていくしかねえだろ」

カイル「そうだね！ハロルドと一緒にの方がもっと楽しいだろうしさ  
！」

ハロルド「そういうわけだからよろしく！」

ジュティア「まあにぎやかになりそうだしよろしくハロルド」

ハロルドが仲間になった

カイル「よし！リアラ、行こう！行き先は現代から18年前…父さ  
んの生きた時代！」

リアラ「わかったわ…みんな、行くわよ！」

ドルク達は光に包まれ消えた…18年前のダイクロフトへ

……

外殻

ドルク「ここは」

ジューダス「ここは外殻の上だ、先の騒乱でミクトランがダイクロフトと共に作り出したものだ」

下からは地上が見える

ハロルド「何、ミクトランって復活したの？懲りない奴ねえ」

ドルク「さあ〜てあの野郎をぶっ飛ばしに行くか！！」

ジューダス「奴の言葉通りだとすれば……ダイクロフトの神の眼の前だ」

ドルク達が視線を向けるとダイクロフトが見える

レオ「（ついに来たんだな……俺がここでミクトランと戦った……あの場所です）」

レオは緊張していた

ポンッ！

レオ「！？」

ドルクがレオの肩を叩く

ドルク「そんな緊張するな……戦いの時動けなかったのはわかる……でもお前ならきつと乗り越えられると思っぜ……俺達を信じろ……俺はお前を見守っているぜ」

レオ「ドルク…」

レオは自信が入る

レオ「そうだな！ありがとうドルク」

レオはドルクにお礼を言う

ドルク「バルバトスは決着つけねえといけねえ相手だ、怖がるな、前だけを見ればいい…」

そう言いドルクは歩き出した

レオ「（そうだよな…バルバトスにビクついてちゃカイルやみんなにも迷惑をかけてしまう…なら俺はあいつと立ち向かうようにしないとな）」

レオはそう思い歩き出した

……

数時間後……

ドルク「やっとついたか」

ドルク達はダイクロフト入口に到着、さらに入口付近ではポケモンの姿となっている4人がいた、どうやらスタン達のような、それぞれ見てみるとスタンはレオというかレオ自体もそうだがバクフーンの姿、ルーティはミジユマルの最終進化系のかんろくポケモンのダ

イケンキ、フィリアは両手が天使のような白い羽で赤と青と白の角が出ているポケモン、幸せポケモンのトゲキッス、ウッドロウは驚のような姿のポケモン、ゆうもうポケモンのウォーグルとそれぞれポケモンの姿をしていた、そして対峙しているのはバルバトスだ

ルーティ「な、何者なのこいつ!? 手強いわ、油断しないでみんな! 特にスタン、あんたわね!」

ルーティはみんなにそう伝える…特にスタンには

スタン「わ、わかってるよ! ルーティこそ気をつけるよな!」

そこにドルク達が駆けつけてきた

ロニ「お、おい! 見るカイル! あれは…!」

カイル「と、父さん、母さん…!?!」

ドルク達はバルバトスと対峙しているスタン達を見る

ドルク「しかも姿がポケモンのままだな」

アクア「あれ? でもスタンだけバクフーンだ、レオに似てるような?」

アクアはバクフーンの姿のスタンを見る

レオ「べ、別人だよ、別人!」

レオは必死で別人だと気をそらせる、実際本人（バルバトスによっ

て殺されて転生された）はいるが（汗）

リアラ「カイル！助けないと！」

ドルク「その前にこいつを倒していかねえと無理だ！」

ドルク達の前に立ちばかるのは赤い鱗に覆われた翼のない竜のようなモンスターだ

シルム「収束の光よ、閃光に輝け！フォトン！」

シルムは収束の光をモンスターにあてる

ドルク「効いてるな、エナジーバスター！」

ドルクはエナジーバスターでモンスターを押し上げる

ハロルド「プリズムフラッシュャー！」

七色の光の剣が数発モンスターに降り注いでモンスターは消え去った

ドルク達はスタン達の元に駆けつけ、構える

バルバトス「よく来たなカイル！ドルク！退屈しのぎに相手をしていたのだが…こいつらでは物足りなくてな」

カイル「バルバトス、貴様…ッ！」

ドルク「テメエ、性懲りもなく卑怯な事をしやがるな…！」

怒りをあらわにするカイルとドルク

バルバトス「三人まとめて殺すのもまた、一興いっせいか…はあっ！」

強力な力が全員を襲う

ドルク「ぐわっ!?!」

カイル「うわあーっ！」

スタン「ぐわあーっ！」

レオ「ぐわあーっ!」

全員倒れてしまう

バルバトス「どうした、カイル!! デユナミス! ドルク!! グランハート! そんなことでは俺の渴きは癒せはしないぞ!」

スタン「なんて力だ…!」

レオ「(くっ! この衝撃…記憶として刻まれてく!?)」

レオはスタンのためか18年前の記憶が脳に刻まれていく

カイル「父さ…」

カイルは剣を地面につけて立ち上がるうとしている

カイル「…スタンさん! タイミングを合わせて一気に仕掛けましょ

う！」

スタン「…わかった、やってみよう！」

ドルク「待てカイル…俺にもやらせる！」

レオ「俺も…カイル…」

ドルクとレオは立ち上がる

カイル「ドルク、レオさん…わかった！」

バルバトス「はあっ！」

再びバルバトスは強力な力でねじ伏せようとする

4人「てやあーっ！！！」

ザシュザシユドカツ！ゴスツ！

バルバトス「ぐはッ…！」

カイルとスタンの一閃、ドルクのウッドハンマーによる一撃、レオの拳による一撃がバルバトスにダメージを与えた…するとバルバトスは消えていった

ドルク「くそっ！また逃げやがったな…だが致命傷を与えたはずだ」

レオ「（たしかに致命傷を与えたから奴を追い詰めた…なのになんだこの震えは…）」

レオの震えが止まらなかった

ドルク「大丈夫か？」

ドルクが声をかける

レオ「あ、ああ……」

レオは大丈夫な事を言う

スタン「危ないところをありがとう、助かったよ……にしてもすごいな君達3人は、初めての相手とここまで息が合った攻撃が出せるなんて、ポケモンの姿でもこうして出来るなんてね」

スタンは頭をなでるようなしぐさをする

カイル「……初めてじゃないです」

スタン「……え？」

ルーティ「スタン！」

ルーティが声をかけ、スタンと横で並ぶ

ルーティ「危ないところをありがとう、おかげで本当に助かったわ、あなた、名前は？」

名前を聞かれドルク達3人は応える

カイル「カイル…です。カイル」デュナミス「いいいます」

ドルク「ドルク、ドルク」グランハートだ」

レオ「レオだ」

ルーティ「デュナミスにグランハートにレオかあ〜デュナミスって『資質』って意味よね、いい名前じゃない」

ルーティはそうほめる

スタン「カイルってのもカッコイイよな、将来、俺に子供ができたらそんな名前にしようかなあ…な〜んてね、冗談冗談！」

スタンはまた頭をなでるしぐさをする。実際生まれた息子が目の前にいるというのに（汗）

ルーティ「バカな事言っただけ先を急ぎましょ！時間がないのよあかし達には」

カイル「あ、あの、もう行くんですか？まださっきの戦いで受けた傷が残ってるのに…」

そう、たしかにさっきのバルバトスの時ダメージが残っているはずだ…だが

スタン「ああ、行かなきゃならない、俺達も命がけで戦ってるんだ、君達と同じように」

カイル「……………」

カイルは黙ってしまふ

レオ「（そうだ…俺は命をかけて戦ってきた…でも震えが出てしまふ…怖い…そんな感じが…）」

レオ自体自分が命をかけて戦ってきた戦い…バルバトスから受けた傷…精神の傷が癒えぬままだ

スタン「じゃあ、これで…」

カイル「待って！スタンさん！」

カイルがスタンを止める

カイル「きつと…いや、絶対にうまくいきます！」

カイルはそう言う…息子としての応援メッセージだろう

スタン「…ありがとう、君達もがんばって」

スタン達4人はベルクラントの中へと入っていった、それをドルク達は見送る

カイル「後はあなたたちの仕事だ、そうだろ、父さん…」

レオ「（カイル…）」

レオはそんな息子を見ていた、そんな時、ロニがカイルに声をかける

ロニ「…よかつたじゃねえか」

カイル「…うん！」

カイルは頷いた

シルム「ここからどうする？さっきの様子だと、バルバトスはまだ生きてるようだし」

ジューダス「おそらく『神の眼』に向かったらろう、僕達も向かうぞ」

ロニ「スタンさん達の後をついていきや、早いんじゃないか？」

たしかにそれは早い方法だが

ジューダス「後ろからコソコソとついていくような情けないマネが出来るか、別のルートを使うぞ…：ちようどそこの階段から先に進めそうだ」

ジューダスが視線を向いた方向には階段があった

クレス「それじゃあ行動開始しよう」

すず「はい！でも油断できません…：バルバトスからさらに邪気がたくさんあるように感じます」

すずはバルバトスの状態をそう感じている

ドルク「たしかに…：さらに強くなってる感じが俺もする…：だが奴に

致命傷を与えたからなんとかなるとは思うがみんな！油断するな！」

みんなは頷いて神の眼へと向かう

アクア「（レオ…なんだかレオとスタンが瓜二つに思えてくる…レオ…本当はスタンなのかな？）」

アクアはレオがスタンじゃないかと感じてきていた

アクア「（本当かどうかもわからないし…レオ…きつと何か知っているのかな？）」

そう思い、アクアもみんなの後についていく

……

ドルク「なんとかついたようだな」

ドルク達は『神の眼』のところまでついた、そこにはスタン達それぞれがそれぞれのソーディアンを『神の眼』に刺したところだった、そして最後はもちろん…スタンのソーディアンである、ディムロスのみとなった

ディムロス「いいのだよスタン、我等は永く生きすぎた…」

スタン「……………」

スタンはディムロスを構える…そして

スタン「でやあああああつ！」

神の眼が刺さる

ウッドロウ「急げスタン！ここはじきに崩れるぞ！」

スタン「…くっ！ちくしょうっ！」

スタンは悔し涙を流し、仲間達と共にここを離れた、すぐさまドルク達が神の眼に駆け寄る

ロニ「お、おい！どうなってやがんだ！？何にも起きねえじゃねえか！」

そう、この場合は神の眼は破壊されるはずなのだ

ドルク「それってどういうことだ？」

ドルク達はわからないようだ

ナナリー「ソーディアンを刺したら神の眼の力で外殻は壊れるはずなんだよ！？」

シルム「えっ！？」

みんな驚く、だがハロルドは原因がわかったようだった

ハロルド「神の眼のエネルギーがソーディアンの力をわずかに上回っている…だから神の眼を制御できないんだわ、あと一押しなんだけど…」

ドルク「一体どうすりゃ……」

カイル「どうすればいいんだ、どうすれば……！」

ドルク達は考える、するとソーディアンから声が聞こえる

デймロス「千年ぶりか……久しいなカイル君、ドルク君……と言っても君達にとっては大した長さではなかっただろうが」

カイル「……！その声は……デймロスさん！？」

ドルク「ソーディアン自体にデймロスの意思が……それだけじゃねえ、アトワイトやクレメンテのじじいやイクティノスまでもだ！」

シルム「ホントだ、声が聞こえるよ」

みんなデймロス達の声が聞こえるようだ、本来、ソーディアンはデймロス達の意味があり、持つてる者はデймロス達の声が聞こえるがそれ以外の者達にはその声は聞こえない

デймロス「残念だがハロルドの言うとおりだ、どうやら我々だけでは力不足らしい、こればかりはどうにもならん……」

カイル「でも、だからってあきらめるわけにはいかないじゃないですか……！」

ドルク「そつだ！ここであきらめんじゃねえ！何か方法はあるはずなんだ！方法が……！」

そこでデймロスが

ディムロス「たった一つだけ方法がある、しかし、それは不可能なのだ…」

ドルク「不可能なんかはやってみねえとわかんねえよ！」

カイル「そうだよ！やってみなきゃわからない！教えてくれ、ディムロスさん！」

ジューダス「騒ぐな、見苦しいぞカイル、ドルク」

ジューダスが二人を黙らせる

カイル「ジューダス…？」

ジューダスは一つの剣を背中から取り出した

ジューダス「黙って見ている」

それは彼の相棒であるシャルティエだ、シャルティエの声が聞こえる

シャルティエ「やあ、待たせたね、みんな、遅くなって申し訳ない」

イヤミを言うような口調でシャルティエは言う

ディムロス「お、お前は…シャルティエ！？」

ディムロスが言う方法とは…シャルティエだ

リオンと共にシャルティエもまたソーディアンなので魂を維持して

いる。シャルティエもまたソーディアンなのだ…

クレメンテ「ほ、こんな形で現れるとは、ひねくれ者のお前さんらしいのう…」

アトワイト「すべてのソーディアンがそろったわ、これならきつと…！」

そうこれなら神の眼を壊すことが可能となる、だがそんなドルク達の背後から

ドルク「バルバトス!？」

バルバトスが現れた

バルバトス「英雄ごっこは終わりだ! 貴様等はここで死ぬ、この俺と共に!」

カイル「ば、バルバトス…!」

ジューダス「この世界はスタン達によって救われなければならない、それを邪魔する奴は…この僕が許さない!」

ジューダスは剣を抜いて構える

バルバトス「さあ来いよ! 貴様等全員、みじん切りにしてやるぜ!」

今ドルク達はバルバトスと対峙する

ドルク「逆にみじんぎりにされるのはデメエだ!」

ドルクはバルバトスに迫る

依頼99 18年前へ決意と最終決戦（後書き）

ジューダス「スタン達の邪魔はさせない！」

次回ついに奴との最終決戦です。しかし

ジューダス「どうした作者？」

ドルク達が大変な事に！

依頼100 VSバルバトス〜窮地のプレイブ〜(前書き)

ついに100話達成!!

パチパチパチパチ!

ドルク「ついに100話まで来たか」

シルム「すごい!」

あゝ喜んでるところ悪いけど、今回やばいよ

ドルク「なっ!?!」

では依頼100

ドルク「見やがれ!!」

依頼100 VSバルバトス〜窮地のブレイブ〜

ドルク「オラア！」

ドルクはウッドハンマーでバルバトスを叩きつける

バルバトス「そんなもんで俺を止められるか!!！」

バルバトスの強力な力でドルクは吹っ飛ぶが体勢を立て直す

ドルク「やっぱり前より強くなってやがる…致命傷で受けたはずだがこいつの体力は化け物みてえだ」

冷や汗がドルクに流れるがドルクは構えなおす

ミゲール「剣分身！」

ミゲールは左手に剣を生成する。

ミゲール「まそうつぎ魔双月！」

クロスにバルバトスを斬りつける

バルバトス「その程度の剣で俺を倒すだと…ぬるいわ!!！」

バルバトスが斧を振り、ミゲールは吹っ飛ばされる

クロス「父さん!?!よくも父さんを!次元斬!!！」

青い気を剣に纏い斬り上げから斬り下げの動作をする

バルバトス「フン！その程度で俺を倒せると思うな灼熱のバーンス  
トライク！！」

バーンストライクがクレスを襲った

クレス「うわあああああー！ー！っ！！」

ミント「クレスさん！？」

クレスは倒れてしまう

アトリ「テメエ！！ブラスト！！」

アトリが膝蹴りを繰り返すが

バルバトス「ぬるいわ小僧！！」

アトリ「ぐわあああああー！ー！っ！！」

アトリは吹っ飛んで壁に激突して倒れた

クラウド「波動弾！！」

k「スターライトバースト！！」

クラウドは波動弾、kは星型に光をバルバトスに浴びせる

バルバトス「貴様等の攻撃などぬるいわ!!」

バルバトスは思い切り斧をなぎ払うように振り、クラウドは避けたがkは避けられず食らって吹っ飛んでしまった

k「うわあああーっ!!」

クラウド「くそっ! レールガン超電磁砲!!」

クラウドの銃から電磁砲が放たれる

バルバトス「はあっ!!」

それを斧でなぎ払い、消滅させた

クラウド「何っ!?!」

バルバトス「断罪のエクセキューション!!」

上下から紫の魔方陣が魔空間を放出してクラウドに襲い掛かる

クラウド「ぐわっ!?!」

クラウドはエクセキューションを食らってしまった

すず「このままでは!?!」

そこからバルバトスがすずに向かって斧をなぎ払うように振る

すず「くっ!?!」

すずはかるうじて避ける

シエルマル「シエルブレード！」

ジユク「リーフブレード！」

シエルマルとジユクが斬りつけるが

カキーン！！

シエルマル「うわっ！」

ジユク「くっ！」

二人は吹っ飛ばされるがなんとか受け身をしてダメージを軽減させる

ミント「みなさん回復を！リザレクション！！！」

アーチエ「インディグニション！！！」

マリア「ブレスト！！！」

ロニ「ヒール！！！」

ナナリー「バーストライク！！！」

リアラ「リザレクション！！！」

ハロルド「エンシエントノヴァ！！！」

ジユティア「タイダルウェイブ！」

レビィ「グラントダツシャー！」

ヴォル「スパーク！」

それぞれ術と技を使う、それがバルバトスに当たり大爆発が起きる

ドルク「やったか？」

だが

バルバトス「術なんぞ使ってんじゃねえ！！断罪のエクセキューション！！」

エクセキューションが術を使った者達に襲い掛かり一掃された

ジユク「レビィ！くっ！よくも！！」

ジユクがリーフブレードで斬りつけるが

バルバトス「ぬるい、貴様の剣などぬるすぎるわ！！」

ジユク「ぐわあああああーーーーーっ！！」

ドルク「ジユク！！」

ジユクは吹っ飛ばされた

クレス「ミ、ミント…」

クレスはまだダメージが残っていて立ち上がる

デュランダル「コ・ロ・ス」

デュランダルはブチキレてシャドーボールを連発するが

バルバトス「クズが…！」

デュランダル「ぎゃあああああーっ！！」

バルバトスに吹っ飛ばされた

すず「みなさんしっかり！」

すずが治療をおこなう

レオ「（どうすればいいんだ…俺は…）」

レオは固まってしまっ…殺される…そんな恐怖が縛られてくる

シルム「バーストライク…！」

シルムはバーストライクを繰り返す

ドルク「エナジーバスター…！」

ドルクはエナジーバスターで攻撃

ドルク「さらにグランドダツシャー!!」

さらにグランドダツシャーでバルバトスにダメージを与える

バルバトス「術に頼るか雑魚共が!!」

今度はドルクとシルムにエクセキューションが襲い掛かる

ドルク「あぶねえ!!」

ドン!とドルクがシルムをかばいエクセキューションを受ける

シルム「ドルク!!」

シルムがドルクに駆け寄る

シルム「キュア!!」

シルムがドルクをキュアで回復

バルバトス「また頼るか雑魚が!!」

またエクセキューションが迫る

ドルク「ロックフェンス!!」

ドルクがロックフェンスで防いだ

カイル「岩斬滅碎陣!!」  
がんざんめつさいじん

カイルが隙をついて大地に衝撃を与えて数多の岩片を飛ばす

バルバトス「クズが!!」

バルバトスがカイルに斧を振る

ドルク「あぶねえ!!」

ドルクがカイルをかばう

ドルク「ぐわっ!?!」

斧がドルクの左目に当たり傷がつき血が流れる

シルム「ドルク!」

すぐさまドルクに近づいて回復させる、傷は深いためかドルクの左目に傷のあとがついてきた

バルバトス「貴様もだ!!」

今度はシルムに斧が振られる

シルム「がつ!?!」

シルムの背中が傷つけられ背中に大きな傷ができ、血が吹き飛ぶ

ドルク「シルム!!」

シルム「う…ドルク…」

シルムは痛みを訴えながらドルクを回復させる

アクア「リカバーレイン!!」

アクアがりカバーレインで怪我を治す

アクア「大丈夫二人とも!」

アクアがドルクとシルムに駆け寄る

ドルク「こ、これぐらいかすり傷だ…」

ドルクは左目の痛みを手で抑える

シルム「あ、ありがとう…うっ!」

シルムは背中の中の傷でアクアの技で治しているが痛みがシルムを襲う

カイル「バルバトス、貴様ツ!!」

カイルが剣を振る

キーン!キーン!カキーン!!

バルバトス「こんなもので俺がやられるか!!クズが!!」

ドルク達にエアプレッシャーという地属性の術が襲い掛かる

アクア「うわああああーっ!!」

ドルク「ぐわっ!?!」

シルム「うわああーっ!?!」

カイル「うわあっ!?!」

4人は地のプレッシャーに苦しむ

ジューダス「ネガティブゲイト!?!」

ぐにやりとバルバトスのいる場所から魔空間がバルバトスを襲う

バルバトス「クズが!?!術に頼る愚か者が!?!」

ジューダス「ぐわっ!?!」

ジューダスはエアプレッシャーを食らってしまっ

窮地…ドルク達は窮地へと追い込んでしまった

レオ「みんな!?!」

レオは叫ぶ

レオ「くそっ!ちくしょお!?!俺は何もできないで終わってしま  
うのか…俺は…」

その時

ディムロス『スタン!!』

レオ「え？」

レオは頭から声が直接耳に届く

ディムロス『スタン!!』

レオ「(デ、ディムロス…?)」

その声は懐かしいよき相棒声

ディムロス『お前はこんなところでみんなを守れないのか？お前はそんな臆病な奴なのか！！私はお前といてお前と過ごした思い出はある…カイル君やドルク君達が苦しんでいるのにお前は怯えて逃げるのか!!』

レオ「(ディムロス…俺…怖いんだ…俺はバルバトスに殺されて生き返った…バクフーンのレオとして…でもその時傷ついてしまった…俺の心が…俺…どうしたらいいんだ!!)」

レオの目から涙が出てくる

ディムロス『恐れるな!!』

レオ「!？」

ディムロスがレオに一喝する

ディムロス『お前とカイル君、そしてドルク君はあの時アトワイト

の事…仲間の事を私は教えられた…お前もドルク君達と一緒にいて変わったはずだ!!お前はお前だ…私の知っている…スタン・エルロンを!!」

レオ「(デймロス…)」

レオは神の眼に刺さっているデймロスを掴む

レオ「(そうだよな…俺…怖がってた…本当のところは俺気づけたよ、カイルやドルクがこうして俺達のために歴史改変を防ぐために)」

レオは目をつむった

レオ「(デймロス…少しだが力を貸してくれ…)」

レオはデймロスを抜いた

レオ「(そうだ…俺はバクフーンになってから拳で戦ってきた…でも再びデймロスを抜いたら…俺のなくした力がみなぎってくる…行くぞ、デймロス!)」

デймロス『ああ!!』

その頃ドルク達ブレイブは全滅…

ドルク「くっ!」

ドルクはなんとか立ち上がる





して蘇った！バクフーンのレオとして！」

レオの目が真剣になる

カイル「ま…まさか！？と、父さん？」

カイルの言葉にレオは頷いた

アクア「レオが…本当にスタン！？」

驚いたのはアクアだった、まさか彼…レオ自体がスタン本人だったなんて思わなかったのだ

レオ「あの時は口ニが人質にとっていなかったら俺は死ななかった…でも俺はこの体でも俺は戦う！」

レオの闘志が体に流れ込む

カイル「とう…さん…」

カイルの目から涙が出てきた

レオ「心配かけてすまないカイル…お前の言葉…お前の行動…俺にも伝わったよ」

カイル「え？」

レオには伝わっている。カイル達がしてきた事を…一緒になって伝わっていた…たとえ自分が転生してもだ

レオ「でももう心配ない…俺は俺との決着<sup>ケリ</sup>をつける…ディムロス、いけるか？」

ディムロス「ああ、いつでもいける…油断するなよ」

ディムロスがきつくレオに言う

レオ「ああ」

レオは構える

バルバトス「ぬかせ！貴様が転生しようが俺は倒せん！倒せんのだ  
！！」

バルバトスは強気に言う

レオ「倒す！お前なんか二度と負けない！！仲間を傷つけた分…  
そして俺を死なせた分！返してもらおう！！」

レオは迫る

依頼100 VSバルバトス〜窮地のプレイブ〜(後書き)

ドルク「こいつの攻撃異常すぎねえか？」

バルバトス3戦目は術使えばエアプレッシャーやエクセキューションが来てパーティ全滅されるという…回復の邪魔しやがって(黒激怒) D2やったためかバルバトスに回復邪魔されてごりつぶくの作者

シルム「作者さんがキレるのもわかるね(汗)」

あれは異常すぎる、バルバトス勝てる気しねえだろこれは(汗)

ドルク「たしかにな〜あれは全滅しまくりでアイテム使用できるが術使えば術返したもんな〜卑怯だな」

俺も卑怯だとあれは思ってる…マジ思ってる(黒激怒) オホン！さて次回はレオが活躍します

シルム「あの技が蘇るの？」

まあデステイニーマンバーやデステイニーマンバーの秘奥義つて多いから秘奥義のオンパレードができるってものだしレオ(スタン)もマイソロとかの秘奥義だけでなくデステイニーマンバーの他の秘奥義とかもやっちゃおうと思う…バルバトスに怒りを覚えたから(黒激怒)

ドルク「ある意味難易度高すぎだろうなあれは」

D2経験者にとってはチートすぎるしねあれは(汗)

依頼101 復活の炎〜君といた運命〜（前書き）

ついにバルバトスと決着です。

ドルク「今回はレオが活躍だな」

そう、ここはスタンであるレオで決着つけないとね

カイル「そんな依頼101、よし行くぜ！」

依頼101 復活の炎く君といた運命く

バルバトス「灼熱のバーンストライク!!」

バルバトスはバーンストライクを詠唱して繰り出す

レオ「当たるか!!」

レオは軽く避ける

レオ「俺はバクフーンでも素早さはうりだ、お前に負けないようにな!!」

レオは剣を振る

カキーン!

だが防がれる

バルバトス「クズが!!」

バルバトスはなぎ払うかのように斧を振る

レオ「よつと!!」

レオはバックステップで軽く避けた

レオ「フィアフルフレア!!」

上空から無数の火炎弾が無数の輪を作り燃え上がる

バルバトス「ぶらああああーっ！！」

バルバトスは焼かれる

バルバトス「クズが！！」

エアプレッシャーでレオを攻撃するが

レオ「ほっ！」

レオは離れて避け、そこからダッシュでバルバトスに迫る

レオ「烈空斬！！」

空中回転斬りでバルバトスを切り刻む、だがレオの攻撃はまだ終わらない

レオ「続けて灼光拳！！」

晶術を込めた拳でバルバトスを殴りつける

バルバトス「ぐおっ！貴様ア！！」

バルバトスを怒り狂い斧をひたすら振り下ろす

カイル「させるか！」

カキーン！とカイルは剣でレオを守る

レオ「カイル！」

カイル「父さんにこれ以上殺させはしない！」

バルバトス「ならば二人一緒に死ねえ！！」

バルバトスの斧が二人に迫る…だが

ドルク「エナジーバスター！！」

シルム「フレイムドライブ！！」

ドルクはエナジーバスター、シルムは火炎弾を3発放つさらに

シルム「オイラ達は負けない！！フォトンブレイズ！！」

炎が爆発してバルバトスを吹っ飛ばす

レオ「ドルク！シルム！」

ジューダス「プリズムフラッシュャー！！」

ジューダスがさらに術を詠唱して光の剣がバルバトスを襲う

ジューダス「今だ！スタン！！カイル！！」

ドルク「決めやがれ！！」

シルム「レオさん！！」

レオ「おう!!」

レオに力がみなぎる

カイル「俺もやる父さん!!」

カイルに力がみなぎる

カイル「これは受け継がれた英雄の剣!!」

カイルはバルバトスの懐に潜り込み突き

カイル「斬!空!」

斬り下げして斬り上げを2回くりかえし

カイル「天翔けーん!!」

斬り上げで空中へ吹っ飛ばした、そこからレオが力をためて解放する

クレス「すごい…」

ミント「レオさん…」

クレスとミントはなんとか立ち上がる

チエスター「熱っ!?俺達まで巻き込まれないだろうっな?」

チエスターは不安になるが

ヴォル「大丈夫だ、レオは僕達の事をちゃんと思っている」

ヴォルはそう言う、みんなすでに立ち上がっている

ミゲール「くうつう、俺もやりたかったがレオが決めるしかないからな！」

マリア「これがレオさんの力…」

みんながレオに視線を向ける

レオ「みんなの力を一つに…行くぞデймロス！」

デймロス「ああ！」

レオが燃え上がる

レオ「舞え！紅蓮の翼！」

レオの周囲に炎が燃え上がる、それにバルバトスは巻き込んだ

レオ「「おうてんしよつやく皇王天翔翼！」

レオの背中から炎の翼が生えて天翔する

バルバトス「ぶらあああああ——っ！！」

バルバトスは吹っ飛んで倒れそうだった

ドルク達がバルバトスを囲む

ドルク「もう逃げ場はないぜ」

カイル「覚悟しろ！バルバトス！」

レオ「俺達がいるかぎりお前に勝ち目はない！」

バルバトスは窮地にたつたが…

バルバトス「ク、ククク…」

バルバトスは笑う

バルバトス「覚悟しろだと！？貴様等のような小僧と若造が俺を倒すだと！？誰も、俺は倒せない！倒せないのだあああつ！！」

するとバルバトスはドルク達の背後にある神の眼の前に

カイル「バ、バルバトス…！」

ドルク「テメエ！何する気だ！」

バルバトス「勘違いするなよカイル、ドルク…そしてスタン、俺は貴様等に倒されたのではない！俺は、俺の手で死を選ぶ！！フッフ… あーっはっはっは！」

バルバトスは高笑いする

カイル「ま、待て！バルバトス！」

バルバトスは神の眼の上に飛び込んだ

バルバトス「ぐおおおあああッ！！！！」

悲痛な叫びをあげて消えていった

ディムロス「…死に場所さえも自らの意志で選ぶか、最後まで自分勝手な奴だ…」

ドルク「結局あの力任せの卑怯野郎は、力でしか脳がねえ大馬鹿野郎だ…自分の力でしかあの野郎にはなかつたんだろうな」

ドルクはそう言う、力だけがすべてではない…力は時に人を傷つけ、破滅へと導く…でも

ドルク「力を間違はなく使いこなせれば人の役に立つ…力任せは逆に破滅を招く」

ディムロス「さすがだな…」

ディムロスはドルクをほめる

イクテイノス「感傷にひたっている暇はないぞ、このままでは我々は神の眼の力に取り込まれてしまう」

レオ「そうだな…ごめんな」

レオは謝る

するとジューダスが神の眼の前に行き、シャルティエを構える

カイル「ジューダス！一体何をやる気なんだ！？」

ハロルド「シャルティエよ、あれを突き立てデймロスも突き立てればソーディアンのが神の眼を上まわり、制御下における、あとは神の眼をオーバーロードさせて外殻を破壊するって寸法ね」

つまりシャルティエ…そしてレオ…スタンのもつデймロスを刺せば神の眼を壊すことができ、外殻を壊すことができるのだ

ロニ「そっか！リオンであるジューダスもソーディアンを持ってたってわけか！」

リアラ「けど、それは…」

それは永遠の別れということにもなる

デймロス「…いいのかりオン？君はシャルティエを失うことになるんだぞ」

ジューダス「言ったはずだ、この世界はスタン達の手によって救わなければならないと」

レオ「そうだな…」

レオはデймロスを見る、彼自体がスタンのためもう一度ということになる

イクティノス「…ソーディアンと使い手は一心同体、それを、マス

ターの手で消さねばならんとは…」

クレメンテ「運命とは、かくも酷なものか」

ジューダス「スタン…お前は最後にしておく…お前が最後でなければ救った意味もない」

ジューダスはスタンであるレオを最後にした

レオ「ああ…」

レオは静かに頷いた

ジューダス「…許せシャル、僕は…」

だがシャルティエはジューダスを励ますように言った

シャルティエ「いいんですよ坊ちゃん、さつき、ディムロスが言っていたでしょう？僕等は永く生き過ぎたんです。それに、正直言つて坊ちゃんのお守りにも疲れましたし…ね」

ジューダス「ちょうどいい、僕もお前のお小言に付き合いきれないと思っていたところだ」

ジューダスとシャルティエ…二人もまた、一心同体なのだ

ドルク「ジューダス…シャルティエ」

ドルク達はそんなジューダスとシャルティエを見守る

シャルティエ「じゃ、そういうことで早いところ済ませましょう・・・  
ああ！それと！」

シャルテエは何か言いたそうな事があるようだ

ジューダス「…まだ何かあるのか？言うなら早くしろ、時間がない」

シャルティエは言う

シャルティエ「坊ちゃんと一緒にいてたしかに疲れはしましたがど  
…結構楽しかったですよ」

ジューダス「…僕もだ、今まで…ありがとう」

ジューダスはシャルティエに感謝の言葉をかける

シャルティエ「らしくないです。坊ちゃん」

ジューダス「お前もな、シャル」

ジューダスは一息おいて

ジューダス「行くぞッ！シャルっ！！」

シャルティエ「はいっ！！」

覚悟を決めて構える

ジューダス「だああーーーーーっ！！」

シャルティエが神の眼に刺さる

デймロス「後は…私達だけだな…」

レオ「ああ…」

レオが神の眼の前へ

アクア「レオ…」

レオ「俺はたしかに死んでポケモンになった…そして再びこの世界に戻ってきた、そして千年前にお前と出会った…俺は嬉しかった、ドルクとカイルがお前を変えてくれなかったら…俺達は出会ってなかった」

デймロス「そうだな…我々は永く生き過ぎた…でも楽しかった、お前が数年後のお前でも…いつでもお前のパートナーだ」

レオとデймロスが別れの前に話す

レオ「…ありがとう」

レオはデймロスに感謝の言葉をつげた

デймロス「カイル君…君がいたから我々はこうして生きてきた、君もがんばって父であるスタンを見ていてくれ」

カイル「はい！」

カイルは頷いた

ディムロス「そしてドルク君…君のこれから見守っている…死んでも我々は見ている」

ドルク「ああ、ディムロス…あんたに色々教えられた、俺達を見守ってくれ…俺達はお前の命を無駄にはしない…絶対にな！」

ドルクは頷く

ディムロス「行くぞスタン！」

レオ「ああ……」

レオは構える

レオ「てやあああああーーーーーっ……!!」

ディムロスが神の眼に刺さる、神の眼は強力な電気を流し、ひびが割れる…そして

バリーン!!

神の眼は破壊された

この世界に蒼い淡い光が放たれ外殻は割れていき…光は世界を包んでいった

光がおさまると外殻はなくなり、元の世界へと戻っていった

世界は…救われたのだ

依頼 101 復活の炎君といた運命（後書き）

カイル「これですべて終わったのかな？」

まあ終わりなのは終わりだけどまだ終わってないからね

ドルク「まあこれで歴史改変は防げたみてえだな」

そう、そして次回は色々ですが休息です。

ドルク「休息？なんかな」

まあ一時ストーリーも落ち着いたからね、少しの休憩は必要なんだよ

シルム「なるほどね」

カイル「俺、父さんの方聞いておかないといけないことあるし……」

そうだね……

依頼102 休息(前書き)

今回はちょっとストーリーからはずれます

ドルク「なんとか解決したな」

シルム「これで本当に終わったのかな？」

さあ、どうだろうね…では依頼102

ドルク「行くぜ！」

## 依頼102 休息

ドルク達は元の世界へ戻ってきた、ここはハイデルベルグという町だ  
ナナリー「全部終わったのかな、これで」

ロニ「バルバトスも倒したことだし、そう思いたいところだな」

ジューダス「……………」

たしかに全員はそうは思っていない

レオ「まあでも無事に元の時代に戻ってきたことだしな」

レオは安堵の表情をする

アクア「それもそうだね」

カイル「とにかく、ウッドロウさんに会おう、持ち去られたレンズの事、話しておかなくちゃ」

ドルク「ちょっと待て、カイル」

ドルクが待ったをかけた

カイル「どうしたの？」

ドルク「会いに行くのはいいが、ウッドロウってあのウォーグルの  
だろ？」

ドルクがカイルに質問する

カイル「あ…たしかに18年前の姿がウォーグルだ…」

ドルク「だろ？その時スタンもバクフーンの姿になっていた…これはどういふことかわかるか？」

つまり…

カイル「あ…」

アクア「そうか！レオはスタンだからこのまま行ったらスタンが生き返った事がバレるってことだね」

「ああ」とドルクは頷いた

レオ「でも同じバクフーンならこの町とかにもいるとは思っくんじやないか？」

レオはそう言うが

シルム「たしかにそうだけど、顔とか覚えてるとかもあって一目で見破られる可能性もあるよ」

シルムの言うとおり、顔を覚えているのなら見破られてバレるのがオチだ

ジューダス「何か方法はないのか？」

ジューダスは何か案がないのかとドルクに言いかけてきた

ドルク「そうだな…とりあえず変装しておいた方がいいんじゃないか？」

レオ「変装かあゝ」

レオは悩む…

レオ「そうだな、ここは変装でなんとかウツドロウさんに会わないようにしよう…なありオン、その仮面貸してくれないか」

レオはジューダスに笑顔で仮面を貸してほしいと要求した

ジューダス「バカか！僕の仮面を貸したら僕だとバレるだろ！」

ジューダスは拒否

カイル「でもジュプトルの姿になっているのなら仮面つけてもバレていないんじゃない？」

カイルはそう言うが

ジューダス「だがポケモンの姿が18年前にあっただろ、つまり僕もポケモンになってるといふことにもなるんだ」

ヴォル「たしかにそうかもしれないな」

18年前にポケモンの姿にスタン達がなっているのならリオンであるジューダスも同じである

シルム「とりあえず洋服とか買いに行ってみよう」

とりあえずドルク達はこの町の洋服を扱う店へと向かった

……

洋服屋

ドルク「色々あるな…なんか妙に何処かの世界のが混じっているな」

洋服屋の洋服は制服など色々な服が取り揃えている

シルム「どれか選んで試着してみよう」

ドルク達はレオのために服を選んだ

……

カイル「これならどうか？」

まずカイルが選んだ服は

レオ「これ…」

レオは固まっていた

カイル「父さんの身につけた鎧！白くて輝かしくてとってもいいな」

カイルは憧れのまなざしでレオを見る

ドルク「却下だ」

カイル「え？なんで？」

カイルはとぼけた表情をする

ジューダス「当たり前だろ！こんな姿してたら1発でバレるわ！」

ジューダスがツツコミをいれる

ドルク「次」

次の服は

レオ「なんだこれ？」

ハロルド「研究にはもってこいの」

シルム「いやだめだよ！？」

ハロルドが選んだ服は病院で見かける患者用の服だ

ジューダス「お前は手術するつもりか！？」

ジューダスがまたもやツツコミをいれる

ドルク「もつとまともじゃろっぜ」

アクア「そつだよ、とりあえず僕のは」

アクアのはローブのようでは何処かの中国拳法の拳法着のようだ

ドルク「それは無理だろうな」

アクア「え、これ気に入ったのにな」

アクアはふてくされるが

シルム「それアクアが着たいんでしょ？」

アクア「まあ僕のトレーナーがマオの声に似てるとか言われたからマオのがあったからせつかくだからって」

ドルク「まあ買えばいいじゃねえか」

しかたなくマオの服（というかコスプレという名の）をご購入（アクアのお金で）

……

次々と選んだがどれもレオには合わない感じのばかりだ

ドルク「とりあえず選んだのがこれだ」

ドルクが選んだのは

レオ「なんだこれ？」

レオが着たのは制服のようだが

ドルク「とりあえず不良っぽいのだがこれなら大丈夫か？」

黒の学ランに黒のズボン、頭には黒の学生帽だ

レオ「そうだな、しばらくはこの服でいるよ」

とりあえず、レオの服は決まったので早速ハイデルベルグ城へと向かった

余談だがドルク達は他にも色々と服を買っていき、お土産として十分な買い物をした、ちなみにドイツからもらった転送できるアイテムで服を送っておいた（それぞれの手持ちポケで）しかもこの洋服屋は安かったのでお得だ

……

城に入ったドルク達、門番には疑われたがカイル達の仲間だということを通った

ドルク「広いな」

見渡すと赤いジューダンに大理石の床、そして天上には豪華なシャンデリアがついている

その先の王の間へとドルク達は向かった、赤いジューダンがしきつめられた先に彼は待っていた、王に似合うような彩りの服を着ているウォーグル…ハイデルベルグの王であるウッドロウ…ケルヴィンだ

ウツドロウ「おお、カイル君、それにみなも…どうやら無事に目的を果たせたようだな、それに見慣れない顔もいるな」

ウツドロウはドルク達に視線を向ける

ドルク「俺は探検隊ブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方、ドダイトスのドルク・グランハートと申します」

ドルクがウツドロウに挨拶する

シルム「同じく探検隊ブレイブのサブリーダー兼ギルド『ブレイブ』の副親方、ゴウカザルのシルム・フレアライトです」

シルムも片膝をついて挨拶する。

レオ「レオと申します」

アクア「アクアと申します」

ヴォル「ヴォルだ…」

クレス「クレス・アルベインです」

ミント「ミント・アドネートと申します」

ミゲール「ミ…いやアストン・ヴォルテクスと申します」

デュランダル「デュ…デュランダルでございます…」

マリア「マリア・アルベインと申します」

アトリ「アトリだ」

デイン「デインだよ」

アーチェ「アーチェ・クラインっています」

チェスター「チェスター・バークライトだ」

すず「藤林すずと申します」

k「kと申します」

クラウド「クラウドだ」

シエルマル「シエルマル＝タチツキです」

ジユク「ジユク＝ラプターだ」

レビィ「レビィ＝ラプターっています」

ジュティア「ジュティア＝アクアリスよ」

みんなそれぞれ自己紹介する

ウッドロウ「よろしく…カイル君もよくやったね」

カイル「はい、なんとかリアラは助けることができました、ただ、ファンダリアのレンズは…」

カイルは暗くなる

ウッドロウ「報告は受けている。飛行竜と共に海底に沈んだと」

カイル「すみませんでした、俺の力が足りなかったばかりに……」

カイルは謝るがウッドロウは首を横に振る

ウッドロウ「君が謝ることはない、レンズの一極集中を防げただけで十分だ、ファンダリアの民を代表して礼を言う、ありがとう、カイル君」

ウッドロウはカイルに感謝する

カイル「いえ、お役に立てたなら光栄です」

ウッドロウ「なんとか君達の功績に報いたいが今の我々にできるのは城に泊まってもらっことぐらいだ、どうだろうカイル君」

カイルはパアツと元気よく

カイル「ありがとうございませす！ぜひそつさせてください！」

というわけでドルク達は客室へ

……

ハイデルベルグ城客室

ドルク「このベット心地いいな」

レオ「だろ」さすがウッドロウさんだよ」

ドルクとレオはベットでボタンと倒れてベットの心地よさを満喫している

クレス「城に泊まるなんて僕達にはなかったね」

ミント「たしかにそうですね、ほとんど私達は宿屋で泊まったり、  
すずちゃんのところ温泉に入ったりしていましたから」

クレスとミントは自分達がダオスを倒しに旅に出た思い出を思い出す

すず「色々ありましたがここの部屋は豪華で初めてですね」

すずにとっては初体験にもなる城の寝泊り

アクア「ホントに豪華だね、レオもすごい人と旅していたんだね」

レオ「ああ！旅に出た時、最初に会ったのがウッドロウさんなんだ」

レオは自分が最初に会った仲間であるウッドロウの事を話す

カイル「父さんもすごいな」ってか父さん！そういえば忘れていたけどなんで今まで自分の正体を隠してたの！俺すんごく寂しかったんだよ！」

カイルは怒るようにレオに言う

レオ「悪い悪い 中々うまく言えなかったんだよ…俺が転生したこ

と」

アクア「そういえば、まだ転生した理由がわからなかったよね？」

アクアの質問にレオは「ああ」と応えた

レオ「でも最初はいいつと会ってからポケモンとかの事は知らなかったし、ポケモンの技や他の技を覚えるの苦労したんだぞ？」

ドルク「最初はそうだろうな」

シルム「いや、ドルクだって最初は強くてかなりの技使ってたよ（笑）」

シルムは笑いながら言う

レオ「そうなのか！？ドルク！お前すごいな〜！！」

ドルク「それほどでもねえよ／＼／＼」

ドルクは照れながら言う

カイル「へえ〜ドルクってすごいね、元人間には思えないよ」

たしかにドルクは元人間だ、ありえないほど技も強力で豪快だ

ドルク「まあ色々な奴等に出会って俺やシルムも変わっていったけどな」

シルム「そうだね、オイラも最初は臆病だったんだ」

ヴォル「そう…なのか」

ヴォルはシルムに目を背けながら言う

シルム「うん、最初ドルクと会ってからドルクは怪しい人に思えたんだけど…でもドルクは優しいから誰よりもオイラやみんなの事思っているよ」

ジユク「そうだな、未来世界の事など色々あったがドルクがいたから変わったんだ」

元パートナーであるジユクがそう言う

レビィ「そうね、レオみたいに魔術があるのかわからないけど」

レオ「そういえばたしか元々魔力があるとかなんとかって言ったな」

シルム「うん、ドルクはポケモンになってから魔力があったけど、それは世界樹自体がドルクを取り込んでいるから」

ハロルド「ますます気になるわ」

ハロルドは目を輝かせながらドルクに視線を向ける

ジューダス「だからって解剖とかするな」

ハロルド「え〜世界樹を取り込んだのだからやりたいのよね〜」

ハロルドの怖い目的にはみんな冷や汗をだす

シルム「ハロルドのは無視して（汗）またこれからの事考えていこう」

レオ「そうだな…まあ俺も一時は怖い感じもあつたがドルク達のおかげでなんとかなつた…俺からもお礼を言わせてくれ…ありがとな」

レオはドルク達に感謝する

ドルク「探検隊のことをしたまでだ、お前自身が心を開いたんだ…いつものスタン「エルロンじゃねえとレオらしくもねえしよ（笑）」

ドルクはニカツと笑う

レオ「そうだな…リオンにも色々言えたし」

ジューダス「フン！僕は別にお前のためを思つたわけじゃないからな」

ジューダスはそっぽを向く

ロニ「お前素直じゃねえ〜なあ〜（笑）」

ロニはニヤリと笑う

ジューダス「フン！」

それでもジューダスは背けるような態度をとつた

そんな彼等の話はつきることはなかった

依頼102 休息（後書き）

ドルク「やっぱポケモンになっても正体はバレるんだな」

というわけでレオを変装という形にしましたが…本当は中の人の意味で色々とコスプレしたいというのもありますがそういうわけにはいかないので普通の変装ということで番長っぽい感じにしました。

シルム「まあでも色々話せてオイラ満足だよ」

カイル「父さんも色々あったんだね」

カイルもポケモン技とか

カイル「う…できるかな（汗）」

ジューダス「まあ僕はなんとかできるが、まあ僕も色々と経験させてもらったからな」

隠された英雄でも（笑）

ジューダス「僕は別に英雄になった覚えはない、それにスタン達に救われないと僕が生き返った意味がない」

まありオンだから性格も変わらない部分もあるけどね

ジューダス「性格は余計だ」

依頼103 再びの異変(前書き)

D・D2編もそろそろ佳境に入ってます。

今回は物語が急になります

ではごきげん

## 依頼103 再びの異変

次の朝、とりあえずみんな起きて（レオはアクアが死者の目覚めで起こして）それぞれ休息をとることになった

ドルク「やっぱり左眼は見えるが傷が目立つな」

シルム「オイラも背中中の傷は目立つな」

レオ「たしかにこれじゃあな」

ジューダス「アクア、リカバーレインで傷を回復できないのか？」

アクア「それが、二人の傷は深いから古傷になっちゃったみたいなんだ」

こちらドルクとシルムはレオ、ジューダス、アクアと一緒に前回行った洋服屋でドルクとシルムの傷を見ていた。バルバトスによって二人は傷を負ってしまったている。ドルクは左眼に傷ができ、シルムは背中に大きな傷を残した

アクア「とりあえずシルムは服とか着て背中中の傷を目立たなくした方がいいね」

シルム「そうだね」

シルムは服を着ることになった

ドルク「俺は眼帯をつけていいのか？」

ドルクは眼帯をつけるかどうか迷っていたが

ジューダス「それほど大丈夫だろ眼帯つけなくてもお前にはこの方がいいと思う」

レオ「そうだよな」たしかにドルクの左眼の傷があつてかっこよく見えるぜ」

ジューダスとスタンであるレオにほめられたのはドルクはそのままの状態にした

シルムの方は今着替えをしていた

……

数分後

シルム「おまたせ」

シルムは試着室から出てきた

レオ「おお〜！」

シルムは赤のカーディガンを着ていて背中には炎の絵がかかっている。ズボンはジーンズを着ている

ドルク「似合うぞシルム」

シルム「あ、ありがとう／＼／＼」

シルムは照れる

……

他のメンバーはデートやら食事やらとしている。そんな中……

カイル「ZZZ……」

カイルは客室のベッドで寝ていた、そこからリアラが部屋へと入ってきた

リアラ「ねえ、カイルおきて」

リアラはカイルを起こす……しかし彼はまだ眠ったまま

リアラ「ちょっとカイル！カイルってば！」

それでもカイルはまだ眠っている

リアラ「こら——っ！カイル！起きなさい————い  
！」

でかい声でリアラはカイルを起こす、カイルは寝ぼけて起きる

カイル「…ふわ？ん、リアラか…もう遅いよおやすみ……」

再び夢の中へとカイルは眠ろうとするが

リアラ「何言ってるの！もう朝でしょ、朝！ねえ、起きてよカイル」

カイル「後ちよつと…ほんのちよびつとだけ…」

カイルはまだ寝ぼけたままだ…さすがレオでもあるスタンの息子だ、寝ぼけたところや死者の目覚めがないと目を覚まさないところが親子としかいいようがない

レオ「へつくしゅー！」

ジューダス「どうした、風邪か？」

ジューダスが風邪かとレオに聞く

レオ「誰か俺の噂してたのかな？」

レオは首をかしげる

カイルとリアラに視点を戻そう

リアラ「ほら、せつかくだから何処かに出かけましょつよ」

カイル「いつてらつしゃい…俺、寝てるう…」

リアラは呆れた表情で

リアラ「もういいわ、カイルったらそんなに私とデートしたくないのね？」

カイル「したくない、したくない…デートなんか全然……………えっ、デート!?!」

すぐにカイルは起きた、デートという単語がカイルを動かしたのだ  
ろう

リアラ「そう、デート！行きましょカイル！」

二人は手をつないで客室を出た

……

ハイデルベルグの公園

降り積もった雪が少し残っている

リアラ「ふう、歩き疲れちゃったね、少し休みましょう」

公園は静かだった…公園にいるのはカイルとリアラだけ、二人きりの  
ひととき…

リアラ「静かね…こうしていると、これまでの騒ぎがまるで嘘みたい  
だわ」

カイル「なんだか不思議な気分だよ、前に来た時は、ここ『リアル  
ダ』で街だったのに」

そう、エルレインによってここはリアルダという街に変わっていた  
…だが今はドルク達のおかげで元のハイデルベルグに戻ったのだ

リアラ「ふとしたきっかけで取り返しがつかないほど大きく変わっ  
てしまう…歴史のそんな脆さを利用して、エルレインは目的を果た

そうとしたのね」

カイル「でも、歴史は変わらなかった、ディムロスさん、アトワイトさん、それに父さんや母さん…みんなの強さが歴史を守ったんだ…それに、死んだ父さんは生きていた…」

そう…レオであるスタンはこうしてカイルと再会することができた…転生しても親子なのに変わらない

リアラ「うん、それに大活躍だったわね、カイルも」

カイル「そ、そうかな、ドルク達だってそうだよ、へへ…」

カイルは照れる

カイル「俺、今でも信じられないよ、遺跡で不思議な女の子に出会ったり、仲間と世界中を旅したり、それに途中から新しい仲間と出会えたり、時を越えて英雄達と一緒に戦ったり、実は全部、夢なんかじゃないかって…」

リアラ「本当にそうだったらどうする？ある朝、起きたら急に私がいなくなったらカイルはどうする？」

カイルはその疑問に

カイル「……？どうして急にそんな…」

リアラ「答えて、カイル…」

リアラは真剣な表情になる…それはまるで自分が消えるといえるよ

うな感じだ…

カイル「…嫌だ」

リアラ「えっ？」

カイル「リアラがいなくなっちゃうなんて俺は嫌だ！」

カイルは嫌と不定する

カイル「もし、リアラがいなくなったら…俺、どんなことをしても、絶対にリアラを取り戻すよ」

リアラ「カイル…」

すると突然辺りが赤くなる

リアラ「えっ…!？」

カイル「こ、これは…!？」

なぜかわからないが辺りが赤く、そして何か消されるような赤い景色が広がる、それは歪んで見えた

リアラ「何…一体なんなの!？」

するとそこから

「カイル！」

呼び声と同時に景色は普通に戻った

カイル「今のは、一体…!？」

呼び声の正体はロニだった、ロニがカイルとリアラの元に駆けつける

ロニ「カイル!こんなところにいたのか!具合でも悪いのか!?真つ青じゃねえか!」

カイル「いや、なんでもない…それより何かあったの?」

カイルは顔を真つ青だが気をとりなおしてロニに聞く

ロニ「ああそうそう、ハロルドが呼んでるんだよ、すぐ来てくれってな、なんでも時間が歪んで、エンペラペーがどこの…の…って…」

カイルとリアラは首をかしげる、わけがわからない言葉が出てきたからだ、エンペラペーじゃわからないだろう

ロニ「とにかく一緒に来い!みんな城にいるからよ」

カイルとリアラ、そしてロニは急いで城へと戻っていった

依頼103 再びの異変（後書き）

カイル「一体あれはなんだっただらう？」

リアラ「ハロルドに話を聞けば何かわかるはず！」



依頼104 破滅の危機

ハイデルベルグ城の客室にカイル・リアラ・ロニが来た時はみんな集まっていた

カイル「話って何？ロニから聞いたんだけどさっぱりわからなくて…」

カイルにはさっぱりなのでハロルドが説明する

ハロルド「私の『解析君二号改』が時間軸の歪みと、エンドロピの異常なまでの増大を検知したの」

カイルがわからないような顔をしている。ここで説明しよう、エンドロピーとは示量性状態量という意味である。ロニが言うエンペラペーというのはエンドロピーの事だ

ハロルド「わかりやすく言うと時間の流れがとってもヤバイ状態になってるってこと」

カイル「ヤ、ヤバイ状態って？」

シルム「つまり…未来がなくなりかけてるみたいなんだ」

レオ「それってどういことなんだ!？」

みんな驚いた表情をしている

クレス「まさか僕達の世界とか他の世界に影響は？」

ハロルド「それはないわ、ただこの世界に影響が出ているだけ…具体的なことまではわからないけど、未来からこの時代に対して、なんらかの干渉がおこなわれているような、その影響で本来あるはずの未来が失われようとしてるってわけ」

クレス達やドルク達の世界には影響はなく干渉はしていない、それは安心だが今いる世界は本来の未来が失われる危機が出てしまっている

カイル「それってエルレインが今度はこの時代を変えようとしてるってことか？」

ドルク「そうとしか考えられないな…これまでのようなことはあげようだし」

ハロルド「そうよ、つまり未来そのものを消してしまいかねない、恐ろしく大がかりなものよ…すでにそのきざしは出始めてる、さつきも時空間の揺らぎを観測したわ、一瞬だけど現代と未来が重なったみたい」

リアラ「カイル、さっきの…！」

そう、公園で風景が一瞬焼け野原のような歪んだようなのをカイルとリアラは見ていた

ハロルド「あんた達、何か心当たりでも？」

カイル「見たんだ…」

ナナリー「見たって何を？」

カイルがゆっくり話す

カイル「…ハイデルベルグが歪んで、消えかけるの…」

ドルク「俺も、シルムと一緒に歪んでるのを見たぜ、なあシルム」

シルム「うん、どうやら見える人とかは限られているかもしれないね」

レオ「俺も一瞬だけ見えたんだ」

レオも歪んでいるのを見たようだ

ハロルド「世界の破滅、か…」

ロニ「世界の破滅って…どういうことだハロルド？」

つまり…未来そのものだけでなく現在の時代を消すという意味だ、ハロルドはエルレインが未来を消そうとしているとロニに説明した

ナナリー「世界を消すだって！？どうしてそんなことを！？」

ハロルド「さあ、理由まではね」

ハロルドが呆れた表情で両蔓を出す、「これはつまりは本人に聞くしかないんじゃないの？」と付け加えてハロルドは言った

ヴォル「だがエルレインが何処にいるのかわからないようだ」

ハロルド「ああ、それなら心配ないわ、時空間に残されたパルスをたどっておいたから：今から約8万7000時間後、つまり10年後ね、そのあたりにいるわ」

どうやらエルレインの居場所は特定はしたようだ

ミント「後は時間転移に必要なレンズをどうするかですね」

クレス「そうだね」

アストン「でも大量のレンズ集めるの時間かかるから間に合わないんじゃないか？」

たしかに、レンズを集めるのには時間がかかる、ソーディアンのような大量のレンズがあるようなのがあれば話は別だが

ロニ「この城にあったレンズは俺達が海に沈めちまつたし…」

そこでハロルドが思ったのか

ハロルド「ねえあんた達、たしかイクシフォスラー使ったのよね？ならそのレンズを使えばいいじゃない、ソーディアンに使ったのと同じ私の特別製だからエネルギーもバッチリよ」

ドルク「そういえばイクシフォスラーは俺達は使っていないがどうなのなんだ？」

ジューダス「それじゃあ説明する」

ジューダスはドルク達イクシフォスラーに乗っていない者達に説明した

シルム「つまり飛行機な感じだね」

ジューダス「そうだな」

とりあえずは納得できたようだ

ジューダス「だが、あれはどこに墜落したのかわからないな、」

実はカイル達は現代が変えられる前に変えられる要因になった時空間の歪みによってイクシフォスラーに乗ったまま巻き込まれてしまい、何処にあるのかわからないのだ、しかしハロルドは自身満々にハロルド「フッフーン！こんなこともあるのかと、自動帰還機能をつけておいたのよ〜ん！」

ロニ「インチキくせえな、オイ」

ロニは呆れる

シルム「さすが天才科学者（汗）」

チェスター「ホント変わり者だな（汗）」

もはやハロルドが天才ということが実感できる

ドルク「とりあえずイクシフォスラーのもとへ行こうぜ、場所は何

処なんだ？」

ジューダス「場所は地上軍拠点跡地だ」

シルム「それじゃあ行こう！」

ドルク達は地上軍拠点跡地へと向かった

依頼104 破滅の危機（後書き）

ドルク「俺達は地上軍拠点跡地へと向かった、ハロルドがイクシフオスラーから取り出したレンジで俺達は10年後の未来へと向かった、なぜかついである奴まで来たようだ…だがそいつはあいつらと関係ある人物だった！」

次回、ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ 『未  
来と再会』

ドルク「希望と勇気を振り絞る！行くぜ！！ブレイブ！！」

依頼105 未来と再会（前書き）

ついに未来世界へと行きます…そして今回はとある方も登場します

ドルク「それじゃあ依頼105…行くぜ！ブレイブ！」

ちなみに前回から次回予告にしています

依頼105 未来と再会

ハイデルベルグの入口に一匹のポケモンが現れた、つぶらな黒い瞳に背中には茶色の棘が数個も生えていて、手が爪となっているポケモン、ねずみポケモンのサンドパンだ、両腰には剣が2本ついている

サンドパン「ここがハイデルベルグか…さてとあいつらを見かけたのか聞き込みしねえとな」

サンドパンはこの町の住人に聞き込みをした…どうやら誰かを探しているようだ

数分も聞き込みをしてとある洋服屋で

サンドパン「何っ！？本当か！」

サンドパンは驚いたように店主に迫る

「はい、バクフーンのお客さんがレントラーとラグラージと一緒にいました。さらにドダイトスとゴウカザルなど様々な人達が来ましたよ、それで城に行ったようです」

サンドパン「城か！ありがとな！」

サンドパンは急いで城へと向かった

……

ハイデルベルグ城入口

門番とサンドパンは話していた

「あゝその人達なら地上軍拠点跡地に行くのかなんとか言っていたんだけど、ここから南西の方角にあるんだが東に大回りして行けばたどり着くよ」

サンドパン「ありがとな！そんなじゃ！」

サンドパンは急いで誰かを追いかけて走って行った

「一体なんだ？あのサンドパンは？」

門番のポケモンが疑問に思い首をかしげる

サンドパン「待ってるよ！レオ！アクア！ヴォル！」

……

ここは地上軍拠点跡地

ドルク達は急いで格納庫へと向かった

格納庫へ到着したドルク達、そこでイクシフォスラーという飛行機がすでに配置していた。赤い両翼に前方には景色が見えるガラスがついている

カイル「すげえ…ホントに帰ってきてる」

カイルは驚いていた。ドルク達別世界に来た組は知らないのだからイクシフォスラーなんだとイクシフォスラーを眺める

ハロルド「あつたりまえでしょ！？誰が作ったと思ってるの？」

ハロルドは自慢そうに蔓で表現する。その後イクシフォスラーの小さい丸い球体の物を取り出した

ハロルド「ほい取れた、小さいけどこれ一つあればペンダントの力を増幅できるはずよ」

リアラ「じゃあみんな集まって」

カイル「リアラ、どうしたの？」

リアラは深刻そうだった、まるでこれから先の事がわかっていようなそんな感じだ

リアラ「…カイル、お願いがあるの」

リアラの目は真剣だった、そんなリアラのお願いとは

リアラ「これから、たとえ何が起こっても…エルレインを止めるって、誓って」

そんなリアラの様子にカイルが問いかける

カイル「どうしたんだよりリアラ、そんなのあたりまえじゃ…」

リアラ「お願い、誓って」

彼女は厳しいような目つきでカイルを見る

カイル「…わかった」

カイルは頷いた

ドルク「（リアラ…何か隠しているような感じがするな）」

ドルクはそんなリアラの見ても感じていた

カイル「誓うよ、リアラ、何があってもエルレインを止めてみせる、  
かならず！」

リアラ「……………うん」

カイルは誓った…だが彼はまだ知らない…これがリアラにとっても  
だがカイルにとって重大で残酷な運命になるうとは…カイルはまだ  
知らなかった…もちろんドルク達もだ

リアラ「それじゃ行くわ、未来へ！」

リアラのペンダントが光ドルク達を包み込む

「待ってくれ!!」

そこに先ほどのサンドパンが光へと飛び込んでいった

……

ドルク「ここは？」

カイル「未来のストレイライズ大神殿？」

どうやら何処かの神殿のような場所についたらしい…そこに

サンドパン「やっと見つけたぞ！レオ！アクア！ヴォル！」

ドルク達が振り向くとさつき飛び込んできたサンドパンがいた

シルム「ねえこのポケモンも巻き込まれたみたいだけど」

ジューダス「お前は誰なんだ？」

みんなサンドパンに視線を向ける

レオ「俺を知ってるみたいだが？」

サンドパン「おいおい、俺が誰なのかわからねえのか？まあこの姿だから君達にはわからないだろうな」

どうやらレオ、アクア、ヴォルを知っている人物らしい

アクア「もしかして…？パル？パルなの？」

アクアが何か思い出したかのように彼の名を言う

サンドパン「おっ！さすがアクア！俺だとわかったな！」

どうやらレオ達三人の知り合いのようだった

レオ「マジか！パルまで来たのか！？」

ドルク「なあレオ、こいつはお前等の知り合いなのか？」

ドルクの問いかけにアクアが応えた

アクア「うん、僕達のトレーナーでパルポンっていうんだ」

パルポン「初めまして…かな？俺はパルポン、レオ、アクア、ヴォルのトレーナーだ」

カイル「ということは父さんが言っていた父さんを大事にしてくれた人なんだね？」

どうやらそうらしくレオは頷いた

シルム「とりあえず…パルポンさんがどうやってこの世界に来たのか色々説明しとかないと」

ハロルド「それもそうよね〜つまり元は人間ってことだろうし、また別世界からの者が来るなんて 科学者として調べたいわ」

ハロルドのマッドサイエンティストスイッチが入る

ジューダス「とにかく説明させてもらおうか？」

パルポン「あ〜…まあ………」

……

パルポン「俺はレオ達を探している途中で変なものに飲み込まれたんだ」

全員『変なもの?』

全員が復唱する

パルポン「で、気がついたら俺はサンドパンになっていたってわけ……」

レオ「なるほどな」納得

ジューダス「スタン、お前納得早いな(汗)」

ジューダスが呆れるようにツッコミをいれる

パルポン「え?スタンってどういうことだ?」

アクア「あ…そうかパルは知らなかったんだよね……」

アクアがパルポンにこれまでの事を説明した

パルポン「なるほど…どうもスタンに似てるって思っていたら本物だったってわけだな…とりあえず…ドルク…さんでしたっけ?」

ドルク「呼び捨てでいいぜ、別に敬語つけなくてもいい」

ドルクはそう言う

パルポン「わかったよドルク…まあレオ達の事世話してありがとな  
…あいつら色々と何かあるから心配だったけど…大丈夫のようだな」

クレス「よかったね、レオ、アクア、ヴォル」

アクア「うん！」

レオ「まあ俺もパルに再会できてよかったしな」

ヴォル「そうだな…」

レオ達は自分のトレーナーと再会できて嬉しくなる

パルポン「ときにシルムさん、ヴォルがあなたに何かされていませ  
んか？あいつ猿嫌いなもので」

シルム「いえ大丈夫ですよ、ちょっと痛い目にあいましたけど」

シルムは遠慮してるように言う

パルポン「すみません、ヴォルには後でなんとか言っておくので」

ドルク「まあ話はそれぐらいにして…」

そこに

「おいお前達！」

入口から兵士二匹が現れる

兵士1「こんなところで何をしている!？」

カイル「あ、えっと俺達は…」

リアラが前に出る

リアラ「エルレインは何処ですか？」

兵士2「なんだお前は？」

兵士1「お、おい!あのペンダント!」

兵士達の目にリアラがつけているペンダントが映る

兵士2「もしかして、せ、聖女様!？」

兵士1「エルレイン様は、こちらにはいらっしやいません」

どうやらここにはいないようだ

リアラ「では、何処にいますか？」

冷静な少し暗い感じの声でリアラは兵士達に聞いた

兵士1「それがその…」誰にも行き先を告げるな』と

リアラ「事は急を要します、答えなさい、エルレインは何処ですか？」

リアラの威圧的な言葉に兵士1は仕方なく応えた

兵士1「…カ、カルビオラです」

兵士二人は逃げるように去った

ロニ「カルビオラっていえば、ナナリーの村の近くの巨大レンズがあつたところだったな」

パルポン「そのエルレインって奴が何かよからぬことやろうとしてるんだろうな…これは急いだ方がいいかもしれない」

ドルク「急いで行こうぜ、あいつが何を企んでいるのか知らねえが嫌な予感がする」

みんなは頷いて急いでカルビオラへと向かった

依頼105 未来と再会（後書き）

シルム「新たな仲間バルボンさんを加えてオイラ達はついに聖地カ  
ルビオラへとついた！ だけどオイラ達は驚愕の真実を知ってしまった  
！」

次回、ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ『消え  
る運命』

シルム「希望と勇気で乗り越える！ 行くぜ！ ブレイブ！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8918p/>

---

ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

2012年1月6日23時48分発行